

舟山群島における漁村社会の変容から見る女性の役割

— 螞蟻島の“漁嫂”の暮らしをめぐって —

神奈川大学歴史民俗資料学研究科 于洋

要旨

本博士論文は、ジェンダーと漁村民俗誌に関する理論を基に、中国の舟山群島新区の螞蟻島という漁村社会の変容における女性の労働と自己認識、家族との生活、人生儀礼、廟の復興の分析視角をもって、実証的に考察したものである。本研究を舟山群島さらに全国に普遍化させることはできないが、ここで分析された実態は現実の中国における漁村像の一部になった。本研究では、伝統的な漁村社会と人民公社時代の漁村を経て、今日までも漁村で暮らしている女性に対し、聞き取りアンケート調査を実施した。

まず、序章において、舟山群島新区の設立などをはじめとした中国における近年の海洋経済発展の戦略を紹介し、本論の研究の背景、目的、先行研究を述べた。

第1章では、舟山群島における漁村社会の形成歴史の流れを考察した。また、漁村社会の形成と発展とともに、舟山の漁業発展過程にいくつかの段階があるのか検討した。そして舟山群島の螞蟻島を主たる研究対象とする文化的経済的状况を整理し、その中で、螞蟻島が舟山群島のなかでどのように代表的な地域であるかを明らかにした上で、螞蟻島の歴史と特色についても概観した。また、中国の解放後、浙江省の漁民政策を踏まえたうえで、それに基づいて行われた螞蟻島における「漁民」の生業集団化の過程を検証した。

第2章では、昔の伝統的な漁業中心に暮らした女性の姿を述べた。漁村女性の労働比重は重かったが、その労働に対する収入は少なかったため、長い間女性は家庭の中の地位が低く、彼女たちの労働も軽視され、まるで「牛馬」のようにこき使われる存在であった。人民公社時代、女性は「時間労働点数制」によって女性労働からも家庭収入を加わるようになり、家庭の中の決定権をも持つようになり、女性の家族内での地位が向上した。改革解放後、政策転換により漁村の産業も大きく変化し、女性は家事専業から、出稼ぎや自主創業の事例も増加してきた。

第3章では、漁村女性の視角から、「螞蟻島」における村落での家族と親族の構造変化を分析した。伝統的な漁村社会の家庭構造は、家族の構造形態が一般的に大家族の形態であり、家族成員は三世代、あるいは四世代が一緒に暮らすのが普通であった（秦兆雄 2005）。漁村男女の性的役割に応じた分業が普遍的にみられた。その時の漁村女性は嫁入り道具を分与されるだけで、均分相続には参与できなかった。後に人民公社が成立し、生活の集団化が実行され、家族内部の機能は集団へ委譲することになった。この生活の集団化も大家族を解体させ、半分以上の大家族は、親と子の世帯が分離することによって、小家族化した。改革開放以降、漁村社会における家族形態

もすこしずつ変わってきた。現在では息子が結婚すると独立するので大家族の形態は出現せず、夫婦と子供の小家族が圧倒的に多くなっている。特に、「一人っ子」政策の影響で、漁村の家族人口規模は著しく縮小している。

第4章では、漁民の産育・婚姻・墓葬という人生儀礼の伝統的な内容と現在の変化を表し、さらに人生儀礼から見る女性の家族帰属意識を明らかにした。今日の漁村では、例えば、調査地の螞蟻島のように、漁村といっても、ほとんど漁業ではなく出稼ぎをして生計をたてる人が一般的である。人生儀礼は海に関する内容が多少残り、まだ漁村の特徴が見られるが、おもに農村地域の漢民族を対象として行われてきた事例と今回の螞蟻島とは家族帰属意識のレベルにおいて大きな差異は見受けられなかった。

第5章では、「漁村」文化の代表として各種民間信仰に基づく祭祀活動を行う廟の復興過程を整理し、廟の再建と運営に注目し、再開後の廟で行われる儀礼を分析した。その中に廟で行う祭祀活動の主催はほとんどが女性中心となっており、拝みに来るのも女性が多い。この状況は、おそらく漁村における男女がそれぞれの「責任」を分掌していると言えよう。一方、螞蟻島における現在の毎年祖先祭祀から見ると、女性は祖先祭祀活動において、重要な役割を果たすようになった。改革開放後、男性が出稼ぎで村を離れるようになり、清明節や位牌祭祀の時に、村に帰れないことが多くなった。そのため、男性に代わって女性が墓参りや位牌祭祀を行うように変化してきた。この時点で、女性が墓参りに参加できないという認識が薄れ、家に残された女性が家庭の仕事の1つとして祖先祭祀にもせざるを得なくなった。

結論として、本論は舟山群島における漁村社会像と「漁嫂像」は、中国人の生活世界の1つの側面を現してきたと考えられる。以上の漁村のさまざまな民俗変容によって、現在螞蟻島の漁村は、伝統的な漁村と比べて大きく変質・変容したといえる。なぜかという、「漁村」と言っても、全然漁業に従事しない人が半分以上を占めているのである。特に、漁村工業化による大勢の外来人口流入と新しい文化要素の流入は、螞蟻島の地元の人々の生活観や世間観、価値観にも少なからざる変化をもたらしたと考えられる。漁村社会を変質するとともに、漁村の伝統的な民俗も変容し、特に、漁村で特有の民俗事象が消滅しつつある。この漁村の無形民俗文化財の保護においては、早くこうした文化財保存の動きをしたほうがいいと考える。一方、漁村社会の変質過程においては、漁村女性の地位と役割も変わってきた。まず、女性自身は、労働の参加によって、女性自身が労働主体としての自己認識の自覚化を実現した。そして、女性は自己価値の実現とともに、彼女らの家庭での役割も、従属的な地位から現在の家庭を半分支える地位（半边天）になった。彼女らは、無意識的ではあるが、結果的には漁村における重要な民俗文化財を保護する存在であったことがわかった。

最後に、今後舟山群島における漁村社会の研究課題、あるいは、本論でまださらに研究する必要がある課題は、やはり、中国における他の地域の漁村社会と比較研究することが必要と考える。さらに、中国と他の国の漁村との比較研究もこれからの課題としたい。

舟山群島における漁村社会の変容から見る女性の役割

— 螞蟻島の“漁嫂”の暮らしをめぐって —

目次

目次	i
図の一覧表	v
表の一覧表	vii
【資料1】舟山群島新区年表	viii
序章 問題の所在	1
第1節 研究の背景・目的と調査地の選定	1
第2節 先行研究のまとめと問題の所在	3
第3節 本論の研究方法及び各章の内容	5
第1章 調査地の概況と歴史	9
第1節 螞蟻島について	9
1 螞蟻島の地理・人口・生業概況	9
2 螞蟻島の経済概況	12
3 螞蟻島の学校教育	13
第2節 資料から見る螞蟻島の歴史	13
1 舟山群島における漁村社会の形成史	13
2 舟山群島における漁業の発展過程	17
3 解放前の螞蟻島	21
(1) 螞蟻島の漁民の来歴	21
(2) 解放前の漁業	21
4 解放から人民公社時期へ	22
(1) 漁民供銷合作社	22
(2) 土地改革	22
(3) 螞蟻島の漁業民主改革	23
(4) 互助合作	25
(5) 人民公社	29
5 改革・開放期の漁民たち	33
(1) 改革前期—生産責任制及び漁業政策の局部調整	33
(2) 漁業生産責任制	34
① 郷鎮企業	35
② 海洋漁業会社	35
第2章 漁村女性の労働と自己認識の変化	37
はじめに 女性労働についての先行研究のまとめ	37
第1節 「牛馬」としての伝統的な漁村女性の姿	39

1 「牛馬」として扱われた漁家女	39
2 「牛馬」から「労働の主体」へ	41
(1) 家事からの脱出	41
(2) 主体意識の萌芽	41
第2節 現代の漁村における女性の労働参加と自己認識の変化	42
1 漁村における産業の変化と女性の働き	42
(1) 螞蟻島の社会構造——改革開放以降の螞蟻島	42
(2) 「漁家楽」から見る漁村における女性の働き	44
① 「漁家楽」とは何か	44
② 「漁家楽」の運営と女性労働者の主体意識の形成	44
(3) 漁村工業化の影響——東海造船所の登場と外来の出稼ぎ女性労働者	45
① 出稼ぎ女性労働者とネットワーク	45
② 生活空間としての工場	46
③ 定住の可能性	47
2 漁村女性の自己認識	48
(1) 漁村女性の楽しみと労働の位置づけの変化	48
(2) 現代の漁村女性の自己認識	49
3 婦女連合会が果たした役割	50
(1) 螞蟻島の婦女連合会の機構設置と機能	50
(2) 漁村女性の集団活動	50
(3) 婦女連合会の役割	51
小括	51
第3章 漁村家族生活における女性の役割変化	53
はじめに 中国の家族に関する先行研究のまとめ	53
第1節 漁村社会の変容における家族	56
1 解放前の伝統的な漁村社会における拡大家族	56
(1) 家族と親族	56
(2) 螞蟻島における解放前の家族生活	58
(3) 漁業民主改革（漁区の土地改革）と家族	60
事例① 拡大家族の分家	60
事例② 土地分配を有利にするため、息子の結婚を早める	60
2 人民公社における拡大家族から核家庭への変化	61
(1) 人民公社における親族・姻戚	61
(2) 人民公社期の核家族	63
① 親子関係	63
② 恋愛・結婚	63
3 現代の漁村社会における核家族	64
(1) 現代家族の形態	64
(2) 子供中心主義と老親扶養の後退	64
第2節 漁家女が「娘家」から「婆家」へ：Y・AXの個人生活史	65
1 娘として	66
(1) 母と娘	66
(2) 姉妹の間	67

2	娘から嫁へ	67
(1)	結婚後の初期	67
(2)	嫁の実家とのつながり	68
3	母として	68
(1)	家族関係の変化	68
(2)	家の付き合い	69
①	舅と姑の義務	69
②	近隣との関係	69
4	母から姑へ	70
(1)	家族生活の頂点段階	70
(2)	変容する社会における娘	70
(3)	変容する社会における嫁	71
(4)	変容する社会における母	72
	小括	73
第4章	漁村人生儀礼からみる女性の家族帰属意識の変化	74
	はじめに 人生儀礼についての先行研究のまとめ	74
第1節	婚姻儀礼	76
1	伝統的な婚姻儀礼	77
(1)	婚姻儀礼前	78
(2)	結婚式の基本過程	79
(3)	海島の特殊婚礼	85
2	婚姻儀礼の変化と女性の家族帰属意識	85
(1)	婚姻儀礼の変化	85
(2)	新婦の家族帰属意識の表面的な移動	86
第2節	誕生儀礼	86
1	伝統的な誕生儀礼	87
2	誕生儀礼の変化と女性の家族帰属意識の実質的な移動	90
(1)	誕生儀礼の変化	90
(2)	新婦の家族帰属意識の実質的な移動	91
第3節	葬送儀礼	92
1	伝統的な葬送儀礼	92
2	墓葬の変化と女性の身分帰属の最終的確認	96
	小括	97
第5章	漁村における廟の復興・祖先祭祀と女性の活動	99
第1節	螞蟻島の廟の歴史	101
1	1949年以前の廟	101
2	解放以降の廟	101
第2節	廟の再建と新たな運営	102
1	観音信仰と海神信仰——天后宮（娘娘廟）の再建	102
2	再建後の天后宮の管理	103
3	大興岬財神殿の再建と管理	104
4	後岬財神殿の再建と管理	105

第3節 儀礼の再開と女性の活躍	106
1 大興呑財神殿と後呑財神殿の儀礼	106
2 天后宮の儀礼	108
第4節 祖先祭祀と女性の関与	109
1 伝統の祖先祭祀	110
2 現代の祖先祭祀と女性の活動	111
3 祖先祭祀と女性の関与	112
小括	114
終章	115
第1節 本論の総括	115
1 漁村女性の労働と自己認識の変化—漁村の工業化と流動化	115
2 漁村家族生活における女性の役割変化—漁村家庭の構造の現在	118
3 人生儀礼から見る女性の家庭帰属意識の変化—漁村民俗の伝承・消滅	119
4 漁村の廟の復興と女性の活躍—漁民信仰と祭祀活動の伝承	121
第2節 漁村社会の変質・形態の変遷と女性の役割	123
おわりに—今後舟山群島における漁村社会の研究課題	124
参考文献	125
謝辞	140

図の一覧表

図1 中国における浙江省の位置	1
図2 舟山群島の位置	1
図1-1 螞蟻島の地理位置	9
図1-2 螞蟻島の全体図	9
図1-3 2007年以前の螞蟻島	9
図1-4 現在の螞蟻島	9
図1-5 螞蟻島郷政府を中心とした行政モデル図	11
図1-6 張網の作業図	11
図1-7 燈光囲網の作業図	11
図1-8 螞蟻島第九村漁民互助組契約書	25
図1-9 螞蟻島の人民公社歴史資料	30
図1-10 三八海塘	32
図1-11 大型木帆船	32
図2-1 女性の網を作っている場面	39
図2-2 三世代同居	40
図2-3 L・YZの家族構成	40
図2-4 女性の運搬している場面	41
図2-5 女性の農作業をしている場面	41
図2-6 「三八海塘」を建造している様子	42
図2-7 「漁家楽」	44
図2-8 造船所の従業員宿舎	46
図2-9 「漁嫂」らのダンスをしている場面	50
図3-1 Z・DY家の家族構成(1927年)	59
図3-2 Z・DYの家屋	59
図3-3 Z・DY家の家族構成(1938年)	59
図3-4 L・GL家の家族構成(1965年)	62
図3-5 2012年L・GLの住宅(1966年建)平面図	62
図3-6 L・GL夫婦	63
図3-7 1985年L・YZの家族構成	63
図3-8 螞蟻島の「老人マンション」	65
図3-9 Z・LD家の家族構成(2010年)	65
図3-10 Y・AXをめぐる分析図	66
図3-11 2012年Y・AXの家の構成図	67
図3-12 Y・AX家の外観	68
図3-13 Y・AX家の内部	68
図3-14 Y・AXと次男夫婦	72

図 4-1	嫁入り道具：てんびん棒	77
図 4-2	伝統的な婚礼の「抬嫁粧」の場面	79
図 4-3	ホールに安置される「享仙」儀式の供物	80
図 4-4	花轎の示意图	82
図 4-5	神様に訃報を伝えるルート	93
図 4-6	1940年代普陀の葬送隊列	95
図 4-7	1940年代和尚さんを参加していた葬送隊列	95
図 4-8	小螞蟻島における墓前で行われる墓参り	97
図 5-1	天后宮	103
図 5-2	娘娘菩薩	103
図 5-3	観音菩薩	103
図 5-4	天后宮を維持管理する女性	103
図 5-5	再建された大興岬財神殿	104
図 5-6	造船所	104
図 5-7	土地公公・婆婆と天医菩薩	104
図 5-8	武財神と文財神	104
図 5-9	三官菩薩と葛仙翁菩薩	104
図 5-10	修繕した後岬財神殿	105
図 5-11	経を読んでいる僧侶	107
図 5-12	財神廟儀礼後の食事会場面	107
図 5-13	天后宮儀礼後の食事会場面	108
図 5-14	螞蟻島における清明節で行っている墓参り	111
図 5-15	L家の清明節の墓参り	111

表の一覧表

表 1-1	螞蟻島の人口	10
表 1-2	各行政村の人口	10
表 1-3	螞蟻島の漁撈暦	12
表 1-4	螞蟻島の教育程度	13
表 1-5	舟山歴代行政区画の沿革表	15
表 1-6	宋至民国の舟山の人口変化	16
表 1-7	解放後舟山の人口変化	16
表 1-8	漁、農、塩業の人口変化	17
表 1-9	螞蟻島の行政区画の歴史	21
表 1-10	1951年土地改革時期螞蟻島階級規定	23
表 1-11	1953年螞蟻島全島階級別平均世帯人数	24
表 2-1	螞蟻島女性労働参加の産業構成と年齢構成	43
表 2-2	螞蟻島の女性労働力の状況	43
表 2-3	螞蟻島労働力の構成	43
表 3-1	舟山群島における親族の呼称体系	57
表 3-2	舟山群島における姻戚の呼称体系	58
表 4-1	妊婦の禁忌の食べ物	88
表 5-1	螞蟻島の年中行事活動	106

舟山群岛新区年表

*『舟山市誌』『舟山漁誌』より抜粋。嵎蟻島に関する項目はゴチックで示す

西暦 年号 舟山群岛のイベント

七三八	(唐)	翁山県を設置
開元二六		
七六二	宝応元	袁晃の蜂起軍、翁山を占める
七七二	大歴六	翁山県を廃し、鄞県に入る
八六三	咸通四	日本の僧慧鑒普陀山観音像を奉納
九一六	(五代・呉越)	普陀山、不肯去観音院を建てる
	梁眞明二	
一〇七三	熙寧六	析鄞県東部海中の富都、蓬萊安期三つ郷、昌国県に属する
一〇七八	元豊元	析定海(今寧波市鎮海、北仑区)及び金塘郷、昌国に属する
一一九〇	(南宋)	県令王阮、『昌国志』書く
	紹熙元	
一二四八	(北宋)	宋理宗、普陀山に応接荘を設置
	淳祐八	
一二七六	景炎元	元軍、昌国を占める
一二七八	(元)	昌国県を昌国州に昇格
至元十五		
一二九三	三十	朝廷、昌国より水産品税を徴収
一二九五	元眞元	朝廷、各道塩使を廃し、昌国州の各塩場を塩司に改める
一二九七	大徳元	官府命令、船頭の船の大きさにより官塩を買い、干物を作る
一二九九	三	普陀山宝陀山の妙慈大師、元の国史として国書を持ち、日本へ行く
一三三五	元統元三	西域龜茲(今新疆古車渠の周り)僧人盛熙明、普陀山に至り、『補陀洛迦山伝』書く
一三六八	(明)	蘭秀山の乱起こる
	洪武元	
一三六九	二	昌国州、昌国県に改める
一三七一	四	海禁令を發布
一三八六	十九	四六島居民三万余内地へ強制移動
一三八七	二十	昌国県廃し、昌国郷を設置
一四〇九	永楽七	沈家門、水寨を立てる
一五四〇	嘉靖十九	李光頭、王直など双嶼港に集り、ポルトガル人及び倭寇と貿易したり、強奪する
一五五七	三六	倭寇の王直、逮捕される
一五六七	隆慶元	海禁を解除
一六四九	(清)	明魯王、閩から舟山に移住
	順治六	
一六五一	八	清軍、舟山を占め、明の軍民一万余殉難
一六五五	十一	鄭成功、舟山を占領
一六五六	十三	海禁令を際發布、普陀山の普済寺を造り直す
一六八四	二三	海禁を解除、農漁業を復興、舟山鎮を建てる
一六八六	二五	舟山を定海山に改称、寧波に海関を設置
一七〇〇	三九	イギリスの東インド会社、定海に事務所を設置
一七二七	雍正二七	海禁を緩和
一七九八	嘉慶三	海賊蔡牽、反乱、嘉慶十四に蔡牽自殺
一八四〇	道光二十	イギリス海軍、定海港を侵略
一八四二	二二	中英『南京条約』規定、定海府の舟山島とアモイの鼓浪嶼だけ、依然として英兵に駐留
一八四六	二六	『返却舟山条約』結び、英軍、舟山から退撤
一八五〇	三十	「客田制水、魚鮮補佐」の方法が開発され、氷鮮船、魚行棧増える
一八六〇	咸豐十	英法連軍、定海城を侵略、翌年春撤退
一八七七	光緒三	英太古汽船会社、上海、寧波、定海、温州航路を開設
一八八五	十一	中法、石浦海戦後、フランス数艘軍艦、普陀山と金塘を経過、鎮海を侵略
一八九五	二一	カトリック教徒、普陀山寺院の田を占拠
一九一一	宣統三	寧波民軍、定海に着き、定海を取り戻す
一九一三	(中華民國)	農商部、定海に漁業伝授所を開設
	民国一	
一九一六	五	孫中山、舟山を視察、『遊普陀志奇』を書く
一九一七	六	大隊作業、余山漁場にイシモチ生産を開発
一九二〇	九	浙江省外海漁業局成立

一九二二	十一	『舟山日報』創刊
一九二五	十四	「五・三〇運動」を支援のため、定海城内労働者・学生・商人をストライキ
一九二六	十五	中国共産党定海独立支部成立
一九二七	十六	浙江省立高級水産職業学校、定海に移転
一九二九	十八	中国国民党浙江省定海県独立区党部成立
一九三一	二十	二〇〇艘余日本漁船、舟山漁場に侵入出漁
一九三三	二二	日本海軍第三軍艦七艘、舟山群島海域に侵入
一九三四	二三	定海県 保甲制を施行
一九三七	二六	三、四十艘日本漁船、余山、嵎山漁場に出漁
一九三八	二七	日本海軍定海港侵入、浙江省外海水警局軍艦収奪
一九三九	二八	日軍一四〇〇人余、沈家门に上陸、定海占領
一九四四	三三	日軍 定海東港に空港を築く
一九四五	三四	定海県政府、国民党定海県党部 定海戻る
一九四六	三五	浙江省漁業管理局、定海に成立
一九四九	三八	国民党軍隊、舟山群島に共産党解放軍負けて退却、国民党軍隊、岱山に空港を築く
一九四九	(中華人民共和国)	駐舟山国民党軍隊、沿海を修築
一九五〇	五月十七日	舟山群島解放、定海県と嵎山特区、保甲制廃止、区鄉村制度実行
一九五一		定海県岱西郷塩業互助組設立、嵎山漁民協会を成立
一九五二		定海県嵎山郷 劉岳明漁業互助組設立
一九五三		嵎山郷に漁業民主改革試行、遠洋漁民互助組を成立、嵎山郷長沙塘漁業生産合作社設立
一九五四		嵎山郷、四つの漁業合作社合併、また、販売社、農業社、手工業社、信用社と合併
一九五五		『舟山報』創刊、第一機帆船を造った
一九五六		漁業、農業高級合作社試行、嵎山郷高級漁業生産合作社成立、海洋漁業税徴収
一九五八		定海・普陀・岱山・嵎山4県合併、舟山県を設置
一九五九		嵎山郷漁業人民公社を始め、小嵎山郷の公墓が造られ、「死んだ人と生きる人」が「分島居住」
一九六〇		農区「三級所有、隊が基盤」漁区「公社、大隊、兩級所有、大隊が基盤」
一九六一		全県群衆運動「学ぶ嵎山郷、追いかける嵎山郷、越える嵎山郷」
一九六二		沈家门、全国海洋漁業嵎山郷現場会議を開く
一九六四		全県公社化期間、二二九二漁農村食堂中止
一九六六		舟山海洋漁業会社を開業
一九六七		「学ぶ嵎山郷」を中心的「比べ、学び、追いかける、助け」群衆運動を展開
一九七六		「四旧・旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣」を破る
一九七八		普陀山の仏像を壊され、仏經を燃やされる
一九七九		「文化大革命」展開、全区漁業機械化基本的に実現
一九八〇		周恩来、朱徳、毛沢東逝去、「四人組」逮捕
一九八一		舟山第二海洋漁業会社設立
一九八二		日本宮城県石巻市漁業団、舟山に訪問、嵎山郷中心学校ビルを建成
一九八三		漁区「定額包干」生産責任制試行
一九八四		農業請負生産制度実施、嵎山郷のクリマエビ養殖が始まった
一九八五		人民公社の解体を決定
一九八六		漁区、「船より精算」の生産責任制試行、嵎山郷人民公社退場
一九八七		舟山海洋漁業会社とアフリカ漁業会社合資、中非漁業会社設立
一九八八		労働制度改革、企業労働合同制実行、嵎山郷の漁業株式会社試行
一九八九		定海・普陀の大部分の地区、火葬を実行『舟山海域島礁誌』と『普陀県誌』出版
一九九〇		舟山市の漁業村、全部株式合作制を施行（一九九四、嵎山郷全郷株式合作制を施行）
一九九一		『中日漁業協定』実施
一九九二		新型漁農村建設を推進、嵎山郷社区を成立、嵎山郷社区婦人委員会を設置
一九九三		中国一の外海大橋を貫通、嵎山郷灯圍經濟合作社成立
一九九四		浙江東海岸船業会社を開業、嵎山郷中心学校を解散
一九九五		舟山市農（漁）民專業合作社連合会を成立
二〇〇〇		舟山群島新区を設立

序章 問題の所在

第1節 研究の背景・目的と調査地の選定



図1 中国における浙江省の位置

「2011年7月7日、中国の浙江舟山群島新区（図1、図2）の設立が正式に批准された。この結果、舟山群島新区は、上海浦東新区、天津滨海新区、重慶両江新区に続く新たな国家級の新区となり、また国務院が批准した国内初の海洋経済主体の国家戦略的側面をもつ新区となった。舟山群島新区の範囲には、舟山市の現行の行政区域が含まれる。新区の機能は「浙江省の海洋経済発展を先導する区」、「海洋の総合開発のテスト区」、「長江デルタ地域の経済発展の重要な成長極」などと位置づけられている。新区は今後、国内の大口商品の貯蔵、輸送、中継、加工、取引のセンター、東

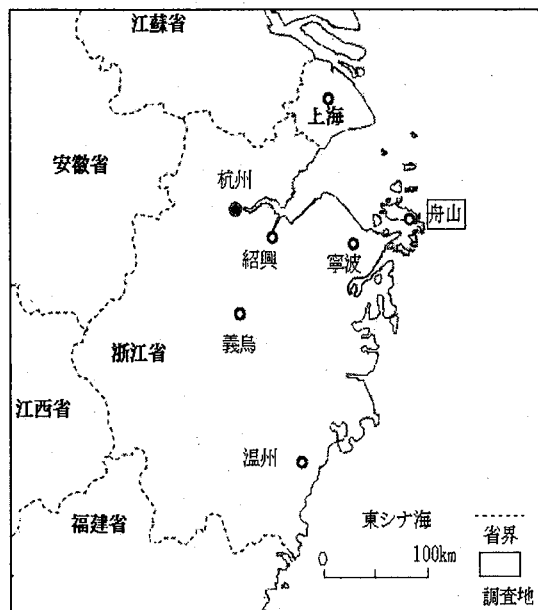


図2 舟山群島の位置

部地域の重要な海上の開放窓口、海洋や海洋島の科学的保護開発のモデル区、重要な現代型海洋産業拠点、陸海の一体化発展の先行地区になることを目指して努力する」という (<http://j.people.com.cn/2011年7月8日>)。

舟山市は国内で唯一の島嶼によって形成され、1390の島嶼を含む市である。東部沿海地域の中心にあり、北は山東省の膠州湾や渤海湾に連なり、南は福建省や広東省に連なり、西には長江が海に注ぐ地点と杭州湾があり、東は太平洋に直接面しており、中国の沿海省の中で太平洋に最も近い群島である。舟山群島海域の深水海岸線の長さは280キロメートルに達し全国の18.4%を占め、港湾建設の条件に優れている。港湾物流、臨海工業、海洋観光、海洋漁業を根幹とし、海洋島の特色を鮮明に備えた海洋経済システムがすでに基本的に形成されている。

舟山群島新区の発展は、海洋文化に支えられることが非常に重要だと考える。海洋文化には、昔からの海洋社会の形成過程、漁業生産の発展の歴史、漁村に伝承される豊富な民俗文化などが含まれる。こうした海洋文化は、島の人々の精神的な支えとなり、人々の心理や意識に作用しながら、独特な海洋民俗をつくりあげていくことになるだろう。

海洋社会という概念について、楊国楨は、「直接的あるいは間接的な各種海洋活動の中に、人と海、人々の間に形成された各種関係の組合、海洋社会団体、海洋地域社会、海洋国家など各レベルの社会組織とその構造システムを含む。つまり、社会生活主体としての人と各種の社会組織、観念意識、文化行為と方式などが、一定期間に海洋と相互交流をすれば、すべて海洋社会の基本的内容になると思われる」と述べている(楊 2000)。一方、崔鳳の理解によれば、「海洋社会は、人間が海を開発し、利用し、保護する実践活動により、形成された地域的な人込み共同体であり、人海関係、人海インタラクティブ、渉海の生産と生活の実践の中での人間関係や人間インタラクティブを含む複雑なシステムである。この関係とインタラクティブに基づき形成する経済構造、政治構造と思想文化構造を含む有機的な全体が海洋社会になる」(崔 2007: 8)と指摘している。海洋社会の基礎的な構成単位としての漁村において、漁業生産は漁村の主産業として昔からずっと重要な地位を占めている。

漁業というと、一般には男性が主に活動しているイメージがあった。しかし、男性による出漁以外に、例えば、網の修繕、漁獲物の売買、ほとんどの家事などは女性の活躍があり、その活躍は漁師の正常な生活の維持に貢献している。また、漁村の生活は漁業だけが行われているわけではない。近年、舟山群島の漁村女性による起業的な活動が増加している。これらの活動には、水産物の加工・養殖・販売という内容のものが多く、また「漁家楽」というレージャー漁業は舟山群島の特色的産業となった。こうした副収入機会の創出という漁家経営や女性労働の経済的評価から見た意義に注目することにより、漁村女性たちは舟山群島新区の振興と発展の新たな担い手として期待されている。

2005年に舟山群島の普陀区の螞蟻島という漁業郷が上海海洋大学の経済管理学院の社会实践基地になった時、筆者は最初の社会实践組のメンバーとして、はじめてこ

の地方における現地調査を行った。当時の筆者にとっては、舟山群島の周辺、とくに螞蟻島の漁村社会はまったく未知の世界であり、それまで螞蟻島の近くにある世界的に有名な観音寺院が建つ普陀山が存在することしか知らなかった。

螞蟻島は、1958年9月26日に中国初の漁業人民公社である螞蟻島人民公社を設立したことで知られる。すなわち、螞蟻島が遂げてきた発展の過程は、中国の漁業発展の歴史の縮図であるといえる。また、螞蟻島の漁村で女性たちが労働に参加してきた歴史は全国的にも知られており、こうした意味でも螞蟻島を調査地として選定し分析をすることは、舟山群島全体、更に中国全体の漁村における女性の地位や役割を分析するうえで重要な意義があると考えている。

筆者は、産業経済学の専門だったので、経済学・社会的な視点から螞蟻島に数回にわたるフィールドワークを行い、研究成果を「社会の変革と漁業経済の発展過程における漁村女性の地位・役割に関する研究—浙江省の螞蟻島を事例として—」（上海海洋大学経済管理学研究科修士論文）という論文にまとめている。この修士論文の作成のために、数多くの社会学・民俗学的資料を収集することができた。2009年10月に、筆者は日本政府（文部科学省）奨学金の国費外国人留学生として、日本の大学で勉強する機会を得た。これまで舟山群島の漁村社会に関する研究はまだ少なく、舟山群島の地元の学者である金濤が、舟山群島における海洋民俗を豊富に集めたが、学術的な研究とは言えず、貴重な資料であることが認められているが、まだ多くの課題が残されている。特に漁村社会の変容におけるジェンダーについて民俗学的視点から研究したものはあまりない。

一方、中国の民俗学は、これまで、主に民間文学、民間芸術、風俗習慣、民間信仰、民間結社などについて研究してきた。しかし、ある地域において様々の面で深く研究する方法、つまり、民俗誌の研究方法は長い間、軽視されていた。最近、中国民俗学者高丙中は、「中国人の生活世界」を対象として、つまり、普通の人の日常生活の文化伝承について、注目している（高 2010）。したがって、本論においては、ジェンダーについて民俗学的視点から螞蟻島における漁村女性民俗誌研究を目指す。本論の女性民俗誌の研究は、漁民家族をその研究の基礎においた。つまり、微視的分析を中心とし、さらにそれへの歴史的視点を強調することにより、漁業および漁業経済の特殊性との関連の中で、女性の地位や役割を位置づける。

第2節 先行研究のまとめと問題の所在

1 先行研究のまとめ

民俗学にとって「男と女」とは永遠の命題である。どこの国でも人々の暮らしの中の文化を研究対象とする民俗学において、例えば年中行事や通過儀礼、また口承文芸や民俗芸能、あるいは生業や衣・食・住について考える時、いかなる場合においても、男と女をめぐる問題は避けて通ることができない課題である。民俗学においては、「ジ

エンダー」ということ、あるいは「女の民俗」を対象とした研究は、どの学問領域よりも早くから着手された（服部誠・山崎祐子・八木透 2008）。民俗学と学問領域において隣接している人類学においても、男性と女性の関係について重要な課題として研究している。例えば、綾部恒雄は、世界のできるだけ多くの地域の、異なった生業形態をもった様々な社会に生きるごく普通の女性の一生を、女性の手によって紹介した民族誌を書いた（綾部恒雄 1982）。今日、男と女をめぐる様々な社会問題の大半が「ジェンダー」に起因するといえるだろう。特に、「ジェンダー・フリー」と「ジェンダー・バイアス」というような言葉は一時的によく使用され、社会学や心理学、あるいは社会福祉の領域で男女共同参画社会の研究の中で使用されてきた傾向がある（大沢 2002）。民俗社会における「ジェンダー」をめぐる問題は、村落運営や社寺祭祀、あるいは様々な年中行事において、避けては通れない課題になっている。例えば、「近代家族」においては「男は公共領域、女は家内領域」という性別役割分業論に立脚した家族の形態があり、男たちは家を代表する公的立場としてふるまうことが求められ、一方女たちは、家を守りながら夫や舅を助けるという役割を担ってきた。

中国の漁村女性に関する研究はまだ少ないが、漁村についての研究は多少蓄積がある。舟山群島の漁村に関する専門研究であり、金涛が編集した『東海島嶼文化と民俗』（2005）と『舟山群島海洋文化概論』（2012）では、海島生産習俗の変遷、特徴と規律を論述しており、さらに漁撈習俗、魚類加工と貿易習俗、養殖、魚介類を採る習俗及び海に関わる他の習俗を具体的に分析、考察している。それと同様に、海島民の長期的な生産生活実践においては、豊富な文学芸術、漁民の民間信仰、儀礼などを創造し、舟山地区の独特的「漁文化」を形成し、島民の生産生活及び彼らの理想と願望を示した。そして、福田アジオは、2002年から2006年にかけて、浙江省民間文芸家協会と共同で浙江省の象山县東門島と温嶺市箬山という漁村でフィールドワークを行い、漁村での生活を把握し、民俗の特色を考え、特に、漁村の家族・親族と民間信仰の内容について調査している。福田は、日本論化のルーツや中国文化の影響、日本との近似性・近縁性、また表面上の類似性や共通性という文化の系統について分析を行った。その中で、漁家の婦女と女神信仰について言及しているが、深く研究されたとは言えない。

このような中国の状況に対して、日本は漁村における女性に関する研究や、明治以降蓄積されてきた膨大な数の資料があるため、筆者の研究にとって大変参考になる。例えば、柳田国男は、『女性と民間伝承』や『妹の力』を代表著作としており、『妹の力』の中で、日本の太古から、女性に対する古称は妹であり、この妹の力をイモウトとして妹の兄に寄せる強い霊力をさしている。しかし、女には男に無い霊的な力を持っていることがあり、それはおそらく女が子供を産む性であり、男よりも自然即ち神に近い存在だと考えられていたので、柳田の言う「妹」とは妹と言う意味だけではなくて、母や姉や妻など男にとって親しい女全般を指している（柳田国男 1990）。また、宮田登は、柳田『妹の力』を発展させ、「女性の持つ霊的優位がどこから生じたのか原因について、『産む性』であり、それは一方では女性の血穢と関係している。

かつての社会では、血のケガレが月経と出産に伴うことで忌避されたのであるが、それは男性の女性に対する畏怖感から生じた文化であった」と述べている。そこに女性を畏怖する男性の側の問題もあるはずであり、しかもその畏怖がどこかで女性を恐怖の対象に変質するプロセスもあったのではないかと考えた（宮田 1983）。さらに、瀬川清子・江馬三枝子・大藤由紀などの女性研究者が膨大な資料の収集を行い、機関誌を刊行した。そのセンターとしての役割を果たしたのが「女性民俗学研究会」であり、機関誌の『女性と経験』であった。瀬川清子は、柳田の「女性の霊力」の出発点から、海村生活の調査において、男性が出漁に行って、女性は神事を行って家を守る」と指摘してきた（瀬川清子 1980）。

2 問題の所在

中国は伝統的に父系社会であり、従来の研究は男性をめぐる視点からの研究が普遍的であったが、近年になると世界中にジェンダーフリー運動が広がり、それとともに、各領域の研究はジェンダーの視点から再考察できるようになった。本研究では、先行研究を踏まえて、舟山の漁村女性について論じたいと思う。漁村女性の労働と自己認識、家族との生活、人生儀礼、廟の復興について研究する方法として以下の点が考えられる。

- (1) 漁村女性の労働及び自己認識にどのような影響を及ぼしたのか。
- (2) 漁村における家族と親族の構造の変化に焦点を当てることにより、女性たちの家族及び姻戚関係の中における位置と役割がどのように変化してきたのか。そして彼女たちが「娘家」から「婆家」へのさまざまな種身分転換に対してどのように実践しながら自身の生活空間と親族関係を構築してきたのか。
- (3) 近代以来彼女たちの自己帰属認識がどのように変化してきたのか。
- (4) 生育と婚姻と墓葬という人生儀礼において女性はどういう役割をしてきたのか。漁民信仰の代表的な廟の復興における女性の活躍はどういう状況であるのか。

という点について考察していく。そのなかで、漢民族の漁村における社会構造、価値体系、民俗的性格及び中国解放後の社会・歴史に対して女性の視点から再検討を行う。

第3節 本論の研究方法及び各章の内容

1 研究方法

まず、歴代の文献、考古学の発掘報告書と研究結果の中から漁村に関する文献資料を収集し、特に浙江省の舟山群島に関わる先行研究を分析した。そして、社会や民俗が変化の過程にある舟山列島の漁村において現地調査を行い、女性たちの地位がどの

ような状況にあるか、直接地元の漁民から解放前から現在までの漁村社会の変化について聞き取り調査をすすめた。さらに、解放前の漁村社会が解放後の社会主義化改造や建設の中でどのように変容されたのか、具体的に分析するために、地元の漁業民主改革や人民公社時代の文字資料と聞き取り資料をできるだけ集めた。その際、民俗学で用いられるフィールドワークの方法に則り、現地の人々の間に深く入り込んで調査し、民俗資料を自らの手で収集することを目指した。聞き取り調査のほかには、アンケートを作成した。さらに、現在の漁村にみられる歴史的・文化的現象について探るために、歴史学のオーラルヒストリーやライフヒストリーなどの研究手法を用いて漁村の歴史的変遷を遡った。

2 各章の内容

本論はあくまでも螞蟻島という漁村の女性民俗誌である。この内容を舟山群島さらに全国に普遍化させることはできないが、ここで分析された実態は現実の中国における漁村像の一部である。

筆者は、螞蟻島という漁村をジェンダー的・民俗的・歴史的・社会的にトータルに分析したかった。そのために、序章においては研究の背景・目的・方法・課題、第1章では調査地の社会概況と解放前後の歴史、第2章では漁村女性の労働と自己認識の変化、第3章では漁村家族生活における女性の役割変化、第4章では人生儀礼の変化と女性の帰属意識、第5章では「漁村」の廟の復興・祖先祭祀と女性の活躍について、螞蟻島という漁村を通じて多面的多角的に分析した。

具体的には、序章において、舟山群島新区の設立などをはじめとした中国における近年の海洋経済発展の戦略を紹介し、本論の研究の背景、目的、先行研究を述べる。

第1章では、まず、舟山群島における漁村社会の形成歴史の流れを考察する。また、漁村社会の形成と発展とともに、舟山の漁業発展過程にいくつかの段階があるのかを検討する。そして舟山群島の螞蟻島を主たる研究対象とする文化的経済的状況を整理し、その中で、螞蟻島が舟山群島のなかでどのように代表的な地域であるかを明らかにした上で、螞蟻島の歴史と特色についても概観する。また、中国の解放後、浙江省の漁民政策を踏まえたうえで、それに基づいて行われた螞蟻島における「漁民」の生業集団化の過程を検証する。

第2章では、昔の伝統的な漁業中心に暮らした女性の姿を述べている。彼女たちは大変な労働に従事するが、家族に対する経済的貢献があまり見えなかった。近代、人民公社時代になって、漁村女性は公社の中で働いた。収入が得られるようになり、特に改革解放後、政策転換により漁村の産業も大きく変化し、女性は家事専業から、出稼ぎや自主創業の事例も増加してきた。こうした「牛馬」（詳細は後述）から「労働の主体」への変化は、女性たちの自己認識にどのような影響を及ぼしたのか。また、現代女性の権利を守るために設立された婦女連合会は漁村女性の労働参加と女性自身の成長に如何なる役割を果たしたのかを検討する。

第3章では、漁村女性の視角から、「螞蟻島」における村落での家族と親族の構造変化を分析する。そのなかで、中国解放以降、特に改革開放後の30年を通じ、螞蟻島という漁村における家族と親族の構造変化に焦点を当てることにより、女性たち家族及び姻戚関係の中での位置と役割がどう変化してきたのか、そして彼女たちが「娘家」から「婆家」へのさまざまな身分転換とどのように実現しながら自身の生活空間と親族関係を構築してきたのか、近代以来彼女たちの自己帰属認識がどのような変化をしてきたのか、という点について考察する。

第4章では、漁民の出産・子育て・婚姻・墓葬という人生儀礼の伝統的な内容と現在の変化を表し、さらに人生儀礼から見る女性の家族帰属意識を明らかにしてみた。そこに表れる文化的内容に注目し、現在の螞蟻島における「漁民」文化の位置づけについて考察する。

第5章では、「漁村」文化の代表として各種民間信仰に基づく祭祀活動を行う廟の復興過程を整理し、廟の再建と運営に注目し、さらに再開後の廟で行われる儀礼を分析する。そのなかで女性たちの漁村文化の発展における地位と役割を再考する。一方、廟で行う祖先祭祀活動における女性の関与も明らかにする。

総括にあたる終章では、これまでの議論を整理したうえで、舟山群島における漁村の社会性格、集団構造と女性の役割が具体的にどのようなものであり、しかもどのように変化しつつあるのか、その変化の原因が何であるかを考察する。

最後に、今後の課題としては、中国の他の地域の漁村社会と比較研究し、さらに、中国と他の国の漁村の比較研究を行いたい。

3 調査の概要

本論で使用する調査資料は、2005年9月から2008年7月までの上海海洋大学修士期間中の断続的に行った数度の予備調査と2011年3月、2011年12月から2012年1月までの本調査、および2012年8月、12月の追跡調査により得たものである。

本論におけるフィールドワークは、数度の予備調査と本調査、ならびに補足調査を行った。具体的に筆者の調査歴を以下に要約する。

2005年9月 修論の予備調査：螞蟻島という漁業郷が上海海洋大学の経済管理学院の社会实践基地になった時、筆者は最初の社会实践組のメンバーとして、はじめてこの地方の現地調査を行った。

2006年5月 修論の本調査：アンケートによって、漁村女性の漁業経済の発展過程における地位と役割に関する聞き書き調査を行った。

2007年8月 修論の補足調査：郷政府から、全郷の漁業経済の中で、女性労働力の参与状況に関する補足調査を行った。

2011年3月 博論の予備調査：歴民の小熊誠先生、安室知先生と同道して、民俗の

視点から、修士論文の調査地螞蟻島で再び調査した。

2011 年 12 月 博論の本調査：螞蟻島の人民公社の歴史、漁村女性の労働と自己認識の変化、または、漁村家族生活における女性の役割についてフィールドワークを行った。

2012 年 8 月 博論の追跡調査：螞蟻島の人生儀礼に関する聞き書き調査を行った。

2012 年 12 月 博論の追跡調査：螞蟻島の廟の歴史と復興過程、廟で行う祖先祭祀に関する内容、または、その中で女性の活動についての聞き書き調査を行った。

2013 年 9 月 博論の補足調査：中間発表の後、先生方から意見をいただき、不十分な点について補足調査を行った。

以上の調査は、いずれも調査時間がほぼ一週間から 3 週間までの短期調査であることが欠点であった。しかし、8 年間にわたり連続して同じ漁村に通うという調査の形で、長期滞在できない不足を補い、徐々に 1 つの漁村の状況を深く把握し、その漁村の社会変容も自らで確認できたことは、本研究の資料蓄積となっている。

また、本研究の中で、聞き書き調査者の実名をすべて名前の漢字のピンインの最初のローマ字で表記する。例えば、李彩英 (Li CaiYing) は、L・CY のように表記する。

第1章 調査地の概況と歴史

第1節 螞蟻島について

1 螞蟻島の地理・人口・生業概況

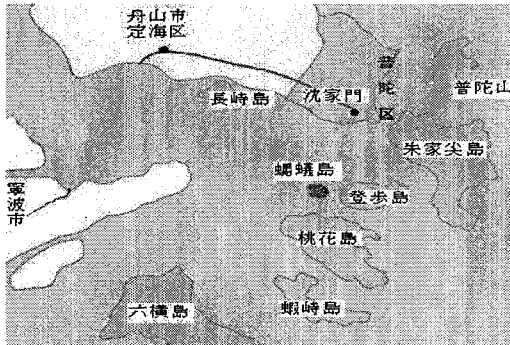


図 1-1 螞蟻島の地理位置

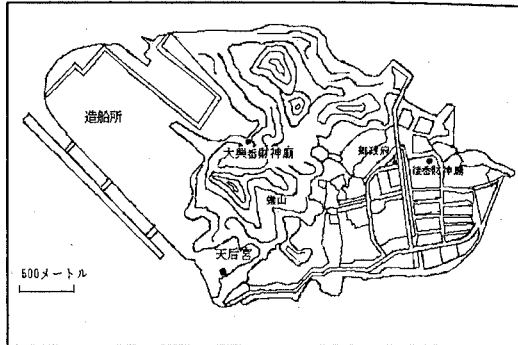


図 1-2 螞蟻島の全体図（筆者作成）



図 1-3 2007 年以前の螞蟻島（写真：google 地図）



図 1-4 現在の螞蟻島（写真：google 地図）

螞蟻島は舟山市普陀区の管轄で、舟山群島東南部に位置する蟻に似た形の島で、北緯 29 度 52 分 34 秒、東経 122 度 15 分 32 秒に位置する（図 1-1）。螞蟻島から北に 8.5 キロメートルのところに沈家門があり、南に 1.7 キロメートルのところに桃花島があり、西に 73 キロメートルのところに寧波があり、東に 1.1 キロメートルのところに登歩島がある。螞蟻島は島全体が標高 157.3 メートルの大平岡からなり、島の周囲は 7.82 キロメートル（図 1-2）である。螞蟻島の面積は民国 13 年（1924 年）当時、2.15 平方キロメートルであり、2006 年には 2.64 平方キロメートルだったが（図 1-3）、現在は造船所が建設されたために、新たに 0.36 平方キロメートルが埋め立てられ、3 平方キロメートルになり、「半島船郷、半島人居」といえる（図 1-4）。螞蟻島郷の全域は大螞蟻島、小螞蟻島、点燈山と鼠山という 4 つの島で構成されるが、大螞蟻島にだけ人が住んでいる。螞蟻島の行政においては螞蟻島郷（2008 年以前、螞蟻島郷には、長沙塘村、蘭田岙村、穿山岙村、後岙村、大興岙村という 5 つの村があったが、2008 年、蘭田岙村、穿山岙村と大興岙村を合併して新紀村になり、合計 3 つの村になった。2010 年、3 つの村を再び合併して螞蟻島社区⁽¹⁾（村）になった）と 5 つの経済合作社⁽²⁾（長沙塘経済合作社、穿山岙

経済合作社、後岙経済合作社、大興岙経済合作社、蘭田岙経済合作社）を管轄している。

螞蟻島の戸籍人口は全て漢族であり、1959年に戸数586世帯、人口2849人、高度経済成長期に入った1999年には、人口がピークに達し、戸数1236世帯、人口4573人であった。その後出稼ぎ人が多くなるにつれて戸数、人口とも減少して行く。螞蟻島の郷政府報告によると2003年には戸数1155世帯、人口4070人となり、2010年には戸数は1143世帯、人口は3969人となっている（表1-1、表1-2を参照）。表1-1は螞蟻島の戸籍による螞蟻島人口を示しているが、2003年の4070人から2010年は3969人に減っている。これは出稼ぎ者と含むと、2003年の4200余人（外来人口134人）2010年の1万余人（外来人口6000人余り、外来の出稼ぎ者は大体河南、安徽、湖北、四川から来た）になった。

表1-1 螞蟻島の人口

年	戸数	人口数 (戸籍人口)
1953	503	2281
1959	586	2849
1964	649	3243
1982	1200	4519
1987	1443	4766
1990	1525	4743
1996	1247	4619
1999	1236	4573
2000	1203	4485
2003	1155	4070 (外来人口143)
2006	1169	4116
2008	1170	3987
2010	1143	3969 (男1904、女2065) (外来人口約6500人)

資料：螞蟻島の郷政府報告より筆者作成

表1-2 各行政村の人口

行政村	年	戸数(戸)	人口(人)
長沙塘村	1986		
	1999		
	2008	440	1356
大興岙村	1986	166	605
	1999	148	549
	2008	136	447
蘭田岙村	1986	193	605
	1999		
	2008	135	464
穿山岙村	1986	190	668
	1999	188	685
	2008	171	598
後岙村	1986		
	1999	287	1074
	2008	272	923

資料：螞蟻島の郷政府報告より筆者作成

2008年、舟山地区には、「グリッド化管理とグループ式サービス⁽³⁾」を実施している。螞蟻島は経済合作社を基礎に1128戸の漁民が10の「グリッド小組」で組織されており、各組と経済合作社の関係は、以下の通りである。

第1小組＝長沙塘	第2小組＝長沙塘
第3小組＝長沙塘	第4小組＝長沙塘
第5小組＝穿山岙	第6小組＝穿山岙
第7小組＝後岙	第8小組＝後岙
第9小組＝大興岙	第10小組＝蘭田岙

グリッド小組には組長、副組長、情報員、連絡員、警察、医者、成員などを設置し

て全島の村民を管理している。具体的には、各戸の村民の家に、その属している小組の組長、医者、警察の連絡先が記された一枚の連絡カードが貼らされている。村民は問題が起きたとき、そこに連絡する。したがって、浙江省から螞蟻島までの行政モデルは図 1-5 のようになる。

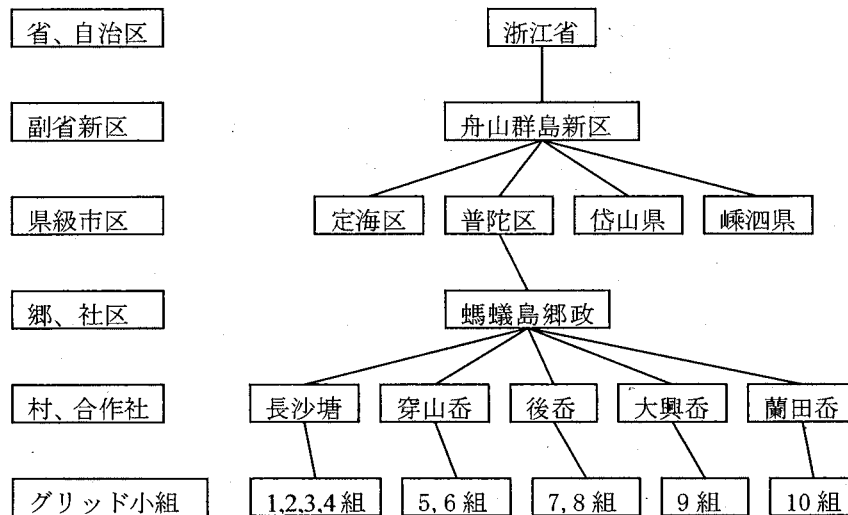
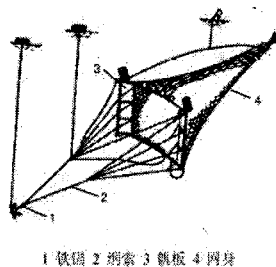


図 1-5 螞蟻島郷政府を中心とした行政モデル図

1982 年人民公社解体以前、螞蟻島の主な生業は漁業であり、その他には、農業もあった。改革開放後、螞蟻島に「生態島⁽⁴⁾」を建設するため、一切の農耕作業を停止し、漁業と工業が発展した。1987 年末



1 鉄錐 2 網索 3 網板 4 網身

図 1-6 張網の作業図

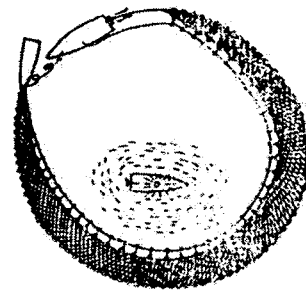


図 1-7 燈光囲網の作業図

には、174 艘漁船を有し、その総トン数は 3892 トン、総馬力量 4718 馬力、舟山市の水産品総生産量の 3% を占める年産 15239 トンに及んだ。2005 年、螞蟻島の船は 179 艘に増え、漁業労働力は 1000 余人、生産作業は蟹籠、曳網、張網（図 1-6）などを行う。養殖業、燈罾業も螞蟻島の重要な産業である。螞蟻島の伝統的な作業方式である燈罾作業は図 1-7 のように、灯光を使い魚群を誘い集め、包围して捕らえるという作業方式である。また、干した小エビを中心に螞蟻島の加工業は 2005 年まで、60 戸の漁民が従事していた。

螞蟻島の漁撈暦は表 1-3 により示され、1～6 月に、主にフウセイ、マナガツオ、ナマズ、エビ、カニを獲り、6～12 月にアオウオとタチウオを捕獲する。しかし、近年になると、漁業資源の減少を背景に、漁業産量も減少していく。螞蟻島はレージャー漁業を発展させながら、2007 年に東海岸造船所を設立するとともに、螞蟻島の産業も漁業から造船工業に転換している。

表 1-3 螞蟻島の漁撈暦

漁獲物\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
フウセイ												
マナガツオ												
ナマズ												
エビ												
カニ												
アオウオ												
タチウオ												

聞き取り調査により筆者作成

2 螞蟻島の経済概況

1955 年以前、国家の政策により、魚市場や国営企業が組織され、漁民のために水産品の販売を進めていた。また、「螞蟻島漁民供銷社」という民間販売組織と漁民自産自銷の方法も許可された。1956 年、中国浙江省漁業供給会社舟山支店と各県の県立会社が設立され、水産品の流通と売買を統一的に管理始めた。その結果、漁民は単純な生産者になり、自分の水産品を処理する権利がなくなった。一方、水産品の価額は長期的に凍結状態であり、1957 年から 1977 年までの 20 年間の間、魚の平均価格はたった 6.6% 上昇したのみで、同期間の漁業生産コストは 120% 増加した。螞蟻島漁民供銷社は 1955 年から魚の買収することが許されないだけでなく、漁民の代わりに輸送委託することも許されなくなった。この供銷社は民間組織から国営に変化し、長い間漁業合作経済の健全な発展を妨げていた。

1985 年 3 月、中国の国務院は、水産品の価格自由化に関する文書を発行し、市場の需要と供給に従うようになった。螞蟻島はこの政策が実行された年、300 トンの水産冷蔵倉庫を創立した。漁業生産は再編成が始まり、漁業会社が成立し、漁業、工業、商業と共同経営、生産、供給、売買の総合管理システムが形成された。2003 年～2006 年、漁業資源の衰退とともに、螞蟻島は遠洋漁業を発展させ、漁業株式合作制を改善し、漁業への投資も増加した。2006 年まで、漁船 195 艘、合計 13572 トン、18997 馬力。水産品年間産量 34680 トン、9516 万元、2002 年と比べてそれぞれ 8.32% と 46.31% 増加した。また、水産品の養殖業も発展し、合計 600 畝、年間生産量 166 トン、443 万元。また、螞蟻島干した小エビ加工企業は 65 家があり、年間生産額 5721 万元。2007 年～2011 年、螞蟻島は漁業への投資も増加した。2011 年まで、漁船 136 艘、合計 13503 トン、17853 馬力。水産品年間産量 40205 トン、18580 万元、2006 年と比べてそれぞれ 15.92% と 95.33% を増加した。また、水産品の養殖業合計 241 畝、年間生産量 50 トン、500 万元。また、螞蟻島は造船所を中心に発展し、地元の 200 余人の労働力と出稼ぎ者 7000 人の就職を解決した。2011 年の工業産業額は 158647 万元であり、2006 年と比べて 26.7 倍以上に増加した。

3 螞蟻島の学校教育

1950 以前、螞蟻島には 1 つの私人学堂（初小）しかなく、高小は登歩島の中心学校しかなかった。その時の学生は 50 人～60 人であり、貧しい漁民の子女はほとんど学校へ行くことができなかった。螞蟻島解放後、教育面ではかなり大きな変化が見られた。1950 年、人民政府は螞蟻島小学校を創立、当年の生徒数は 100 人であった。1952 年の調査によると、螞蟻島には 7 歳以下の人を除く人口は 1885 人があり、その中で、学校に行ったことのない非識字者 1021 人、54.16%を占め、小学校しか行かなかった半識字者 321 人、17.03%を占め、初小以上の人 543 人、28.81%を占めていた。1955 年、螞蟻島の小学校の生徒数 320 人、また、漁業合作社は、「掃文盲協会」を成立し、全社において 612 人がこの協会に参加し、社員総人数の 78%を占めた。1956 年、螞蟻島郷漁業合作社は、漁民の子女の教育ため、小学校の学費すべてを合作社に負担させ、毎年 3500 元の費用を合作社の福利厚生費の 35%で支払った。1957 年、漁業生産を発展させるため、螞蟻島水産中学校を創立し、主に政治、中国語、数学、漁業技術を学んだ。漁業技術という授業は、海洋知識、航海学、海洋気候、海洋生物、水産品加工、漁獲、機械と電力設備、漁業会計を含んでいた。1958 年から義務教育が普及し、当年の生徒数 480 人であり、また、遠洋漁業の発展とともに、長期的に船で作業する人が多くなるため、船の成人教育を実施した。1957 年～1964 年水産中学校の卒業生は 271 人、その中の 90 人が機帆船で漁作業に参加し、27 人が輪機員になり、12 人が公社、大隊の会計になった。1965 年以後、公社の規定により、新しい漁業労働者は、中学校を卒業しなければならないことになった。

1982 年、螞蟻島では（表 1-4）、1952 年と比べて教育の普及とレベルが上がっていることがわかる。1958 年、螞蟻島には小学校と中学校の総合学校 1 校があり、教師は 17 人、生徒数は 524 人であった。1970 年、生徒数は 600 人、教師は 21 人、1987 年、生徒数 671 人になり、幼稚園が 1 校ができた。2007 年、螞蟻島の学校は廃校となり、教育局によって学生を沈家門街道と東港街道の 2 校に分散歩させた。

表 1-4 螞蟻島の教育程度

教育程度	1982 年
大学卒業	5
高等学校	301
中学校	305
小学校	2233
文盲半文盲	1675
合計人数	4519 人

螞蟻島の政府報告に基づき作成

第 2 節 資料から見る螞蟻島の歴史

1 舟山群島における漁村社会の形成史

浙江省には小さな島が多い。その数は舟山群島を主として 2000 を超え、中国全体の 3 分の 1 を占める。舟山群島の中心は舟山本島であり、それは舟山地区の第一の島であり、中国の 4 番目の島であり、陸地総面積が 1258 キロメートル、人が住んでいる島は 96 あり、群島の周辺と外側の海域は有名な舟山漁場である。中国の国務院が

設置を認めた「舟山群島新区」の範囲は、舟山市の現行の行政区域と同じだという。舟山一帯は、20 世紀後半から急速に工業発展を遂げた長江デルタ地域に含まれ、中国の経済発展を支える重要地点である。

舟山は新石器時代にすでに人が定住していた。周代以前は、「海中洲」と言われ、春秋時代は甬東と呼ばれる。『定海県誌』により、甬東は周代前ずっと越国の句章県（今の寧波）に属し、秦漢の時会稽郡の鄞県に属し、隋代は呉州の句章県に属していた。唐の開元 26 年、甬東は県が設立され始め、そして、境内に三国時代の葛先翁が丹薬を作っていた翁山があるため、翁山に改称された。五代呉越国開平三年(909 年)、鄞県は鄞県に改称し、宋神宗熙寧五年まで続いていた。宋朝の熙寧六年（1073 年）、鄞県の東の「蓬萊（今の岱山）」、安期（今の桃花、六横）、富都（今の定海）という 3 つの郷を県が設立され、「昌国」に呼ばれた。元豊元年、もともと定海（今の鎮海）に属した金塘郷を昌国県に編入されてきた。それにより、舟山の区画は基本的に完成した。宋代の 300 余年、昌国県の各事業、特に製塩工業が大きく発展した。端拱二年（989 年）から、曉峰、昌国、東江、芦花、岱山と南高亭という塩場が設立された。舟山と言う名前は宋代から呼ばれ始めた。元朝至正 15 年（1278 年）、人口は数万に増加したため、昌国州が設立された。大徳二年（1298 年）編の『昌国州図誌』に舟山は州の南に位置し、山翼がある島であり、海に舟の集まる所なので、舟山と称されたと記されている。

明代から本島を舟山と称し始めた。明の洪武元年（1368 年）、湯和、廖永忠は福建を攻め落とした後、昌国を経、秀山の葉希戴、王子賢に奇襲された。洪武 19 年（1386 年）、明太祖は湯和に東南沿岸防衛を管理させ、また、昌国も元末の農民蜂起軍の方国珍の 1 つの根拠地であったため、明太祖はこれを心配していた。湯和は秀山の葉希戴、王子賢などの襲撃に恨みを抱いていたから、これを契機に、昌国の住民をすべて内陸へ移住させた。洪武 20 年昌国県を廃止、2 軍隊だけが舟山に残った。その後、居民から遣民の危害や兵民耕戦の結合のよいところという意見が太祖に述べられ、やっと舟山の本島住民 547 戸を残らせることになった。この遣民と廃県は、舟山にとって歴史的な第 1 回目の「海禁」であり、舟山漁民に莫大な災難をもたらし、千年を経て建設した家が壊れた。その後、倭寇はこの「無人の境」を根拠地として利用し、沿海の数省に災難をもたらし、さらに明朝の統治も動揺させ弱体化させた。しかし、家を離れた舟山住民は、自分の故郷を懐かしがり、やがて朝廷の禁令を冒して、こっそりと家に帰った。その後の抗倭闘争の中で、多くの将兵と地方官吏も百姓と切り離せないから、次第に禁令を緩めた。明末、舟山の住民は再び万戸を超え、しかも南明政権の最後の根拠地のひとつになった。

清の前期、本島は群島で最大の島のため、群島も舟山と称された。清朝順治三年（1646 年）、明朝の魯王は 3 番目の南明政権を設立した。順治六年、明朝の残っている大臣張名振は魯王を舟山に迎えた。1651 年、清兵は舟山を攻め落とし、住民の万余人が亡くなり、井戸の中にも死体がいっぱいになり、大火が何日も止まなかった。張名振と魯王は舟山の陥落を知り、アモイへ鄭成功と会合に行き、1655 年、張名振が舟

山を取り返した。1657年、清軍は再び舟山を占領し、舟山が守りにくいため、第2回の撤兵遷民を決定し、商船と漁船は1艘も入ることを禁止された。この第2回の「海禁」命令により、舟山の漁民を再び強制的に内陸に移住させるという災難がもたらされた。康熙26年(1687年)、康熙帝は「舟」が静ではなく、動くものなので、海が静でなければ、安寧ではなくなると考え、舟山を定海に改称し、もともとの定海を鎮海に改称した。道光20年(1840年)、アヘン戦争が勃発し、英軍は定海を攻め落とし、1845年によりやく奪回した。

表 1-5 舟山歴代行政区画の沿革表

年代		従属		行政区画沿革	注
紀元	年号	省、道級	府台、地区級		
738	唐開元二六年	江南東道	明州	翁山県	
742	天宝元年	江南東道	余姚郡	翁山県	
771	大歴六年	江南東道	明州	廃	鄞県に編入(今鄞県)
907	五代	呉越国	明州望海軍		
1073	宋寧熙六年	浙東道	明州	昌国県	
1080	元豊三年	両浙路	明州	昌国県	
1131	紹興元年	浙東路	明州	昌国県	
1195	慶元元年	浙東路	慶元府	昌国県	
1355	元至正十五年	浙江行中書省	慶元路	昌国州	
1369	明洪武二年	浙江布政使司	明州府	昌国県	洪武十二年設昌国御千戸所
1381	明洪武十四年	浙江布政使司	寧波府	昌国県	洪武十七年改昌国所為衛
1387	明洪武二十年			廃	衛を象山に移し、昌国に中中、中左を置く
1688	清康熙二七年	浙江省	寧紹道 台寧波府	定海県	定海県を鎮海県に改称
1841	道光二一年	浙江省		定海直隶庁	
1912	民国元年	浙江省		定海県	
1950	中華人民共和国	浙江省	寧波専区	定海県	
1953	中華人民共和国	浙江省		舟山専区	定海、普陀、岱山、嵎泗、象山を管轄
1987	中華人民共和国	浙江省		舟山地区	定海、普陀、岱山、嵎泗を管轄
2011	中華人民共和国	浙江省		舟山群島新区	

『舟山漁誌』により作成

1950年5月17日、舟山は解放され、定海県人民政府が設立され、寧波専区に属した。1953年、舟山専区が設立され、定海、普陀、岱山に分かれた。この時、もともと江蘇省に属した嵊泗県と浙江省寧波専区に属した象山県が舟山専区に編入され、ここで舟山群島と舟山漁場は行政的に統一された。1987年、舟山専区は定海、普陀、岱山、嵊泗と言う4県、6鎮を管轄し、86郷、853大隊が含まれた。2011年7月7日、もとの舟山市は舟山群島新区に改編された。舟山は中国で最初、また唯一の海洋経済を中心に設立された新区となった。『舟山市誌』1992) 具体的な行政区画の沿革は表1-5を参考できる。

舟山地区の人口状況は表1-6、表1-7と表1-8を参考できる。

表1-6 宋至民国の舟山の人口変化

朝代	年代	戸数	人口数
宋	政和六年	1116	11475
	紹熙年間	1190~1194	13541
元	至元二十年	1283	22640
	至正年間	1341~1320	13799
明	洪武二十四年	1391	547
	成化八年	1427	3490
清	順治八年	1651	9700
	宣統元年	1909	78177
民国	元年	1912	77970
	27年	1938	103279
	38年	1949	105666

資料：『舟山市誌』

表1-7 解放後舟山の人口変化

年	戸数	人口数		
		合計	男	女
1950	102336	460677	234707	225970
1960	135137	638165	324461	313704
1970	165039	787406	400324	387082
1980	233216	888818	450001	438817
1990	336456	969904	492200	477704
2000	349400	984100	495700	488400
2010	430000	1028700	524800	503900

資料：『舟山統計年鑑』

表 1-8 漁、農、塩業の人口変化

年	漁業		農業		塩業	
	戸数	人口数	戸数	人口数	戸数	人口数
1950	21700	99900	63600	280000	4900	27600
1960	33400	154100	70800	292700	4600	21900
1970	39900	184000	96600	449500	8300	33100
1980	55400	204800	122600	460700	10300	38700
1990	75100	218600	154000	454900	9500	27300
2000	82300	244900	144600	410800	11500	30600
2006	68800	190100	143100	404500	7500	20200

資料：『舟山統計年鑑』

舟山の方言は呉語と福建語があるが、呉語が 90%以上を占めている。具体的には、定海区の舟山本島部分、金塘島、長峙島など；普陀区の舟山本島部分、六横島、蝦峙島、桃花島、登歩島、普陀山島、朱家尖島（糯米潭村を除く）、黄興島；岱山県の岱山本島、秀山島、漁山島；嵊泗県の嵊泗県本島、黄龍島、嵊山島などの人は呉語を話している。これに対して、福建語を話す範囲は小さく、お互いに福建語を使う人も、外地人には舟山語を使う。今回の調査地—蚂蚁島の人は呉語を使っている。

2 舟山群島における漁業の発展過程

舟山の漁業発展史（『舟山漁誌』 1985）は大体自採自食の砂浜で採る段階、主に自産自販と地産地販の近海生産する段階、生産販売加工がある程度の規模があり遠洋生産出来る段階という三つの段階があるが、遠洋生産ができるようになると、漁業分配制度の変遷により、さらにいくつかの段階に分かれる。舟山の漁業発展はかなり遅く、特に、2回の「海禁」により早期の漁業生産成果がほとんど消滅してしまったことにより、明・清時代以後漁業資源が衰退し、漁業発展の速度も遅くなった。

（1）早期の砂浜での採捕

1964 年以来、舟山群島の白泉、馬岙、朱家尖、泗嶼などの 20 数箇所でいくつかの新石器時代の文物を続々と出土した。1975 年と 1976 年、また、新石器時代の陶製の網で使われる碁と直径 5 センチぐらいの蚌、あさりなどの貝類の化石が発掘された。これらの出土品は、B.C. 4500 年頃、人間がすでに舟山群島のいくつかの島に住みつき、魚介の採捕をし始めたという証拠である。しかし、その時の採捕生産はただ自分自身の生活の需要を満足だけだった。その時の舟山はまだ未開発の原始状態で、砂浜に、海藻、魚介、海老がたくさんあり、人々はここで漁業生産を始めたが、砂浜と浦の近くで採るだけで十分だった。この時の生産は自然環境に依るものが多く、人々は晴れ

の日の引き潮の間に採取するしかなかった。したがって、生産量も低く、主食に充てるには不十分で、人々はほとんど山で農業または野生植物を採って生活した。出土品が発掘された20数箇所は、すべて山下の干潟や大量の干潟が集中する山沿いにある。当時の人々は干潟で魚介類を捕るのは難しくなかったが、どの魚介類が食べられるかは、自らの命を代償に実験するしかなかった

当初、砂浜は人々の漁業生産の主要な場所であると同時に食べ物を取る重要な根拠地なので、人には同一の砂浜に住んでいた。その砂浜周辺は共有領地としてほかの地域の人に採捕させなかった。また、この時の砂浜で行った生産は道具が必要ではなく、専門的な技術も要らず、1人でもできるので、各地区の居民はみんな孤立的に生産を行い、外界への連絡も少なかった。そのため、この時の生産力の発展はかなり遅かった。長い時間の模索、経験の蓄積によって、人々は海洋について、例えば、潮の満ち引き、魚介類の活動と生成について、ある程度の認識を得、だんだん簡単な道具を使い始め、徐々に腰までの海に入り、1人あるいは数人がいくつかの魚介類を包囲して捕らえるなど発展したが、人々はまだ干潟や陸から離れることはなかった。

（2）近海作業の出現と発展

東晋の末年（399～411）、舟山で中国の第1回目の大規模な海上の農（漁）民蜂起が起き、蜂起軍20万余り、12年間続いた。唐代の大暦六年（771年）にも20万余人の蜂起がおきたため、朝廷は翁山県を廃止した。人口がどんどん増え、食物（海産品も含む）の需給量も増した。そのため、そもそも魚介や海老を採る砂浜は田圃と塩田に使われてしまった。採捕地が減少すると、人々は近海の実産に転換しなければいけなかった。人々は海に関する生産知識を積みながら、造船業と海運事業も発展させつつあり、近海作業へと転換し始めた。干潟の採取から近海作業転換までの過程は長いですが、唐代にはほぼ完成したと見られる。

紀元7世紀30年から8世紀40年代までは中国の封建社会の重大な発展時期であった。この時期、社会生産は飛躍的に進歩し、生産力も著しく向上した。738年、舟山は県に設立された後、島の秩序が安定し、人口が増加し、漁業生産も干潟での採捕から近海作業に転換した。経済形式は自採自食の自然経済から、自産自販と地産地販の小商品経済に発展してきた。人口の増加と近海作業の出現は、社会に海産品の需要増加をもたらした。それにともない生産者の船、網や他の漁具の需要も増加した。船や網は個々の生産者が単独で、購入できないので、生産者と使用者は交換によりそれぞれの必要を満足させた。このようにして海産品は狭い範囲から解放され、社会的商品生産として形成されていった。

初期の近海作業で使用された船や道具は非常に粗末で、自然災害に耐える機能も弱いため、生産者は各島に分散していた。毎日朝早くから夜遅くまで、それぞれの住む島の周辺の港湾で作業していたが、生産量は多くはなく、船や網を除き、労力に応じて分配していた。分配されたものは生産者それぞれが新鮮なうちに販売し、あるいは

塩漬けで加工するなどした。近海作業の最初の漁法も簡単であり、底引き網、流し網、まき網、1本釣りなどの漁法があった。近海作業の生産形式は過去の個人作業から2～3人の小集団生産に転換した。この小集団生産の組織形式は、最初は各世帯が中心であった。そして天災人災の影響を受けながら、兄弟の分家立業などの原因で数戸の合併生産に発展した。当時の作業はまだ簡単であり、明確な技術分業はまだなかった。同じ船で生産する人は、お互いに厳格な等級区分もなく、制約も少なく、人員の変動性も大きかった。その後、作業の場所は大きくなり、生産時間も長くなり、漁業と農業は分かれ始め、いくつかの専門的な漁民が生まれた。同時に、船や網という生産道具の役割が重要になり、生産道具を持つ人の地位が変化してきた。次第に、階層分化が現れ、生産道具を持つ者は、ゆっくりと「長元⁽⁵⁾」になり、大部分の人は、自分の労働力を商品として「長元」に売る漁工になった。

初期において、生産道具を持つ者は必ずみんなと一緒に労働に参加し、自分の労働所得を主な生活源として暮らしていた。船や網はある程度の分配額として報酬をもらい、破損したら、すべて船主が責任を持って修理しなければならなかった。同じ船で作業する者は1人当たり1株と分配された。例えば、一般的に3人で流し網で作業をする船は、1回の出漁で獲る漁獲物を5株に分けて、船と網も各1株として平均分配する。この分配方法は「硬脚」と称された。

宋・元の時代、近海の実産力は飛躍的に発展し、漁業生産の状況が地方誌の文献に記載されている。例えば、『普陀山誌』に600～700年前、普陀山（螞蟻島の4倍ぐらゐの島）に住む漁民は、すでに700人までになったと記載されている。

明・清時代、2回の「海禁」により、舟山の漁業生産はほとんど中断され、300～500年の間の漁業は廃滅した。しかし、移住させられた漁民たちは禁令を冒し、こっそりと舟山へ戻り出漁したため、ここの漁業は完全に廃絶されることはなかった。

（3）近海生産の回復

清康熙二三年（1684年）、「海禁」が解除され、人々は舟山本島に居住できるようになった。1736年前後、岱山、秀山、金塘、六横、桃花、蝦峙などの島に続々と人口が居住するようになった。1838年～1850年、福建からきた小釣船は中街山列島で一本釣りをしてから、瑞安、鄞県などの漁民もここに出漁をしてきた。そして、彼らが続々と定住したため、青浜、廟子湖、黄興、東福などの島は漁村になった。人口が急速に増えたので、舟山の底引き網、流し網、1本釣り、張り網などの近海作業が回復し、いっそう発展した。ここに移動してくる居民の多くはもともと漁民で、よく舟山漁場に出漁した。ここに漁業生産が復活すると、家族と一緒に定住するようになり、船、網などの道具や豊かな生産知識も向上した。例えば、螞蟻島の張網作業はその時鎮海に住んでいた陸姓という漁民が伝授したものである。

「海禁」解除後、初期の近海生産は、その作業方式、組織形式、分配方法のいずれも、基本的に宋代の方式と方法を続けたが、後の発展速度、生産規模はかなり速くな

った。生産知識が豊かになり、海洋の状況もよく知ることができるようになり、それ以降の漁場の開拓と遠洋漁業の作業にずいぶん活かされた。具体的には：①生産力は過去より進化し、生産者の収入も大幅に増加した。螞蟻島、桃花、蝦峙出の調査によると、地元の漁民はほとんどこの時家を建て定住してきた。②生産道具と生産規模が増えた。たくさんの人に多く分配されたため、資金を蓄積し、船や網を増やすことができた。例えば、螞蟻島は最初陸という姓の漁民だけが張網を行ったが、まもなく30戸余りがこの作業をやるようになった。③漁業生産の地位は、その前の副業から専業に転換した。その上、たくさんの干潟は田んぼや塩田に変わり、農業や製塩工業が発展した。その結果、専業農（塩）民と漁民との境界がはっきりしていった。また農業（製塩工業）を中心とする農塩村と漁業を中心とする漁村や漁業島も現れた。

この時期は1700年前後から1850年ぐらいまではほぼ百年続いた。当時のいくつかの作業は今でも踏襲されている。

（4）遠洋漁業の作業

160年ぐらい前から、漁業生産は近海から遠洋漁業に発展して来たが、当時のいわゆる遠洋漁業は家から少し遠くの海での生産を指し、今日の遠洋漁業とは意味が違う。当時漁業作業単位が多くなり、近海の資源も不足し、漁民たちは近海の実験もよく積んでいた。そして、道具を持っていた船主と網主もできるだけ大きい船と網を作り、遠洋漁業への条件が整ってきた。遠洋漁業という組織形式と生産関係は新しい変化をもたらし、はっきりした雇用制度が出現し、いわゆる「長元制⁽⁶⁾」が生まれた。

（5）遠洋漁業の大発展

1911年から1937年にかけて、中国の資本主義経済の発展と漁業への投資の増加は遠洋漁業を大きく発展させた。各地の漁民は舟山に定住し、出漁の技術が高まり、漁場もよく開発され、天然氷で鮮度を保つための運鮮船が生まれた。漁業の発展とともに、漁業に関わる手工業、交通運送業、商業なども発展した。その結果、舟山漁場の名声は国内外で大きくなり、全国的に有名な漁場になった。1937年～1950年の間、継続していた戦争は舟山漁業にまた1つの大災害をもたらした。1949年一年で海に出た漁船はたったの192艘であった。

（6）人民公社の登場

建国の初期は合作化の社会改革が行われた。また船の機帆化をめぐる技術革新が行われ、舟山の漁業は急速に回復した。そして、1958年、螞蟻島には全国第一の漁業人民公社が成立し、その後舟山全体に広がった。82年人民公社の終わる時期には、漁業経済は解放以前の最高水準に達した。

(7) 株式合作制

発展が早まる 1983 年以降になると、舟山の漁業生産は株式合作制となった。近年、漁業資源は衰退しており、出漁期の収入も不安定になっている。その反面、観光事業が発達するようになり、舟山の工業や交通の発達とともに家庭の収入も増加してきている。例えば、螞蟻島では 2007 年の造船所の開業によって、島の居民の就職率もかなり増加した。

3 解放前の螞蟻島

(1) 螞蟻島の漁民の来歴

290 年前、螞蟻島はまだ無人島であった。ある日、鎮海の周姓漁民が出漁していた時嵐に出遭い、螞蟻島に避難した。帰れなくなったため、彼は螞蟻島の近海で簡単な漁具で漁をした。この近くには魚が非常に多かったので、家族と親戚を連れて、ここで居住し始めた。それから、顔家、劉家、李家などの寧波、鎮海、寧海、温州の漁民もこの情報を聞くと、移住してきた。その後、ここに住んでいた漁民が鎮海へ帰省したとき、そこはどんな島かと聞かれると、みんな蟻のような小さい島だと言った。それがこの地名の 1 つの由来であろう。清康熙『定海県誌』に螞蟻島は「馬蟻山」と称され、民国 13 年（1924）に至ると「大馬蟻山」と改称された。螞蟻島は解放前、登歩郷の一部分であった。1950 年 5 月に解放され、同年の 10 月に郷を設立、島名は螞蟻島なので、螞蟻島郷と呼ばれ、定海県に属していた。1958 年 9 月に全国初の漁業人民公社—螞蟻島人民公社を設立した。螞蟻島の具体的な行政区画は表 1-9 を参考。

表 1-9 螞蟻島の行政区画の歴史

年	社区数	社区名称	行政村数	行政村名称	経済合作社数	経済合作社名称
1952	-	-	5	9、10、11、12 村	-	-
2000	1	-	5	長沙塘、穿山岙、後岙、大興岙、蘭田岙	-	-
2006	1	螞蟻島社区	3	長沙塘、後岙、新紀	-	-
2012	1	螞蟻島社区	1	螞蟻島村委会	5	長沙塘、穿山岙、後岙、大興岙、蘭田岙

(2) 解放前の漁業

解放前、螞蟻島の漁民は中国の他の沿岸漁民と同じように、極度の貧困生活をおくっていた。しばしば失業の漁民は螞蟻島の漁業労働力の全体の 4 分の 1 を占めていた。

18戸の漁民は乞食していた。1949年5月26日、螞蟻島は大災害に遭った。国民党軍隊は、上海から舟山に後退し、1大隊は螞蟻島に1年間ほど駐留し、螞蟻島の漁業生産資料を略奪した。漁民の食糧、家禽、家畜などはすべて略奪された。具体的な損害は、漁船76艘、漁網61つ、漁船を造る木材890本、山の本1629本に達する。また1950年5月14日の夜に、当時螞蟻島総漁業労働力の20%に当たる62人の若い漁師が、国民党に逮捕されて台湾に連れ去られた。

4 解放から人民公社時期へ

解放の初期、螞蟻島はいたるところ破壊しつくされた状況で、家族をなくした老人や婦女たちがあふれていた。当時、全島の漁業生産ツールは40艘の荒廃した船だけが残っていた。ほぼ300人の漁民は失業していた。その後、桃花島に駐留していたPLA軍は、漁民の飢餓救済のために、螞蟻島へ米を送った。また、定海県人民政府の漁塩民作業委員会と中国人民銀行は、幹部を派遣し、漁業生産を再開するため、8000元の漁業ローンを発行した。その結果、解放後の最初の秋の漁期、出漁の船は12艘、年末には20艘に増え、ほぼ100人の漁民が出漁できた。

1951年2月に、定海県の漁民委員会は、螞蟻島で漁民協会（漁会を略称）を組織した。約300漁民が会員登録し、漁民夏品根を漁会主任に選出した。その後、漁会は銀行から漁業ローン融資を受け、春の漁期の生産を組織し、出漁の船も35艘に増加した。

（1）漁民供銷合作社（購買共同組合組織）

1951年6月、九村漁民鄒渭満によって、“定海県六横区螞蟻島漁民供銷合作社”の設立が開始された。1人当たり1元、自発的に株を持つ形式で、合計1500株が集まった。“供銷合作社”の開業は、漁民に代わって漁獲物の販路を拡大し、“漁行”の独占システムを壊すとともに、漁業生産及び生活の必需品を調達、供給し、流通段階の搾取を回避することができた。“供銷合作社”は、漁民の代表によって理事会、監督会を選出し、鄒渭満が第一代の主任になった。“供銷合作社”は、一年間で2937元の収入があり、株の価値も上昇し、漁民へのサービスも拡張し、漁民に非常に歓迎された。“供銷合作社”の設立は、流通領域においても“合作化”が実施された。

（2）土地改革

1951年10月、六横区から幹部が派遣され、螞蟻島の土地改革実施機関が成立し、一般農区の政策と同じように、表1-10のような階級規定を行い、それに基づいて土地を分配した。

表 1-10 1951 年土地改革時期螞蟻島階級規定

階級	戸数	没収の土地の畝数	分配
地主	9	土地 361.74 畝全部没収	
工商業資本家	3		
漁業資本家	14		
雇貧農	81		農民、211.97 畝を分配
中農	8		
漁工	109		漁民、漁工 301 戸合計 149.5 畝を分配
漁民	192		
手工業、小商人	101		
合計	517		

全島 517 戸、これを階級構成別にみると、地主 9 戸、工商業家 3 戸、漁業資本家 14 戸、雇貧農 81 戸、中農 8 戸、漁工 109 戸、手工業や小商販など 151 戸となる。当時、漁区において、階級規定の統一的基準がなかったため、しばしば富裕な一般漁民が地主や資本家に昇格され、打撃の範囲が拡大した。解放前 3 年ほど失業し、山で雑穀を植えるなどしていた漁民や、わずかな元手で商売をやる漁民は、農民などに規定された。一方、封建的漁行主は、工商業資本家や漁業資本家に規定され、攻撃されなかった。これらの問題は、1953 年の漁業民主改革によって調整された。

土地改革は、当時漁民、漁工の就業や漁業生産の再開の要求を満足させることができなかった。その年末、螞蟻島全島は、40 艘の船が出漁し、就業していた漁民は 150 人であったが、まだ 100 余人の漁業労働力は就業できなかった。

土地改革が終わった 1952 年 2 月 14 日、螞蟻島人民代表大会が行われ、螞蟻島郷人民政府が設立された。郷の人民大会は「漁業生産互助組を組織する」という決議を行った。

(3) 螞蟻島の漁業民主改革（略称漁改）

1953 年 4 月 25 日、中国共産党舟山地区委員会「今後の漁民に関する問題」という報告の中で、「現在の漁民について問題は多い。封建反革命の残党がまだ完全になくなっておらず、漁民の意識も高くない。漁村の生産は再開されておらず、漁民の生活はまだ改善されていない。互助合作運動はまだ正常に展開できていない。この問題を解決するため、全面的な政治改革運動を行う必要がある」と指摘した。漁業改革は一般的に、ある地域で改革を試行して、結果が得られてから全面施行した。螞蟻島はその試行区である。螞蟻島はどの歴史的期間においても、生産関係の変革や漁業発展の舟山地区における最前線であった。

漁改は漁村の階級を漁工、貧苦漁民、一般漁民、漁業資本家、漁行主という五つの階級に規定した。具体的に次のように階級規定を行った。

- ① 漁工とは、自分は生産ツールを持たず、完全にまたは主に労働力を売り、雇われる人である。彼らは最も厳しく抑圧され搾取され、漁船の中の労働者階級である。
- ② 貧苦漁民とは、少量の不完全な生産ツール（一般的に網有り、船なし）のみを持ち、独自の生産で生活を維持することができず、一部のツールを借り、時々労働力を売る必要がある労働者である。貧苦漁民は農村の貧農に当たり、漁村の半労働者階級である。
- ③ 一般漁民とは、他の人より多くの生産ツールを持ち、主要な生産技術をマスターし、船、網を持ち、1人2人の漁工を雇い、自分も労働に参加する人である。
- ④ 漁業資本家とは、大量の漁具や資金を持ち、自ら労働に参加せず、漁工を雇って暮らす人である。
- ⑤ 漁行主とは、封建制度における漁行の主人であり、ある地域において経済的に独占的地位があり、また政治的にも権力で漁民を搾取する人である。漁行主は「漁覇」と呼ばれる。

漁業資本家に関する政策は、彼らを漁業民主改革に参加させ、漁業生産に参加させたが、漁民協会に参加できなかった。

漁行主はまた3種類に分け、(1) 漁覇とは、漁行主の中のリーダーであり、ある地域で政治的に権勢が強く漁民を搾取し、経済にも独占する人である。漁覇は、政治的には人民政府によって処罰され、経済的には財産を没収した。(2) 経済だけ独占し、政治的権勢のない人は漁行主と規定した。漁行主については、公民権を剥奪し、強制労働によって思想を改造し、全財産を没収し、一般漁民の生活をさせた。解放後、確かに反省して積極的に強制労働に参加した人には、公民権を認めた。(3) 多くの小漁行主は、解放後、搾取しない正しい職業に従事する人である。彼らは、一般の漁行主と違い、主に強制労働に参加し、公民権を認められた。以上の基準により、螞蟻島は、表 1-11 のような階級規定を改めて行った。

表 1-11 1953 年螞蟻島全島階級別平均世帯人数

(単位：戸・人)

階級	戸数 (戸)	人口 (人)	平均世帯人数
漁業資本家	3	14	4.7
漁行	16	70	4.4
漁覇	1	5	5
漁行主	4	17	4.3
小漁行主	11	48	4.4
地主	5	21	4.2
漁民	320	1632	5.1
漁工と貧苦漁民	212	963	4.5
一般漁民	108	669	6.2
他の階級	151	544	3.6
合計	503	2281	4.5

螞蟻島書類保存室提供資料により筆者作成

当時、螞蟻島は4つの行政村があり、戸数503戸、人口2281人であった。土地改革の時14戸であった漁業資本家は3戸に減り、残りの11戸は新しい基準によって一般漁民に編入された。解放前漁行は21戸があったが、解放初期、5戸は外地に移住し、漁改の時までに、16戸となっていた。これを3種類に分け、漁覇1戸、漁行主4戸、小漁行主11戸と規定した。土地改革の時9戸があった地主は、4戸が主に漁業労働収入による生活のため、一般漁民に編入され、5戸となった。以上の3つ階級は合計24戸、全郷の4.5%を占め、その中の漁覇、漁行主、地主合計10戸、全島の総戸数の2%未満であり、打撃範囲は縮小した。漁民階級とは、漁工と貧苦漁民212戸、963人、一般漁民108戸、669人、合計320戸、全郷の72%を占めていた。他の階級とは、農民、手工業、小商人、貧民など151戸で、全郷人口の23.5%を占めていた。この部分の労働者は、漁改の後、ほとんど漁業に参加し、漁民あるいは漁業にサービスを提供する労働者になった。

漁改によって、漁行主と漁覇から没収した財産は、合計土地10.67畝、部屋24.5間、漁船5艘、網74つであった。これらの財産のほとんどは79戸の漁工、7戸貧苦漁民、2戸農民に分配された。

(4) 互助合作

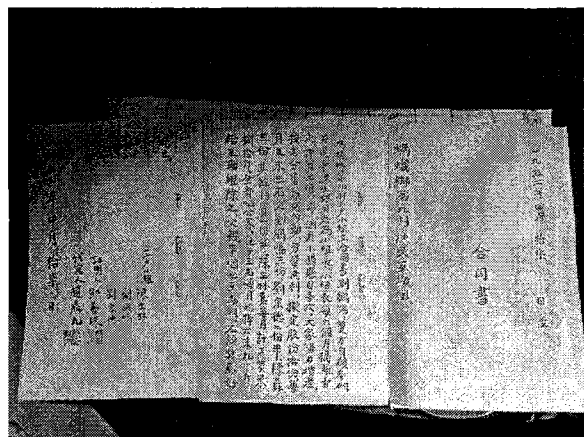
①漁業生産互助組の組織化

1952年2月20日、九村の一般漁民陳森林は互助合作の思想を学び、自家で雇っていた漁工劉岳明、劉忠徳と相談し、それまでの雇用関係に代わり互助組を作った。これが螞蟻島初めての漁民互助組の成立である。郷政府の指導の下で、「螞蟻島第九村漁民互助組契約書」(図1-8)を交わした。

「螞蟻郷第九村漁民互助組合同書」

“螞蟻郷第九村三戸小组立合同書陳森林、劉岳明、劉忠徳：双方自願參加并選舉陳森林同志為小组長。小组長每六個月結賬一次；評算工資，每個月小結賬一次。大家努力增產，按勞分配原則勿動，勞資兩利，擬定股份拾份，每月支米3石，定劉岳明三份，劉忠徳二份半，陳森林三份，其余物資（即陳森林的生產資料——編者注）一份半。陳森林妻每月計工資米80斤。全部吃公家，兒子三名每月吃掉大米90斤給互助組除之，父親半個吃互助組，應該獎勵好的。”（三人手印）證明人鄒善珠（漁會主任），代寫人趙鼎九。

図1-8 螞蟻島第九村漁民互助組契約書



螞蟻島郷政府提供

この互助組の成立当年、漁業が増産増収になったため、同村の多くの漁民が入組を希望し、14戸に拡大し、労働力は17人になった。その後、改めて契約書を作り、按労分配などの原則を契約書に書き込み、具体的な賞罰制度も規定した。この互助組が模範的役割を果たし、当年、全島の4つ村において、18組の互助組が成立し、成員284人、全島の出漁する漁民の77.38%を占めるに至り、漁戸の平均年収は191に達した。

1953年、九村の劉岳明、夏金棠、陳保安の属していた互助組は合併を協議し、「労働力62人、魚介類を加工する女性労働力64人（給料あり）、船14艘、網841、積立金1600元を有する「大互助組」を成立させた。

大互助組は、小互助組の方法をそのまま応用し、労働者はすべて一緒にご飯を食べ、毎日1人当たり食費は0.42元であった。その後、十村、十一村、十二村も小互助組を合併した。その結果、18の小互助組は8の大互助組になった。そして、水産資源を保護するため、各村の互助組から、遠洋技術を持ち、あるいは遠洋漁業へ転換したい漁民62人を集め、「遠洋互助組」を成立させ、何方品を組長に選出した。

陳森林らの3戸から成る小互助組から、遠洋互助組まで、ちょうど1年間かかり、螞蟻島の漁民は「互助組化」を実現した。全島9つ互助組は、322戸を含み、総漁戸の97.2%を占めた。当時全島の4つ村の4つ大互助組における構成は、組員（出漁する漁民）286人、漁工人数36%、ツール株3.5%；貧苦漁民21.7%、ツール株11.2%；一般漁民30.7%、ツール株80.7%；他の階級11.6%、ツール株4.6%であった。しかし、合併した大互助組の中に若干問題が出てきたため、互助組を調整して、初級合作社へと試行が続いた。

②初級合作社の試行

1953年7月22日、九村劉岳明の大互助組は舟山漁区の初めの漁業生産合作社—螞蟻島長沙塘漁業生産合作社—を成立した。第一陣の社員はもとの互助組の63戸（2月後100余戸に増加した）に限り入社し、九村村長陳再如は初代の社長に選出された。そして、後岙（十村）大岙（十一村）、穿山岙（十二村）も行政村を単位として合作社を成立した。ここまで、4つの行政村において4つの合作社が成立し、入社社員827人（男性407人、女性420人）、入社漁民戸は341戸（全郷漁業戸数の92%）に達し、1754人、船110艘、網4793、公有財産148752元、60.7%を占め、私有財産95364元、39.3%を占めていた。私有財産の中、漁工3.3%、貧苦漁民11.2%、一般漁民79.5%、漁業資本家6%。1953年末、合作社の成果が顕著に現れしてきた。漁業生産は前年と比べて38%増加した。漁業総収入は18986元で、前年の1.82倍に増加し、社員の平均収入は433元、前年の互助組の時期の191元と比べて、2.27倍に増加した。合作社の初年度の公共蓄積13204元で、社員に分配した後、再び合作社に81156元を投資し、分配の64%を占めていた。

③「小社」から「大社」へ

1954年1月、舟山地区委員会は螞蟻島の4つ小合作社を合併してさらに規模の大きい合作社を組織する必要性和条件について検討した。必要性：全郷の4つ村は4つの小合作社の成立によって、互助組より合作社により優位性があることを明らかにしたが、各社の間においての根本的な矛盾が解決されず、特に労働力、ツール、資金などの矛盾は最も顕著である。例えば、一部の遠洋漁業合作社において、労働力はあるが、ツールはない、別の一部では逆の状況であった。近海漁業合作社において、十二村の合作社は労働力が多く、ツールが少なく、3分の1の過剰労働力があつた。十村は労働力が少なく、ツールが多く、資金も多く、労働力が足りなかった。要するに、過去の各互助組の間での矛盾は、集中的に各合作社の間で出現してきた。条件：以上の矛盾は一層の発展の障害になったため、「大合作社」を成立する必要が生じた。一方、「大合作社」を成立する条件も、互助組と「小合作社」に基づいて、蓄積資金と生産管理の初期の経験を積み、多くの幹部が育成されてきた。

1954年2月、螞蟻島郷漁業生産合作社（大合作社）が組織され、もとの4つ小合作社の社員以外の新社員98人も入社し、合計370戸、868人に達した。その中には、非漁民階級の労働者も含まれていた。社員大会は理事会と監督会、社長李阿旺（郷長）、第一副社長陸渭川、第二副社長劉岳明（副郷長）を選出した。大合作社では、漁業生産の作業特徴に基づいて、各生産組織に分けた。具体的に、1つの遠洋漁業漁獲大隊、大隊長李明洲；近海作業中隊は各村を単位として、九村中隊、隊長陳再和；十村中隊、隊長劉岳明；十一村中隊、隊長林阿信；十二村中隊、隊長何惠根。各中隊に、2人の副中隊長、1人の管理員を設置した。

大社への組織化は次のような方法で行われた。

(1) 社員の私有財産を2種類に分けた。1つは船、網などの漁具を価格に換算して入社する方法であり、内訳は、漁工5.6%、貧苦漁民11.5%、一般漁民78.4%、漁業資本家4.5%である。もう1つは陸上の加工設備は大社がその使用料を支払うという方法である。

(2) 社員は合作社に現金12万元を投資し、ツールとしての投資と合計221272元があつた。その内、漁工と貧苦漁民社員71368元、32.2%、毎戸平均348元；一般漁民130670元、59.1%、毎戸平均1221元、他の階級14986元、6.5%、毎戸平均57元である。

「大社」は三つの基本矛盾を解決した。1、ツールありとツールなし労働者間の矛盾、2、労働力、技術、多労働と少労働の矛盾、3、統一分配における各船間の産量多少の矛盾。「大社」の成立後、2対⁽⁷⁾大捕船—「火肉船」と「草縄船」が造られ、遠洋漁業作業用の船は6対に達し、遠洋漁業労働力は全社漁民の20%を占めた。

④「五社合一」

1954年3月、螞蟻島農業生産合作社が組織され、入社農民28戸、土地156畝であったが、その後漁業社に合併された。6月、螞蟻島漁民供銷合作社は漁業社に合併され、漁業社の「供銷部」になった。「供銷部」の経済は漁業社と独立して計算していたが、利益は漁業社に統一的に支配された。また、新しく設立された螞蟻島の信用部も漁業社に統一管理された。そして36戸の手工業者も漁業社に参加した。ここに、螞蟻島の漁業、農業、手工業供給販売、信用は「五社合一」になり、「螞蟻島郷漁業生産合作社」と改称された。これは人民公社の原形と考えることができた。

「大社」は労働力とツールを統一的に管理し、作業を調整し、生産規模を拡大させ、年間水産品総量5445トンに達し、前年度の41.4%増産した。前年総収入は64.35万元になり、前年度の72.29%増加し、社員平均収入は500元になった。しかし、合作社内部において、多くの組織体制や、政策と管理の問題が出てきたため、合作社に関する調整が行われた。

⑤合作社の調整

合作社の調整は主に以下のように行われた。

- (1) 組織内部の調整：権力の過度集中を解決する。
- (2) 五社分離：各生産部門の統一分配の矛盾を解決する。農業社、手工業合作社、供銷社、信用社を分離させた。漁業社は全島の漁業従事漁民全員が属した。つまり「大社」は当初の規模を維持した。これは「五社合一」後の第1回の分離であった。
- (3) 分配方法の改革：1952年の互助組から1954年の「大社」まで、漁期ごとに計算し分配していた。つまり年4回の漁期ごとに4回計算を行っていた。しかし、大社において、労働力が多く、職種も複雑で、年4回の分配は困難になった。1955年から年1回分配する方法に変わった。
- (4) 経営システムの健全化：経営管理の経験不足のため、大量の廃棄損失が生じた。そのため、社長陸渭川は財務管理委員会の主任になり、合作社における物資保管、檢察監督、財務会計という3つの管理組を設置した。
- (5) 株式ファンドシステムの確立：合作社の漁業生産に従事する男性労働者は、一人当たり300元を支払う。全男性社員426人、合計127800元を支払われた。
- (6) 遠洋漁業を強化し、機帆船を発展させる。

合作社の調整によって、年末までに、全社425戸、男女社員907人、漁船128艘、水産品総量6233トンに達し、前年度比14.46%の増産、社員の平均収入は700元、全年度比の32.6%増加した。また、合作社の固定資産が25.7万元、財庫物資9.94万元、

流動資金 25.72 万元に達した。

⑥高級合作社

1956 年 3 月、螞蟻島高級漁業生産合作社準備委員会が成立した。当日 1038 人が高級合作社に参加を申し込み、84 人の社員代表を選出した。その後、初級社を高級社へと昇格させた。高級社設立の意図は、以下の点にあった。

(1) 土地補償を取り削る。例えば干し場、網棚は報酬をなしとし、高級合作社の所有とする。

(2) 漁業資本家、漁行主、地主は、階級身分が漁民に変わったら正式社員になり、合作社成立後の積立金と福利厚生費を基準にして支払われる。

(3) 高級合作社は、木造帆船造りを停止し、集中的に機帆船を発展させる。

1957 年 2 月、高級社の分配は、①生産量、②生産価値③生産コストの 3 つの請け負と、各作業単位の④固定労働力⑤固定労働点数⑥固定船数⑦固定ツール数⑧固定奨励基準という「三包五定」によりおこなわれることが採択された。

高級社の成立からの 2 年間で、機帆船は 3 対になり、800 人を収容できる 2 階建の「螞蟻島郷漁業合作社ホール」と若干の倉庫を建築した。全社の固定資産は 55.56 万元に達し、初級社の 2 倍余になった。在庫物資 31.96 万元で、初級社より 3.15 万元に減少した。積立金は 37.98 万元、初級社の 1.32 倍になり、社員から合作社への投資が 8.39 万元減少した。高級社において公有化の程度が急速に拡大した後、一部の社員は合作社に対する態度が冷たくなりつつあった。また、漁業生産では、3 対の機帆船が増加したが、水産品の総産量は逆に減少してきた。1956 年の産量は 1955 年より 30.3%減少し、1957 年の産量は 1955 年より 8.2%減少した。

(5) 人民公社⁽⁸⁾

①第二回の「五社合一」

1958 年初、分離した漁業社、農業社、手工業合作社、供銷社、信用社の間には、相互に多くの矛盾が存在した。各社は自身の利益ばかり優先したため、螞蟻島の全体としての利益についてあまり考えなかった。例えば、供銷社は営業額を拡大するため、漁民の消費を奨励したが、漁業社は生産を発展させるため、社員の消費を減少させようとした。また、農業社は農作業が忙しいとき、漁業社の船を借りて農作物を運んだ。漁業社の漁期の時農業社の女性労働力を利用して魚介類を加工するが、農業社は漁業社の要求を拒否した。以上のような問題は、5 つの合作社の連携だけでは問題を解決することができなかったため、新たな再編成が必要となった。したがって、1958 年 6

月第二回の「五社合一」を行い、「螞蟻島郷漁業生産合作社」と呼び、1島1郷1社を実現し、全島の統一分配、管理という生産組織を形成した。

②人民公社の成立

1958年8月24日、螞蟻島郷は、普陀県委員会へ「人民公社成立についての報告」を提出した。その後、10月1日、中国の初めての漁業人民公社—螞蟻島漁業人民公社が成立した(図1-9)。人民公社の基本的な状況:全島586戸、2758人全員入社した。その中に、幹部10名、男女労働力1101人、漁業労働力708人(全部男性労働力)、手工業労働力72人、農業労働力262人(主に女性労働力)、牧畜業労働力14人、交通業労働力13人、商業労働力11人、副業労働力13人、漁業後方勤務8人、船130艘、農業用地738畝。また医療、美容室などのサービス単位10余、人民公社共産党

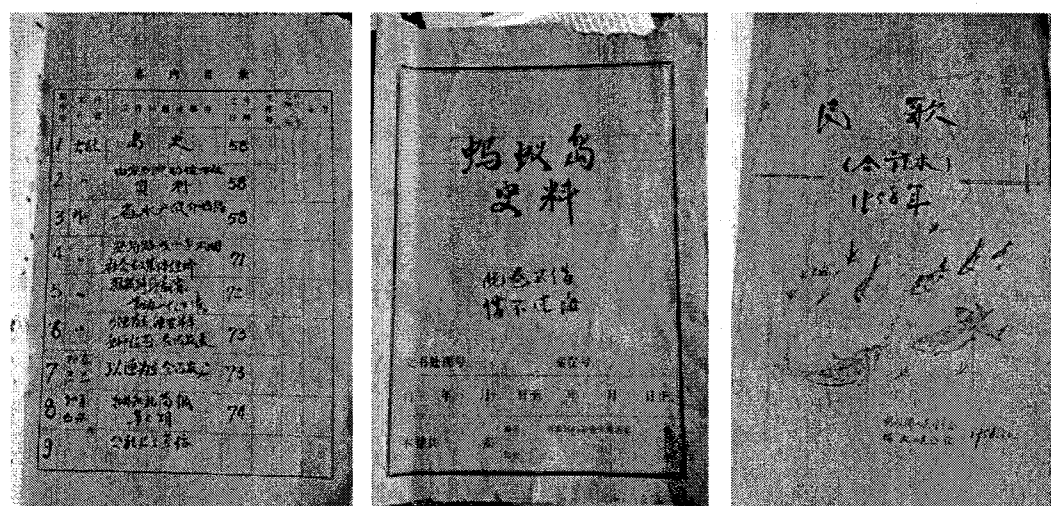


図1-9 螞蟻島の人民公社歴史資料

螞蟻島村民L・YJ提供

委員会の5つ党支部の設置、民兵596人。公社管理委員会16人、監督委員会7人、公社の下級機関としての漁業、農業、工業と交通、財務貿易、文化衛生、生活福利、基礎建設、計画、政法、軍事武装、調停という11つの下級委員会が設置された。また、漁業生産基層組織としての遠洋大隊1つ、近海生産隊5つが組織された。

③公社初期の分配制度

公社の分配制度は無料の食堂から始まった。1958年7月、全社の2700人余りの社員は村に属する5つの食堂に集合して食事をし、その代金は公社によって払われた。その中で、最も大きい長沙塘食堂は999人を収容でき、一番小さい蘭田岙は200余人であった。そして、公社は「三包五定」の他、「十包」⁽⁹⁾を実行し、1958年の1年間における、「十包」の費用は10.02万元になり、社員1年分の分配の22.54%に相当し

た。1959 年も「十包」を実施続け、費用は 17.34 万元、社員の分配の 34.6%に相当した。1960 年、「十包」の費用が多くなりすぎたため、「六無要」⁽¹⁰⁾に代わった。1961 年に「六無要」は中止され、合作者時期から実施していた社員の公傷医療費と出漁中漁民の食料という福祉のみを残し、食堂も解散した。

④公社体制の調整

1961 年 6 月、供銷社は公社から分離、信用社も独立した。1962 年手工業の 20 余人も公社から分離し、手工業社に戻り独立した。全社の農業と漁業は、統一分配、別に管理されていた。また、1958 年に分散していた 16 の小工場を合併し、4 つの公社に属する工場になり、遠洋機帆船隊と近海生産にサービスを提供した。

株式ファンド制度は公社化時期に一時停止したが、再開した。公社体制の調整によって、1965 年末に、遠洋漁業機帆船は 1957 年の 3 対から 15 対に増加し、機帆船での作業漁民は 450 人、水産品総産量も 10293 トンになり、1957 年より 79.8%増加した。全公社の総収入は 188.87 万元（漁業収入 180.1 万元）、1957 年より 99.8%増加した。社員の平均収入は 786 元であり、1957 年の 800 元に回復した。

⑤第三回の「五社合一」

1967 年 1 月、第三回の「五社合一」を実施した。具体的に、(1) 手工業社、農業社、飲食業を合併し、統一管理経営とし、全社の統一計算と分配に参加した。(2) 供銷社、と信用社は、公社の供銷部と信用部になり、この 2 つ部門の幹部は公社社員と同じように、労働点数により全社の統一分配に参加した。(3) 各大隊の代理販売店は独立採算という経営方式を停止し、漁民社員と同じように、労働点数により分配制度が実施された。(4) 漁業の体制は、相変わらず 5 つの遠洋大隊が公社の下級漁業生産部門として設置された。

⑥ 文化大革命時期の人民公社

1968 年 4 月、「螞蟻島公社革命委員会」が成立した。一部の漁民は革命委員会の成立に対して態度が反対していた。1969 年 4 月、反対態度を持っていた 126 名の漁民は、3 対の機帆船に乗って螞蟻島を離れた。群衆は 2 つの派閥に分れ、各項の管理制度が停止され、「三包」制度も批判された。漁業生産はひどく壊されてしまい、出漁していた機帆船も 1967 年の 17 対から 1970 年の 10 対に減少し、水産品の産量も大幅に減少した。1966 年の産量は 9984 トンであり、1965 年により 3%減産し、1967 年は 9368 トン、1966 年より 2.2%減産し、1968 年 6 は 472 トン、1967 年より 30.9%減産し、1969 年 5607 トン、1968 年より 13.4%減産した。1968 年～1970 年の 3 年間に於いて、

公社の積立金は 38503 元であり、1954 年の 1 年によりも満たりなかった。社員の平均収入は、1968 年 525 元、1970 年 624 元、すべて 1954 年より少なかった。

1972 年から、それぞれの生産は回復しつつあった。漁業生産分配制度は「三定兩獎責任制」を復活し、3 対の遠洋機帆船（114 人）は 1 つの請負単位になり、近海生産も大隊を単位とした請負制が実施された。

この制度は 1983 年まで実施された。また、螞蟻島は、舟山地区において初の機帆船燈围で漁獲する漁村であった。そこから、舟山漁場の近海生産は、伝統的な「四大魚類」から、サバなどの多種魚類に発展した。一方、1972 年、螞蟻島は 200 余人の女性を組織、1 年かけ、「三八海塘」（防波堤、図 1-10）を建築した。80 畝の干潟を開墾し、そこで綿花を栽培し、漁船の修理をした。1974 年から、60 畝の塩田が作られた。

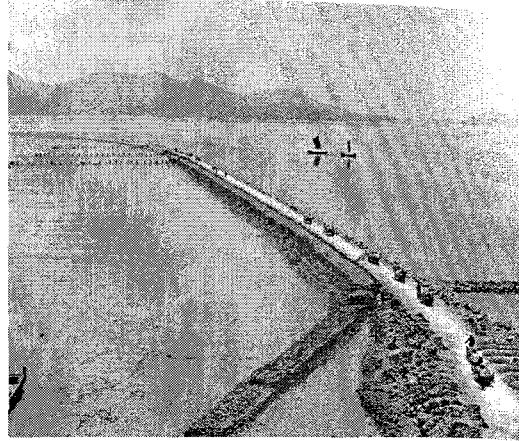


図 1-10 三八海塘

螞蟻島の労働参加率は長期にわたり 50%前後を占める。漁業労働は、個人技能に応じて分業した。体が強い漁民が遠洋漁業、力が普通の漁民が近海漁業、婦女と年老いて力が衰えた男性が後方勤務、水産品加工と他の副業をさせた。特に、女性労働力の役割は重視された。1953 年の 4 つの小社の時、社員合計 827 人中、女性社員 420 人で、彼女らは主に「草縄船」、「火囱船」を建造するために貢献した。人民公社初期の 1960 年、公社全体社労働力は 1286 人中、女性労働力 562 人、その中で、農業生産に参加する人 175 人、水産品の加工に参加する人 66 人、近海漁業に参加する人 20 人、網を作る人 52 人、他の産業 16 人であった。1978 年、公社全体労働力 2220 人中、女性労働力 1036 人、当時の第 3 次産業には 58 の部門があり、その中の 50 部門に女性労働力が参与し、また、14 の部門ではすべてが女性労働力により担当されていた。

以上から、螞蟻島の漁業発展は以下の 2 つ段階に分けられる。

< 1 > 1950 年～1957 年

この段階の漁業生産は、伝統の沿岸定置網作業から、一部の労働力が近海流動作業（遠洋漁業）に転換した。漁船は定置網船、小型木帆船から、大型木帆船（図 1-11）に発展した。漁獲物の種類も単なる小魚、小エビから経済魚類に変わった。1954 年春漁期に、遠洋漁



図 1-11 大型木帆船

業では大型漁船四対になり、1955 年大型漁船の数は頂点の 19 艘になった。1956 年に

は8対の大型漁船、1957年9対になり、その後、機帆船を発展した。遠洋漁業の経済魚類の産量は1952年の68トンから、1957年の1429トンに増加した。遠洋漁業の作業をする漁民は、1952年の15人から、1957年の207人に増加した。遠洋漁業に参加する労働力は、漁作業総労働力の比率が1952年の3.9%から、1957年の41.4%に増加した。

< 2 > 1957年～1977年

この段階で、遠洋漁業の漁船は木帆船から機帆船に発展した。遠洋漁業の漁獲物の生産量と生産額は、近海漁作業と比べて総生産量と総生産額に対する比重が高かった。1958年末、機帆船は5対になり、冬漁期に漁作業をする漁民は264人、機帆船で漁作業をする漁民は45.5%を占めていた。しかし、1966年～1976年、中国の文化大革命運動の時期には、螞蟻島の漁業も非常に影響を受けた。

5 改革・開放期の漁民たち

(1) 改革前期—生産責任制及び漁業政策の局部調整

螞蟻島人民公社の体制は、1978年に最高峰になり、それ以後の改革はすべてこの基礎の上に展開した。1978年全社917戸、4278人、労働力2220人（男性1184人、女性1036人）。当時の就職構成は、第1産業1664人、74.95%；第2産業373人、16.8%；第3産業181人、8.15%；長期病気のため休暇をとる人2人、0.1%を占めていた。

第1産業：遠洋漁業機帆船21対、労働力684人（すべて男性）；近海漁業生産漁船20艘、労働力165人（女性10人）；海産品養殖業において、昆布隊1つ、海苔隊1つがあり、労働力89人（女性30人）；以上の漁業生産労働力は合計898人、全社男性総労働力の75.84%を占め、漁業生産は螞蟻島の主体産業と男性労働力の主要な従業産業であった。また、他の農林牧畜業は、全農、半農、野菜、綿花、養豚場、養鶏場、営林場、養牛場、など12隊あり、労働力766人、その中で女性が745人、97.3%を占めていた。農林牧畜業は主に漁家女性の従業産業であり、男漁女農が依然として螞蟻島の基本的な就業パターンであった。

第2産業：機械場、造船所、水産品加工場、網場、手工業など18の工場があり、主に漁業生産前後にサービスを提供した。工場の労働力346人、そのうち、男性156人、漁民から転職数は全社男性労働力の13.17%を占め、他の塩田労働力14人（女性10人）、建築材料工場などの非漁産業の労働力27人、第2産業は漁業に依存していることがわかる。

第3産業：24の職種があり、その中で、交通輸送、商業など直接に漁業生産にサービスを提供する労働力74人、他の学校、医療、招待所などの労働力107人。第3産業は長期に公社経済に従属していた。

1978 年公社の総収入構成：総収入 375.56 万元、その中に、漁業収入 317.7 万元、84.6%；農林牧畜業収入 6.4 万元、1.7%；公社に属する企業の収入 27.35 万元、7.3%；副業と他の収入 24.2 万元、6.4%。全社の共有財産 479 万元、積立金 474.34 万元、借金なし。社員に分配した収入、毎戸平均 1268 元、1 人当たり 272 人元。水産品総生産量 14989 トン、1953 年の 2.9 倍、1957 年の 1.6 倍、1965 年より 45.63%増産した。この時期、螞蟻島人民公社は公社化の模範として「東海明珠」と称賛されたが、公社体制の欠点、例えば高度集中の統一管理と平均主義分配制度は、社員間に矛盾を生んでいた。この段階で、機動漁船は小型、中型から大型、多機能へ発展した。1977 年、舟山地区で 40 対大型機帆船を建造した。螞蟻島には 6 対が分配され、毎艘 75 トン、150 馬力であった。1978 年、燈囲作業組を使用始め、2 組から 8 組に増加し、生産量は 2155 トンになった。1987 年、漁船 174 艘、75 トン、150 馬力以上の漁船 31 艘になった。秋漁期の燈囲は 21 組になり、鮐魚の生産量は 3876.5 トン、漁業総生産量の 25.44%を占めた。

螞蟻島の統計資料に基づいて作成された新しい価値は次のように分配された。1953 年～1957 年、国家の税金 3.85%、集団の蓄積 20.8%、社員の分配 75.35%；1958 年～1978 年、国家の税金 11.1%、集団の蓄積 20.11%、社員の分配 68.79%；1979 年～1982 年、国家の税金 8.78%、集団の蓄積 21.04%、社員の分配 70.18%；1983 年～1987 年、国家の税金 4.91%、集団の蓄積 15.51%、社員の分配 79.58%。以上のことから見ると、平均国家 7.5%を占め、集団 20%前後、社員個人の分配 70%～72%を占めていた。社員に分配した資金は、政策指針と思想教育を通じて、漁業拡大再生産をサポートするため、社員の貯蓄資金を集めて、新たな「蓄積」を形成した。

1982 年の憲法において、1958 年以前の郷政府制が復活して、公社から行政機能がなくなり、82 年の憲法改正による政社分離の原則に従って人民公社の活動を停止した。社隊（人民公社と生産隊）企業は、後に郷鎮企業に発展した。そして、漁業生産は株式合作制となり、今日までこの制度が維持されている。

（2）漁業生産責任制

1983 年 3 月、各漁業大隊は生産責任制を選択できるようになった。長沙塘、穿山岙と蘭田岙は作業単位によって請負制を実行し、後岙と大興岙は 3 対 7（3 は大隊の積立金と後方勤務に分配、7 は請け負った単位に分配）の割合に分ける責任制を実行した。

1984 年、螞蟻島郷は商品経済が発展してきた。1987 年末、全郷には專業戸（特定の農作物や漁獲物を専門に生産する農家と漁家）が 34 戸あった。その内訳は、海洋漁獲專業戸 7 戸、海水養殖專業戸 1 戸、食品加工などの工業專業戸 4 戸、輸送專業戸 3 戸、建築業專業戸 1 戸、商業專業戸 3 戸、飲食業專業戸 2 戸、他の産業の專業戸 13 戸であった。以上の專業戸の総固定財産は 21.13 万元であり、1987 年総収入が 1 万元以上の專業戸は 26 戸に達した。

①郷鎮企業

人民公社制度が廃止されてから、螞蟻島郷政府は全島の経済発展を改めて集中的に計画した。1984年1月7日、螞蟻島の郷政府の報告によると、螞蟻島水産総合加工場と螞蟻島食品場の生産を再開した。2月、300トン級の水産冷凍場の建設を螞蟻島の郷と社の集団企業として計画した。8月、郷政府は、5つの大隊が共同に経営していた企業を郷経営の集団企業に変えた。1985年1月、水産冷凍倉庫が建築され、300トンの漁獲物を貯蔵できるようになった。1986年初、螞蟻島郷漁獲隊が成立した。

②海洋漁業会社

1987年3月11日、螞蟻島海洋漁業会社が成立した。会社の下級企業としての漁獲船隊(130人)と冷凍場を有した。合計労働者340人、全郷総労働力の11.87%を占め、男性280人、女性60人、固定資本800万元であった。

これにともなり、各村の漁業合作社は強くなり、固定資本は1983年の266.57万元から、341.32万元になり、28%増加した。生産責任制と経営方式にはさまざまな様式がある。

全島の労働力の就業状況は1978年と比べて、構造的な変化があった。全社労働力2865人、漁業(第1産業)1216人、総労働力の75.95%から、42.44%に減少した。工業(第2産業)1108人、16.8%から38.67%に増加した。建築、交通、商業、教育など(第3産業)620人、8.15%から21.64%に上昇した。全島の漁(農)工業総生産書額は、1810万元、1978年の3.8倍に増長し、人民公社制度廃止前の1982年の4倍に達した。1人当たりの平均収入は1608元、戸平均5338元であった。

(1) 行政単位で、居住環境を主体として社会機能が行使される、行政村と同一的等級の行政区域。中国において、1958年から1982年の間に、農村を基盤として普及した、政治や経済、さらに文化、軍事までも含んだ農業集団化の組織であり、農村での工・商・農・学・兵が結合し、「政社合一」という生産組織と行政組織が合体した地区組織の基礎単位である。

(2) 経済合作社は、昔の漁村の大隊に当たるものであり、漁民に自主的に相互利益に基づいて組織する協同組合経済団体である。

(3) グリッド化管理とグループ式サービスとは、社区管理と社会的サービス管理は具体的1つ1つのグリッドにおいて、情報技術を通じて、グリッドの中の人、場所、物事、組織の情報を収集、監視、管理、応答及び上下双方向通信する管理方法である。

(4) 島の自然保護の重要性を強調されると、「生態島」を呼ばれる。

(5) 漁業ボス

(6) 清・康熙の時、多くの生産道具(船・網)、資金を持つ漁業主(俗称「長元」)、雇工と一緒に出漁する人であり、この雇う漁撈は資本と労働力別に分配する制度が長元制と呼ばれる。

(7) 普通は1艘の船を漁作業をやるが、この対船は2艘と合わせて漁作業をやる。

(8) 1958年半ばごろから従来の農業生産協同組合を合併させ、工業、農業、商業、学校、民兵の各組織を含み、また今までの郷政府のもっていた行政機能をもあわせもつ、人口数万にも達する一大コミュ

ニティをつくり始めた。農村部では、生産合作社が統合され、次々と「人民公社」として組織された。人民公社とは、合作社より大きな行政単位で組織され、集団所有、集団労働、統一的な経営と分配を明確にしたものである。土地改革は農家による地主からの土地や財産の収奪だったが、人民公社化は政府による農家からの土地や労働の決定権を収奪することを意味した。毛沢東の「人民公社はすばらしい」ということばにも励まされ、わずか1、2か月のうちに全国99%の農家が参加する人民公社化運動が展開された。「一大二公」（規模が大きくて公共的）が理想とされ、食事無料供給を行う「公共食堂」が設けられ、さらに一部の地域では公社規模での所有、管理、分配が行われた。1961年以降、最末端単位である20～30戸からなる生産隊を基本単位とし、そこが土地を集団所有するとともに、生産・分配の意思決定権をもち、その上の生産大隊が比較的大型の資本を有した。人民公社はもともと農村範囲に展開されていた。中国の大農業という言葉は農業、林業、牧業、副業、漁業が含まれている。したがって、漁業人民公社も農業人民公社の一部分と思われる。

(9) いわゆる衣、食、住、教育、福祉、病気と出産、入浴、旅費（螞蟥島から沈家門までの乗船切符）、映画、葬儀がすべて無料である。

(10) 社員は定量基準に従い食料が要らず、幼稚園、老人院の費用は公社に払い、社員の子どもは中学校までの学費が公社で負担され、社員の出産費用は公社に払い、社員は結婚するとテーブル二つ分の酒席の費用を公社に払い、社員の公務中のけがや子どもと老人の医薬費は公社が負担する。

第2章 漁村女性の労働と自己認識の変化

はじめに 女性労働についての先行研究のまとめ

「女性の労働」という項目が柳田国男の『民俗学辞典』に所収され、たくましく働く漁村の女性たちの姿を捉えている。漁村における女性の働き・地位・役割について、民俗学に関する瀬川清子らの先行研究がある。日本の各地の漁村で労働をする女性を対象とした瀬川氏の研究では、女性たちは漁業以外にも家事や農作業といった様々な活動を行っていたことがわかる。『女の民俗誌 そのけがれと神秘』の中で民俗学に接したのは、全国にわたる海村調査の始まる頃であったと述べている。また、『海村生活の研究』の中における「海村婦人の労働」という章において、「海村の中には、漁業らしい漁業はせず、全く海に背いて農耕生活をして居る村が思いの外に多く、漁村と目せられる村も実は半農半漁が普通で、男漁女耕が漁村の常道になっている」と述べている（瀬川 1981：115）。女性は漁に参加せずとも農作業に関する労働を行っていたというもので、男性が海上作業を専門的に行い、女性はその補助労働を行うという、どこにでもある漁村の女性についての研究ではなかった。また女性も鮮魚の加工、漁獲物の販売などを担うことも多く、その上男性が漁にでる際に女性は、家のこと一切をまかされる。瀬川氏の報告からわかるように、漁撈活動が中心の漁村においても、仕事の量は男性より女性の方が多かったといっても過言ではない。瀬川は、<なぜ、女の地位が低くなったのか>を問い続け、「女性劣位」をなぜ、女性自ら認めるようになったのかを問題とした。「女の不幸の最大のものは、自分の働きの価値を知らなかったことである。知らされなかったことであつた」と結論づけている。また、「女の地位はもともと低かったのではない、自分自身の働きに対する経済価値換算の認識がなされていなかったためである」と主張した（瀬川 1962）。岡田照子は、U氏の農家経営の事例研究をもとに、地域社会の構造、男女・家族間の労働内容と家計、家庭内での地位・役割を分析した。その結果、「性別役割分担の女性の労働、料理・洗濯・掃除などの家事は、一切労働時間に含まれず、農業労働のみが労働時間とされる」ことを明らかにした（岡田 2012）。その論文に対し、「家事は働き（労働）でないという男の証言」を得、実証したとして評価したものの、「女自身は、家事は労働ではないとは思っていないとしても、なぜ女が、自分自身の女性劣位を認めるのかを自分にわかるように説く」と指摘した。さらに、瀬川は「問題はそこ（女性自身が自分の劣位を認めること）にもあると思う」と付け加えた（瀬川 1962）。女性の生活経験ということを重視しながら、そこに止まらず、男性主体の先入観や偏見を排して、男女平等や男女共同参画にかかわるような、重要な社会問題を指摘しているのである。

中道仁美は、『女性から見る日本の漁業と漁村』（農林統計出版、2008）において日本の漁業・漁村女性研究の発展と漁業・漁村女性の地位向上に寄与し、ひいては世界の漁業・漁村女性研究の発展と漁業・漁村女性の地位向上につながることを指摘している。

岩崎繁野は、「女性が夫・子と共に漁し漁撈を行い、自営漁業や水産加工、行商などに参加している」ことを指摘している。女性が漁業に従事する生活時間の変化や生活環境の変化についても述べており、家事なども行わなければならない女性の多忙さを明らかにしている。女性の補助的労働と家事・育児労働への活動がみられたが、漁業における女性労働の社会的ないし家族内での労働経済的評価についてはほとんど取り上げられてこなかったのである（岩崎 1957）。

三木奈都子は、漁家における女性労働の統計的整理と性別分業の態様を把握したうえで家族経営の中での女性労働の位置づけに関する研究を行い、「漁家女性の就業は、地域の雇用就業機会の少なさから盛漁期の漁業従事をその他の自営業や臨時日雇いの雇われ就業と組み合わせ、あくまで漁業労働にとって補助的な就業を中心に行ってきた」と指摘している。また、三木も沿海地区漁協におけるジェンダー関係と漁業協同組合における男女共同参画についての研究を行い、「近年、漁協婦人部の活動において、女性がローカルで繰り広げられる水産物加工や販売などの漁村特有の起業が見られる」としている（三木 1997）。

漁村における女性の起業的な取り組みに関する研究は、三木奈都子と副島久実が行った。三木は、「漁村女性起業化グループに関する漁協女性部の加工販売活動は、漁協女性部の自主的な取り組みとして行われている」ことを紹介している。その支援は、担い手対策をすると同時に、地域だけでなく報酬を受け取る個人の活性化をもたらし、水産業への女性の参画を促すと指摘される。副島は、「漁村女性起業グループ活動は副収入機会を創出しながら、地域特産物の開発やグループ活動を通じて得られる他地域の人との交流という意義が見られる」と述べている（副島 2010）。

一方、中国における女性の労働に関する研究は、城鎮と農村の女性に関する研究はたくさん蓄積しているが、漁村においてはまだ少ない。

城鎮の女性の労働参与に関する研究は、沈可、「中国の家庭構成の中で『多世代同堂』という居住モデルの比率が減っている現状で、女性は育児と家事への労働時間が増え、その結果、女性の労働参加は減少している」と指摘している（沈 2012）。姚先国は、「計量経済学の方法で、中国の家庭収入と城鎮婦女の労働参与の決定との関係进行分析してから、中国の経済の転換時期において、女性労働参与率は著しく減っている現状であり、その原因1つには家庭収入の増加と家庭内再分業により女性の労働が自由選択になったことがあるが、さらに、就業が厳しくなった傾向のせいではないか」と考えられる（姚 2005）。孫楽は、「中国の改革解放以来、女性は社会の労働参与の機会が創出されると共に、女性が家庭のほとんどの家事を担う現状は変わらず、実は女性の負担が昔よりもっと重くなった」という（孫 2009）。

農村において、蘇群と周春芳は、「農民は現実の生活方式が変化している過程において、女性は労働力の主要な構成要素と家庭決定の重要な参与者として、彼女らの役割は軽視できない」と指摘している（蘇群、周春芳 2005）。また、高小賢の「中国現代化と農郷婦女地位の変遷」と「地元中国農郷労働力移動及び農業女性化傾向」、孟憲範の「農業労働力移動中の中国農郷女性」により、農村婦女の労働力移動の問題を研究

するうえで、農村婦女の非農産業へ移動する傾向とそれが停滞した後れの原因をまとめて分析した。

以上の先行研究を踏まえ、本章では、中国の漁村女性の労働について、昔の伝統的な漁業を中心に暮らした女性の姿の現状を述べたい。彼女たちは大変な労働に従事するが、家族に対する経済的貢献がまったく見えなかった。近代の人民公社時代から漁村女性は公社の中で働いた。収入が得られるようになり、特に改革解放後、政策転換により漁村の産業も大きく変化し、女性は家事専業から、出稼ぎと自主創業の事例も増加してきた。こうした「牛馬」（詳細は後述）から「労働の主体」への変化は、女性たちの自己認識にどのような影響を及ぼしたのか、また、現代女性の権利を守るために設立される婦女連合会は漁村女性の労働参加と女性自身の成長に如何なる役割を果たしたのかについて、以上を分析する必要があると考えている。

第1節 「牛馬」としての伝統的な漁村女性の姿

鶴理恵子は、テマについて「単なる労働力を意味する言葉だ」という概念を説明している。鶴氏は、「農漁村社会に根強く残る男尊女卑の思想や小規模家族経営による無償（無償に近い）労働、家の嫁としての様々な苦勞、農作業では一人前を期待され、その上に家事と子育てを担うことからくる過重労働、その為に教養・娯楽の時間が男性と比べて極端に少ない事、などがあげられる（中略）舅や姑の指示通りに動く（働くではない、動くである）だけの存在、婚家の農作業や農業経営、農業以外の働き（土木建設作業、野菜や花などの行商や朝市、魚の加工作業など）、家事全般などに関して、労力を提供するだけで何の参加も意見表明もできない存在としての自分である。労働の主体性を奪われたこうした扱いの記憶は『ただ牛や馬のように使われるだけだった』という（鶴理恵子 2003）。

1 「牛馬」として扱われた漁家女

中華人民共和国解放前、漁村の女性は船に乗れないという伝統的な禁忌のために、女性は漁業の作業に全然参加しなかった。その時代、男性は出漁する間の一切の家事は女性が担い手であった。漁家女性は家事をするだけでなく、補助的な労働、例えば、網を洗う、修理する（図2-1）などとした。そして、男は遠洋へ出漁するのは幾月もかかるので、漁村の農業生産はほとんど女性



図2-1 女性の網を作っている場面

達が行った。そのため、漁家女性の労働比重は非常に重かったが、女性達のその労働に対する収入は少なかった。その時、一般的な家庭は大世帯であり、家族構成は3世代、4世代が同居（図2-2）するのが普通であったため、家事の負担も大きかった。そして、家族の構成は世代と性別によって地位が決まるため男尊女卑の思想も深かった。家庭内の経済権利は家長が持ち、個人の給料はすべて家長に出し、家長が統一分配する。特に、漁家の中に、家の「見える」収入は全て男性



図2-2 三世代同居(螞蟻島書類保存室提供)

の働きによるものだったので、長い間女性は家庭の中の地位は低く、彼女たちの労働も軽視されていた。女性のこのような生活形態は中国語で「牛馬」といわれ、これは鶴理恵子氏が言う日本の農漁村における女性の「テマ」の状態とまったく同じの存在であると思っている。

本稿では、螞蟻島での聞き取りと漁家民謡などを通して、漁家女性のたちが「牛馬」として位置づけられていたことを捉えてみる。例えば、L・YZ（図2-3）は1933年生まれの螞蟻島の漁家女性である。父親は漁工であり、彼女が11歳の時亡くなり、母親も次の年に亡くなった。そして、

L・YZは父の妹の家に、「童養媳」⁽¹⁾として育てられ、妹は母の妹の家に養女として育てられた。L・YZの記憶によると、解放前、生活はとても苦しかった。その時の漁家民謡は漁民の苦しかった生活を表している：「沉在苦海中，漁家世代穷，破衣破裤破毡帽，草房像个破鸡笼，早上空饭桶，蜘蛛爬烟囱，鱼行大门空咙咚，卖儿卖女喝西风」

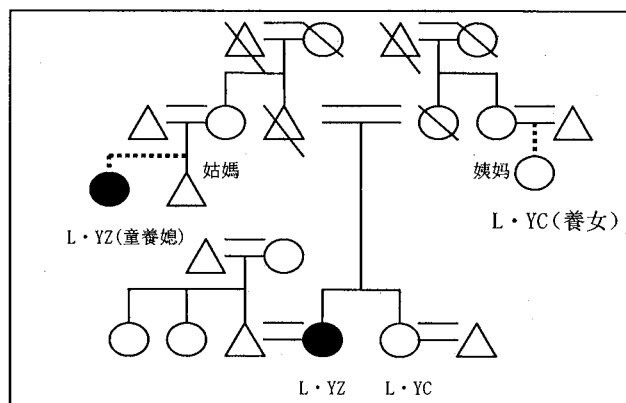


図2-3 L・YZの家族構成（1958年 ●：L・YZ）

この意味は、「漁家は代々貧しく苦海の中に生き、衣服とズボンと帽子は破れている。草ぶきの家は破れた鶏籠に似ている。貧乏だから、朝ごはんもなく、家も何もなく、息子と娘を売り、飢えて生きる。」である。

L・YZさんの父親は漁業資本家に働いていた、母親も資本家の家に下女として働いた。1年中、死ぬほど働いても、家族の全員4人はぎりぎりの生活をして生きていった。両親が亡くなった後、L・YZさんと妹は育てられる家も苦しかった漁工の家庭であった。その時の漁家女性たちは旧社会の最低層で暮らしていた。L・YZさんは「童養媳」だから、叔母さんの家のほとんどの家事や農作業をした。解放後の最初は、旧

社会の思想はまだ残っていたから、漁家女性の労働はまだ「牛馬」として扱われた。しかし、婚姻自由の政策のおかげで、L・YJさんは童養嫁の束縛から解放されて、婚姻自由の典型代表として、自分の意思で結婚した。結婚の時、貧乏のために、新婚最初の資産は5キロの古い布団しかなかった。結婚後、L・YJさんは夫の両親と夫の2人の妹と一緒に暮らしていた。毎日、L・YJさんは農作業、漁業補助労働と家事など、姑の管理下で過ごしていた。自分の自由生活時間はあまりなかった。そして、毎月、家の収入は全部姑に集められ分配した。自分が決まられる小遣いも報酬もなかった。

蟬蟻島の漁家女性は解放の初期には、ほとんどL・YJさんのような生活をしていた。伝統的な漁業経済の背景に、一般的な家庭の収入はとても低くて、子供がたくさんがいるから、みんなの生活は苦しかった。

2 「牛馬」から「労働の主体」へ

(1) 家事から脱出

人民公社の成立後、漁業、農業、林業、牧業、副業はすべて発展していったので、漁業生産の労働力は非常に不足していたために、女性の「半边天⁽²⁾」の役割を發揮することが提唱された。旧社会の最低層の人々は、自分の生活のために働けると非常に興奮していた。女性は家の外へ出かけ、男性と一緒に公社の労働に参加できた。その時、女性の労働は「工分⁽³⁾」という体制によって、女性の労働は家庭の収入として加わるようになった。しかし、その時、蟬蟻島の女性たちは大変苦労した。昔の家事、農作業と補助的な漁業労働は言うまでもなく、生産資材と生活資材の運搬(図2-4)も女性たちの仕事であった。



図2-4 女性の運搬している場面

(2) 主体意識の萌芽

人民公社の労働に参加しながら、漁家の女性たちは勉強し始めた。そして、家庭の収入源として貢献しながら、公社の団体活動にも参加でき、彼女たちは、だんだん家庭の経済を管理し始め、自己認識も変わってきた。

例えばL・YZさんは、人民公社の時期の婦女主任であり、その時の記憶は



図2-5 女性の農作業をしている場面

今でもはっきり覚えている。人民公社の時、螞蟻島は、発展のために、お金を節約する意見を提出した。男性の社員は「男捕千担魚、不分紅、建造機帆船⁽⁴⁾」を提出すると、女性たちはすぐ遅れをとらずに「女種万斤薯（図2-5）、養活兒子因⁽⁵⁾」を提出した。そして、お金を節約するために、まず18人の女は「勤儉持家小組」⁽⁶⁾を組み立て、「日蓄一分、月蓄三元、三年不分紅、老婆養老公⁽⁷⁾」というスローガンを叫び、1956年まで、10人組の「勤儉持家小組」は24組あった。この結果、女性たちは、6万元を節約でき、「婦女号」という機帆船を作った。また、女性は藁縄をない、そのお金を使い、「藁縄船」という機帆船も作った。また、R・JDさんは1922年生まれ、の螞蟻島の漁家女性であり、人民公社時期、

「三八海塘⁽⁸⁾」の建造に参加した（図2-6）。「防波堤の建築はとても苦しかった。満潮になると、何も見えなくなり、退潮を待つ。退潮になると、満潮までの短時間の間に、一所懸命働いた。この防波堤の建造は3年の内で完成予定であったが、200余の漁家女たちは1年4ヶ月で建て終わった。以前、資本家に搾取されたから、今、自分のために労働し、どんなに苦労しても思わなく、嬉しくて働いていた」と言った。



図2-6 「三八海塘」を建造している様子

更に、W・YXさんは、1928年生まれ、の漁家女性であり、「婦女号」機帆船の「船老大⁽⁹⁾」であった。「その時、私たちは何にも文句もなく、防波堤があれば、堤防の中で、農作業ができるようになって考えていた」と言った。また、その時、漁村は遠洋生産を発展させようとして、男性労働力が足りなかったので、10人の女性が男性と一緒に遠洋生産をした。昔、女は船に乗れなかったが、W・YXさんは、漁撈作業に参加し、船に乗れるだけでなく、「船老大」で「婦女号」の全員を管理でき、「女が船に乗ると船が転覆する」という迷信を除き、女性も男性と平等であるという自信から、女性の地位を向上した。

第2節 現代の漁村における女性の労働参加と自己認識の変化

1 漁村における産業の変化と女性の働き

（1）螞蟻島の社会構造——改革開放以降の螞蟻島

20世紀80年代は世界の巨大な歴史的転換の時期であった。社会・経済、ひろく文化のパラダイム・シフトの時代に向かいつつあるといってもよい。この時期の中国に

は、全国的な改革開放政策を行い、市場経済と競争原理を導入し、高度経済成長を達成した。改革の初期段階では、農村に生産請負制が採用されて普及した。螞蟻島は1982年に、30年ぐらい続いた人民公社制度が解体した。そして、「郷鎮企業⁽¹⁰⁾」が設立するとともに、現在までずっと続いている漁業生産の株式合作制が登場した。人民公社体制のもとでは、公社以外の職に就くことは不可能であったが、各戸（漁家）経営請負制の導入による漁家所得が向上し、漁民は自己で運営する企業も出てくるようになり、出稼ぎ人も増加していた。

この産業の変化とともに、労働力のフェミニゼーションは大きな役割を果たした。螞蟻島の女の労働参加構成の状況は表2-1と表2-2に示している。表2-3により、2003年の螞蟻島の人口は4070人、労働力の人口は2325人、その中に、女性労働力の人口は955人、労働力人口の全部の41.1%を占めている。出稼ぎに行った人口は1218人、労働力人口の全部の52.4%。このデータから、18-50歳の労働力が出稼ぎする場合、家に残っているのはほとんど老人と婦人であり、したがって、女性はまだ地元の主要な労働力になった。

表2-1 螞蟻島女性労働参加の産業構成と年齢構成

項目	人数	パーセント (%)
女の労働参加の種類	950	100
漁業	363	37.9
工業	208	22.1
交通	19	2.1
販売	72	7.3
飲食	28	3.2
その他	260	27.4
年齢	2030	100
18歳以下	302	14.7
18-35歳	448	22.2
35-60歳	943	46.3
60歳以上	347	16.8

データ：中国国家统计局、文号：公[2003]55号

表2-2 螞蟻島の女性労働力の状況

年	総労働力 (人)		漁村女性の労働参加の生産額 (元)	
	男	女	漁業生産額	補助労働生産額
2003	1116	957	5400 万余	800 万余
2004	1143	971	6300 万余	1000 万余
2005	1128	955	7602 万	1382 万

データ：螞蟻島の政府報告に基づき作成

表2-3 螞蟻島労働力の構成 単位：戸、人

	户数	戸均	全郷 (人)	占全郷比重 %
人口	1155	3.5	4070	100
労働力		2.0	2325	57.1
男労働力		1.0	1370	58.9
女労働力		1.0	955	41.1
出稼ぎ人数		1.0	1218	52.4

データ：中国国家统计局、文号：公[2003]55号

しかし、近年になると、螞蟻島は生態島を建設する目標を制定して、農業は島から

なくなり、漁業資源は衰退したため、出漁の収入は不安定になり、螞蟻島の産業も変化しつつある。海産品の加工、養殖業と工業などが発展するとともに観光事業も急速的に発展してきた。「漁家楽」と言う項目はこの機運に乗じて生まれた。

(2) 「漁家楽」から見る漁村における女性の働き

20 世紀 90 年代初期、中国政府はアメリカ、西欧などの観光農業を中国へ紹介し、同時に各地の政府は市民に「農村・農家に入り、自然に近づく」という活動を提唱したので、「農家楽」という農家で余暇を体験することが中国で急速に普及している（池田孝之、周晟 2008 : 397~398）。この「農家楽」という経営のモデルを啓発することによって、各地の漁村は自身の環境を利用して「漁家楽」と言う業種を形成することができた。

① 「漁家楽」とは何か

「漁家楽」という業種は観光客が漁民の生活を体験でき、漁村の強い雰囲気を感じられるものであった。螞蟻島の「漁家楽」は漁民の家を民宿として運営されている（図 2-7）。具体的には、お客さんは螞蟻島に着くと、地元政府によって統一的に分配され、4-6 人が 1 戸の漁嫂¹¹に連れられて漁家に行き、次の日に漁民の船に乗り、船老大と一緒に海に出漁し、獲った魚やカニなどを民宿で地元の作り方で料理を作り、「1 日の漁民の生活を体験する」という活動である。



図 2-7 「漁家楽」

また、螞蟻島の人民公社時期の歴史についての観光、あるいは近くの普陀山への観音の参拝などのレジャー項目も提供されている。2005 年まで、漁家
休憩ホテルという「漁家楽」は 24 カ所があり、10 万人ほどの旅行者を招待し、4000 万円の収入が増加した。

② 「漁家楽」の運営と女性労働者の主体意識の形成

「漁家楽」の運営は主に個人経営される。一般的に、男性は海に出漁し、女性は家で「漁家楽」を運営する。一般的に「漁家楽」の利用者は上海、杭州、寧波の都市から人が多い。8 年間「漁家楽」を運営する L さんは、「経営の初期、お客さんは漁家楽の施設整備の不便とか、衛生状況が良くないとかの苦情もあった。私たちもできるだけ各方面のサービスを改善している」という。近年、漁業資源がすくなくなったた

め、一部の経営者は完全に漁業生産を止めて「漁家楽」を経営している。家庭の収入は漁業生産から「漁家楽」へ転換している。女性は昔の家庭のという役割から全く家庭の支柱になった。昔、漁家の家事は全部女性の責任であったが、近年になり、男性は出漁へ行かず、女性が忙しい場合、男性は一部分の家事もやってきた。そして、現代の家庭の構成は核家族に変わり、漁家女性が夫と共同で家庭生活を営むことが普及している。

以上の変化により、漁家女性は自分が労働の主体となる意識はもうすでに形成されたとと思われる。しかし、周辺の島の漁民もみんな「漁家楽」という業種をまねるため、利用者がすくなくなり、最近、2006年よりちょっと閑散となった。2007年以降、地元の漁家女性の一部は東海岸造船所へ就職しつつある。

(3) 漁村工業化の影響——東海造船所の登場と外来の出稼ぎ女性労働者

建国以来、螞蟻島はずっと漁業経済が第1の産業であるが、近年に漁業資源が少なくなったため、2007年、東海岸造船所を建設し、螞蟻島の主要産業も漁業生産から造船工業へ転換している。2011年、螞蟻島の社会総生産値は13.6億元であり、前年より16.24%増やしている。その中に、工業生産額は12.01億元であり、漁撈業と漁業養殖の産量は37160トンであり、生産額は1.34億元になる。造船所に就職している地元の人は200人ぐらいである。しかし、造船所の用地のため、螞蟻島の「大岙村」は全体的に移動され、もとの5つの経済合作社の中の大興岙と蘭田岙の大体半分の島の居民は造船所の用地のために、全部移動されてしまった。この造船所は、螞蟻島の経済に貢献しているが、一部分の居民によくない影響を与えていると思われる。

また、造船所設立の影響から、螞蟻島の外来人口は2011年まで6500人余りになり、その半分は女性労働者である。それから、螞蟻島の発展は外来労働者の存在を抜きにして語ることができなくなっていくだろう。出稼ぎ者は、1年のうち螞蟻島に10ヶ月以上暮らす人が9割以上を占める。これらの外来の女性労働者は、自分の出身地の文化と生活習慣を持ち、螞蟻島の地元の漁家文化と漁村の特有の民俗とどのように融合するか、また、これらの外来人口は「新島民」と呼称され、これらの「新島民」は螞蟻島にどのような影響をもたらしたかを考える必要がある。

① 出稼ぎ女性労働者のネットワーク

造船所に出稼ぎに来る人は大体四川省、河南省の農村からが大多数である。出稼ぎが初めての人7割ぐらいで、引率されて来ている。その内、引率者が「家族・親族」、「友人、隣人、先に出稼ぎしていた同村の人」という者は8割である。例えば河南省出身の運搬人の、ある男性は1人で家族の5人と同村の8人を連れてきたという。今、彼と奥さん2人は造船所で働き、両親は賃貸の家でレストランを運営しながら、孫の世話をしている。彼はここでの典型的な出稼ぎの優秀者ともいえる。奥さんは造船所

の仕事が休みの時、自家のレストランを手伝う。また、同村の他の人は故郷の料理を食べたい時よくここへ来て、ご飯を食べながら、同郷人と交流できると、故郷を思う気持ちを慰めている。このような雇用者側の情報をもとに故郷の家族・親族や同郷者たちを連れてくるのが造船所に普及している。この結果、先に来ている出稼ぎ者のネットワークを通じた採用形態は、地縁、血縁のネットワークを通じた就労の可能性を高めることになっている。螞蟻島における女性出稼ぎ労働者がそれぞれの故郷のネットワークを通じて出稼ぎをし、結婚を通じた定住が少しずつ進んでおり、家族、親族あるいは友人や近隣の人々を就労の機会があれば、その都度呼び寄せている。

② 生活空間としての工場

「半島船郷、半島人居」というように造船所は螞蟻島の半分の土地を占め、外来労働者はほとんど造船所に就労し、これらの外来労働者の生活空間は労働場所である工場と、工場のすぐ近くの住まいである宿舍とに集約されている。先ほどの河南省の男性のような既婚者のうち、一部が工場外の螞蟻島の居民区で暮らしているが、未婚者は当然のこととして、既婚者であってもその8割が工場内で暮らしている。

図2-8は造船所が外来労働者のために建てた宿舍である。違う地域の出身者が一緒に働き、暮らす工場では宿舍の配置について、同郷者同士が同じ部屋となるように配慮しているという。これらの地域



図2-8 造船所の従業員宿舍

文化や言葉の問題が、女性出稼ぎ労働者にとって、学歴は中学卒業が中心であり、共通語（普通語）の能力は一般の農民に比べれば高いが、自分の故郷の方言しか話せない人も確かにいる。こうした従業員は通常の時、工場の中で1日を過ごす他、休日なども自分の住んでいる工場内の宿舍や同郷者あるいは同僚たちと過ごすことが多い。

造船所は54の下請け会社があり、外来の従業員は大体下請け会社に管理される。したがって、造船所は、1つの下請け会社を1つの「グリッド小組」として、その責任者はグリッド小組長になり、グリッド連絡員、グリッド治安長、グリッド安全員を設置するというグリッド化管理方法で全部従業員を管理している。例えば、雲南からの女性出稼ぎ労働者Z・SMさんは、ここに来たばかりで、グリッド組長、組員、医者、警察及び下請け会社の責任者の連絡方法を書いた1枚の連絡カードをもらい、また、造船所の幹部の連絡電話も付き、問題が起きたとき、この電話をかけるように言われた。

また、春節に帰郷と業務復帰する従業員のためにバスを仕立てて家まで送り届けたり、従業員が故郷から連れてきた人の食住の世話まで、こうした家族的温情な労使関係に基づいて経営されている。実は、帰郷した外来の従業員は春節後帰るかどうか

ついて、たくさんの企業が心配していることである。造船所は、従業員に他のところより給料が高いし、従業員の宿舍の条件も非常にいいので、安徽阜陽の出身の N・GF さんは、溶接従業員であり、螞蟻島の造船所に 3 年間働いた。彼は自分の故郷の給料は 1 ヶ月 1400 元であるため、比べると螞蟻島の造船所で 1 ヶ月 4500 元の方がずいぶん高いと話してくれた。そして、造船所の給料が高いだけではなく、ここの宿舍は全部エアコンが付いているから、春節後、自分だけではなく、もともと山東省で従業した 2 人の甥も連れて来たという。

③ 定住の可能性

螞蟻島の外来の出稼ぎ人々が定住者となるためには戸籍を移動することが必要だが、他省出身者の螞蟻島への戸籍の移動は難しい。一般的に、螞蟻島で正式に雇用された出稼ぎ者には流動人口臨時居住登録証明書（臨時戸籍）が付与される。そして、臨時居住証を持ち、螞蟻島に三年間住むと、流動人口居住証が発行される。この流動人口居住証の年限は 9 年である。もし、規制された条件が符合すると、地元の戸籍を取れるという。

造船所の労働条件にもかかわらず、上述した家族的温情的な労使関係の下で、収入や仕事への高い満足感が維持され、定着性も比較的高くなっているものと見られるが、流動人口居住証を持つことは螞蟻島の村民としてではなく、短期的な滞在労働者の出稼ぎ女性の場合、村の政治構造に対する認知すら欠落している。彼女たちの内の九割以上は村幹部の名前さえ知らない。村籍を持たない一時的な滞在者に参政権は与えられない。その上、企業管理職のように村幹部との折衝が業務上必要となるわけでもない。村の政治構造は、企業組織の下級成員としての出稼ぎ労働者の日常生活にとってさほど意味をもたないのである。

生活の面で螞蟻島にとっても、女性出稼ぎ労働者にとっても、もっとも重要な存在は彼女たちと螞蟻島をつなぐ人々である。前述した造船所の管理システムは 1 つの下請け会社が 1 つのグリッド小組として、全部従業員を管理している。こうした中間管理職である人々と出稼ぎ者は日常的な交流が可能となっている。造船所でトラブルなどがあれば、これらの人々、あるいは同僚と同郷者に頼むことが多い。螞蟻島の村民との交流は依然少ない。彼女らの生活空間が職場と宿舍と言う極めて狭い範囲に閉塞され、各自が繋留される血縁・地縁のネットワークに依存している。実際のところ、造船所は螞蟻島の村落を分けている状態であるが、地元の村民も 200 人ぐらい造船所に就職するため、同僚になると、時々、出稼ぎの人々は地元の村民の家に訪問することもある。しかし、方言の存在がコミュニケーションの阻害になることと村での滞在期間の短さなどのために、地元の村民との人間関係がそんなに濃密とは言えない。したがって、ここに定住してくる可能性はまだ高くないのである。

また、造船所建設の数年前、螞蟻島の学校は廃止された。今、外来の出稼ぎ人口は増加していると共に、彼らの子供たちの教育問題が表出するようになる。造船所の 400

人の出稼ぎ者のアンケート（有効アンケートは 332）⁽¹²⁾により、22%結婚し、19%子供がいる（その 3% 螞蟻島にいる）、もし螞蟻島で学校がある場合、子供を螞蟻島に連れて来たい人は 13%である。このアンケートから見ると、子供たちは大体故郷で両親や親戚が世話をしている。これは出稼ぎの人々が定住しない、重要で大きな要因の 1 つであると考えられる。

2 漁家女性の自己認識

（1）漁村女性の楽しみと労働の位置づけの変化

解放前、無償労働である漁村女性の労働が「牛馬」として扱われていたことが分かる。そして、解放から 20 世紀 80 年代まで、螞蟻島は漁業だけではなく、農作業もあったため、漁家の女性たちは、自分の時間があまりなかった。その時、漁家の仕事は天候に左右されることが多く、雨の日や農閑期には、比較的休みが取れることもあった。漁家の女性にとって楽しみであったというが、逆に、雨の日も農閑期も関係なかった、と言う話もある。特に 60 代の女性たちの記憶からの話しである。

そして、人民公社時期、仕事のやりくりをつけ、家族に気兼ねをしながらでも、各種の“学習班”⁽¹³⁾や“生産小組”へと出かけていく人が増加していった。特に、「人民公社の婦女連合会の会合やサークル活動は、何よりの楽しみだった。ふだんは家において農業や補助的な漁業だけの毎日だから、その日だけは、うれしかった」、「何かを勉強して自分が向上し、自分の力と知恵は人民公社の発展と自分自身より良い生活に向けて精一杯努力するのが楽しみだった。」と語る女性が多い。この時期には、嫁さんは姑と一緒に暮らすことが普通であったから、家の舅と姑が家計収入や労働及び生活全般を統括するというやり方のために、漁村女性には労働主体の認識はまだ薄かった。

80 年代から 1995 年ぐらいまで、螞蟻島の「生態島」の目標のために農作業を止め、人民公社も解体、株式合作制となってから、漁村女性の自由時間はずいぶん多くなる。この間に、漁家の収入は男性 1 人で出漁したら十分であり、女性は補助的な漁業と家事以外の仕事に従事する人があまりいなかった。実は、この時期の漁家の生活は他の農家の生活より裕福であったので、漁家の嫁の生活も気楽であった。したがって、周辺の農村の娘は漁民と結婚する人も増えていた。また、この時期、漁村社会全体に進行した改革の中に、漁村の家族は大家族から核家族へ転換しつつあり、家の舅と姑が労働組織及び生活全般を統括するというやり方が崩壊した過程により、漁村女性は家の経済支配者になり、自分の考えで判断し、行動するという行動パターンをもち、自立することが出来た。

しかし、近年になると、漁業資源が衰退し、漁民の生活にも大きな影響が出た。特に、休漁制度を実行してから、休漁期⁽¹⁴⁾には、漁家の自由時間が 3 ヶ月になる一方、漁家の生活緊縮圧力も高くなる。その結果、漁村の女性たちは起業の意識を生み出し、「漁家楽」というレージャー漁業や水産品の養殖漁業の起業は“漁嫂”を家庭経済の

「わき役」から「主役」に変わらせてきた。それに伴い専業主婦も減少してきていて、現在では就労主婦が圧倒的に多くなってきて、忙しい主婦・母親・労働者として幾重にも役割分担をしている。自由時間が少なくなったが、労働主体になると、自分自身の価値と家に貢献を与える満足感は増加しつつある。彼女らは家や起業経営における地位や役割が大きく変化し、「牛馬」から労働の主体への変化はいつそう進んできた。

(2) 現代の漁村女性の自己認識

① L・DN さんの場合

L・DN さんは、1970 年普陀区の桃花島の農家に生まれ、1990 年富裕な螞蟻島の漁家の夫と結婚したが、非漁家の暮らしから一転して、不慣れな補助的な漁作業や子育てをする漁家の嫁として生活し始める。「故郷の農家の暮らしより生活レベルが高くなり、不慣れでも早く慣れるために努力した」と言って、ほほ笑みを浮かびながら当時のことを思い出している。L・DN さんは、様々な面で協力的な夫に支えられて、自家の漁獲物の加工や販売のかたわら、「3 学 3 比」という“学文化、学技術、学政治、比成績、比貢献、比思想”のような漁村婦女連合会の活動に積極的に参加し、婦人同士のつながりなどを深めている。今、L・DN さんは漁業経済合作社の漁家婦人のリーダーになり、婦女連合会の活動で漁村婦女芸術団の活動などを自ら率先して行ったり企画したりするなど、螞蟻島の漁家女性たちに多大な影響を与えている。

② Z・HY さんの場合

Z・HY さんは、1965 年生まれの螞蟻島の漁家女性であり、同郷の漁民の夫と結婚した。自分も漁家の出身だから、子供の頃から母親と一緒に家の労働によく参加した。夫と結婚してから、当然のように家の各種労働をリラックスして行った。結婚の最初の 7 年、舅と姑と一緒に暮らし、その後、自分の家を建て、舅と分家して、夫婦で独立して暮らしてきた。2000 年から、夫は自家の船で出漁し、Z・HY さんは自分で“漁家楽”の仕事を起業して経営を始める。最近、“漁家楽”の経営は難しくなり、ちょうど造船所が開業してから、地元の人を募集するため、Z・HY さんは、“漁家楽”を休業し、造船所の管理者として働いている。「私は暇を好まない人間なので、稼げる仕事があれば積極的にやってみたい人間であり、また、自家の経済は絶対に私が管理する」と言ってちょっと自慢的に話しをした。

L・DN さんと Z・HY さんは、螞蟻島の女性たちの典型的な代表である。L・DN さんは、外来の非漁家の出身として螞蟻島の嫁になり、漁家の暮らしは不慣れであったから、自分自身の努力によって、漁家の本当の女主人になり、労働主体として自分自身の価値も実現した。Z・HY さんは地元の漁家の出身として嫁になり、最初から漁家の生活を心得ていた。そして、家庭あるいは夫の従属人にならなく、自分自身の手で労

働に参加し、家の経済支配権を持った。本人たちの努力や能力がそれぞれの人生のものとはいうまでもないが、それに加えて、こうした他の漁家の女性たちと比べるとかなり恵まれているといえる状況も個人の努力の後押しをしていることは明らかである。

3 婦女連合会が果たした役割

螞蟻島の婦女連合会は、人民公社時代で中国における全国的に有名な“漁村先進代表”である。この螞蟻島の婦女連合会は今日どのような活動が行われ、この組織がどのように位置付けられているのか、さらに螞蟻島婦女連合会を通して螞蟻島の女性の役割とは何であるかを明らかにしていきたい。

(1) 螞蟻島の婦女連合会の機構設置と機能

今日、螞蟻島の婦女連合会は、全郷の女性のみの投票によって選挙される5つの経済合作社で2人ずつの代表による合計10名の婦女代表から構成されている。そして、この10名の代表の中から1名の婦女主任を選出し、その任期は3年である。婦女主任の仕事は重要であるから、一般的に統治能力があり、文化に精通し、開拓精神を持ち、熱心に婦女と児童にサービスを提供する女性が優先的に推選されるという。

婦女連合会の基本的な機能は、全郷の婦女に“3学3比”競争活動を指導し、推進し、全郷婦女を代表して郷政府の社会事務を民主的に、管理や監督する仕事に参加する。婦女児童を保護する法律を宣伝、婦女児童についての問題を調査し、郷政府に相応対策と意見を提出、婦女児童の合法權益を守る。婦女の家庭教育を指導し、特に託児事業を推進する。

(2) 漁村女性の集団活動

漁村社会から変容した螞蟻島の女性の集団活動を螞蟻島の漁嫂の生活記録と婦女連合会の変遷と役割を中心に行った。

人民公社時代、婦女連合会は全郷の婦女を動員し、「勤儉持家小組」を組み立て、藁縄をない、「婦女号」・「藁縄船」という機帆船を作ったり、「三八海塘」の建造に参加したり、全郷婦女の自身価値を最大限に発揮させた。

現代になると、婦女連合会は主に婦女の權益や、労働や創業や、精神的な生活を豊富に指導する。郷政府

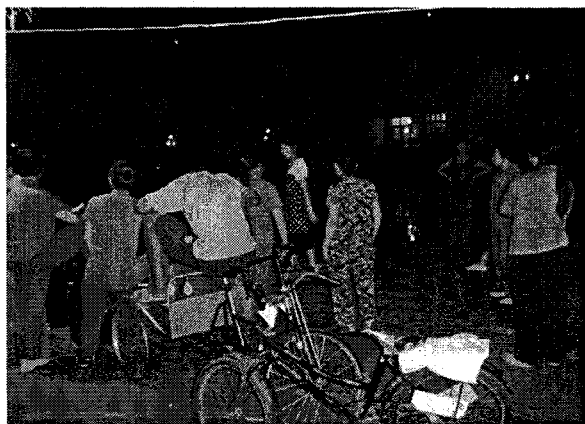


図 2-9 「漁嫂」らのダンスをしている場面

の相応部門の責任者は、婦女労働力創業就業小組を設立し、婦女労働力創業就業サービスセンターを成立する。婦女連合会の成員を中心に婦女労働力創業就業連絡小組を設立し、全郷の婦女労働力の総合情報を集め、彼女ら自身の価値を高める。また、螞蟻島の婦女連合会の成員を中心に“漁嫂余暇芸術団”を設立し、全郷の120人余の文娛体育愛好者の漁嫂はこの団体に参加し、しばしば各種類の上演活動を行う。その結果、コンビ二や個人宅の庭からよく聞こえたマージャンをする音はなくなり、それに代わって、街のあちこちに音楽の音が多くなる。例えば、図2-9のように、漁嫂らは普陀区の文芸公演のために、マスゲームのダンスを練習している場面である。このような娯楽活動は、1年間数回を行われる。

(3) 婦女連合会の役割

「牛馬」から「労働の主体」への変化と共に、1日をどう過ごすかの自主選択分も確実に増えていった。その結果、漁村女性の生活時間は全体として娯楽・教養の時間が増加していった。漁村女性の活動範囲も、自家の中庭の狭い範囲から各種活動の場所や知人・友人宅などへ飛躍的に拡大し、人間関係も大きく広がり、漁村女性たちの役割も複雑化・多様化し、漁村生活への満足度の高まりとなっている。婦女連合会の活動及び“漁嫂余暇文芸団”の活動は、漁村女性たちの生活全般を豊かにする大きな役割を果たしてきた。

小括

現在、中国の漁村経済成長を推進しているのは“漁嫂”であるという認識は、かなりの人々に共有されている。螞蟻島でも、漁村のレージャー漁業の経営の柱に女性が位置し、労働の主体として活躍している。しかし、性別役割分業意識も依然として存在している。例えば、家事や育児が漁村女性に集中しており、自家のレージャー漁業や造船所での就労などと合わせると、女性の方が過重労働となっているのも事実である。

以上、解放後、漁村女性が「牛馬」から「労働の主体」へ変化してきた過程を分析した。1980年代以降、漁村の経済制度が改革し、漁家の構造も変わってきている。その結果、漁嫂たちの労働参加は自主化・多様化になった。そして、漁村女性の自己認識も、伝統の「牛馬」から労働主体への姿を変えていき、現在に至っている。

注

- (1) 解放前、普通富裕な家は貧しい家の幼い娘を幼い息子の嫁として引き取り、大人になってから2人を結婚させるという婚姻形態が中国各地で見られた。そのような幼い娘を童養媳と呼ぶ
- (2) 女性は男性と同じように、家庭と社会の責任を負担し、経済の発展に平等的役割を発揮する
- (3) 労働に対して「分」を定める精算制度。
- (4) 男は機帆船を作るために、千担の魚を獲るが、利益を分配しない。
- (5) 女は万斤のイモを植え、子供たちを養う

-
- (6) 蟻島（マダガスカル）の女たちは、仕事に励み、無駄な出費を少なくする組織である。
 - (7) 中国に妻は老婆と呼ばれ、夫は老公と呼ばれる。
 - (8) 3月8日婦女節のため、「三八」で女性を指す。この防波堤は全て女性が作ったから、この名になる
 - (9) 船頭
 - (10) 中国の郷（村）と鎮（町）における中小企業。人民公社時代には社隊企業と呼ばれたもので、人民公社廃止後に郷鎮企業と改称。村営、私営などさまざまな形態を持ち、市場経済化のなかで飛躍的に発展。
 - (11) 舟山群島において、漁民の妻を「漁嫂」と呼ぶ
 - (12) 浙江省普陀区政府ネット <http://putuo.gov.cn/jyta/783.html>
 - (13) 漁家の女性たちは解放前ほとんど非識字者であり、解放後、人民公社は“学習班”を成立して彼女らに文化を教える。
 - (14) 舟山群島の休漁期は1995年から始まり、毎年6月15日0時～9月15日24時である。

第3章 漁村家族生活における女性の役割変化

はじめに 中国の家族に関する先行研究のまとめ

女性の視点からみる漢人家族の＜关系的＞側面について、植野弘子の姻戚関係に関する研究が興味深い。植野は、台湾における漢民族の姻戚関係のあり方を分析している。結婚、祖先祭祀の分析から、「妻の与え手」と「妻の受け手」にたいして、「女家」と「男家」という概念を提示し、男性にとっての家族を超えた姻戚関係と、女性にとっての家族内の姻戚関係の差異を指摘してきた（植野 2000）。また、李霞は、ピエール・ブルデューの「実践的親族関係」（Pierre Bourdieu 2001）という概念を利用し、農村女性の日常生活の実践を考え、彼女らが日常生活の実践の中で自分の実践的な親族関係を構築できる能力があるという。そして、「華北の一農村でのフィールドワークに基づき、女性が男性と違う家族観を持ち、彼女らの帰属が夫と子供と構成する核家族であり、夫が属する家族集団ではない」ということを指摘している。また、李霞は、「漢人社会で、女性は結婚後、出生家族から出て、夫方と一緒にくらしている。この方式の結果として、男性は自分が生まれた家族の「自家人」であり、嫁としての女性は夫家の「外人」である。したがって、女性の視点から、女の一生は必然的に出生家族から婚入した家族への転換を体験し、彼女の親族関係が「娘家」―「婆家」⁽¹⁾ という関係構造を形成する」と論じている（李 2010：21）。「女性の各親族役割はその役割の規範に制約され、彼女らは実践の時その役割の存在している位置によって相応的な関係資源と戦略を利用し親族関係を構築する」ということを示している（李 2005）。李の研究は、「婦女が日常生活で各種親族関係を経営する場合、フォーマルな父系譜系と違う実践的親族関係ネットワークを構築し、彼女らも父系集団の中に自分の生活空間と後台権力を創造した」ということを指摘している（李 2010）。しかし、李の研究は女性の各役割――娘、母、嫁など何人の事例を研究したが、一人の人生の各段階の役割については及ばなかった。

中国の漢民族社会と文化についての研究は主に男性を中心に行われている。中国の親族組織のあり方、社会構造の基本原則―父系の血縁集団、拡大家族の形成や分裂、家族内の人間関係、財産の均分相続制なども、すでに人類学者によって研究されてきた。その結果、従来の研究は男性の視角を反映しており、女性の存在と相応的な位置は無視されてきた。また、今まで漢民族の研究は大体台湾、香港、中国大陸の農村社会、また広東、福建「水上居民」についても注目し研究されたが、舟山群島の海洋社会における漢民族社会の研究は管見において見当たらない。

漢民族の家族・親族研究は、主に父系出自原理あるいは父系出自集団である宗族、祖先祭祀、拡大家族とその分裂などを研究対象としてきた。近年では、女性による関係が研究の主眼であり、女性がかかわる婚姻についても、また婚姻関係によって形成された姻戚関係についても、漢民族についての新たな研究領域になる。以下、従来の研究の回

顧を行い、本研究の位置づけを述べることにする。

費孝通による江蘇省の1つの農村——開弦弓の研究であり、母方オジが姉妹の息子の庇護者として役割を持つことが指摘されている。これは漢民族の姻戚・母方関係についての最も初期の報告である。費孝通は、郷土社会における家の主軸が父と子の間や姑と嫁の間にあり、夫婦は補軸である。また、話したり笑ったりするのは同性と同年齢の集団に存在し、男同士が一緒に、女同士が一緒に、子供同士も一緒にする。仕事や生育以外のことは、性別と年齢組の間に非常に大きい距離が保持すると指摘している。

モーリス・フリードマンは、社会組織原理における父系出自イデオロギーの優越性によって、漢民族社会における宗族研究は漢民族の親族研究の重点とされてきた。彼は、「姻戚関係が、個人・家族・宗族の分節あるいは宗族全体のレベルでの紐帯を維持するものであり、これは父系親族関係と同様に、連帯をもたらすと同時に、敵対するものである」ととらえている。そして、「漢民族社会においては、男系関係と姻戚関係との対比の間には、女性を通じた親族関係という中間的存在があり、この第3の関係のカテゴリーにおいて、男系関係と姻戚関係の間の葛藤がみえてくる。姻戚関係には2つの側面があるが、1つの側面は男系集団間の紐帯であり、もう1つの側面は男性とその母の男系親族との関係である」と指摘している (FREEDMAN 1979)。フリードマンは、漢民族の婚姻儀礼は姻戚関係の両義性を強調し、姻戚関係の曖昧さを劇的に表現しているとする。フリードマン以降、姻戚関係研究はルビィ・ワトソンの香港における研究である。

ルビィ・ワトソンは香港新界の厦村の研究において、女性はどうやって宗族以外の親族関係ネットワークを探すかということを目撃した。ワトソンは、女性が父系宗族と夫系宗族に完全に統合することができない場合、自らの能動的機能を利用して自分の生活にセキュリティとアイデンティティを提供し、厦村においては、父系の論理が優先され、宗族の支配性の低下と階層の流動化によって変化している。

一方、中国大陸における近年の社会的変容と経済的变化に伴う家族による生産活動が、家族、女性の地位、地域社会の変化にいかに関与しているかについての研究は注目されている。その中で、姻戚関係が重要な社会関係となっていることが注目されている。

ワルフ・マージェリーは、1972年出版した『Women and the Family in Rural Taiwan』の中で、父系社会における女性が限られた空間の中で、どうやって自分の実践戦略を開始するかということを示している。そして、「the uterine family⁽²⁾」と「women community⁽³⁾」という概念を提出し、「女性は結婚した後、夫家での地位が息子を産んでから変化する」ということを指摘している。中国の家族で男の子の早期教育は大体母親の責任であるから、母は、息子を育てることを通じて息子との感情を維持させ、息子が大人になると、彼女が自分の育てた男性が統治する家族における影響力を拡大できるようになる。しかし、「息子を通じて得た家族内地位を強化するため、母親は伝統的な忠孝観で息子を育てることが必要で、それで息子である男性中心の家族における統治地位が守られる」ということを示している (Margery Wolf 1972)。ジャッドは、既婚女性とその出

生家族「娘家」との関係に注目し、山東省の地域的には離れている三農村でのフィールドワークを行い、これまでの父系原理を強調した研究では把握できない、「インフォーマルな親族関係における慣行」を考察した (Judd, Ellen R. 1989)。特に「村内で結婚した女性とその「娘家」との紐帯には、系譜性の束縛や固定的な単位としての世帯の境界の外にある、非常に広範で活性化した関係がみられる。女性とその出生家族との権利と義務は、女性の一生の各段階で変化し、こうした関係は、中国農村における親族関係の重要な部分を構成している」と示している (朱愛嵐 2004)。しかし、女性と＜娘家＞との関係を考えるには、夫と＜娘家＞との関係の考察も、更に求められるところである。

また、聶莉莉は、遼寧省の一農村——劉堡における親族の変容を考察し、19世紀半ばまで、全て劉姓であったといわれるこの村に異姓が入ってきたのは、姻戚関係を頼っての移住によるものである。中国の親族組織の「分房」と「共祖」、及び「内外」「上下」「遠近」などについて、具体的にその実態を提示する。そして、「個人と個人、個人と集団、また個人からなる集団と集団の関係を基盤として」の基本原理は、「社会を構成する諸要素の中で最も変わりにくい部分」であるために、そこに焦点を当て、中華人民共和国解放以来の激しい変動がどのように現れたかを考察した。「親族の有り様は確かに中国社会の激しい変動と共に変わり、宗族の組織さえも維持できなくなったが、その基本原理は親族以外の人間関係に拡大し、人民公社及び共産党の基礎組織などに浸透し、さらに現在の農村の生活像にも伝統社会の構造原理の延長として解釈できる面も見られる」と指摘している (聶 1992)。また、時代の変遷につれ親族組織の変容の脈絡を提示した。

韓敏は、安徽省北部村落の研究を行い、「新中国成立前、女性は無条件的に夫と舅姑に従属していて、実家の経済、社会的地位、自分の能力などの要素により時々別の行動を用いる。そして、人々の生活の中で大きな位置を占める贈答慣行における姻戚関係」の重要性を指摘し、さらに姻戚関係が儀礼や経済活動に大きな意味を持つことを述べている (韓 2007)。

女性の各役割の地位変化についての研究は以下のように整理する。

王金鈴は、女性の各役割の地位変化について分析し、娘、妻、母としての農村女性の家族地位が他致性から自致性へ、不利から有利へ、低から高に変わっていく。母親世代の家族内地位はかなり低かったが、娘世代の家族内地位は少し高くなったが、妻の婚姻における地位は目に見えて向上していない。蔡沛婕は、嫁の初期の生活経験の中から、既婚女性が娘から嫁への役割転換の心理過程を分析し、この転換苦境に直面した現代女性が、自己調節して多元化した親族関係に適応していく対処スタイルを研究できると指摘している⁽⁴⁾。

孔海娥は、湖北省の燕山村でのフィールドワークに基づいて農村女性の生命役割が生命史の視角からどのように変化するかを分析し、今日の中国農村の新たな現状を示して

いる。そして、娘は婚姻儀礼を通じて「娘家」から「婆家」に来るが、それと共に「娘家」から学んだ「文化モデル」と夫家の「文化モデル」をある程度の「越空間操作」とすると指摘している。また、「二度母親」という概念を提出し、お婆さんは昔育児の補助的役割であった今日では主力になり、孫の「二度母親」として存在するが、この「二度母親」の役割は第1回の母親と比べるとかなり内容と責任が変わってきたことを述べている。孔の研究は一人の人生の各段階の役割については述べているが、社会の変化における各役割の変化については述べていない。また、フェミニズム理論など漢人女性への関心の高まりは、家族での女性の地位に関する数多くの研究からも窺える。たとえば、伊慶春と陳玉華は、台湾、天津、上海、香港の家族の変動を、女性の家族における地位から分析している。

以上の諸研究では、中国大陸の農村や、香港、台湾における研究であり、社会全体において、あるいは個人においても、家族・親類ネットワーク展開の契機としての姻戚関係の重要性を注目しており、父系出自の継続や家族展開に関わっている。しかし、中国の漁村あるいは海洋に関わる漢民族社会における姻戚関係の検討はあまりなかった。したがって、本章では、ある1人の人生を研究対象とした。調査地の漁村における家族と親族の構造及び姻戚関係の変化を考察した。彼女たちは伝統的な父系集団の拡大家族における親族関係の実践から、人民公社という過渡期を過ごし、現代の核家族への変遷という過程を経るが、家族及び姻戚関係の中における位置と役割がどう変化してきたのか、そして彼女たちが「娘家」から「婆家」への各種身分転換にどのような実践をしながら自身の生活空間と親族関係を構築してきたのかについて述べる。

第1節 漁村社会の変容における家族

1 解放前の伝統的な漁村社会における拡大家族

(1) 家族と親族

中国におけるある民族の家族と親族集団構造の特徴の1つは、家族と親族の複雑な名称体系である。家族と親族の呼称は特定の間関係の身分役割を表し、この呼称が社会文化あるいは特定の言語環境の中に人々の関係を反映している。人々は社会関係のネットワークを組み立て、1人1人がこのネットワークの中にある位置を占め、周りの人と相対的関係を構成し、時間と空間を異なると共に、この関係の内容も変化する。呼称はこの関係の変化を直接に表している。伝統的な拡大家族には親族が多く、その親族間の呼称も複雑であり、各地域にそれぞれの特徴がある。舟山群島の漁民間の呼称では、相対的な一致性があり、各地域において内部の差異もある。これは漢民族の伝統的な宗法

表 3-1 舟山群島における親族の呼称体系⁽⁵⁾

世代	直系	傍系 (+1)	傍系 (+2)
-3	阿太 (曾祖父、母)		
-2	父の父：阿爺 (祖父) 父の母：阿娘 (祖母) 母の父：外公 (外祖父) 母の母：外婆 (外祖母)		
-1	男：阿爹 (父親) 女：阿姆 (母親)	父の兄：阿伯 (伯父) 父の弟：大大 (叔父) 父の姐：姑媽 (姑母) 父の妹：阿都 (姑母) 母の兄弟：舅舅 (舅父) 母の姐：姨娘 (姨母) 母の妹：阿姨 (姨母)	
0	自分	年上男：阿哥 (哥哥) 年下男：阿弟 (弟弟) 年上女：阿姐 (姐姐) 年下女：阿妹 (妹妹)	父の兄弟の子 -年上男：堂阿哥 (堂哥) -年下男：堂阿弟 (堂弟) -年上女：堂阿姐 (堂姐) -年下女：堂阿妹 (堂妹) 父の姉妹の子 -年上男：表阿哥 (姑表哥) -年下男：表阿弟 (姑表弟) -年上女：表阿姐 (姑表姐) -年下女：表阿妹 (姑表妹) 母の兄弟の子 -年上男：表阿哥 (舅表哥) -年下男：表阿弟 (舅表弟) -年上女：表阿姐 (舅表姐) -年下女：表阿妹 (舅表妹) 母の姉妹の子 -年上男：表阿哥 (姨表哥) -年下男：表阿弟 (姨表弟) -年上女：表阿姐 (姨表姐) -年下女：表阿妹 (姨表妹)
1	男：小娃 (兒子) 女：小娘 (女兒)	兄弟の息子：阿侄 (侄子) 兄弟の娘：侄囡 (侄女) 姉妹の息子：外甥 (外甥) 姉妹の娘：外甥囡 (外甥女)	
2	息子の子供：孫囡 (孫子、孫女) 娘の子供：外孫囡 (外孫、外孫女)		

*括弧の中の呼称は一般漢民族の親族名称

観念の共同性を表しながら、漁民の呼称の独特な個性も見られる。以下、舟山群島の親族呼称と社会呼称により分析する。表 3-1 は舟山群島における家族と親族の名称体系であり、この表が血族により作られ、つまり、結婚する前の自分を中心に家族と親族の名称を現している。この親族名称体系を見ると、舟山群島の名称は中華民族の伝統的な宗法理念の尊長親幼という特徴が見られ、男系の社会の中で女性は他家から来る。他家へ行く存在なので、その祖先や子孫には「外」が付く名称が多い。また、表 3-1 の中に舟山方言親族名称の最も著しい特徴は、その呼称の前にほとんど“阿”を付けている。そして、家族の中で、子供を呼ぶ場合、名前以外に、その子供の順番として、阿大、阿二、阿小などによく使われている。

そして、もし「自分」が結婚すると、すなわち姻戚により、血族の配偶と配偶の血族というもう 1 つの姻戚呼称体系（表 3-2）があるが、こうした呼称は一般の漢民族の呼称と大体同じである。

表 3-2 舟山群島における姻戚の呼称体系

世代	直系（親族呼称）	傍系（+1）（姻戚呼称）
-1	夫の父：阿公（公公） 夫の母：婆婆（婆婆） 妻の父：丈人（岳父） 妻の母：丈姆娘（岳母）	父の兄の妻：嬢嬢（伯母） 父の弟の妻：阿嬢（叔母） 父の姉妹の夫：姑丈（姑父） 母の兄弟の妻：舅姆（舅母） 母の姉妹の夫：姨爹（姨父）
0	男：老公（丈夫） 女：老濃（妻子）	夫の兄：阿伯（大伯子） 夫の弟：阿宋（小叔子） 妻の兄：大舅子（内兄） 妻の弟：小舅子（内弟） 兄の妻：阿嫂（嫂子） 弟の妻：弟妹（弟妹） 姉の夫：姐夫（姐夫） 妹の夫：妹夫（妹夫）
1	息子の妻：媳婦 娘の夫：女婿	

以上の親族呼称と姻戚呼称から、舟山群島の家族・親族の構成が見えられ、特に一般漢民族の呼称と比べると、舟山地区での自分の位置づけがはっきりわかるようになる。

一方、舟山群島における社交呼称が特徴がある。一般的な社会関係の人々は親族がなくても「名前+相応親族呼称」というふうに呼ばれている。例えば海英嫂、海勇哥など、このような呼称は人々の関係が親族ではなくても親族のような親しい関係を表している。

（2）螞蟻島における解放前後の家族生活

中華人民共和国解放前、螞蟻島の漁民は全国の沿海各地の漁民と同じように、封建主

義、資本主義に抑圧され、漁業生産方式は遅れ、その暮らしは極めて貧困であった。そのとき、失業する漁工は80人（全島漁業労力の1/4を占めている）、乞食をする人18戸。漁村社会の一般的な家族構成は大きく、その成員は3世、4世と一緒に暮らすのが普通であった。このような「拡大家族」は、一般的に兄弟が多く、兄弟が結婚すると別々に居住するが、食事や農漁作業などは共同であった。家族内の経済権は家長が持ち、個人の給料はすべて家長が取り集め分配する。漁村の女性は船に乗れないという伝統的な禁忌のために、女性は漁業に携わることが出来なかった。その時代、男性は出漁する間の一切の家事、農業生産の担い手は女性であり、漁家女性の労働比重は非常に重かった。

例えば、Z姓のある家族では、祖先が鎮海から移住してきて、Z・DY氏までもう7世代になった。Z・DYが出生した1927年当時の家族人口は11人、その構成は図3-1のようであった。すなわち、祖父母、父母と子供3人（兄・姉と本人）及び父の兄2人と兄の妻と子供1人である。この11人で住んでいる家屋（図3-2）は、

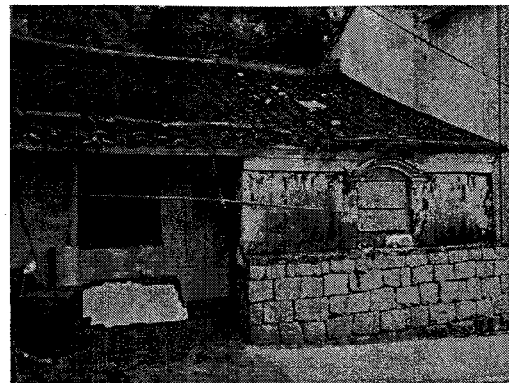


図3-2 Z・DYの家屋

Z・DYの阿太が自分で石を運搬して建築したのである。その時、Z・DYの祖父と父と2人の叔父は漁作業をしていき、一切の家事や育児と大部分の農作業は二人の嫁（Z・DYの母と阿嬭）に担われていた。特に、Z・DYの母は長男の嫁だから、家事の負担がもつ

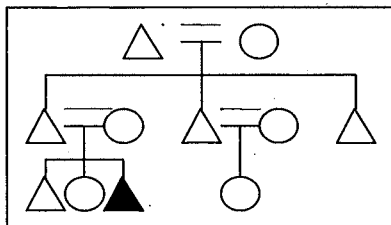


図3-1 Z・DY家の家族構成（1927年）

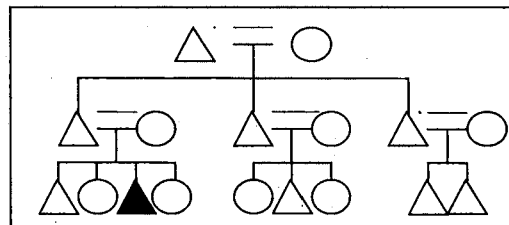


図3-3 Z・DY家の家族構成（1938年；▲：Z・DY）

と重かった。毎日朝早くから起き、家族全員の炊事・洗濯や農作業と、夜遅くまでの重労働であった。その反面、家族の経済権は祖母が持ち、お金を使う全ての場合は祖母からお金をもらうという状態であった。その時の漁家の生活はほとんどが貧乏であったから、家族全員の食費だけで、余剰お金が余りなかった。祖母も、長男が家に対しての貢献が大きいし、長男の娘も家事の全般をやっていることから、長男夫婦を大切にしていた。二人の嫁の仲はまあまあであったが、次男の娘は時々祖母の偏見に対して文句もあった。そして、だんだん家族人口が多くなったのでそろそろ分家を考えていたが、1938年に祖父の死亡（60～61歳）を契機に、Z・DYが12歳の時、父の兄弟3人が分家をすることにした。分家直前の家族人員は17人となっていた。当時、村内の家族人員は12

人～14人ぐらいが普通だったから、Z・DY 家は多い方であった。その17人の家族構成は図3-3の通りである。

分家の際には、男兄弟3人で家屋・土地・家財・道具類を均等に分割した。この時、祖母は長男であったZ・DYの父と家屋で同居することにした。他の2人の息子は村内での建物に住むことになった。3人兄弟は分家後もしばらく長男の家屋で、食事を一緒にしていたし、村のつきあいや対外的なことは長男のZ・DYの父の役割であった。こうした生活もだんだん個別化していくことになったが、祖母の死亡（1953年、72～73歳）と同時に各自が完全に独立するようになった。Z・DYは13歳から徒弟として張網ということを勉強し始め、20歳の時、兄と一緒に一艘の船を持ち、一人を雇って漁業をしていた。解放後、Z・DYは一般漁民の身分として互助組に入っていた。その後、父の死亡（1965年、63～64歳）の時、Z・DYが家屋を継承し、完全に独立した。

（3）漁業民主改革（漁区の土地改革）と家族

1951年10月、六横区から土地改革工作組が派遣され、螞蟻島に土地改革が実施された。土地改革は家族変動の1つの特徴ある時代と考えられてきた。例えば、1947年～1953年の6年間に、中国では分家による世帯数の激増と、その結果としての世帯規模の縮小が指摘されてきた⁽⁶⁾。螞蟻島もこの時期、土地改革における家族構成に変化を与えた影響が窺うことができる。

事例① 拡大家族の分家

L・GLは1946年結婚した。1951年当時の家族構成は、父母、兄家（夫婦と子供二人）、L・GL家（夫婦と子供二人）と妹の11人家族であった。当時、所有地は40畝あり、階級区分は一般漁民と規定された。土地改革で、土地は40畝から15畝に減少した。このとき、父母は労働力にカウントされていず、兄夫婦、L・GL夫婦と妹五人がこの家の労働力であった。1952年にこの家は分家の際には、L・GL夫婦は両親と一緒に暮らすため、土地10畝と家屋を分けて貰い分家した。

事例② 土地分配を有利にするため、息子の結婚を早める

L・YFは1950年当時、両親と四人の兄弟と二人の姉妹の八人家族であった。土地改革期には、漁工と規定され、12畝を分配された。この家では、土地の分配を多く受けるために、長男と次男の嫁を早く迎え入れたと言う。

事例①からは、豊かな拡大家族が土地改革によって小家族の漁民経営単位に再編されていく様子が分かる。一方、夫婦を核とする経営単位の形成が求められたのであろう。

事例②からは、土地を多く分配されるために、漁民がいかなる手段を考えたか知ることができる。

2 人民公社期における拡大家族から核家族への変化

(1) 人民公社における親族・姻戚

親族とは、宗族と姻戚の二つを意味している。土地改革以後、家族及び親族の間において、血縁関係より「革命的な同志」のほうが強調されている。人民公社の集団生産制度が設立した後、国家と集団の利益が強調され、血縁関係が作用していると、「小集団主義」「宗派主義」としてしばしば批判されることになった。また、宗族の人々の祖先の存在も否定され、つまり、もともと祖先が「陰間」で生きているという信仰は迷信として批判され、儀式の面でも、葬送儀礼が禁止された。1958年の大躍進運動において、「社会主義建設のために」という「平墓運動⁽⁷⁾」を行い、各村落の始祖の墓は次第に取り壊された。螞蟻島はこのとき全ての墓は大螞蟻島から小螞蟻島へ移動させ、これから、螞蟻島の「死んだ人と生きる人」が「分島居住」という居住形態が形成した。こうすると祖先の存在が否定され、親族の間が同じ祖先からいただいたものであるという観念も薄れた。特に、人々が人民公社における共産党・共産主義青年団・婦人会などの社会組織の成員になると、政治的・社会的な地位が上昇するから、人々は自分と組織の成員との関係を考えるようになり、いわゆる「社会主義人民公社拡大家族」に対する感情が厚くなり、親族の間は「私人」の感情が薄くなった。

その時、螞蟻島の人民公社は発展のために、お金を集める意見を提出し、全島の各戸が自家の火囱⁽⁸⁾、燭台、銅盆、金装飾品などすべての金属品を公社に供出した。例えば、W・LYの家はとても貧しく、義理の母が結婚した時残った銅盆でも出した。その時、螞蟻島全島民は合計9500元を集め、「火囱船」を買った。このようなことから、当時の人々はまったく「一心為公」（極めて公社の利益ために私心が無い）の気持ちを持ち、個人及び家族・親族の利益より公社の利益を優先させることを行わなければならなかった。

しかし、「中国の農村・漁村では家族を単位とした小農経済の歴史が長く、家族本位の伝統が根強く存在しており、分散していた漁家をいきなり集団化させると、社員たちは互いに同じ生産集団の成員としての協力関係を営むことにまだなれることができず、つい互いの利害が相反する」ように考えるようになった（聶 1992）。螞蟻島は二百年ぐらいずっと近海で漁作業をしていた。集団化の初期、漁場を拡大するため、各合作社は有限な漁場を奪い合い、もめごとが絶え間なく出てきた。また、遠洋漁業を発展するため、資金、労力、漁具、技術などは必要であるが、各合作社の条件は不平等なので、各社の産量と収入も大違いであった。条件が良い第一社の収入は、条件が悪い第四社の

収入より十倍以上多かった。第一社の船や網が多く、労働力不足から、多くの漁具が使えなかった。その反面、第四社は船や網が少ないために、労働力が余剰であった。

人民公社は合作社を再編して、すべての男女社員が労力、技術の状況に基づき、漁業隊と農業隊に編入した。そのような再編から、公社社員は表面的「平等」を実現し、人々は公社の「集団利益」に努力して、個人及び家族・親族の「私人利益」を一時的に忘れていた。実際に、このような「一切為公」の集団化制度の中にも、一部の幹部は職権を乱用し、家族及び親族のために私人利益を図っていた。

例えば、公社の生産労働は全部「工分」に基づいて分配するから、幹部の家族及び親族成員は仕事が軽く「工分」の高い労働に従事できる。例えば、L・GLの家族構成は図

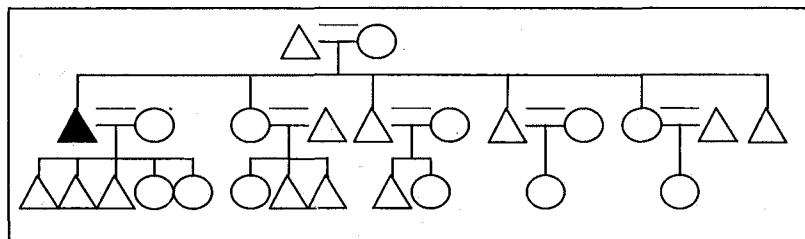


図 3-4 L・GL 家の家族構成 (1965 年▲: L・GL)

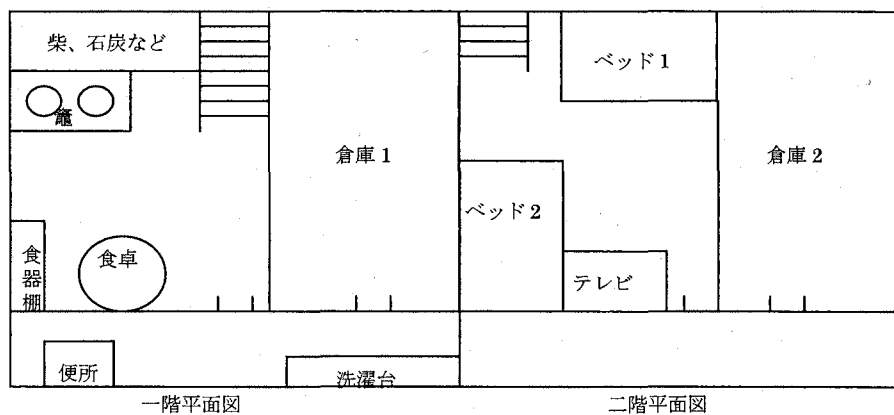


図 3-5 2012 年 L・GL の住宅 (1966 年建) 平面図

3-4に見られ、L・GLの三弟家と二妹は合作社一社に属し、L・GLの二弟家と大妹家は合作社三社に編入され、L・GL家と両親と四弟は一緒に家屋に暮らし、合作社四社の労働に参加していた。各合作社に属されていたL・GLの親族たちは、当時の収入状況も違っていた。L・GL家の状況は大妹家と比べると確かに貧しかった。このような矛盾は当時の生産発展を阻害したから、多数の社員は各合作社の合併を要求し、人民公社の成立を推進した。L・GLの大妹夫は生産大隊の隊長であり、L・GLの親族たちはこの姻戚関係のため、確かにいろいろな利点があった。

1966年にL・GL家は今でも住んでいる二階建の住宅を建築した。(図3-5)当時、L・GLの両親と四弟は倉庫1に住み、L・GL夫婦(図3-6)と5人の子供たちは二階で住んでいた。

また、人民公社は公共蓄積から、学校、病院、ホール、デパート、住居を建築した。住居の管理は生産大隊によって行われ、伝統の相続慣習は廃絶され、すべて大隊の幹部に配分されるから、幹部の親族も優先的に配分される。以上の分析から考えると、人民公社を設立する目的は、人々の家族・親族の私的な紐帯を断ち切るが、実際にその制度が内在的にもつ「公」と「私」の矛盾が目立ってきた。



図3-6 L・GL夫婦

(2) 人民公社期の核家族

①親子関係

人民公社時代には、拡大家族は解体しつつあり、核家族が普遍的な家族構造となっていた。例えば、前例のL・GLの息子たちは結婚すると、すぐ家をはなれ、自分の住宅を建築し、親からわずかな生活用品を贈与され、独立して生活して行った。これは伝統的な「分家」とは異なり、親のすべての財産を「均等相続」ではなく、親から一部の「贈与」だけである。それに対して、L・GLは結婚しても、ずっと両親と一緒に暮らしていたから、親からその家屋を継承し、兄より親に対する扶養という責任が重かった。

②恋愛・結婚

中国の伝統的な社会における婚姻は、完全に両親の意思によって決められ、ほとんどすべて「媒人」を介しての結婚であった。人民公社時代になると、「婚姻自由」という政策が強調され、自分の意思を持ち親の命令に反抗する若者が増えてきた。特に、人民公社の婦人委員会は、「婚姻自主」という婚姻法の宣伝と実行を促進し、若者の婚姻を反対する親に組織が介入し、必ず若者の望みどおりになるような、恋愛結婚や見合いのような方式は徐々に多くの人に認められるようになった。

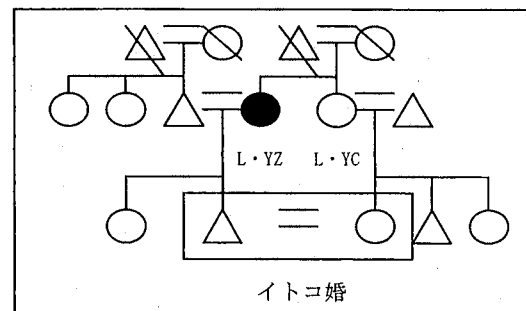


図3-7 1985年L・YZの家族構成

蟻島島の結婚伝統は、やはり島内婚が島民の第一選択であり、同姓の者の間の結婚はかまわないが、先祖が同じ同姓の者は結婚できない。イトコ婚は、父方イトコの間では絶対ないが、母方イトコは以前からあった。例えば、前述で言及したL・YZの息子はL・YZの妹L・YCの娘と結婚した(図3-7)。しかし、こうした事例が多くはなかった。L・YZもこのことを言った時、少し恥ずかしい顔を見せた。やはり、イトコ婚は確かいいことではないと思われる。

また、人民公社時期になると、女性社員は生産隊に編入され、男性と同じように「工分」という労働点数で働けるようになり、家族に見える「経済貢献」を果たし、女性の家族の中での経済地位が強くなり、夫婦間での勢力関係に影響をもたらした。

3 現代の漁村社会における核家族

(1) 現代家族の形態

20世紀80年代以降の改革開放時期になると、漁村社会における家族の形態もすこしずつ変わってきた。現在では息子が結婚すると独立するので拡大家族の形態は出現せず、夫婦と子供の核家族が圧倒的に多くなっている。また子供が結婚して世帯を分けたとしても、両親が高齢になると、息子夫婦と同居している。(佐々木衛 2012)

近年になると、漁獲量が減少し、漁民の生活にも大きな影響が出た。多くの漁村女性は起業し、特に「漁家楽」というレージャー漁業や水産品の養殖漁業という起業が盛んでいた。その結果、漁村の専業主婦は少なくなり、女性が家族における労働主体になると伴い、彼女らの家族内地位や役割が大きく変化し、漁家の収入構造が大きく変わり、夫婦関係も昔よりいっそう平等になった。

例えば、Z・HYは、1965年生まれの蟻島島の漁家女性であり、同郷の漁民の夫と結婚した。自分も漁家の出身だから、子供の頃から母親と一緒に家の労働によく従事した。夫と結婚してから、当然のように家事全般と労働を行った。結婚して最初の七年、舅と姑と一緒に暮らし、その後、自分の家を建て、舅と分家して、夫と共に独立して暮らしてきた。2000年から、夫は自家の船で出漁し、Z・HYは自分で“漁家楽”の仕事を起業して経営し始める。最近、“漁家楽”の経営は難しくなり、ちょうど造船所が開業してから、地元の人を募集するため、Z・HYは、“漁家楽”を休業し、造船所の管理者として働いている。彼女は、家族あるいは夫の従事にはなりたくなく、自分自身の手で労働に参加し、家の経済支配権を持ち、家のすべての大事や小事を取り仕切る立場となった。Z・HYは現代の漁村女性の代表だと考えられている。

(2) 子供中心主義⁹と老親扶養の後退

近年、漁民も子供の教育を重視するようになり、また、数年前、螞蟻島の学校は廃止された。漁民の子供が入学する適齢になると、一般的に、母と一緒に「沈家門⁽¹⁰⁾」の学校に入り勉強し、母は沈家門で出稼ぎしながら、子供の世話をする。その結果、今螞蟻島に住んでいる地元人の大多数は就学前児童と老人である。したがって、螞蟻島の老親扶養問題は非常に重視されている。例えば、前述で言及した L・GL 夫婦は 90 歳になったが、2 階の住宅で夫婦 2 人の暮らしをしている。子供たちと会う頻度は、螞蟻島に住んでいる 2 人の息子とは毎日 1 回で、島外に住んでいる 2 人の息子と 4 人の娘は半年に 1 回ぐらいである。実は、螞蟻島の 1/4 の老人は後岙村の「老年マンション」に住んでいる。「老年マンション」(図 3-8) は郷政府と造船所により建築され、2000 元の入居料金を支払い、一生涯居住することが出来る。さらに死亡時には入居料は返却



図 3-8 螞蟻島の「老年マンション」

される。老人マンションはシングルルームと間取りという 2 種類がある。しかし、このような「老人マンション」は、種々の理由から住みにくく、日々の寂しさより、老人にとって一家団欒の楽しみは一番重要な願望であろう。

第 2 節 漁家女が「娘家」から「婆家」へ：Y・AX の個人生活史

社会個体としての個人は具体的な社会空間と時間において暮らしているから、個人の生活史が人と社会との交流を生き生きとした体现できると思われる。この節では、Y・AX という普通の漁村女性の個人生活史を例として、彼女が各役割として、どうやって暮らして、適応して、実践していたのかという全過程を考察以下に述べてみる。

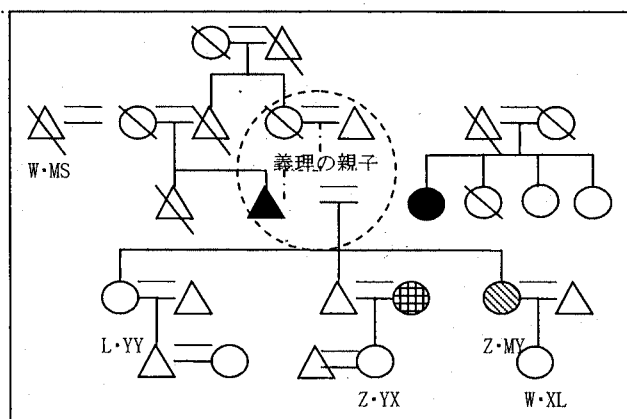


図 3-9 Z・LD 家の家族構成 (2010 年▲：Z・LD、●：Y・AX)

Y・AX (1944 年生) は、4 女の末女また遺児として、螞蟻島の漁民の家族で生まれた。同じく漁民家族の双子の弟として生まれた Z・LD (1937 年生) と結婚することになった。この家族の構成は図 3-9 のように表している。

この部分は、図3-10を展示させるように、Y・AXは娘(A)から嫁(B)になり、そして母親(C)から姑(D)への各役割を転換する動的過程により彼女の一生を見られる。しかし、Y・AXの各役割の分析は動的分析であるが、同じの役割が時代が変わると伴に何の変化をしたのかという静的比較分析でも必要があると考えられている。

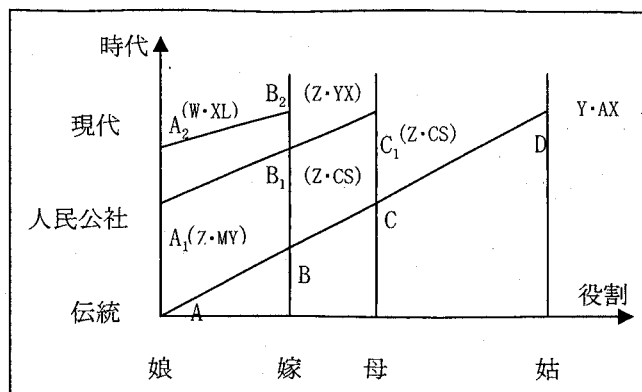


図3-10 Y・AXをめぐる分析図

したがって、Y・AXの娘Z・MY、嫁Z・CSと孫女Z・YXは、人民公社期と現代における相応的役割も分析する。具体的には、例えば、娘という役割は、伝統時代のY・AX(A)と人民公社期のZ・MY(A1)と現代のW・XL(A2)比較すれば、どのような変化したのかを分析する。同じように、嫁という役割は、人民公社時代初期のY・AX(B)と改革開放初期のZ・CS(B1)と今のZ・YX(B2)を比べると、何の変化したのかを分析する。また、母親という役割は、人民公社期のY・AX(C)と現代のZ・CS(C1)を比べると、どのような変化をしたのかというふうに述べられている。こうした動的分析と静的分析を融合して分析すれば、漁村社会の変容過程における女性の役割を全面的に展開できると考えられる。

1 娘として

Y・AXは中華人民共和国解放前の1944年生まれ、4人姉妹の末女である。Y・AXがまだ母親のお腹にいた時、父親がなくなった。この5人の家族は母と長女、次女に支えていった。家には男性がいなくて、女は船に乗れないので、母と長女は近海の漁民から漁獲物を受け取り、隣の桃花島で食糧に交換していた。次女の仕事は、毎日螞蟻島の山で柴を刈り、それを燃料にしてご飯を作り、生計を維持していた。

(1) 母と娘

伝統の漁家は、ほとんど男性の力に頼って暮らしているから、娘は息子より地位が低く、分家のとき実家の財産を継続する権利はなかった。解放前、螞蟻島の漁民はみんな同じように貧乏で苦しく暮らしをしていたから、分家をして、境遇を変えることができない。Y・AXの家は普通の漁民の家とは少し違い、5人がすべて女であるから、「重男軽女」という雰囲気がぜんぜん見えない。Y・AXの記憶によると、彼女が子供のとき「童養媳」は普遍であり、隣人もよく1人か2人の娘を「童養媳」にしたら、負担も軽くな

ると説得したが、母親はどちらの娘でも惜しまなくなかった。解放後、Y・AX が小学校を卒業したとき、長女と次女は結婚した。母親の扶養問題から、3 女は桃花島の男性を婿として迎えた。3 女の婿は家の主体的な労力になったが、彼の性格がよくなく、母親との口喧嘩が絶えず、数年後 3 女と一緒に桃花島へ帰った。

(2) 姉妹の間

Y・AX は初級中学 1 年生としての 16 歳（1960 年）の時、国家の政策により、すべての学生は強制的に農業に従事しなければならなかった。Y・AX は末女なので、3 人の姉からいろいろ世話になった。3 人の姉は結婚しても、子供を連れて、実家に帰り、母や姉妹との会話を楽しんだ。姉は、夫家での生活や姑との付き合いも母親に相談し、自分が嫁としての経験もよく Y・AX に伝授した。そして、Y・AX が成年になるとともに、姉たちも Y・AX のために良い伴侶を気にとめておいた。

2 娘から嫁へ

人民公社時期、漁村では 2 人の年齢をプラスして 48 を上回ったら結婚することができるという政策があった。Y・AX は 22 歳（1966 年）の時、媒人を紹介され、漁民家族の双子の弟として生まれた 29 歳の Z・LD と結婚することになった。その時、人民公社は「勤儉節約」と提唱し、いわゆる「不買新衣服不買靴、不買毛糸不買綿、お金を集め、人民公社に寄付」のため、贈り物や嫁入り道具はぜんぜんなく、婚礼と結婚披露宴も行わなかった。

(1) 結婚後の初期

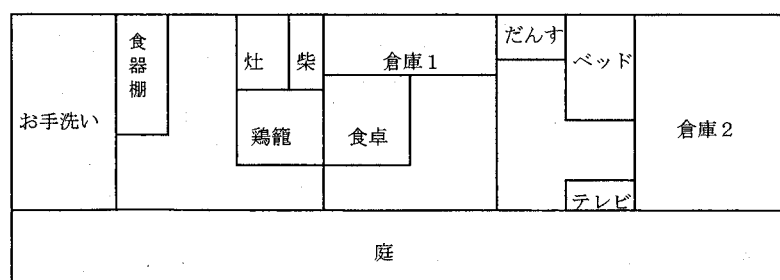


図 3-11 2012 年 Y・AX の家の構成図

Z・LD の家は元々双子があり、父が Z・LD 3 歳の時なくなったから、Z・LD は父の姉の家に養子として育てられ、双子の兄は母親と一緒に暮らしていた。しかし、母親は目がよくなかったせいで、その兄が 8 歳の時病気でなくなった。その後、母親は再婚しても、子供を生まなかった。Y・AX は Z・LD と新婚のとき、家は 1 つの部屋しかなかった

ので、夫婦が独立して暮らしていた。そして、結婚一年後（1967 年）長男が生まれ、結婚二年後（1968 年）次男が生まれ、結婚 5 年後（1971 年）娘が生まれた。結婚 8 年後（1974 年）、3 部屋の間取りの家を新築した（図 3-11、3-12、3-13）。

Z・LD は母親と継父を自分の家に迎えて、Y・AX の母親も一人暮らしのため、Y・AX と一緒に生活するようになった。図 3-11 のように、当時、Z・LD の母親と継父は左の部屋（倉庫 1 の部屋）に住み、Y・AX 夫婦と娘は真ん中の部屋（ベッドの部屋）に住み、2 人の息子と Y・AX の母親と右の部屋（倉庫 2 の部屋）に住んでいた。姑は目がよくないから、一切の家事は

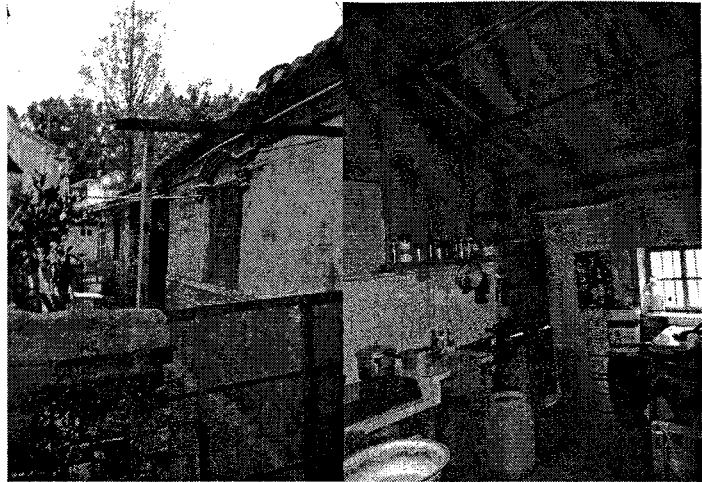


図 3-12 Y・AX 家の外観

図 3-13 Y・AX 家の内部

Y・AX が担っていた。Z・LD は、酒・煙草などの嗜好品は好まず、温和な性格である。さらに、家の一切の事を先に母親の意見を求めてから、再び Y・AX と相談して決定する。

（2）嫁の実家とのつながり

Y・AX は、姑と母親と一緒に暮らすから、彼女にとって、「娘家」と「婆家」は重ねていた。一般的に、娘は嫁になると実家とのつながりは主に母と娘との互いに名残惜しむ感情の継続と思われる。Y・AX は結婚しても、母親と一緒に暮らしていたから、どんなに困ることがあっても、すぐ母親と相談でき、ある程度他の人より幸福と思っていた。一方、3 人の姉も時々母親に訪れてきて、Y・AX の家は姉たちにも実家に当たり、姉妹の間の交流もなかなか頻繁であった。

3 母として

（1）家族関係の変化

父系社会における女性は、母になり、特に息子が生まれると夫家での地位が確立できるようになると思われる。伝統社会に、女性の役割は主に家族に集中し、育児は彼女の唯一大きな責任である。それに子供の性別と数は家族での地位と密接に関連しているから、多くの女性はたくさん子供を出産したいと考えている。解放後、女性の地位は全体的に高くなっているが、母になるのは女性が家での地位を獲得するのに最も重要なこと

である。女性にとって、子供の誕生は自分が夫家での暮らしが安定すると共に、彼女にとっての親疎関係を深くすることを意味する。

Y・AXの3人の子供はすべて人民公社時代で生まれた。その時、螞蟻島の各項の事業は発展し始めるところであるから、社員の労働力は極めて大きいものであった。当時、螞蟻島は漁業生産隊が5つがあり（長沙塘1隊、後岙2隊、大興岙3隊、蘭田岙4隊、穿山岙5隊）、農業隊の精農隊（農作物を植え）と半農隊（山でサツマイモを植え、魚を加工）が含まれている。Y・AXは精農隊の社員であるが、この2つの農業隊は半年ごとには1回交代する。そして、毎年6月～7月の20日ぐらいはクラゲの漁期になると、農業隊の全員が農作業をやめ、クラゲ加工の手伝いにいった。当時、人民公社は「工分」により分配し、農業隊の女性は毎日6.5工分、毎月200工分が16元にあたる。Y・AXの労働力は8人家族の主体的な収入源となり、Z・LDもだんだん家の重要な事を決める時、Y・AXと相談して決定するようになった。

子供たちはすべてZ・LDよりY・AXに従っていた。なぜかと言うと、子供たちの飲食や、衣服の準備は全部母親に担い、何か困ることがあったら、いつも母親と相談していた。

（2）家の付き合い

人民公社時期まで、漁民の家族はまだ伝統の父系社会の特徴を持ち、男性は戸籍の「戸主」として家族の対外的な代表であるが、実際の家族生活には、親戚や近隣の人々との付き合いは女性の「家事」の一部分で担っている。例えば、正月や節句のたびごとに親戚を訪問や、親戚や近隣の人生儀礼への列席等は、ほとんど女性の責任である。したがって、家族の社会関係のネットワークの状態と範囲はある程度女性の能力に関わっている。

①舅と姑の義務

Y・AXと舅・姑との関係は基本的に扶養する関係。Z・LDは親孝行をし、母と継父を迎えてきて扶養していた。Y・AXは舅と姑をよく尊敬し、2人の飲食、衣服、病気の世話など一切の日常的な生活をよく世話をした。したがって、姑はY・AXに対してとても満足し、Y・AXは夫とけんかするとき、姑はY・AXの側に立って息子を批判していた。

②近隣との関係

1980年から、Y・AXは、後岙村の婦女主任になり、1985年から後岙村の会計、計画生育、社会の事務、衛生の仕事も兼任していた。当時婦女主任の作業量は大隊の書記よ

りもっと重かった。1982 年人民公社の解散後、漁民は人民公社のものはすべて奪い取った。当時、労力により分配し、6 人の女=1 人の男（もともと毎日男性は 18 工分、女性は 6 工分により、3 人の女=1 人の男、女性の地位が低いから）。また、女性は絶対に主人の働いているところで労働すると規定していたから、Y・AX も Z・LD が働いていた鑄製鋼所（船の小さい部品を生産し、たとえばねじ、くぎなど）での労働をしていた。

Y・AX は以上の広い範囲で労働に参加する結果として、彼女は後岙村での影響力がとても大きかった。例えば、1987 年、修路チームを創立し、Y・AX と大隊の書記 2 人が率先し、石で道路を舗装した。毎日 10 人の女は石板を背負い、義務的に道路を舗装し、順番に 1 人 2 日間として、そのすべての人は Y・AX の影響力により探してきたのである。

一方、近隣の女性たちの間は互いに日常的な手伝いは普通のことであり、また更に実質的な経済は互いに助け合う段階までも広げた。例えば、Y・AX は病気で手術をしていたとき、100 元が足りなく、近隣のみんなは協力して Y・AX を助けた。

4 母から姑へ

（1）家族生活の頂点段階

Y・AX は息子が結婚する前、家での一切のことに決定権をもち、例えば、子供の婚姻の決まり、家事や労作の分業の手配、家族の器物の買入なども含まれていた。また、父と子が疎遠になること、息子達の間で緊迫した関係などについて、母親としてすべて緩和させてきた。しかし、息子が結婚したら、母親のこの家での権力も衰退へ行く。

螞蟻島の伝統は、息子が結婚したら、自分の家を建築して自然に分家することになる。Y・AX の長男は中学校を卒業した 17 歳、自分で金を儲けた後、外に自分の家を建築した。そして 23 歳（1990 年）の時、郷の副書記と婦女主任の娘 L・YY（23 歳）と結婚した。長男の婚姻も Y・AX が媒人に頼り紹介してもらった。

次男も中学校を卒業した 16 歳、自分で金を儲けた後、外に自分の家を建築した。そして、24 歳（1992 年）の時、21 歳の Z・CS と結婚した。その年、21 歳の娘も結婚した。

（2）変容する社会における娘

Y・AX の娘 Z・MY は人民公社時代の 1971 年生まれ、家の最後の子供なので、2 人の兄よりも寵愛されていた。また、Y・AX の子供時代より、Z・MY の子供のとき、漁民の生活はずいぶん改善してきた。Z・MY は中学校を卒業するまで、あまり衣食についての問題を心配することがなかった。そして、Y・AX に紹介された婚姻に対して、Z・MY は自由恋愛で結婚した。漁村の女性は Z・MY の学生時代に、男性と同様の教育機会を受けたが、高等学校へ行く女性は珍しい。なぜかという、女性はやはり早く結婚しないと、

同じ年齢の良い男性を見つけにくくなっていると思われるのである。

数年前、螞蟻島の学校が廃止されたせいで、Z・MY は娘 W・XL を付き合っ沈家門の中学校で勉強した。しかし、その時期、Z・MY の夫は螞蟻島に不倫関係のせいで、Z・MY と離婚してしまった。今 W・XL は杭州の大学で勉強しているので、Z・MY は沈家門で出稼ぎをして1人暮らしをしている。Y・AX はあまり娘に経済的援助をしない。一般的に結婚後、娘は生家から経済的援助をもらうと、いつも嫁が不満をもたらすから、Y・AX 毎回 Z・MY が螞蟻島へ戻る場合、嫁を避けて娘に何百元をあげる。

W・XL は Z・MY より高い教育を受け、大学を卒業したら、杭州や寧波で働く予定である。もちろん、結婚も自由恋愛で、就職地で定住するつもりで、螞蟻島へ戻らないと思われる。実は現代の漁村でも「一人っ子」政策を実施してから、漁民の子供は、男・女にかかわらず、大学に入学できると、両親は必ずできるだけ子供の就学をサポートする。漁民は自分の生活が苦しいから、あまり自分の子供を漁民にはさせたくないと思っている。

Z・MY は人民公社時代の娘として Y・AX の娘時代より、就職の機会が増加し、もっと自分の意思で結婚するが、あまり多くの高等教育を受けることを進めなかった。しかし、現代の娘としての W・XL は、自分の意思で多くの高等教育を受け、就職し、そして、自分の好きなところで定住して結婚するようになる。一方、親と娘のあり方も変化をもたらしてきた。伝統的には、親の老後の扶養は、息子によってなされるという仕組みはこれまで強固であり、それは漢民族の男子均分相続の理念に基づくものであった。しかし、核家族化によって現代女性の生活は変化し、娘に対する親の期待はその結婚後においても持続する。また、「一人っ子」政策を実施してから、親の老後の扶養に対する義務は、息子と娘との差異は減少し、財産分与の問題も平等になってきた。

(3) 変容する社会における嫁

1980 年後、漁民の生活は改善すると共に、通過儀礼の婚礼が重視され、伝統の婚礼式を伝承し発展してきた。長男の婚礼は当時の代表的な民俗により行っていた。結婚の1年後長男に息子が生まれた。その孫が1歳の時、長男夫婦は桃花島で働いて始めた。その時から Y・AX は孫を8歳まで世話をし、毎週末嫁が帰っていた。忙しい場合、Y・AX の姉も手伝ってきた。この場合、長男の嫁 L・YY は自分の子供に対して、母親という役割をあまり行わなかった。それに対して、Y・AX は婆であったが、実際に二度の母親という役割を行った。この結果、いままでも、孫と Y・AX との関係は、自分の母親 L・YY より、もっと親しいと言われた。

長男と同様に、次男も結婚1年後も娘が生まれた。この孫女は6歳の時、次男夫婦が螞蟻島でレストランを開店したため、Y・AX も孫女を6歳から12歳まで世話をした。今は、孫女は家を出て、沈家門の美容院で働いている。Y・AX は毎日次男の店で手伝っ

ている。次男の嫁 Z・CS は、姑と同じのところに住むから、長男の嫁 L・YY より、姑との仲がよく、もちろん姑からの手伝いやお世話も多くかった。

長男の嫁と次男の嫁は、2 人とも結婚してからずっと夫婦で独立して暮らしている。したがって、Y・AX と比べるともっと早く家の女主人と言う役割を体験した。

現代になると、漁業資源の衰退で、漁民の子供は漁村に暮らすのが極めて少なくなる。Y・AX の孫女 Z・YX は高等学校卒業後、沈家門の美容院に出稼ぎして、当地で自由恋愛をして結婚した。Z・YX の姑は桃花島に住んでいるから、正月や祝日に、夫と一緒に婚家に行くなど必要以外は、あまり螞蟻島へもどらない。

自分の母親 Z・CS と祖母 Y・AX との親密的な関係と比べると、Z・YX は姑と同居し生活をしていないため、姑との関係が必然的に希薄になった。実は、Z・YX と同じように、漁家の青年たちはほとんど生家と婚家を離れ、独立的に暮らしている。1 年中、姑と嫁は会う時間が少ないから、2 人の関係は希薄になり、形式的な関係になる。一方、現代の家庭の中で、嫁が家庭の経済を管理するので、姑の扶養を決める。もし姑は嫁の子育てを手伝い、嫁は家庭の経済面のため労働に集中すると、姑の老後の扶養という義務も果たすようになる。伝統の姑は嫁に対する教導という関係は弱くなり、姑と嫁との関係はお互いに世話する相互扶助の関係に変化して来た。

(4) 変容する社会における母

Y・AX は 2 人の息子と 1 人の娘に対してできるだけ平等に接したが、それでも、多かれ少なかれ違いがある。例えば、長男は結婚した 2 年後に螞蟻島を出て、桃花島に出稼ぎにしていっただので、Y・AX は孫の養育を手伝った。次男はずっと螞蟻島に住んでいるから、日常的生活や、店の運営とか、孫の養育をすることはいうまでもなく、今でも Y・AX は毎日次男の店で手伝っている (図 3-14)。Y・AX は、娘が離婚してから、内緒で経済的な援助をしている。

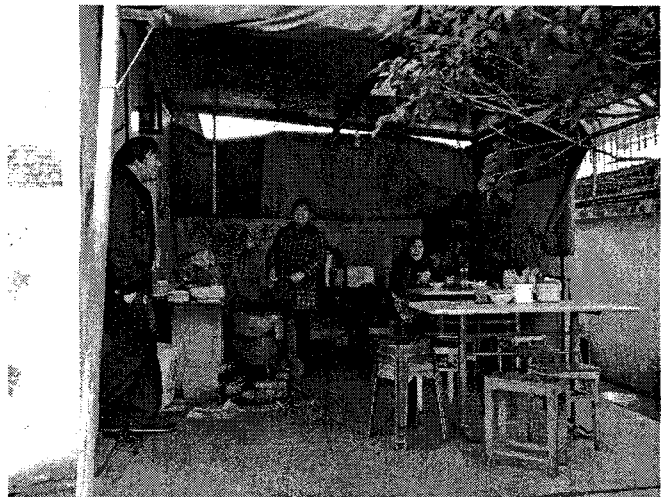


図 3-14 Y・AX と次男夫婦

しかし、「一人っ子」政策を実施してからは、漁村の家族は大家族から核家族へと変化すると、親子の関係にも変化が見える。次男の嫁 Z・CS は、ただ 1 人の娘 Z・YX がいるため、自分自身の豊富な経験とその人間性を娘に伝授し、それが娘の教育に有効であると考えたためでもあった。一方、Z・YX は自分で沈家門へ出稼ぎを行っている。当地の

生活環境と蟻島環境の違いがあり、さらに、若年層と自分達では価値観も大きく違う。Z・YXは結婚後、夫婦で独立した生活のため、姑や自分の母親の経験からのアドバイスはあまり必要ではなく、重要な決定事項は、夫婦または自分自身で決めていた。

以上、Y・AXの個人生活史から、伝統的な漁家の思想が将来的に婚家の生活に影響していることが伺える。Y・AXは娘として娘家から習得した人間関係に対する処理能力が彼女の将来における生活の主要な処世術になった。そして、結婚後、嫁として婚家における姑と付き合っていく過程の中で、いくつかの具体的な状況に彼女も、自分の役割に似合う新たな行動様式を構築してきた。そして、母になると、娘と交流する場合、この調整した行動様式を娘と分かち合っていた。息子が結婚後、時代は変化するとともに、姑として嫁との付き合いは自分の嫁の時代とずいぶん変わったから、新時代に適應するために自分の思想や行動を調整してきた。今、孫たちも結婚したから、Y・AXはだんだん自分が扶養される生活に慣れている。

小括

以上、舟山群島の漁村社会の伝統的慣習にみられる拡大家族における家族と親族と、人民公社時代を経た拡大家族から核家族へ転換過程の中の家族と姻戚関係と、現代漁村における核家族を中心にする蟻島の家族と親族についての状況を考察してきた。また、漁村女性の視点から、舟山群島の漁村社会の変容における家族、親族と姻戚関係の様態を考察してきた。さらに1人の漁村女性の個人生活史から、漁民家族や親族の内部の人間関係と人々の付き合う態度を概観し言及した。

(1) 「娘家」は女性の出生集団、つまり女性の父母と兄弟を含んでいる家族に指し、「婆家」は女性の婚入した集団、あるいは女性の夫の父母と兄弟の家族に指す。

(2) 「the uterine family」とは、母と子供で組まれる家族ということ。この家族の中で、母と子供は感情紐帯で密接に結んで、息子が母の家族利益の代言人であり、母が息子を通じて家族決定を干渉し、そのために、母が曲がり道の方法で自分の家族における地位を確固し、さらに男性中心の家族の変容を達成した。

(3) 「women community」とは、女性が夫家の村に婚入した後、できるだけ村の「女性組み」に参加し、彼女らと友好的な女性集団を形成するということ。「women community」の設立は、女性の家族紛争を起こる時隣人の感情や世論のサポートをもらえ、自分の社会地位も維持させ、これが女性の結婚した後の実践戦略である。

(4) http://readopacl.ncl.edu.tw/nclserialFront/search/ref_list.jsp?la=ch&id=A95037052

(5) 徐波、『舟山方言与東海文化』、中国社会科学出版社、2004

(6) 辻康吾、加藤千洋編『原典中国現代史』(第4巻、1995年) pp. 113~114

(7) 1950年代中国各地で“平墓田を返す”という政策を実施し、“平墓”と引き換え、元葬祭用土地の調整を農業用地として復耕にした。

(8) 伝統的な火にあたって暖まる用具。

(9) 文末注 子供中心主義

(10) 蟻島から近い鎮である。

第4章 漁村人生儀礼からみる女性の家族帰属意識の変化

はじめに 人生儀礼についての先行研究のまとめ

どのようなタイプの社会においても、個々人の人生には順に年齢の階段を経ていくことと、ある仕事から別の仕事への移行がある。ある集団から他の集団へ、またあるステータスから次のステータスへ、次から次へとなぜ移っていかなければならないのかということは、「生きる」という事実そのものから来るのである。つまり、ある個人はこの世に誕生して、「揺りかごから墓場まで」というように一生を送り、その間に何度か節目が作られる。人生の4つの大事である「誕生、成人、結婚、そして死を経る過程で、終わりがすなわち初めとなるような階段からなっている」のである（福田 2009 : 69）。これらの区切りの1つ1つについて儀式が存在するが、その目的とすることは同じである。つまり、個人をある特定のステータスから別の、やはり特定のステータスへと通過させることに目的がある。「通過儀礼は分離儀礼、過渡儀礼、および統合儀礼という3つの下位分類があり、分離儀礼は葬式の際によくみられ、統合儀礼は結婚式によくみられ、過渡儀礼はたとえば妊娠期間や婚約期間の儀礼、加入礼などにおいて重要な役割を占める」ことがよくある（アルノルト・ファン・ヘネップ 1977 : 3）。これらの儀礼は本人が所属する家や村落などの諸集団、あるいは家族や親族によって、その構成員がもっとも大きく変化する機会である。「通過儀礼を行う集団と個人は、相互受容として機能し、集団は共通の儀礼を行うものを、同じ信念のもとに連なるものと見做し、集団構成員として受容する」という（八木 2001）。

これまでの人生儀礼に関する研究は、主に特定の民族集団がある時期に行う儀礼について、その儀礼の流れを述べ、今までの儀礼の内容が昔に比べてどのように変化したかなどを分析するのが主であった。例えば、婚姻儀礼の研究において、伊賀上菜穂は、「帝政末期のロシア農民の婚姻儀礼について、狭い地域に限定し、経済的・社会的・文化的背景において、参加親族のすべての言葉と儀礼行為」を分析した（伊賀上 2002 : 179-212）が、婚姻儀礼による嫁の家族意識には及ばなかった。小坂みゆきは、中国朝鮮族における本来の農村社会の特徴的な現象を把握し、中国での急激な社会変化を経て、「近年家族の中に韓国等の外国への出稼ぎ者のいない家族はないと言っても過言ではない」（小坂 2011 : 51-69）という背景において、婚姻儀礼の動態的な変化を分析したが、嫁の家族帰属意識はどのように出生家族から婚入家族へ移動するのかには論じていない。また、塩谷ももは、ジャワにおける共同体と儀礼を考察対象とし、「イスラーム意識の高まり等の影響を受け、儀礼変化の中でジャワの共同性を支えている」ものを明らかにし、隣人関係に及ぼす影響や、儀礼で料理準備を担当する女性の役割も分析した（塩田 2006）が、隣人や女性自身の儀礼による家族帰属意識については分析していない。藤川美代子は、「1940年代から現在まで、中国の福建省における水上居民の葬送儀礼の変遷」を明らかにし、特に連家船漁民と農民の葬送儀礼の差異を分析した（藤川 2010 : 313-339）。これに対して、昔からずっと陸地

に住んでいる舟山群島の漁民たちと、水上居民や農民の葬送儀礼との差異について、本論で明らかにしたい。

一方、人々の帰属意識、あるいはエスニシティについては、大体特定地域の人々が共通の文化を持ち、外部に対して誇示する主体意識、つまり民族レベルの面で分析されている。樊秀丽は、葬送儀礼と代々の祖先たちの魂が住まう世界へと送るために唱えられる経典指路経を研究する中で、「大凉山彝族の人々における帰属集団意識形成の方法の特色、媒体、射程」を明らかにした（樊 2003）。この帰属集団意識について、本論では樊の研究方法を参考にし、儀礼による個人の家族帰属意識を明らかにしたい。長沼さやかは、「中国南部の珠江デルタにおける水上居民とは、土地にしばられず、家族単位で移動をくり返していた人々であり、つねに社会の「周縁」におかれた存在であった。そのような水上居民が、宗族の人々、すなわち陸上漢族との関係性の中でいかなるエスニシティを形成し、それが今日までどのように変容してきた」のかについて考察した（長沼 2010）。長沼の水上居民の民族識別に対して、舟山群島の漁民にとっては、この民族識別の問題がまったく存在しない。

家族帰属意識について、植野弘子は、「台湾における社会的活動・儀礼的行為にみられる姻戚関係の機能と観念」を考察し、特に嫁の「家族帰属意識」について「若い夫婦世代が大家族ではなく自身の世帯＝＜房＞を独立させそれに帰属する様態が、男方の大家族・女方の実家それぞれの影響」と合わせて述べられている（植野 2000：211-277）。また、婚姻を契機として所属集団を変更する女性の一生にわたる家族との関係、変化する家族関係の有様を示した。また、「継承・相続の権利義務から除外されてきた娘の役割」の変化についても明らかにした（植野弘子 2011：526-551）]が、人生儀礼により嫁の家族帰属意識がどのように変化してきたのかについては検討していない。一方、高江洲洋子は、女性から見る沖縄の父系出自原理と世代を逆行する＜出自＞原理に分けて考え、女性は様々な祭祀を行い、通過儀礼を経ることによって子孫としての存在から祖先としての存在へと移行して行くと指摘した。高江洲は、「男子の出産によって得た〈祖先となる資格〉は女性 ego の死を契機として顕現する。女性が生前保持していた、出生による成果のハラ（親族集団）の成員権は死によって消滅する」と、契機として死をより強調した帰属変化を論じている〔高江洲 1992〕。本論は、高江洲の指摘と似ている部分があるが、強調したい趣旨が異なっている。高江洲は、女性のハラ帰属が結婚・出産・死という、いくつかの重要なポイントを経ることによって変化すると強調している。本論は舟山群島の漁村において、女性が人生儀礼を経ることにより婚出家族から婚入家族へ移動し、さらに夫家の構成員から祖先としての存在へと移行する過程により、女性自身の主体意識としてどの家族に所属するのか、つまり、女性の主体としての帰属意識を強調している。

以上の諸研究により、本章では、舟山群島新区の漁村における人生儀礼とそれからみる女性の家族帰属意識がどのようなものであるか、現在の人生儀礼は伝統的な儀礼と比べてどのように変化してきたのか、さらに人生儀礼の変化は女性の家族帰属意識にどのような影響をもたらして来たのかについて明らかにしてみたい。

ところで、本論で検討する中国の家族とは、日本の家という概念とは違い、大家族と小家族の総称であり、大家族とは日本語の拡大家族を、小家族とは日本語の核家族を指す。女性の家族帰属意識という概念とは、女性自身が主体として家族集団に帰属していると感じることである。しかし、女性は婚出家族集団（実家）から、結婚儀礼によって、婚入家族集団（夫家）に所属すると、さらに誕生儀礼と葬送儀礼によってこの身分帰属を再確認する過程が、女性の人生にとって極めて重要な意味を持つ。また、本論において、女性は自分が伝統的な大家族に属するという意識であったが、家族の規模が大家族から小家族へ変化するとともに、現代の小家族の一員であるという意識になったという変化過程をみることができた。その中でも、漁村の漢民族は一般の漢民族と共通の点と相違の点を明確に表している。

今までの人生儀礼に関する研究の流れはほとんど人の成長過程により、誕生儀礼から始め、結婚儀礼をそして、葬送儀礼で終わるように書かれていたが、本論は、女性の家族帰属意識という視点から、まず結婚儀礼について考察することにした。

第1節 婚姻儀礼

結婚は主に家族を形成することによって象徴され、結婚による社会的身分の変化の中でも特に重要である。「結婚は新郎新婦の少なくとも一方にとっては、家族・クラン・部落そして部族を変えることを意味するからである。そして、時には新婚の夫婦が新しい家に住むことさえもあるのであり、子の住居の変更が儀式の中で表現される際はいつも、空間的通過を第一義とした分離儀礼によって明示される。さらに、婚姻儀礼には分離儀礼と過渡儀礼とがあり、新しい環境に対する予備的統合儀礼あるいは中間期を独立の環境がある」という（アルノルト・ファン・ヘネップ 1977: 100）。

昔、舟山地区の人々は結婚すると、必ず伝統的な一連の婚姻儀礼を行っていた。結婚は男女の一生において大事なので、非常に重視され、その形式が多様で、内容が豊富、流れも繁雑であった。その主な目的は、男女が結婚後、家族が平穏に、発展し、子孫が繁栄することであった。

大陸内地の婚姻形態と比べると、舟山群島にもある程度すべて存在するが、海島の特色もあり、早婚、冥婚⁽¹⁾、婿入り婚などが海島で顕著に表れている。例えば、童養媳や指腹婚⁽²⁾は他の地方でも見られるが、海島では、一般的に、子供たちは六歳になると、双方の父母が彼らたちの縁談を決め、女14歳及び男16歳までに婚約しないと、恥ずべきことと考えられ、これは大陸内地よりもかなり早い（金濤 2012: 318-325）。

五四運動以降、伝統的な繁雑な婚俗は変わりつつあるが、新婦は花轎に乗り、結婚式に天と地を跪いて礼拝する儀礼が残っていた。螞蟻島では、中華人民共和国解放前の伝統社会における婚姻は、ほとんどすべて「媒人（仲人の意味）」を介しての結婚であり、完全に両親の命令によって決められ、本人の意思は尊重されなかった。螞蟻島の結婚伝統は、やはり島内婚が島民の第一選択であり、同姓の者の間の結婚はかまわないが、先祖が同じ同姓の者は結婚できない。中華人民共和国解放後、本人が相手

をみるが多くなり、『婚姻法』により、男女が自分の意思で自由選択によって結婚できるようになり、結婚式も簡略化され、キャンディを食べたり、宴席を何卓か設けて、親友や家族団欒で祝うだけで十分であった。人民公社時代になると、「婚姻自由」という政策が強調され、自分の意思を持ち、親の命令に反抗する若者が増えてきた。特に、人民公社の婦女委員会は、「婚姻自主」という婚姻法の宣伝と実行を促進し、若者の婚姻に反対する親に介入し、結局必ず若者の望みどおりになり、恋愛結婚と見合い方式は次第に多くの人に認められるようになった。図 4-1 のように、社員はたった 1 本のてんびん棒を嫁入り道具として娘に贈り、勤儉して金持ちになるよう励ましていた。1980 年代後、人々の生活水準の向上とともに、高い結納や、宴席を派手にとり行うという社会の風潮が起きていた。漁村には、再び伝統的な婚俗が蘇ってきた。



図 4-1 嫁入り道具：てんびん棒
(資料：『中国普陀・百年漁港』により)

1 伝統的な婚姻儀礼

中国の伝統的な婚姻儀礼は、古代周朝までにすでに完成していた。『儀礼・士昏礼』によると、「婚有六礼」という、「六礼」は「問名、訂盟、納采、納幣、請期、親迎」を指す。近代の伝統的な婚姻儀礼は大体「六礼」の六段階から発展してきた。鈴木清一郎は、台湾の六礼を以下のように述べている。

「問名」は花婿・花嫁の「八字」の交換であり、2 人の相性を占う。次に「訂盟」、これは俗には「送定」「小聘」といい、結婚の約束のために物を送るものである。その後、「納采」（あるいは「完聘」「大聘」）においては、結納金を全て渡す。さらに「納幣」といわれる婿方から嫁方への贈り物をして、嫁方からは嫁入り道具などを贈ることがかつては行われていたが、「納采」あるいは嫁入りの際に、「納幣」を合わせて行うようになっている。次の「請期」は、結婚の期日を嫁方に通知するものであり、最後の「親迎」は本来、花婿自身が轎に乗って花嫁を迎えに行くものであるが、こうしたことをなすものは大変少ない（鈴木 1934：148-168）。

蟻蟻島における伝統的な婚姻儀礼は、鈴木所述べる六礼により近いかたちで婚姻過程を行う。昔、結婚の話は、ほとんど親族関係者や専門の仲人＜媒婆：モエポウ＞（女性）により行われた。まず 2 人の「庚貼⁽³⁾：ゴンティエ」を交換し、相性を占ってから見合いへと進み、「問名」にあたる＜提親＞を行う。双方の合意がなされれば、「訂

盟」「納采」「納幣」「請期」にあたる<定親：ティンチン>が行われる。そして「親迎」にあたる<成親：ツィンチン>といわれる新婦の迎えが行われる。ここで螞蟻島の伝統的な婚姻の具体的な流れと儀礼はどのように行ったか、地元のL・MC（1927年生）の聞き取り調査⁽⁴⁾により、L・MCの若者時代（1940年代ぐらい）の状況は以下の通りである。

（1）婚姻儀礼前

①提親

男女が結婚する前、媒人により「提親」を行い、つまり、媒人は男女双方の家に相手の家族と個人状況を紹介し、もし両方とも基本条件に問題ないと認めると、「庚貼」を交換し、竈王神像の前で茶わんの下に敷き、神様の気持ちを測る。もし3日以内に家の中で、碗がばらばらになったり、家族が口論したり、猫や犬状態が不安定になるなど異常な状況がなかったら、占い師（算命先生）に“排八字”を頼み、生年月日時が合うかどうか、生年の干支が相克しないかどうかを見る。以上のことに問題がなかったら、定親の準備が始まる。

②定親（婚約）

定親前は「議親」であり、つまり男方から女方にどれだけの現金と「礼」を贈るかを論議する。決まると、男方から以上の贈り物を箱で女方の家に持参、女方の返礼は普通自分で作った繡品である。男方の「礼」の中には、必ず2匹の新鮮な大黃魚（フウセイ）を準備し、魚の頭を女方の家に向けて送り、女方が礼を受け取った後、この2匹の魚をそのまま男方に与え、魚の頭は男方の家に向ける。これは、女が夫の家に入ると、一生実家に帰らず夫と暮らすことを意味する。そして、結婚式を行う「好日」を選び、親戚や友人たちは「送人情」という贈り物を送り、その中に、現金、刺繍をしてあるいは絹織物の布団の表、生活用品が多く、赤いナツメ、落花生、リュウガン、「蓮子」（ハスの実）もあり、いわゆる「早く息子を生む」という寓意である。

③婚出集団から婚入集団への過渡期

定親は一旦決まったら、男女双方の家は互いに「親戚」として交際し始める。婚出集団の娘として、この時期の身分は非常に微妙であり、婚出集団と婚入集団の間にはっきりしない状態になる。また、定親した女は、しょっちゅう夫家に行き来し、夫家の成員と親しくなり、嫁になることを留意する。例えば、螞蟻島のY・AX（1944年生）は、4人姉妹の4女として、螞蟻島の漁民の家族で生まれた。そして、同じく漁民家族の双子の弟として生まれたZ・LD（1937年生）と結婚する（結婚後、2人の息子と

1 人の娘を産んだ)。Y・AX と Z・LD と定親してから結婚前、Z・LD の母は病気になり、Z・LD には姉妹がいなかったため、Y・AX はよく未来の夫家に行き、Z・LD の母の世話をしていた。しかし、正式な結婚式は行わなかったから、娘は夫家に行き来することが頻繁すぎると、実家からの文句も出てくるため、この関係の尺度を把握する必要がある。

(2) 結婚式の基本過程

①見嫁資 (ジンギアズ)

女方は男方へ嫁入り道具を運ぶ前、嫁入り道具をホールに置き、人々に見せ(男方に運んだ後も、ホールに置き、人々に見せる)、いわゆる「見嫁資」である。そして、この嫁入り道具は男方の使者に任せ、男の家を持ち帰る、これを「抬嫁粧」(図 4-2)という。嫁入り道具の数はそれぞれ異なり、多いものでは 10 個以上ものボックスがある。その中に、必ず「子孫桶⁽⁵⁾」、「家筵籃⁽⁶⁾」を用意しなければならない。



図 4-2 伝統的な婚礼の「抬嫁粧」の場面
資料：『中国普陀・百年漁港』2009 により)

②安床伴郎 (アンツァンバンロン)

「好日」の前の一日に、男方は 1 人の「全福」⁽⁷⁾ という女を選び、24 対の箸を赤い糸で縛って、新郎の筵の下に置く。それは「安床」と呼ばれる。結婚式前の 3 日間、新郎は両親ともに生きている男の子と伴に寝る。これは「伴郎」と言われ、夜、「伴郎」(必ず両親が両方とも生きている)に饅頭、落花生、卵を食べさせる。「絶対に息子を生む」という意味が込められている。

③享仙 (シェンシィン)

「好日」の前の満潮の晩に、男方は家のホールで「天地君親師」を祭る。これを「享仙」と俗称する。この祭りの流れは以下の 3 部分がある。

ア 上供 (神様に供え物をする)。

図 4-3 のように、ホールで儀式の供物を安置している。

イ 祈福 (賛礼者⁽⁸⁾で儀礼を司会する)。

i 新郎の介添人⁽⁹⁾は新郎をホールへ誘い、新郎の父をホールに誘い、24 名の神様をホールに誘い、礼砲を 3 発鳴らす。新郎と父は一緒に跪いて礼拝する。新郎の介添

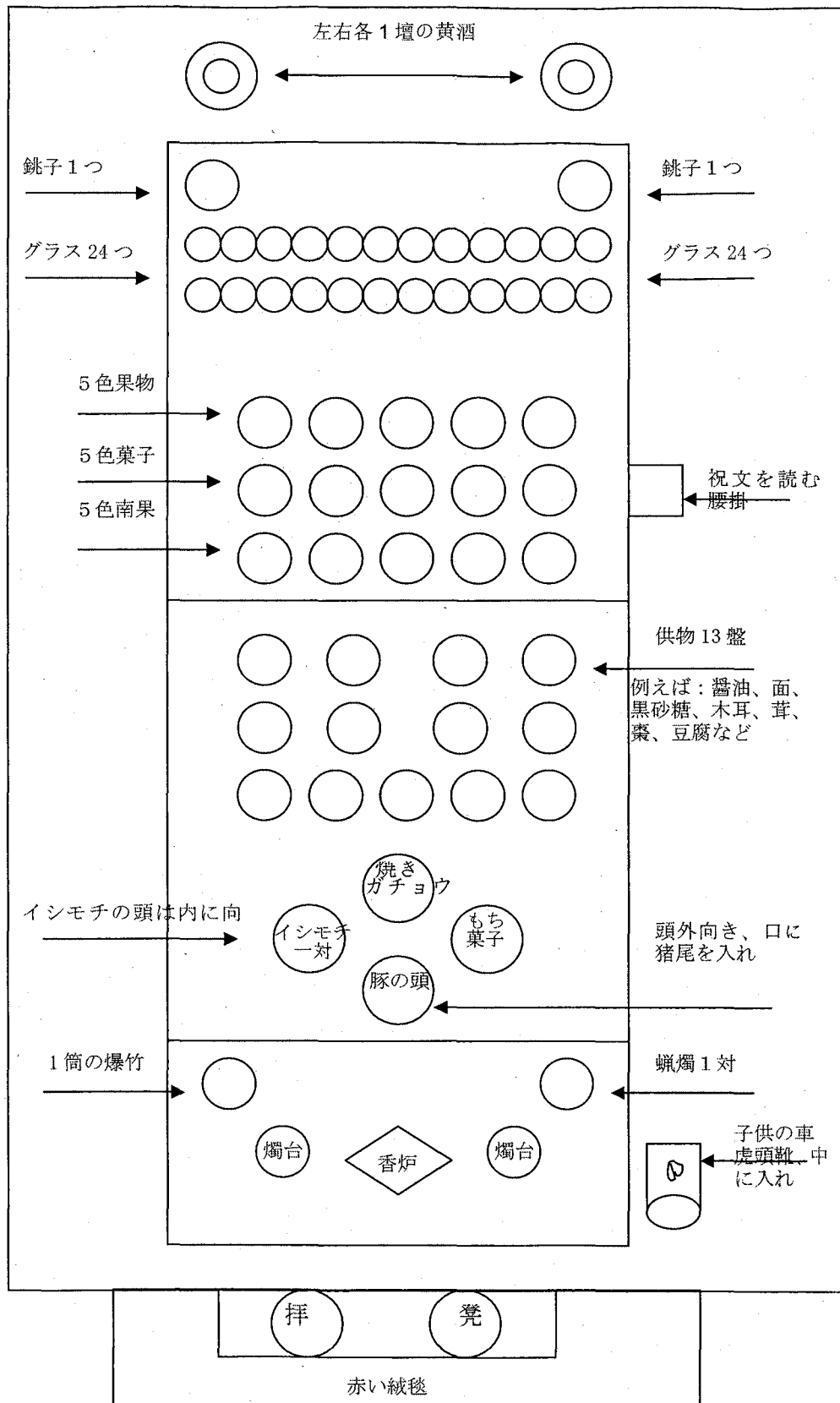


図 4-3 ホールに安置される「享仙」儀式の供物
(資料：『普陀市民万宝全書』2011：196-197 により筆者作成)

人は線香をあげ：1回目線香をあげ、跪いて礼拝；2回目線香をあげ、跪いて礼拝；3回目線香をあげ、跪いて礼拝し、神様を迎え終わる。

ii 新郎の介添人は24つのグラスにお酒をつぎ、再び神様を迎え、3回跪いて礼拝。

iii 新郎と父は、一緒に3回跪いて礼拝。新郎の介添人は祝文を読み、終わったら、新郎と父は、再び3回で跪いて礼拝。

祝文：

維XXXX年岁次朔越X月X日，XXX神祇座下弟子XXX，率男XXX谨具鬣柔毛之仪，敢照高於本境侯皇。当方土地，值日功曹，天地神祇之位座前曰：“伏以天开地辟，男家女室，数易乾坤之定，诗先关雎之缘，婚姻黄花之女。”兹者XXX年以弱冠受室，问凭媒妁之言，聘娶XX氏之女为配。XX良辰，迎娶过门。卜吉于今日成婚。伏愿如鼓琴，如鼓瑟，永谐白发而齐眉。百年歌好合之诗。五世照其昌之美。

伏维谨礼

iv 新郎と父は、神様に3回御酒を捧げて、8回跪いて礼拝。父は香紙、金箔を神様に送り差し上げ、爆竹を鳴らし、家を出て、儀式が終わる。

ウ 親戚や隣人に「享仙」で食べる菓子をそれぞれに送る。

④成親（結婚式を行う）

結婚式の当日を「好日」と言い、「請吃酒」とも言う。「好日」の前に新郎は「知単」という赤い紙を持ち、年長者や親友に祝いの食事を食べさせ、年長者が自分の名前の下に「知」字を書く。そして、男方は女方に「轎前担」という贈り物を送るが、その中には2匹のガチョウ、10斤の豚肉、2匹の魚を含む。

⑤坐花轎⁽¹⁰⁾（ズウファジョウ）

浙江の女は結婚する時すべて花轎に乗る（坐花轎）。民間伝説によると、南宋の小康王（高宗）は金国の兵士に追われ、明州（今の寧波）に避難した。その時1人の女に助けられ逃げる事ができた。その後、その女に恩返しできなかったから、浙江の女は結婚式に皇帝の乗る鑾駕⁽¹¹⁾の半分の大きさの車駕に乗ることができ、と鳳冠霞帔⁽¹²⁾を身につけることができる。花轎は「大紅花轎」と俗称し、4人で担ぐものと8人で担ぐものの2種類がある。「坐花轎」は仲人を立てた正式の婚姻であり、本妻という意味があり、女が一生に一度だけ乗れる。結婚式の当日、花轎は出発前、お茶と4色のお菓子を供物として「轎神」を祭り、爆竹を鳴らし、赤灯籠を先導し、道中で楽器を大いに鳴らす。新郎は新婦の家に行かず、その代わりに、「喜娘（シーニョン）⁽¹³⁾」が使者として「名貼⁽¹⁴⁾」を持って行く。

⑥上轎（シンジョウ）

新婦は花轎に乗る前、男方の喜娘に3回「催粧⁽¹⁵⁾」されるが、嫁入りしたくないふりをして、化粧を怠ける（もちろん、封建時代の婚姻では確かに化粧したくない人がいる）。そして、新婦は母の足に座って、母に「上轎飯」を食べさせられる。これは母に育てもらった恩を忘れないという意味する。また4つの風習もあり、

<1>「泣上轎」、娘が「上轎」の時、母は泣きながら見送り、「依敬重公婆敬重福、敬重丈夫有飯吃（舅姑を尊敬することは福を尊敬すると同じ、夫を尊敬すればご飯食べさせられる）」と言い、新婦は母のことばに感動し、涙を浮かべ別れる。

<2>「抱上轎」、新婦はお兄さんに抱かれ花轎に乗せられる。花轎に座ると、あまり動けない。これは一生安定できるという意味がある。

<3>「撒轎」、新婦の花轎は出発する時、母は1碗の清水を花轎にかけ、「嫁出去的女兒、潑出去的水」という。つまり「嫁にいった娘は、撒いた水と同じでもとには戻らない」という意味で、また娘のこれからの婚姻が幸せであるように、離縁する事がないように願う。

<4>「接火種」、花轎の中に、新婦のいすの下に1つの炭火と香料を焚いている火爐（ホーツォン：昔の暖房ツール）を置き、花轎の後ろの棒に「席子：シイズ」を結ぶ。いわゆる「轎内火爐、轎後席子⁽¹⁶⁾」（図4-4を示す）と俗称する。この「席子」は嫁がこれから実家から離れ、実家に暮らさなくなると意味する。花轎は出発する時、女方は爆竹を鳴らし、茶の葉と米つぶを花轎の頂にばらばらと振りかける。新婦の兄弟は花轎と一緒にいくが、これを「送轎」と呼び、途中で兄弟は火爐の灰を持ち帰り、また火爐の火で線香あるいはタバコを燃やし、その線香あるいはタバコを持ち帰り、家の火がめに置く。これを「倒火爐灰」、あるいは「接火種」と呼ぶ。この「接火種」は新婦が実家の火種を携え、子々孫々へと受け継ぐようにという意味である。

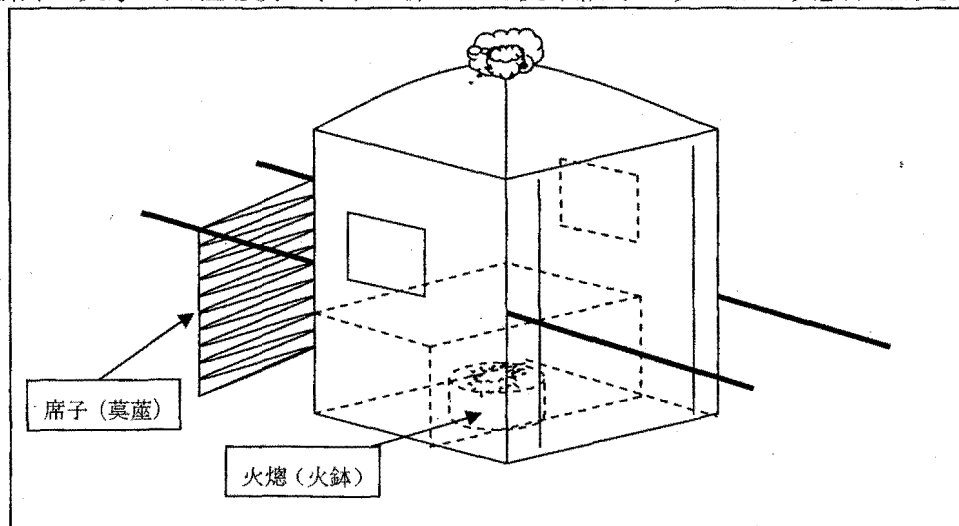


図4-4 花轎の示意図

筆者作成

⑦ 拜堂（バエトウ）

花轎は新郎の家に着き、新郎の家の楽隊が演奏し始め、爆竹を鳴らし、花轎を迎え

る。花轎の門を開け、1人の5、6歳の晴れ着の幼女が新婦を迎え、新婦の袖を3回軽く引いてから、新婦が花轎を下りる。そして、新婦は朱塗りの木製のウマの鞍を越え、携えてきた「席子」を用い、喜娘に手をかり、喜堂⁽¹⁷⁾の右側に立つ。その時、新郎は花轎が着くことがわかると、わざと身を隠し、飾りろうそくを持っている女の子が探し出して、喜堂の左側に立たせる。「拝堂」という儀礼は、新郎と新婦が、3回跪いて礼拝することであり、すなわち、「一拝天地、二拝高堂（両親）、夫婦対拝」という。「拝堂」の時、ペアの龍鳳蠟燭を火をつけて燃やし、これは「洞房花燭」と呼ばれる。

清の光緒の時、「拝堂」の儀礼の中で、「竜王」を跪いて礼拝していた。「拝堂」のホールで「竜王」の位牌を用意し、「天地」を跪いて礼拝してから、「竜王」を跪いて礼拝する。この時、賛礼者が「拝竜王」という歌を歌い、終わった時「送竜王」という歌を歌う。

「拝竜王」:

1. 银烛辉煌金花红，拜谢龙王祝寿隆。龙凤参生龙凤子，他年攀柱步蟾宫。
2. 龙王头上一盏灯，香烟袅袅透天庭。夫妻双双齐来拜，保佑家门万年春。

「送竜王」:

择日好事奉龙王，龙凤呈祥保安康。拜谢龙王回宫转，合家老少大团圆。

⑧進洞房⁽¹⁸⁾（ジンドウファン）

「拝堂」の儀礼が終わってから、2人の女子が龍鳳蠟燭をひとつずつ持ち、先導して前に行き、新郎は絹糸の球の帯を執り、新婦を案内し、洞房に入る。この時、新郎と新婦は5つの麻袋を踏み歩き、この5つの麻袋は喜娘によって次々と前に敷かれる。これは「伝宗接代」と「5代見面」⁽¹⁹⁾を意味する。洞房に入ると、新郎は左側、新婦は右側の寝台の縁に座る。これを「座床：ズウツァン」と呼ぶ。そして、1名の福寿双全の婦人が、竿秤の竿で新婦の頭を軽く叩き、新婦の「盖頭⁽²⁰⁾：ゲエトウ」を持って、これを「請方巾」と呼ぶ。これは新婚夫婦の将来の生活が思いどおりになって満足できるようにという意味である。新郎は少しだけ座ると、洞房を出て、新婦は着替え、客人は「衣替湯菓」というお菓子を食べる。

⑨新郎と新婦の「拝見礼」

新婦は着替え後、親疎と世代順次に従い親戚に跪いて礼拝する。これを「見大小」と呼ぶ。跪いて礼拝の時、音楽が演奏され、喜堂に2つの大きい椅子を置き、跪いて礼拝される先輩の夫婦が座り、夫婦の1人が亡くなっている場合は、男左女右により座り、片方を空けておく。跪いて礼拝の後、新婦に「紅包⁽²¹⁾」をあげ、「見面金」と呼ぶ）舅と姑は「紅包」をあげなくてもよく、いわゆる「新婦は自家人」なのである。新婦は同世代の人に会うと、拱手の礼をし、後輩の人に会うと、後輩に「見面金」

をあげる。その後、「待筵」を行い、新婦は最高位につき、4名の女に付き添われ、食を勧められるが、新婦は食べない。この宴が終わったら、新婦は喜娘に付き添われ、台所へ行き「親割礼⁽²²⁾」を行う。その中に、春雨や泥鰌を掬うなどの習俗があり、「上厨」と呼ぶ。

⑩賀郎酒（ホウロンジュン）

「拝堂」の当日の晩に、新郎の家で「好日」の正式な披露宴を行い、これを「賀郎酒」と呼ぶ。この披露宴に、新婦は目上の人と客人に1人1人お酒をつぎ、そのお酒は器を満たすが、こぼれてはいけないという規則がある。披露宴の後、福と徳がある客人2人に洞房に入り、主賀者は「賀郎辞」を歌いながら、新郎と新婦に「3酌易飲」という儀礼を行わせる。つまり新郎と新婦は、お酒を飲むごとに、互いにグラスを交換し、これを3杯くりかえし飲む。

「賀郎辞」:

第一杯酒賀新郎，有啥闲话被里讲，恐怕人家要听房。

第二杯酒賀新郎，房里事体暗商量，谨防别人要来张。

第三杯酒賀新郎，祝愿夫妻同到老，早生贵子状元郎。

⑪鬧新房（ノウシンファン）

夜になると、「鬧新房」という習俗があり、「三日無大小⁽²³⁾」という諺がある。成親の当日、新婦はあまり客人と話さないの、「鬧新房」の最初は、新婦に話しかけたり、笑わせたりし、真夜中ごろまでに退散する。新郎は客人を見送り、喜娘は布団を敷き、新婦は喜娘に「紅包」をあげ、喜娘はお金が少ないふりをして、追加されたら出る。新婦は部屋のドアを閉め、夫婦は「床頭菓」を食べ、龍鳳蠟燭をそのまま次の朝まで燃やす。

⑫成親後の回門

成親の次の日、新婚夫婦が起きてから、必ず新郎がドアを開けなければならない。そして、新郎は母方のオジを招待し、オジは茶菓を3回もらった後、洞房で休み、昼食時、オジ舅を最高位の席につかせる。この昼食を「会親酒」と呼び、食物では毛蟹は禁忌である。オジは普段「毛蟹」と呼ばれているので、これを食べることは許さないわけである。食後、新郎は新婦と一緒に、お礼の品（「望娘盤」という）を持ち、新婦の家へ帰る。これを「回門」と呼ぶ。新婦の両親は「生頭女婿（結婚するばかりの婿）」を招待し、氷砂糖とスッポンが禁忌されている。成親の第3日、新婦は湯面という料理を作り、隣人に配る。これを「三日入厨下、洗手作羹湯」と呼ぶ。

(3) 海島の特殊婚礼——「抱鶏入洞房、小姑代拜堂」

海島の人々は結婚式の日を非常に重視し、一旦決まったら、変えることはない。しかし、漁民は漁汛の時、出漁しなければいけなく、そのうえ、船の人々はそれぞれの責任をもち、誰もが不可欠なので、一般的に結婚する前に海で漁撈生産をし、結婚式の日までに急いで戻ってくる。もし結婚式の日、新郎が突然遠く海上で嵐に遭遇し、戻ってくることができない場合、期日も変更できないので、前述の「特殊婚礼」が出てくるようになった。この「特殊婚礼」で新郎の妹は雄鶏を抱き、兄に代わり嫂と「拜堂」儀礼を行い、「洞房」に入り、一緒に新婚の夜を過ごす。また、雄鶏の頸に赤い布を縛り、新郎が戻るまで、その鶏はずっと洞房で籠の中に置かれ、新郎戻ると自ら籠を開け、鶏を放す。さらに、鶏は新郎の代わりに「拜堂」に参加するため、その鶏は鶏冠が真っ赤で、当年に育てられた元気な新雄鶏を選ばなければならない。

以上は舟山群島の婚姻儀礼のおおまかな内容であるが、かつては貧富の差が大きかったため、以上の儀礼は富有階級お金持ちと中産階級以上の家で行われた。貧困階級は、硬い紙を「喜字」に切り、金紙をその「喜字」に貼り付け、壁に掛け、そして1組の赤い蠟燭と粗末な花轎があれば、結婚式を行うことができた。

2 婚姻儀礼の変化と女性の家族帰属意識の表面的な移動

(1) 婚姻儀礼の変化

1980年代以降は、嫁迎えの方法、披露宴、〈請吃酒〉などの内容に変化が出てくる。ここでは主な変化をまとめる。まず、1940年代では、新婦が〈花轎〉に乗って嫁いで来た。1950年代になると、簡素に行われ、新婦の乗り物も〈花轎〉から自転車になった。1980年代以降、自動車が用いられるようになった。また、伝統的な儀礼では、新郎が自ら新婦を迎えに行くことはなかったが、現在では新郎が必ず行くようになっている。1980年代以前の「成親」「拜堂」「拜見礼」「賀郎酒」という儀礼はすべて男方の家で行っていたが、現在では、ほとんどホテル、あるいはレストランで行うようになった。一方、伝統方式で男方の客の招待と女方の客の招待は分けて行っていたが、現在は一緒に、「拜堂」を行うレストランで招くようになった。したがって、前述の儀礼における①～⑥の儀礼は現在では省略され、⑦～⑩の儀礼はほとんどレストランで行われる。⑪と⑫の儀礼はまだ残っているが、伝統方式と比べるとかなり簡略になった。例えば、前述のY・AXが結婚した時、贈り物や嫁入り道具はなく、婚礼と結婚披露宴も行わなかった。しかし、Y・AXの長男の婚礼は、大変盛大に行った。当時、Y・AXは後蚕の婦女主任であり、嫁は螞蟻島の郷の副書記と長沙塘の婦女主任の娘なので、螞蟻島の半分以上の人がその婚礼に参加した。その婚姻儀礼はきちんと①～⑫のように行っていたが、その時、「花轎」は使わず、自転車が代わりに使われていた。2009年、Y・AXの孫が結婚した時、婚礼は沈家門のレストランで④⑦⑧⑨⑩を行い、「花轎」

も自転車から自動車に変わった。

(2) 新婦の家族帰属意識の表面的な移動

前述した儀礼は、伝統的な事例であり、結婚の一連の儀礼が、男性子孫の多産と家の繁栄、嫁に対する実家から夫家への身分帰属の転換が何回も強調される。つまり、嫁は儀礼により実家と分離し、夫家の成員になると示している。例えば、⑥においての「席子」は嫁がこれから実家から離れ、実家で暮らさなくなることを意味し、嫁と実家から分離することを示している。夫家での一連の婚姻儀礼はほとんど新婦に対して行われ、新婦が儀礼により夫家で一連の親族との関係も変化してきた。新婦は儀礼により娘から嫁になり、夫家にとっての「外来人」から「自家人」に転換してきた。この転換が完成すれば、新婦は夫家の新成員として夫家の親戚に紹介され、⑦⑨⑩はこの過程を表している。これは、夫家の大家族にとって、新婦の夫家での身分帰属を認めることと意味する。また、新婦は儀礼により夫家の新成員になると、それからの儀礼が新婦の出産をめぐる行われる。例えば、②の「伴郎」に饅頭、落花生、卵を食べさせ、⑥の「接火種」、⑦の「拝竜王」、⑧の「伝宗接代」と「5代見面」、⑩の「賀郎辞」という一連の儀礼は新婦の将来の出産能力についての祝福である。しかし、この段階の嫁の身分帰属の転換はまだ表面的な移動であり、嫁は形式上実家の成員でなくなるが、実は実家との関係を絶つのではなく、⑫は嫁と実家との関係を維持することを表している。嫁にとって、夫家の大家族での最初の1年ほどの新しい環境への適応段階がもっとも孤独な期間で、心はやはり実家への帰属意識が強い。夫家の成員もやはり嫁が子供を産むまで、嫁は「外人」という意識を持ち、祖先の祭りを絶やさないために、嫁の妊娠に大きな期待と関心を持つ。つまり、嫁にとって実家から夫家への過渡期は婚約の初めから、長子の出生まで続く。

儀礼の変化と比べて、意識のレベルでの変化は明確にはうかがえない。近年、漁村で大家族から小家族への変化にともなって、特に、「一人っ子」政策の実施以降、女性は結婚しても、ほとんど夫婦で独立して暮らすようになったため、大家族からの影響がかなり弱くなり、女性の帰属意識もすぐに実家から夫との小家族に移動すると考えられる。例えば、Y・AXの長男夫婦と次男夫婦は結婚してからずっと独立して暮らし、小家族でのすべての事は夫婦で相談して決めている。このことから、かつてのように夫家の大家族ではなく、自分と夫、子供によって形成される小家族に属するようになったといえる。

第2節 誕生儀礼

誕生儀礼は人生儀礼の1番目の儀礼であるが、「人間の誕生とは生児の魂が幽冥界から人間界へと引き上げられる過程であり、つまりその間生児の魂は非常に不安定な状態にあるので、その靈魂を安定させるために産育の儀礼が行われる」という（上野和男 2009: 103）。人間の誕生はこの世に生物の存在する意味しかないが、人間界で

の社会地位を確立しようという目的で儀礼が行われる。一般に、妊娠と出産の儀式は2つが揃って完結する。まず初めに妊娠した女を一般社会からも、家族集団からも、また時としては女性の集団からさえも切り離す分離儀礼があり、次に厳密な意味での妊娠の儀礼が続くが、これは一種の過渡期の儀礼である。最後に出産の儀礼となるが、これは、彼女がもと属していた集団に復帰させるか、あるいは、生まれた子が第一子や男子であった場合はとくに、彼女に新しい地位を与えるものである。一方、妊娠中の女を不浄であるとみなす人々の間では、この穢れは一般的に子供に伝わり、その結果子供もいくつかのタブーに従わされる。子供にとっての過渡期の初めの段階は、母親の「出産からの社会的復帰」前の、過渡期の最後の段階と時を同じくする。邪悪な目、感染、病気、種々の悪霊などからの保護を目的とする様々な儀礼は、同時に母にも子にも効き目がある」（アルノルト・ファン・ヘネップ 1977：35-54）という。

1 伝統的な誕生儀礼

舟山地区の誕生儀礼は「求子」、出産前、誕生、出産後という4つ段階がある（金濤 2012：313-317）。

①「求子」（男子の誕生を願う）

海に働く漁業者は、危機感が強いので、妊娠しない女には必ず「求子」をやり、妊娠した女にも息子を妊娠しているかどうかわからないので、「求子」をやる。「求子」の方法は2つあり、1つは、神様に祈る。例えば「送子娘娘」や「送子観音」（舟山地区の普陀山で祭られている「送子観音」が一番有名だと考えている）が祀られている廟で祈り、神様の恵みを得、息子をいただくよう祈る。もう1つは、巫術を行う。舟山地区では、旧暦の正月十五で「鬧龍燈」をするが、その時龍の髭を触る習俗があり、竜王が嬉しくなると、「送子」してくれると言われている。一方、女は「求子」のため、「婆仔魚」の形の腹当てを身につけて持つ。なぜかといえば、「婆仔魚」はお腹に数多くの卵がある魚なので、女の腹が毎日「婆仔魚」に触れると、妊娠しやすくなれると考えられている。しかし、「求子」は「求男不求女」という生育観念が強く、これは昔の海に働く漁業者がすべて男で、また「女は海に入れない」という慣習も原因なのである。

②出産前

舟山地区では、女性の妊娠を「有喜」と呼び、夫と舅姑が廟で神様に跪いて礼拝し、妊婦と子供が平安であるように祈る。また、妊婦に関する多くの禁忌があるが、主に飲食と行為の2種類がある。飲食の禁忌は「忌口」と俗称される。つまり一部の食物を食べられない。例えば、表4-1に示している食べ物が禁忌されている。

表 4-1 妊婦の禁忌の食べ物

禁忌の食物	理由
雄鶏	食べると、赤ちゃんが夜に泣くようになる
犬肉	犬肉は不浄なので、食後妊婦が難産になる
フウセイ	フウセイは竜王の將軍なので、食後竜王の機嫌を損ない、赤ちゃんの四肢が不全になる
海蟹と海老	食後、胎児が横になり、難産なる
スッポン	食後、胎児の頸が短くなる
タコ	タコは骨がなく、食いしん坊の怠け者なので、食後、子供が意気地なしになる

行為の禁忌といえば、妊婦は伝統劇を見にいけない。銅鑼や太鼓の音が胎児を震動させないように、また舞台の役者の醜い姿を見たら、胎児の顔に影響すると思われる。そして、妊婦は廟に入れず、殺生も禁忌で、鬼や神様を怒れると心配する。また、妊婦は「紅事（婚礼）」と「白事（葬礼）」に参加することが禁忌であり、これは他人に不吉だと考えられるからである。

一方、「依耳朶」という慣習がある。舟山では「避魚」と俗称し、つまり妊婦の悪阻を指し、妊婦が魚の生臭いにおいを嗅ぐと吐くようになることを指す。この時、妊婦の実家が知ると、「挈糖面」という「黄糖」と「干面」を送り、「送生母羹」と俗称する。同時に、妊婦の出産前の3ヶ月の時、実家から衣食を含む「催生担」を送る。衣はすべて黄色の布で作った赤ちゃん用の衣服やおむつなどを指し、食は黒砂糖、卵、長面、リュウガンなどを指す。以上の物を大きな布で包み妊婦に出産を促すために用意されるので、「催生」と俗称する。「催生担」は妊婦の部屋の窓に向けて、外から投げ入れる。もし「催生担」の包の口が下に向かうと、男を産むと暗示し、逆に上に向かうと女を産むと言われている。

③誕生

ア 臨盆報喜

妊婦は出産前の一ヶ月から、家屋の側室に移住し、出産の時、産婆を頼む。赤ちゃんは出産後、産婆が手ぶりで赤ちゃんの性別を教え、左手で男、右手で女に暗示する。家族たちは赤ちゃんの性別が知ると、男女にかかわらず、婿が妊婦の実家に吉報を知らせ、親友と隣人にも知らせる。戸主はそうめんで客人をもてなす。これを「吃喜面」と俗称する。もし、男児が生まれたら、父は海辺で竜王に吉報を知らせ、竜王が祭られる廟に跪いて礼拝し、赤ちゃんが順調に成長するように竜王の恵みを祈る。女儿の場合はやらない。一方、赤ちゃんの腕に赤い絹糸を結ぶ。1つの意味は魔除けで、もう1つは、巫術でその子が大人になっても、人の物を盗らないようにと願うものである。

イ 「開口乳」

赤ちゃんは産まれてから 24 時間後、乳を飲むことができるようになる。この初めての乳を「開口乳」と俗称する。しかし、この「開口乳」は「乳」ではなく、実はオウレン苦い漢方薬の湯であり、いわゆる「先苦後甘」を意味する。また海水を「開口乳」とする場合もある。海辺の子供は一生海水とつき合うから、この海水の「開口乳」を飲むと、海水を怖がらなくなると言われている。

ウ 「洗床」

出産してから 3 日後「洗床」を行う。まず、女性たちが妊婦に贈り物をする。そして、「洗生婆」は赤ちゃんの体を拭き、新しい服を着せ、同時に、ベッドの前に、供え物で「床公床婆」を祭る。昼ごろ「洗床酒」という宴席を設けるが、客人はすべて女である。もし、産婦が初産だったら、産婦の実家は、「三朝礼」という赤ちゃんの四季の衣服、帽子、靴、手押し車など及び寿桃、ミカンなどの果物を送る。

④ 出産後

出産の日から「満月（ちょうど 1 ヶ月になる日）」までの 1 ヶ月、産婦が休養することを「坐月子」といい、この間、産婦の体や生活が変化し、役割も妻から母になり、夫家での身分も「外人」から「家人」に変わり、産婦の地位も非常に高くなる。中には男児を産めば「坐月子」の期間が長く、女児ならば期間が短いという。出産 10 日後、産婦の実家から面、鶏、卵、魚などをいただき、「送月里」と呼ぶ）実家の女性たちが産婦を見舞う。（「望月」と呼ぶ）そして、産婦の飲食は、主に砂糖、卵、酒であり、毎日 3 食である。朝食がリュウガンのスープ、米の粥、昼食がフウセイなどの魚で作ったスープ、夕食が魚スープと米の粥である。この間、産婦に対する禁忌といえば、新鮮な野菜、果物、冷たい食べ物はずべて食べられない。一方、産婦の体はまだ回復の段階なので、あまり部屋の外へ出かけず、家事もせず、特に海風に吹かれるのは厳禁である。

「満月」の日から、赤ちゃんは社会の人々に正式に認められるようになるから、その儀礼も非常に重視されている。赤ちゃんはこの日に髪を剃り落とし、「満月頭」と俗称する）家でも宴席を設け、親友を招待する。（「満月酒」と呼ぶ）産婦の実家はお礼を送り、特に赤ちゃんの祖母は金龍の刺繍がある赤い腹当て、虎頭靴、猫帽を含む「満月衣」を送る。また、祖母は銀の首輪、銀ブレスレット、銀のアンクレットも送る。男児が以上のものをすべて着たら、まるで「開海の哪吒⁽²⁴⁾」にそっくりである。

そして、満月の日に、大人は男児を抱き、海辺に遊ぶ。これを「南海竜王攀親」と俗称する。具体的には、赤ちゃんを湯桶に置き、隣の大人が盆を手で支えながら、海

に漂流させる。これは赤ちゃんを海に親しませ、将来、操船などに慣れるようにとの願いを意味する。また、竜王に赤ちゃんの顔を見せ、竜王の親戚と認められることによって、海上で竜王から恵みをいただけるようにという願いも意味する。以上の儀礼は男児にしか行わず、女児の場合は省略される。

一方、大人は満月の日に、竜王を祭る廟に跪いて礼拝してから、親戚や近所の家を訪問する。親友たちも赤ちゃんの「望親」という来訪を事前に知るので、5色の糸や「龍鳳鎖(25)」などのお礼を用意し、祝い歌を歌う。歌の内容は「新生嬰兒額角圓，一帆風順中狀元。駛船撒網稱能手，月月魚蝦載滿船」というものである。

満月の後、赤ちゃんの1歳の誕生日も宴席を設け、「做百歳」と俗称する)、その日には、「抓周」という儀礼も行ふ。ベッドの上にペン、お金、本などを置き、子供が何を手に取るかで、将来の志向を暗示する。例えば、ペンをもつと、知識人になるといわれている。これらの儀礼も男児に限り、女児には行われなかった。

2 誕生儀礼の変化と女性の家族帰属意識の実質的な移動

(1) 誕生儀礼の変化

以上の儀礼、ほとんど男児を産んだ時のみ行われ、女児の場合は男児よりずいぶん簡単で、男女の差別があった。男児は家を存続させ、祖先祭祀を守り続けていくのに対して、女児は大人になるとやがて他家に婚出してしまうので、親や親族がその誕生を迎える喜びにも相違があるのはもちろんであろう。また、初生児が女の場合、姑が引続き嫁の妊娠に関心を持ち続ける。

改革開放以降、特に「一人っ子」政策の実施から、漁村での男女の差別に対する觀念が伝統觀念よりかなり薄くなり、儀礼も変わった。例えば、「出産の近代化—施設化・医療化が進み、出産介助者は「産婆」から医師へと移行し、出産の場所も、自宅から病院へと移行している」(何燕俠 2009:25)という。また、伝統の家での出産は、産婆、姑、夫の兄弟の嫁たち、姉妹、近所の女性がいたが、男性はあまり登場しなかった。近年、病院で出産する場合、夫も姑とともに出産の場にいる。一方、現在の産婦は、伝統的な習慣を守って、「坐月子」をやり、親友が子供の誕生の祝いも守られており、生育はまだ家族の出来事である。漁村の生活水準の向上とともに、産婦の衣食住も建国以前よりかなり改善してきた。

例えば、Y・AXは結婚後、近くの普陀山に「送子観音」を跪いて礼拝し、「求子」を行った。そして長男が生まれたご再び「送子観音」へ跪いて礼拝し、観音に感謝する「還願」をおこなった。次の次男と娘を産んだ前「求子」を行わなかった。もし、初めの子は女の場合、再び「求子」を行おうと考えている。Y・AXは出産前の伝統的な禁忌がちゃんと注意していたが、出産後の「坐月子」はあまりやらなかった。なぜかという、当時Y・AXは人民公社の婦女主任であったため、労働強度が大きく、出産前の1日までと出産後の1週間後ずっと労働に参加した。出産後の栄養物はフウセイ

と卵しかなかった。しかし、Y・AXの長男の嫁は結婚後「求子」を行わなく、息子を産んでから1ヶ月の「坐月子」をやった。次男の嫁も「求子」を行わなく、娘を産んでから1ヶ月の「坐月子」をやり、「一人っ子」政策のため、もう1人の息子を生むことを考えなかった。

(2) 新婦の家族帰属意識の実質的な移動

誕生儀礼は、家族関係にも変化を及ぼす。子供を産む前、嫁はやはり実家への帰属意識が強かったが、子供を産んだ後、特に男児を産んだ産婦の身分帰属が実家から夫家へ実質的に移動した。産婦自身は、もう完全に夫家の大家族に融合し、夫家も嫁の家族として地位を認めたと言えるのである。この認めることは儀礼③の「吃喜面」を通じて表わされている。「吃喜面」の「喜」は、新婦が夫家に新世代を産んだことを指し、親友と隣人を招待して「吃喜面」を行い、特に、新婦の実家からの親戚を正式に夫家に招待する。夫家はこの儀礼により、新婦の夫家での地位が確認することを新婦の実家に伝える。例えば、Y・AXの長男の嫁が出産した後、Y・AXの3人の姉はすべて招待され「吃喜面」に参加し、皆が卵や赤ちゃんの新しい衣服などを贈ってきた。これに対して、Y・AXの次男の嫁が子供を産んだ後、「吃喜面」をやらず、すべての親友と隣人は「満月酒」の時一緒にお祝いに来て、ほとんどの人がお金を贈ってくれた。儀礼は伝統的な儀礼より少なくなったが、祝福の気持ちは同じであろう。実は、誕生儀礼と婚姻儀礼の間に成人儀礼があるが、建国以前の漁民は早婚のため、成人儀礼と婚姻儀礼が重なるようになった。

意識的には、それぞれの世代において、嫁としての自身の身分帰属に対する意識は異なっている。例えば、Y・AXの長男は自分で金を儲けた後、外に自分の家を建築し、結婚してからずっと2人で独立して暮らし、結婚の1年後長男が誕生した。Y・AXの孫が1歳の時に、長男夫婦の仕事の都合により子供を預けて他の島へ移住した。その時から孫が8歳になるまでの間、Y・AXがこの孫を育てた。この場合、長男の嫁L・YYは、自分の子供に対して、母親という役割をあまり果たさなかった。それに対して、Y・AXは、二度母親という役割を果たしたことになる（于洋 2013b）。Y・AXにとって、孫は「自家人」であり、自分は孫を世話することが当然の責任であり、つまり、これは大家族の内部のことだと思っていた。しかし、L・YY、自分は結婚後、ずっと夫と2人だけで独立して暮らし、あまり姑と付き合う時間がなく、自分の家族帰属意識がやはり自分と夫との小家族にあった。その後、子供を産んでも、この状況はかわらない。L・YYは姑に子供の面倒を頼み、夫と他の島へ仕事に行ったことも、小家族の未来のためだと思っていた。実は、蟻蟻島で、L・YYのような人はかなりあり、彼女らの夫家の大家族への帰属意識は非常に希薄になり、やはり自分の小家族への帰属意識が強いと思われる。また、Y・AXの次男の嫁は「坐月子」をやった時、Y・AXがもちろん毎日嫁を世話し、嫁の母も次男の家に泊まりこんで娘の世話をした（伝統的な「坐月子」時期、嫁は姑の大家族で暮らしたので、嫁の母が娘に世話することがで

きなかった)。これは、次男夫婦が独立して暮らしていたため、次男の嫁にとって、夫との小家族が自分の家なので、自分（娘家）の母が泊りこんでも問題ないという感覚があることが伺える。この場合、Y・AX（姑）としては、自分の孫のために嫁の世話をしてきた。逆に、次男の嫁の母は、孫のためではなく、自分の娘であるか故に世話をしたという母と姑の違いが明確であった。

第3節 葬送儀礼

葬送儀礼は、死者を死者の世界に統合させる儀礼である。喪は遺された者たちのための過渡期であって、彼らは分離儀礼によって過渡期にはいり、この期間の終わりに再統合の儀礼を行って一般社会に戻るのである。場合によっては、遺族の方の過渡期が死者の過渡期と表裏一体をなしており、遺族の過渡期が終わると同時に死者の過渡期も終わり、死者が死者の世界に統合される（アルノルト・ファン・ヘネップ 1977：125-141）。

1 伝統的な葬送儀礼

死亡は人間にとって避けられないことであり、数千年来、人々は喪葬儀礼を死んだ人も満足させ、生きている人も安寧させ形成させるものとして形成させてきた。葬儀の全過程は、死者の親族にとって、生者の世界と死者の世界の間に位置する特殊な社会を形成し、つまり生者と死者との交流であり、また両者の間に「念祖懐親」という強靱な結びつきを持つものである。この結びつきは、生者と死者における実体的なつながり及び精神的なつながりの中に表われる。これは中国人の生死観の深い内包を現れている。また、「葬式の及ぶ親族関係範囲はすべての行事の中で最も広いものであり、葬送儀礼の一連のルールが死者に関する各種社会関係と秩序を表す」（李霞 2010：207）という。

中国では、耕地での生産を妨げることを理由に、長い間厳しい墓地政策がとられてきた。土地改革以後、家族及び親族の間において、血縁関係より「革命的な同志」のほうが強調された。人民公社の集団生産制度が設立した後、国家と集団の利益が強調され、血縁関係が作用していると、「小集団主義」「宗派主義」としてしばしば批判されることになった。また、宗族の人々の祖先の存在も否定され、つまり、祖先が「陰間」で生きているという信仰は迷信として批判され、儀式の面でも、葬式と土葬が禁止された。1958年の大躍進運動において、「社会主義建設のために」という「平墓運動」を行い、各村落の始祖の墓は次第に取り壊された。螞蟻島ではこの時、全ての墓は大螞蟻島から北の方に1000メートルからの小螞蟻島という無人島へ移動され、この後、螞蟻島の「死んだ人と生きる人」は「分島居住」という葬式が形成した。こうなると祖先の存在が否定され、親族間で同じ祖先をもつものであるという観念も薄れた。「1980年代に入り、埋葬についての規制が緩和され、法制化が進む時期になると、

各地で盛んに墓碑をともなう墳墓が形成されるようになった」という（田村和彦 2012：87-121）。

ここで螞蟻島の伝統的な土葬の葬送儀礼の具体的な流れと儀礼はどのように行ったか、地元のL・MC（1927年生）の聞き取り調査⁽²⁶⁾により、L・MCの若者時代（1940年代ぐらい）の一般的な老人がなくなった葬送儀礼の状況を述べる。

①送終（ソンジュン）

老人の臨終の際に、家族は棺を入れる前にいくつかの準備をする。身体を洗い、きれいな衣服に着替えてさせ、髪をカットし、手の爪や足の爪を切り布で包まれる。また、老人を空腹にさせないため、老人に何口かの粥湯をたべさせる。そして、家族皆が集まり、老人の遺言を聞き、老人の息が絶えるまで、ベッドのそばを片時も離れない。

②報喪（ボウソウ）

報喪は、2つの意味があり、1つは人の亡くなったことを親友に伝えること、もう1つは螞蟻島の3つの廟の神様に伝えることである。親友に伝える場合、報喪人は本家姓の人（一般的に死者の息子あるいは孫）であり、家を出かけるとき、黒い傘を逆に持ち、途中で他人の家に入ってはならず、親友の家に着いたら、1碗の冷水を飲んでから、訃報を伝える。女がなくなった場合、訃報を伝える1番目の家は必ず死者の実家であり、これは死者の実家に対して最も尊敬する地位であることを現している。実家の人が「娘」の死亡が正常かどうかを確認してはじめて、「娘」が正式に「婆家」の家族の祖先として祀られることができるようになる。神様に教える場合、報喪人は必ず死者の子女であり、そして、順番に螞蟻島の3つの廟の神様に訃報を伝える。例えば、図4-5のように、死者の家はAにある場合、報喪人はまず一番近くの後岬財神廟へ行き、そして、山の上にある大興岬財神廟へ行ってから、その後は天后宮（娘娘廟）へ行き、最後に家に帰る。

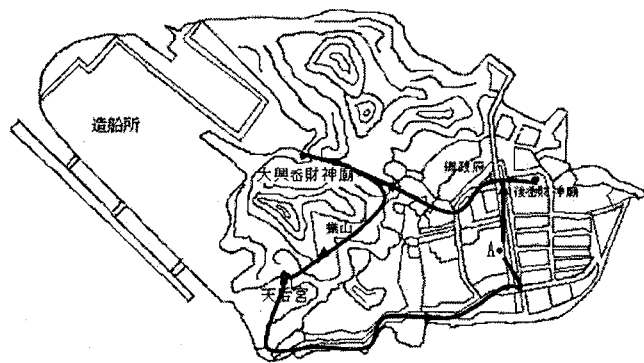


図4-5 神様に訃報を伝えるルート

③拝懺（バイチェン）

老人が亡くなった後、家のホールあるいは庭に「霊堂⁽²⁷⁾」を建て、家族は自分の友達、あるいは僧侶を頼み、お経を読んでもらう。亡くなった老人の懺悔厄除けさせ、苦難から脱せるようには、念仏を唱える。1人が仏、菩薩の名を唱え、と、拝懺に参加する全員が、一緒に唱え、かべに掛けてある仏画に跪いて礼拝する。1部の経を読み終わると＜1部懺＞を完成できたという。1部また1部と読み続け、跪いて礼拝し続け、その拝懺の部数は、拝懺に参加する人数によって決められる。

④吊唁（ディオイエ、弔問）

死者の主な親族は死者に布団と花輪をあげ、一般的な親友が花輪を捧げ、故人を慰霊、家族を慰問する。

⑤帶孝（デショウ）

葬送儀礼の中で、子孫は亡くなった人の喪に服し、孝行と哀悼を表す。これはもともと「周礼」から出自した儒家の礼制であり、後に亡くなった人に「免罪」させるという派生的な意味を持つようになった。この「帶孝」は多くの規制があり、死者の息子は「三両官」という帽子をかぶり、腰に左手で縛った縄を締める。死者の娘は「長好斗」という帽子をかぶり、白い靴を着て、白い「海清」という服を着る。3代の子孫は白い帽子をかけ、4代の子孫は黄色の帽子をかぶり、5代の子孫は赤い帽子をかぶる。

⑥守夜（シュイエ）

夜、家族と親族は順番に亡くなった人を見守る。一晩中、供物は供え、線香や蠟燭を絶えずともし、死者のベッドの後ろに置いたランプも絶えず火をともし。

⑦入殮（ルーレン、納棺）

入殮は＜大殮＞と＜小殮＞があり、＜小殮＞は死者に服を着せること指し、＜大殮＞は死者を納棺させること指し、＜歸大屋＞と俗称する。入殮の日は「陰陽先生（占い師）」に頼み、期日を選ぶ。当日の真夜中、満潮になると、息子は死者の頭を抱き、婿は死者の足を抱き、死者を棺に置かせる。入殮の時、家族や親族全員がそばにいて、死者の生活用品、布団、衣服など、1つ1つチェックして棺に入れてから、棺の蓋を釘で打ちつける。

⑧醺扛（ジョウカン）

死者の出棺の日、お棺を運ぶ人はお棺を家の外の十字路に運び、2つのベンチの上に置き、お棺の上に何杯かの酒を置く。葬送儀礼の専門家は「醺扛」という講演を行う。その講演の主要な内容は、死者の子孫後代は永世に金持ちになり、平安で繁栄するというものである。

⑨泣喪

泣喪は、葬送儀礼の終始を貫き、大きい場面が何度もある。その中で出棺する時の「泣喪」が最も重視される。出棺の日に、家の外の十字路で祭る時、一般的な家は葬儀民謡団を誘う。その団は葬儀の家族を代表し、悲しい越劇⁽²⁸⁾の曲を歌い、死者に対する悲しみの気持ちを表す。歌う者が次々と歌い、家族や親族が上の世代から始まり下の世代まで何度か跪いて礼拝し、死者への哀悼を託す。

⑩安葬（アンゾウ）

家族はお棺を墓の前まで送る（図4-6、図4-7）。具体的な行列の順序は、霊位が一番前に、そして、お棺、民間楽隊、最後は喪に服す人々である。そして、すべての人は1つ1つの霊船に乗り、お棺が乗る船の後ろについて小螞蟻島に行く。同時に、舵をとる人は大声で「何々さん、あなたは小螞蟻島で幸せにしてくださいね、行くよ、後についていくよ…」と叫ぶ。小螞蟻島に着いたら、まず、家族や親族の男性たちが



図4-6 1940年代普陀の葬送隊列
(資料:『中国普陀・百年漁港』により)



図4-7 1940年代和尚さんを参加していた葬送隊列
(資料:『中国普陀・百年漁港』により)

墓穴を掘って、その内で死者の息子の下着であちこちを軽く払い（この下着を家に良く保管すると、将来家に金運をもたらすという伝説がある）、墓内でゴマの茎や大豆の茎を焼く。（こうすると次世代の子孫が繁栄するという伝説がある）。そして、お棺を墓に入れ、家族たちは墓の周りを囲んで縄を置き引き、墓の周りに沿って3回右にまわり、その後3回逆回りする。この6回が終わるとこの土地は死者のものになったことを示すから、その輪が大きければ大きいほど、死者の土地が大きいことを表わす。安葬の当日、安葬の過程の一方で、＜請菩薩＞と＜做羹飯＞という祭祀儀礼も行われる。

⑪ 做七（ズウオチ）

人間は死んでから 49 日後、はじめて本人は死んだことに気づくといわれている。したがって、＜做七＞の儀礼は、七日ごとに一祭行われ、「七七」49 日で終わる。その中の「六七」祭の羹飯は、必ず嫁に行った娘が豪華な食事を用意し、出棺の日に手伝ってくれた人々を招待する。また、「七七」祭に、死者の男女双方の親族が必ず死者の家族に蝋燭やお金などを贈り、家族と一緒に「七七」祭に参加し、一緒に昼ご飯を食べ、死者への思いを託す。

＜做七＞の後、百日、1 周忌の儀礼と 3 周忌の儀礼も家族と親族はできるだけ参加することが要求される。

2 墓葬の変化と女性の身分帰属の最終的な確認

政府の決定により、1991 年から、浙江省の定海・普陀の大部分の地区で、火葬が実行されるようになった。土葬から火葬への転換は、葬送儀礼の内容にも変化をもたらした。螞蟻島の人々、特に年上の老人たちは、できるだけ伝統的な葬送儀礼を守りたいのであるが、やはり、現実の条件は変わったので、儀礼も変化せざるを得ない。まず、前述したの「送終」と「報喪」を行い、そして螞蟻島は火葬場がないので、遺体は一般的に亡くなった当日に、船で沈家門の火葬場に運ばれて火葬される。天気が悪い場合は、螞蟻島から沈家門への船が欠航するので、次の日に行われる。そして、家族は死者の遺骨を持ち帰るが、この時、螞蟻島の老人会の老人たちは、銅鑼や太鼓を打ち鳴らし、旧友同士の死者への見送りを表す。その後、骨箱が家の庭に置かれ、⑦⑧⑨⑩の儀礼を行う。

近年、螞蟻島の経済条件がいい島民の多くは沈家門に家を買ったので、毎年の祖先への祭祀を便利するために、墓も沈家門の公墓を選択するようになった。実は、小螞蟻島でも公墓が建てられたが、その形が 1 つ 1 つの小さい家のような納骨堂で、地元の人々は、「入土為安」という意識を持つことから、このように土の上に置かれている納骨堂では死者も家族も落ち着けず、やはり伝統的な形の墓のほうがよいと思われるのである。

葬送儀礼の内容は変化したが、意識的に、女性の実家によっても、女性の夫家によっても、この女性の身分帰属が葬送儀礼によって、夫家に属することが最終的に確認され、その以降、夫家の祖先として祀られる。それにより、女性の実家では死者を祭る義務がなくなる。地元の規則によって、何の状況にもかかわらず、女性は実家の祖先として祭られることにならず、唯一の合法的帰属が亡くなった後夫家の祖先として祭られることである。したがって、女性は老齢段階において、夫家への帰属意識が強くなるのである。女性がなくなった後、自分の帰属意識もなくなり、その帰属が女性死者の子孫の意識によって表す。例えば、Y・AX の姑は、Y・AX の舅がなくなった後再婚したが、再婚した後子供がいなかった。したがって、Y・AX の姑がなくなった後、

依然として、Y・AXの夫家の祖先として祭られる。

一方、螞蟻島のもう1つの慣習は、死者が生前と死後を合計して100歳以上になると、祭祀しなくてもいいと考えられているので、今の50代の人々は父母の世代まで祭祀し、祖父の世代はあまり祭祀しない。したがって、彼らの祖父の世代の墓はほとんど小螞蟻島にあり、父母の世代の墓の多くは沈家門にある。小螞蟻島は船でしか行けないので、毎年1回清明節の時だけ祖先祭祀が行われる(図4-8)。



図4-8 小螞蟻島における墓前で行われる墓参り
(撮影：楊宜霖)

小括

以上、舟山群島における漁村では、改革開放以降の30年の間に行っている人生儀礼の変容を見る中で、女性の身分帰属の移動と確認ということを明らかにしてきた。伝統的な漁村における人生儀礼には、女性の身分帰属が結婚儀礼を通じて実家から夫家へ表面的に移動した。その後、女性は出産の日から、自分自身も夫家も産婦の身分帰属が実家から夫家へ実質的な移動した。最後に、葬送儀礼によって、女性の身分帰属が夫家の祖先として最終的に確認した。しかし、現在の漁村での家族形態は大家族から小家族になり、人生儀礼の内容を変化するとともに、女性の身分帰属の移動も1980年代前と少し違ってきた。漁村女性は結婚すると、ほとんど夫婦で独立して暮らすから、女性の帰属意識もすぐ実家から夫との小家族に移動する。また、中国の若者はいつも姑に子供を養育を頼んで出稼ぎに行く場合、姑にとって、大家族が実際に存在しなくても、独立して暮らしている息子の小家族は意識的に夫家の大家族に属するのだろう。これに対して、嫁にとって、一時的に姑に子供を養育を頼んでも、独立して暮らしている小家族への帰属意識が強い。

- (1) 冥婚(めいこん)は、生者と死者に分かれた異性同士が行う結婚のこと。陰婚(いんこん)、鬼婚(きこん)、幽婚(ゆうこん)、死後婚(しごこん)、死後結婚(しごけっこん)などとも呼ばれる。
- (2) 指腹婚は、2人がまだ母親の妊娠中、双方の父母は約束し、もし男児と女児なら、婚約が成立するという昔の結婚形態。
- (3) 年齢、生辰八字が書いてある紙、その紙に2匹の「鰲鰲魚(ヒラメ)」のパターンに貼り付ける。夫婦が愛していることを意味する。
- (4) 一部の資料は『浙江省非物質文化遺産普查—舟山市普陀区螞蟻島集成巻』を参照した。
- (5) 昔家の中にトイレがなかったので、夜「子孫桶」をトイレに使った。
- (6) ナイフ、尺、針などが置かれる籠。
- (7) 息子と娘が両方ともいる女は「全福」と言われる。
- (8) 冠婚葬祭で式次第を読み上げる人

-
- (9) 新郎の介添人は親戚の中で、両親が両方とも生き、未婚、祝文を読める青年が担当する。
 - (10) 婚礼の時新婦を乗せるための輿
 - (11) 皇帝の車駕
 - (12) 鳳冠は、鳳の形の髪飾りであり、霞帔は霞の色の服である。昔、お金持ちの家の女の結婚時の服装、栄光を表す。
 - (13) 昔、結婚式で新婦を世話する婦女
 - (14) 昔、人の名刺
 - (15) 早く化粧し、花轎を乗るようにと催促される
 - (16) 「席子」の役割は、新婦の花轎が夫家に着いたら、新婦の足が土地に触れないように、この「席子」を土地に敷き、新婦が花轎から下りる。
 - (17) 結婚式を行う新郎の家のホール
 - (18) 新婚夫婦の部屋
 - (19) 中国語で、袋と代の発音が同じことから、五つの麻袋「五袋」は「五代」と同音になる。「伝宗接代」は、子々孫々へ受け継ぐことを意味する。「五代見面」は、五世同堂であり、つまり五世代が共に暮らすことを願う。
 - (20) 新婦が頭にかぶる赤い布
 - (21) 赤い色紙で包んだ金一封
 - (22) 自ら肉や野菜を切るという儀礼
 - (23) 婚姻儀礼の日から三日以内に新婦にいたずらをやれ、年功序列を考えなくてもいい
 - (24) 中国の神話に出てくる神の名前、毘沙門天の王子。
 - (25) 龍と鳳の形がある首にかけerアクセサリー
 - (26) 一部の資料は『浙江省非物質文化遺産普查一舟山市普陀区螞蟻島集成卷』を参照する。
 - (27) 遺体や遺骨、位牌などを安置した部屋。
 - (28) 浙江省の地方劇で、その地方の民謡から発展した。

第5章 漁村における廟の復興・祖先祭祀と女性の活動

中国には「漁文化」という言葉がある。「漁文化」とは、海や川における漁民たちが、長期の漁をする過程で、創造した物質文化と精神的・制度的文化を指す。具体的には3つの側面がある。1つは、漁をする人の漁をする道具である漁船・網・漁具、および漁の対象となる魚介類で、物質文化の内容である。2つ目の精神的文化は、漁をする過程で創造された漁民号子⁽¹⁾、漁歌、漁諺、魚に関する伝説、漁民の宗教信仰、儀礼などを指す。3つ目は、漁に伴う作業、船の操縦、網打ちなどの漁撈活動と漁民の漁獲物に関する利益分配などで、行為文化・制度的文化に属する（金濤 2012）。

その中でも、漁民の民間信仰は「漁文化」の非常に重要な地位を占めると思われる。舟山群島における民間信仰あるいは海神信仰には、主に網神、竜王、観音、媽祖（天后）と地方神という五種類の信仰がある（黄均銘 2011）。近年、舟山群島における地域の経済発展を促すため、舟山群島新区を設立してから、特に当地の観光開発が活発に行われている。そこでは、復興した廟と漁民文化が観光資源と認識され、それに伴う活動が展開されている。

1949年に建国した中華人民共和国は、1950年代から1960年代にかけて、急進的な宗教排撃を行った。その中で各地の廟も大量に破壊された。しかし、1970年代後半になって国家の宗教政策も転換した。それに伴い各地で宗教・信仰の再活性化とも形容すべき現象が進行している。今日の中国では「宗教的なもの」は基本的にすべて「迷信」であって公認されないが、生活習慣に密着した有害性の低いものは社会の進歩に伴って暫時消滅していくだろうという唯物史観的な宗教観のもとに黙認されている。また観光や地域開発などに貢献し得ると見做されたものは、「宗教」へと格上げされたり、「特色ある文化」などとして公認されたりもする（川口 2010）。一方、近年の東南中国における廟の復興は、観光の目玉として整備される廟だけに限られることではない。明・清代の村や町内会の廟ともいべき小規模な廟（斯波 2012）にも近年急速に復興が進んでいる（川口 2010）。

舟山群島における廟の復興、あるいは、宗教信仰といえ、普陀山の観音信仰に言及しなければならない。普陀山は観音道場として有名であり、別称を「海天仏国」といい、普陀山の観音信仰文化が海洋文化に一つの側面を加えている。そのため、舟山群島における宗教信仰に関する研究も、そのほとんどが観音信仰をめぐって行われている。しかし、その他の民間信仰の展開についても筆者は関心を持っている。

宗教について研究する場合、まず靈魂観・他界観という概念を確認する必要があると考える。舟山群島においても、仏教、儒教、道教などの成立宗教が存在する。しかしこの地域における人々、特に漁民の生活には、これらの成立宗教に律されていない独自の信仰とそれにかかわる生活がある。伝統的な漁村の生活をみると、漁民たちは1年の間の出漁、休漁、謝洋⁽²⁾という定期と不定期の生活リズムの中で宗教儀礼を行っていた。その祭祀対象は、祭船関老爺、天后娘娘、羊府大帝（羊府は生前有名な官であり、災難に遭った漁民を救ったことがあったため、死後海神に封じられた）な

どの諸神霊である。漁民にとって特定の教祖や教義はないが、この地域社会の生活に深く根ざした習慣的な儀礼は、こうした諸神霊を対象としてきたのである。この民俗信仰の中核としての祭祀儀礼が行われている廟は、漁村の社会結合をもたらす重要な契機の1つであると考えられる。

「村における廟をめぐる問題について、漢人社会を一義的なハードな社会とするよりは、選択肢の多様な柔構造の社会とみる方がよく、廟の結合も状況に応じて自在に紐帯を選択操作するその選択枝の1つである」と末成道男が指摘している（末成道男 1987）。

中華人民共和国建国以前の農村では、人々が自発的に組織したさまざまな結社や相互扶助組織のネットワークが張り巡らされて村民の生活を支えていた。その村落の結合の中心にあったのは村の廟であった。中華人民共和国解放の当初、全国の多数の廟と神像は「迷信」の象徴として破壊され、廟の祭りも廃止された。また、村の自発的な結社などもあまり存在しなかった。近年、改革・開放政策が進展してからは、中央の政策も緩和され、村民の自発的な活動も行われるようになり、廟や祭りも復活した。以上の内容について、三谷孝らは、中国の華北平原の農村を対象に、1940年代以降のおよそ50年間にわたる廟の村人の生活に対する意味、村人が組織していた民間結社の状況と変遷過程を分析している（三谷孝 2000）。しかし、三谷の研究は、村の女性がこの廟の復活過程の中でどのような役割を果たしたかについては言及しなかった。三谷の研究に対して、川口幸大は、広東省広州市の農村部を事例として、中国の1980年代以降に活発化した宗教・信仰のうち、政府から公認された「宗教」ではなく、また、観光資源という意味付けもない廟やそこでの儀礼に注目し、その廟の再建とそこで行われる活動から、現代中国の信仰の1つの位相として、社会主義はそれを「宗教ならざるもの」として扱い、政府が介入しない状況で実質的な宗教行為が行われていると指摘している（川口幸大 2010）。川口の研究では、廟を復興しつつある過程において、廟の運営活動をめぐる女性の役割について強調している（川口幸大 2010）。

ここまで、中国の農村での廟の復興の状況についてみてきた。しかし、漁村の廟について、あるいは、漁民の民間信仰がどういうものかということについて、胡艶紅は、太湖流域の漁民社会における在地の大型漁船漁民を対象にして、過去と現在の信仰活動を比較し、現在の大型漁船漁民の信仰の再構築から、大型漁船漁民の社会関係は、かつての血縁関係による結合という特徴から各家と香頭⁽³⁾との個人的な社会関係へと変容したことを明らかにした。さらに太湖流域の漁民社会における民間信仰の実態とその背後にみられる漁民社会の変容の中で、漁民気質は徐々に失われ、陸地の社会へと融合していく傾向があるとしている（胡艶紅 2013）。そして、胡は、同じ調査地における漁民たち自身が社会環境の変容に適応しながら、神、祖先、死者に対して継承してきた問題を「七月半」祭礼の変容を通じて、実践の側面から中国内陸における「水上居民」の社会における内在的連続性を指摘した（胡艶紅 2013）。胡の研究は、中国の漁村における民間信仰の1つの表象を分析し、廟の復興についても多少言及したが、女性の活動に関する分析は乏しい。

以上の諸研究により、本稿で対象とするのは、解放後に、螞蟻島で復興した3つの廟と、そこで行われる活動である。まず、螞蟻島の廟の歴史と復興の過程を紹介し、廟を造ろうとする組織の背景と運営活動を整理する。また、近年、螞蟻島における漁民の祖先祭祀は、毎年、清明節の墓参り以外の活動はすべて廟で行われている。この神の祭祀儀礼と祖先祭祀の活動が同じ廟で行われるということから、螞蟻島における祖先祭祀と廟の機能について考察する。さらに、これらの廟における活動において、女性がどのように活動してきたのかを明らかにする。

第1節 螞蟻島の廟の歴史

1 1949年以前の廟

1949年以前の舟山群島では、どんな漁村にも必ずいくつかの廟があって漁民の生活に重要な役割を果たしていた。螞蟻島には合計5つの廟（5つの村があり、各村が独自の廟を持っていた）があったが、解放後、天后宮と2つの財神廟だけが残っている。これらの廟の規模は、天后宮が最も大きいものであった。廟には、観音、財神、天后、三官など、中国各地で広く信仰されている一般的な神が祀られ、1つの廟にさまざまな神や仏が同居しているのがふつうであった。いずれの廟も神の生誕の日には儀礼を取り行い、そこには村の内外から数多くの参拝者が訪れた。解放前、螞蟻島は登歩島に属していたことから、螞蟻島と登歩島が3年に1回「三月半廟会」を共同主催していた。当時「三月半廟会」に参加していた組織は、登歩島における石弄塘天后宮（大帝菩薩と靈観菩薩を祀っていた）、螞蟻島における後岙の太平会と長沙塘の永勝会であった。この廟会は三日間（登歩島2日、螞蟻島1日）であり、目的は全郷の生産や生活がうまくいくようにと祈ることであった。廟の運営は、日常あるいは特定の催しの際に人々から寄せられるお金によって成り立っていた。当時の自治組織は、例えば後岙の太平会と長沙塘の永勝会のような団体が廟を中心に存在していた。一方、漁民の家々にも灶王（カマドの神）・観音・財神などのさまざまな「家庭神」が祀られ、漁民の信仰対象となっていた。

2 解放以降の廟

1949年に中華人民共和国が建国し、社会主義に基づいた新しい国家の建設に乗り出すと、「封建・迷信」の打破を掲げて、既存の信仰や宗教的な行為を弾圧したために、「宗教的なもの」を代表していた廟は、地元政府に接収され、取り壊して廃棄されていった（川口 2010）。螞蟻島の廟においても全ての神像は、「封建的迷信」の象徴として打倒の対象とされて、次々と破壊されていった。もちろん神々への儀礼を取り行うことも不可能になった。このような運動は何回にもわたり土地改革から人民公社、文化大革命の時期をと通して繰り返行われた。同時に、漁民に代々受け継がれてき

た家譜も「封建的な家族意識」を示すものとして焼却された。こうして、廟の信仰空間としての性質は完全に失われてしまった。その後 1958 年からは人民公社の生産大隊の打ち合わせ場所として使用されてきた。1980 年代初頭に人民公社が解体されると、郷政府の倉庫とされ、廟としての概観をほぼ留めないまでになっていたが、1980 年代後半には廟を再建し、儀礼も再開されるようになった。

第 2 節 廟の再建と新たな運営

1 観音信仰と海神信仰—天后宮（娘娘廟）の再建

螞蟻島の廟の中で天后と観音を祀った蘭田岙村の仙人洞岙の天后宮（娘娘廟）の儀礼は、最も規模が大きく、特に多くの人々を集めていた。舟山群島の民間海神信仰においては、2 名の天后が存在する。その 1 名は福建の湄洲に由来する林氏という海神媽祖であり、もう 1 名は、北宋時代の「狸猫換太子⁽⁴⁾」という伝説において、宋仁宗を救った女官寇承御である。舟山群島における媽祖信仰の多数は林氏という海神媽祖を指すが、一部の島において、寇承御を娘娘菩薩として祀る。青浜島の娘娘、黄龍島の天后、衢山島宋朝宮の聖母の他、螞蟻島の天后宮もその 1 つである。螞蟻島の天后宮は、清の時代の中期に建築された。伝説によると、ある日、ある船が台風に遭って壊れ、その船の中にあった泥と木彫りの人形の娘娘菩薩は、海水で泥が溶けてその中の木の枠だけを残し、螞蟻島の 1 つの洞窟の側を離れていかなかった。島の人々は、この木を拾って、洞窟の側に娘娘廟を建築した。なぜ漁民が女官としての寇承御を娘娘として祀るのかについては、多分、寇承御の女性の道徳と母性の輝きが漁民に高く評価されているからであろう。海上の作業は危険なので、つねに漁師は命の危険に去らされるため、出産は非常に重要であり、無事に子供を出産して育てると、後代を繁栄させて労働を継続できるようになる。寇承御が救ったのは赤ちゃんなので、漁民が彼女を祀るのは信仰の合理的心理欲求である。一方、寇承御の死ぬまで真実を自白しないという義侠心も漁民に尊敬されている。漁民が一般的な女官を神界の娘娘として祀るのは、みんなが同じ船で義侠心を持ち、力を合わせて海上の漁作業ができるようにと寇承御に加護を祈っていると思われる。

1980 年代の初期に、改革開放政策を実施してから人民公社が解体され、政府の宗教と民間信仰に関する政策も徐々に緩和した。そして、郷鎮企業と漁業生産の株式合作制が登場するとともに、螞蟻島の漁民たちが失われた廟の再建を求め始めた。当時の郷政府は、漁民の民間信仰に関する活動に曖昧な態度をとっていたため、それを奨励するわけではなかった。したがって、天后宮が属している蘭田岙村の船頭たちに発起され、連携を取り合って廟再建の資金として 18 万元を集め、さらに螞蟻島全島の人々も多少のお金を寄付して、1988 年天后宮の再建を実現させた。

図 5-1 から見られるように、天后宮のドアの両側には「無門有門是為仙門、似洞非洞造成仙洞」と書かれている。実は、天后は明代に、皇帝に道教の信仰を特定されて

いた。螞蟻島の寇氏天后は、仏教とは違う独創的なものかもしれないが、いわゆる「仏亦可道、道亦可仏」のため、具体的な原因はさらに検討する必要がないと思っている。とにかく、螞蟻島の天后宮においては、娘娘菩薩（寇氏天后、図5-2）を祀る他、観音菩薩（図5-3）も祀っている。漁民たちは、出漁前、謝洋、1年の生産や生活の順調などを祈って焼香参拝する。郷政府は、天后宮の再建には一切の資金提供を行うことがなく、廟の維持管理と儀礼の挙行にも参与しない。



図5-1 天后宮（筆者撮影）

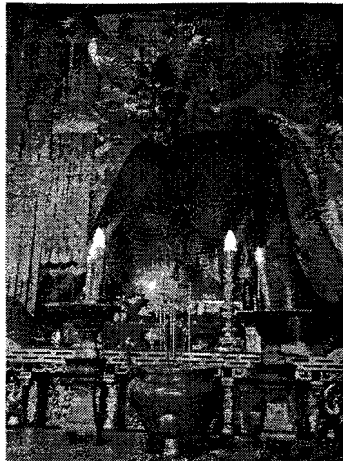


図5-2 娘娘菩薩（筆者撮影）



図5-3 観音菩薩（筆者撮影）

2 再建後の天后宮の管理

再建された後の天后宮の管理は、蘭田岙村の女性たちがボランティアとして担っている。天后宮にはおよそ5人ほどの女性たちが常に出入りしており、廟の開け閉めや清掃、ろうそくや線香など祭祀用品の補充、儀礼当日の料理の準備などを行っている。彼女たちの多くに共通するのは、60歳以上の年配者で、定期的な仕事に従事せず、時間的に余裕があり、信仰心に篤く、神事についての豊富な知識をもっている点である。また彼女たちは螞蟻島の郷政府とは関わりなく、全くの自発的な意志によって天后宮に関わっている。



図5-4 天后宮を維持管理する女性（筆者撮影）

例えば、図5-4のCさんは、68歳、螞蟻島で生まれ、現在は仕事をせず、2人の息子と1人の娘は皆結婚して独立している。Cさんは娘娘菩薩、観音菩薩の神事に関する知識をかなりもっているため、天后宮の管理者の女性チームのリーダーとなっている。旧暦の毎月1日・15日にCさんは必ず天后宮を訪れて維持管理に従事している。さらに、螞蟻島の住民の葬送儀礼や、天后宮で行う特定の儀礼の際にも必ず中心的な役割を果たしている。天后宮の日常的な管理は、Cさんのような女性たちの自発的な働きによって支えられているのである。

一方、天后宮の運営に必要な費用はすべて、参拝者からの寄付、線香・蠟燭などの売上金、そして毎年数回ある儀礼の際に得られる収益から賄っている。例えば、毎年娘娘菩薩の誕生日の儀礼を例にすると、収入は、儀礼の前に螞蟻島全島の住民が寄せる寄付（一般的に、個人名義での寄付は1人で120元で一節にすることを個人普仏と呼び、集団名義での寄付は1人で10元、12人を一節にすることを中心普仏と呼ぶ）と儀礼当日に提供する饅頭などの素食の食べ物の売上金であり、一方で支出は線香・蠟燭などの祭祀用品、供物と食事会の食品、天后宮の内の飾り物などである。毎回の儀礼も天后宮の運営の重要な収入源になっている。

3 大興岙財神殿の再建と管理

天后宮が再建されてから2年後の1990年に、大興岙村の船頭たちも、もともと財神廟が存在した場所に大興岙財神殿の再建を実現させた。その資金は、船頭の寄付と螞蟻島の全島住民からの寄付、天后宮がそれまでに得た収入が大部分



図 5-5 再建された大興岙財神殿

図 5-6 ⁽⁵⁾ 造船所（筆者撮影）

を占めている。2007年には、造船所が大興岙財神殿の土地を占領してしまったため、造船所に発起させ、螞蟻島の他の小企業と住民の寄付によって、2008年に大興岙財神殿（図 5-5、図 5-6）が螞蟻島の山の上にもう1回再建された。

大興岙財神殿には、財神爺（文財神と武財神）、土地公公と土地婆婆、医の神であ



図 5-7 土地公公・婆婆と天医菩薩
（筆者撮影）

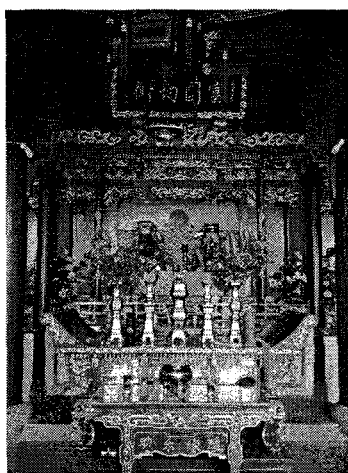


図 5-8 武財神と文財神
（筆者撮影）

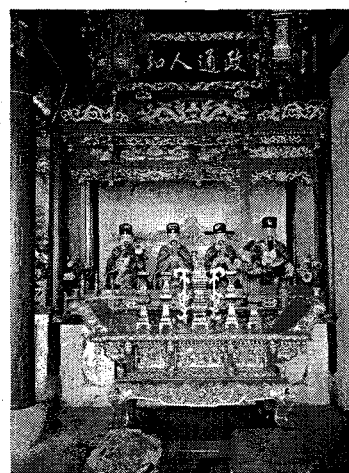


図 5-9 三官菩薩と葛仙翁菩薩
（筆者撮影）

る天医菩薩、平安の神である天官（堯）・地官（舜）・水官（禹）という三官菩薩と葛仙翁菩薩（図 5-7, 図 5-8, 図 5-9）を祀っている。

大興岬財神殿の管理と運営は天后宮と同じように、大興岬村の 5 人ほどの女性たちがボランティアとして担っており、廟の開け閉めや清掃、ろうそくや線香など祭祀用品の補充、儀礼当日の料理の準備などを行っている。大興岬財神殿の儀礼は天后宮と比べるとそれほど大規模ではなかったが、それでも旧暦の毎月の 1 日、15 日に催される儀礼の際にはたくさんの人々が集まった。特に、大興岬財神殿に天医菩薩を祀っているため、地元の住民の家で誰かが病気になった場合、皆でこの廟に参拝することが多く、病人が早く治るようにと祈る。大興岬財神殿の運営に必要な費用もすべて、参拝者からの寄付、線香・蠟燭などの売上金、そして毎年、数回の儀礼の際に得られる収益から払っている。大興岬財神殿の管理者は寄付した人々の名前と寄付金の数をすべて財神殿の庭壁「功德碑」に記録している。

4 後岬財神殿の再建と管理

天后宮と大興岬財神殿が再建されてから 1 年後の 1991 年に、後岬村の船頭たちも後岬財神殿の再建を計画した。そして 1992 年、船頭たちと全島の人々の寄付金と天后宮と大興岬財神殿の一部収入によって、後岬財神殿が再建された。2012 年には、それまでの 10 数万元の収入と周辺住民の寄付金によって、もう 1 回修繕された。（図 5-10）



図 5-10 修繕した後岬財神殿（筆者撮影）

後岬財神殿には、財神爺（文財神）、土地公公、土地婆婆、医の神である天医菩薩、平安の神である天官（堯）・地官（舜）・水官（禹）という三官菩薩と葛仙翁菩薩を祀っている。これは大興岬財神殿と同様である。

後岬財神殿の管理は、天后宮や大興岬財神殿と同じように、後岬村の女性たちがボランティアとして担っている。後岬村にはおよそ 10 人ほどの女性たちが常に入出入りしており、廟の開け閉めや清掃、ろうそくや線香など祭祀用品の補充、儀礼の当日の料理の準備などを行っている。その管理者のリーダーは、後岬村において最も信仰心の篤く、神事についての豊富な知識をもっていると皆に公認されている。また彼女たちも螞蟻島の郷政府とは関わりなく、全くの自発的な意志によって天后宮に関わっている。

以上の分析から、螞蟻島の 3 つの廟の管理と運営は、一般的に、廟が属している村の女性たちが自発的に行われており、行政からは独立している。しかし、廟の儀礼に参加する人にはあまりこの村という区別がない。螞蟻島の全島の多くの人々、特に女性たちは、春節や特定の儀礼の時、3 つの廟のすべての神や菩薩に参拝する。

第3節 儀礼の再開と女性の活動

ここでは螞蟻島の再建された廟で行われている儀礼に着目する。この三つの廟の儀礼は、共通性と独自性がある。共通性としては、旧暦の毎月の初一、十五に催されることで、中国全土において共通する。その儀礼は廟に集う人々をめぐって行われている。前日までに、先述した廟の管理者としての女性たちが事前の準備を行い、当日は、経を読む人が経を読み、廟に参拝してきた人々が線香を上げて、最後に食事をとるという形式で進めている。しかし、天后宮殿と二つの財神殿は祀っている神や菩薩が異なるため、各廟には独自の儀礼がある。具体的な毎年螞蟻島の年中行事と儀礼は表5-1のようである。

表 5-1 螞蟻島の年中行事活動

筆者作成

行事名	旧暦の月日	儀礼の内容
春節拝菩薩年	正月 1 日	3つの廟の全ての菩薩を参拝する
土地誕	2 月 2 日	後岫と大興岫の土地公公と土地婆婆を参拝する
後岫財神菩薩誕	3 月 15 日	財神菩薩の誕生日を祝う
大興岫財神菩薩誕	3 月 16 日	財神菩薩の誕生日を祝う
天后宮娘娘菩薩誕	3 月 23 日	娘娘菩薩の誕生日を祝う
清明節	西暦 4 月 5 日前後	祖先の墓参りを行う
七夕	7 月 7 日	槿の葉で髪を洗う
死人節	7 月 15 日	廟で経を読み、紙衣靴などを作り、死者と縁を結ぶ (5 日間)
冬至	西暦 12 月 22 日前後	廟で経を読み、死者と縁を結ぶ
謝年	12 月 23 日～ 12 月 30 日	12 月 23 日に竈神を送り、12 月 24～30 に財神と喜神を祭り、 12 月 30 日に竈神を迎える。
更生	黄道吉日	自己或いは夫婦とも、燈籠をつけ、経を読む

この中で、それぞれの廟に祀っている菩薩の誕生日はそれぞれの廟の最も重要な儀礼である。大興岫財神殿の財神菩薩の誕生日は旧暦の 3 月 15 日、後岫財神殿の財神菩薩の誕生日は旧暦の 3 月 16 日、天后宮の娘娘菩薩の誕生日は旧暦の 3 月 23 日である。

1 大興岫財神殿と後岫財神殿の儀礼

まず、螞蟻島の大興岫財神殿と後岫財神殿の財神菩薩の誕生日に行われた儀礼をみる。大興岫財神殿の財神菩薩の誕生日は旧暦の 3 月 15 日であり、後岫財神殿の財神菩薩の誕生日は旧暦の 3 月 16 日である。しかし、なぜ同じ財神菩薩なのに、その誕生日が違うのか、後岫財神殿の管理者に聞いたところ、「大興岫財神殿の財神菩薩は武財神で、私たちの後岫財神殿の財神菩薩は文財神なのである」というように異なるものであると教えてくれた。

そう言われても、筆者は、同じ日に儀礼を行うと、訪れてくる人が少なくなるからかもしれないと考えている。この2つの財神殿で行う儀礼は期日が違うが、儀礼の準備活動や、儀礼の内容と過程は大体同じである。ここでは、後吞財神殿の財神菩薩の誕生日に行われている儀礼についてみていく。

儀礼の数日前から、螞蟻島の船頭やお金持ちの人は必ず財神殿の管理者のリーダーを訪ねて、今回の儀礼の主要な寄付をする人になりたいという気持ちを伝える。もちろん、儀礼を行うための大部分の費用と儀礼後の食事会も主催することになる。そして、管理者のリーダーは、他の管理者を召集して

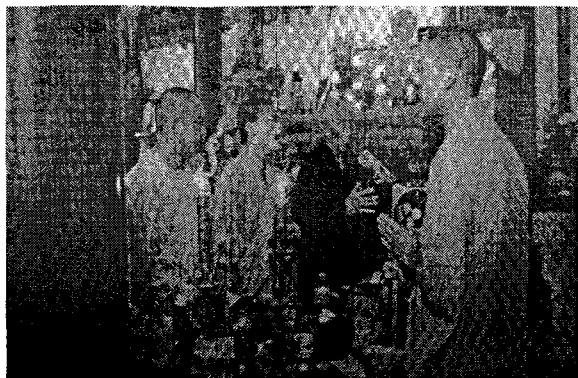


図 5-11 経を読んでいる僧侶

(写真：螞蟻島文化站提供)

打ち合せをし、具体的な準備活動を検討する。儀礼の前日、普陀山から僧侶を招き経を読んでもらい(図 5-11)、管理者たちは、儀礼の当日に必要な線香、蠟燭、供物(豚肉、魚、果物など)などを用意する。当日の朝5時から参拝に訪れる人々が次々にやって来て、財神菩薩と他の神様に供物や寄付金を捧げて祈り、蠟燭の火で、紙銭などの紙製の祭祀用品に火をつけて、炉の中にくべていく。10時ごろに、主催の人と家族、親戚は財神殿に行き、廟を訪れた人々と挨拶し、廟の管理者たちに寄付金を渡して名前を記入してもらい、線香を上げ、紙銭を燃やして財神菩薩と他の神様を参拝し、主催者の家族全員の健康、財運の向上、ビジネスが活況を呈するように祈る。その後、廟の管理者たちと手伝っていた人々が、廟の中と廟の前にテーブル

(10脚)と椅子を設置し、食器や食べ物を運ぶなど、儀礼の後の食事会(図 5-12)の準備を始める。写真から、儀礼に参加した人々はほとんど女性であることがわかる。12時になると食事が始まる。料理は、豚肉や、魚、エビなどを使った盛大な宴席といえる。その中には、招いた僧侶のテーブルと素食も用意する。



図 5-12 財神廟儀礼後の食事会場面

(写真：螞蟻島郷政府提供)

食事会に参加する人々の大部分は、主催人の家族、親族、隣人であり、食事は約一時間半ほど続き、終了の時、参加者の一部の人々は主催人に挨拶して名残りを惜しんでいる。

財神菩薩の誕生日以外に、もう1つ「更生」という儀礼が財神殿で行われる。具体的には、依頼人(50歳以上の人)は、万年暦で調べると、一般的に2ヶ月に1回ある「黄道吉日」を選び、廟の管理者に頼んで、「更生」という儀礼を行う意思を表し、

儀礼のためのお金を管理者に渡す。儀礼の前行う日に、廟の管理者としての女性たちは、廟を清掃して、蠟燭や線香の補充などの準備活動を行い、もし依頼人が頼んだら、沈家門の専門的な「更生」を行う人を招くことも勧める。儀礼の当日は夜七時から始まり、依頼者は、自分あるいは夫婦の名前が書いてある燈籠を持ち、頼んだ「更生」を行う専門の人（4～5人ほど）に経を読んでもらう。大体1時間半ぐらいで儀礼は終了する。この儀礼の目的は、主に自分が死んだとき、冥途の道中にたくさん燈籠があれば、閻魔殿への道を照らし、迷子にならず、悪い空間に行くことがないようにと祈るためである。そして、供物は果物、お菓子、自己の好きな食べ物を用意し、また紙銭も燃やす。この紙銭も、自分が死んだら冥途の管理人にあげて、自分が生まれ変わる時によい場所へ更生するようにと祈るためである。

2 天后宮の儀礼

財神殿の財神菩薩の誕生日の儀礼は、上記のように廟を管理している女性たちが中心で運営し、呼ばれた専門に経を読む人が儀礼を執行して、人々がそこに参拝するという形式で進められていた。これに対して、1週間後の旧暦の3月23日に、娘娘菩薩の誕生日を祝う儀礼は、どうだろうか。具体的なことは、Cさんにより紹介されていた。儀礼の数日前から、管理者のリーダーは、すべての管理者を召集した打ち合わせの時に具体的な準備活動を検討し、螞蟻島の住民たちに儀礼のための寄付金を募る。そして、儀礼の前日までに、管理者たちは、廟の収入と募った寄付金を使い、儀礼の当日に必要な線香、蠟燭、供物（饅頭、果物、餅など）などを用意する。最も重要な廟の庭でテントと経を読むための机（20脚）と椅子を用意することである。そして、桃花から来た専門に経を読む人が、儀礼前日の晩から当日の正午まで数回「太平経」を読みあげる。当日の朝5時から、参拝に訪れる人々が次々にやって来て、娘娘菩薩と観音菩薩に供物や寄付金を捧げて祈り、蠟燭の火で、紙銭などの紙製の祭祀用品に火をつけて炉の中にくべていく。これらの祭祀用品は螞蟻島の店舗で購入でき、もちろん天后宮でも用意してあり購入できる。大体10時ごろ、今回の儀礼において最も多くお金を寄付した人が、太平経を読む人と廟の管理者たちと一緒に娘娘菩薩の前に集まってきて、女性合計15人ほどが蠟燭を1人ずつ受け取り、太平経を読みながら、紙銭に火をつける。大体15分ほどの後、太平経を読みながら、他の人々も娘娘菩薩に次々に参拝し、家族の健康や出漁の順調などを祈る。訪れる人々は正午まで続き、同時に管理者たちが儀礼の終わりに廟の外に用意したテントの中での食事会のために、料理（すべての料理は素食である）



図5-13 天后宮儀礼後の食事会場面

（写真：螞蟻島郷政府提供）

を準備させる。また、もう1つのテーブルにも料理を用意し、経を燃やす。これは死んだ人に縁を結ぶためだという。特別参拝客のほとんどは螞蟻島の人やその親戚などであり、外地からの観光客は少ない。ここで食事会（図5-13）に参加する人々（写真は女性ばかりであり、あまり男性の姿が見られない）は必ず多少のお金を寄付する。もし寄付しないと、娘娘菩薩に負債を負うようになり、将来悪いことが起るかもしれないと考慮される。

財神殿の儀礼と天后宮の儀礼を比べると、3つの面白い点に気づいた。1つは、財神殿で行われる儀礼は、個人あるいは一家族のためにという「私人」の雰囲気が高く、天后宮で行われる儀礼は相対的にみんなのために、あるいは「公衆」の感じが強いことである。もう1つは、財神殿で祀っている神様は道教に属するのに、儀礼の時仏教の僧侶を招くようになったことである。それに対して、天后宮で祀っている観音菩薩は仏教に属するのに、儀礼の時読んでいた「太平経」は道教の経典である。この見かけ上の矛盾あるいは不調和な表象の中に、何か深い意味があるのだろうか。おそらくいわゆる「仏亦可道、道亦可仏」が最良の答えなのではないかと思われる。そして最後の面白い点は、以上の廟に関する活動に参加する人々はほとんど女性であり、あまり男性の姿が見えなかったことである。なぜかと地元の人に聞いたところ、「廟へ行って、神様や菩薩を参拝するのは女性のすることだ、男性たちは参加しない、または参加したくないといってもいい」と教えてくれた。この状況は、おそらく漁村における男女がそれぞれ「責任ある事を司っている」ということが言わなくてもはっきりしているからであろう。

第4節 祖先祭祀と女性の関与

東アジアで相対視できる靈魂観・他界観の存在といえば、神・鬼・祖である。これは頗る中国的・漢族的概念であって、神＝人間との系譜関係がなく人間にプラスの利益をもたらすもの、鬼＝人間との系譜関係がなく人間にマイナスの災厄をもたらすもの、祖＝人間との系譜関係があり人間にプラスの利益もマイナスの災厄ももたらすもの、と定義される（渡邊欣雄 1989：31）。靈魂観・他界観の神・鬼・祖という概念により、廟で祀っている神・仏に関する舟山群島における漁村の民間宗教については、前文のように研究した。ところで、鬼と祖先のことは別のテーマであり、一般的には廟との関係がなく、宗族の祠堂、または各家の家堂などと関わっている。しかし、今回の調査地の螞蟻島で祖先祭祀の一部の儀礼を神・仏を祀っている廟で行っていることは、筆者にとってとても興味深い。「百善孝為先」——親孝行は一切の善行の基盤である。また、「不孝有三、無後為大」——不孝は3つあるが、そのうち無妻に子なし、先祖を祀れないことが、最も重大である。この言葉は漢民族の倫理孝道を極端に表現をしている。祖先は、その父系子孫あるいはその家族によって祭祀されるべきものであり、このためには息子を得ることが、親そして祖先に対する第1の義務である（植野弘子 2000：155）。ここでは、舟山群島における漁村の靈魂観・祖先祭祀のあ

り方を述べ、さらに、女性たちが廟の復興の中で活躍していることに対して、祖先祭祀の中でどのような役割を果たしているのかも探求していきたい。

1 伝統の祖先祭祀

漢民族の靈魂観・他界観における祖先と「鬼」との区別が「子孫」の有無によって定義されている。「子孫」とは父系男性子孫である。男性子孫は祖先に対する祭祀の権利と義務が同じであり、これは「男子均分相続」の原理に基づいている。女性は祖先祭祀に参加しても祭祀を継承していくことはない。

祖先祭祀の対象となっているのは、墓と位牌の2つであり、墓参りはまた「請」と「祭」の2種類がある。

「請」は、個人あるいは家庭を単位として、世代が近いの祖先に祭祀することを指し、一般的に年初、清明節、冬至、死者の誕生日と命日に行われる。家庭を単位としての祭祀の対象は一般的に祖父の世代までとなり、もっと上の世代の祭祀は「公産(家族共有財産)」がなくなるまで行われる。祖父以上の世代からの祖先は、もはや家庭単位の祭祀の対象ではなく、家族全体の祖先として祭祀される。年初の祭祀は「歳祝」と呼び、一般的に旧暦の正月の3日から15日の間の吉日に行われる。墓参りの時は必ず爆竹を鳴らす、これは風水思想により、墳墓が「龍脈」の上に建てられ、爆竹の音が臥龍を目覚めさせることができ、そして、相続人の繁栄を祈ることになる。墓参りの時、線香、蠟燭、お酒、供物(丸形のご飯、豚肉、豆腐1丁ずつ、グラス2個、箸2対)と紙銭を用意する。

「祭」は、宗族あるいは家族全体による一族のすべての祖先のための祭祀儀式であり、毎年清明、冬至前の3日間に行われ、「房」を単位として順番に主催する。当直の「房」は、祭祀当日の供え物(豚などの贅沢な供物)、各種祭器を用意する。また、当直の「房」の男性は全員必ず参加し、他の「房」の男性成員もできるだけ参加する。女性が祖先祭祀の墓参りに参加することは許されなかった。

解放前、螞蟻島の墳墓は全て本島の山の上に建てられたため、全ての祭祀活動も墓の前で行われたが、解放後、「祭」という宗族あるいは家族の大規模な祖先祭祀の活動はもう行われなくなり、祖先の存在も否定され、親族間で同じ祖先を持つものであるという観念も薄れるようになった。特に1958年「平墓運動」を行い、螞蟻島の全ての墳墓は大螞蟻島から小螞蟻島へ移動させられ、螞蟻島の「死んだ人と生きる人」は「分島居住」という慣習を形成した。小螞蟻島は船でしか行けなく、交通が不便なので、祖先祭祀の墓参りは毎年清明節の一度のみ行われている。また、現行の祖先祭祀活動はほとんど家庭単位で行われ、女性が墓参りに参加できないという認識も薄れ、ある時から女性も祖先祭祀に参加し始め、だんだん祖先祭祀活動の主要な担当者になってきた。

2 現代の祖先祭祀と女性の活動

螞蟻島における毎年の祖先祭祀は、清明節にだけ墓参りが行い、それ以外の祖先祭祀は全て廟で行う位牌祭祀となる。近年、螞蟻島の経済条件のよい島民の多くは沈家門に家を買ったので、毎年の祖先への祭祀を便利にするために、墓も沈家門の公墓を選択するようになった。実は、小螞蟻島でも公墓が建てられたが、その形が一つ一つの小さい家のような納骨堂で、地元の人々は「入土為安」という意識を持つことから、このように土の上に置かれている納骨堂では死者も家族も落ち着けず、やはり伝統的な形の墓のほうがよいと思われるのである。また、現在の螞蟻島の慣習は、死者が生前と死後を合計して100歳以上になると、祭祀しなくてもいいと考えられているので、今の50代の人々は父母の世代まで祭祀し、祖父の世代はあまり祭祀しない。



図 5-14 螞蟻島における清明節で行っている墓参り

(撮影：楊宜霖)

したがって、彼らの祖父の世代の墓はほとんど小螞蟻島にあり、父母の世代の墓の多くは沈家門にある。ここで小螞蟻島での清明節の墓参り（図 5-14）だけに言及する。

① 清明節の墓参り

清明節は西暦の毎年4月5日前後とされ、祖先の墓参りが行われる。現在、螞蟻島の清明節の墓参りは昔ほど重視されておらず、昔の墓参りが家庭の男性全員、あるいは家族の「房」を単位として男性全員が参加して行われたのに対し、今日の実況は家庭の中で誰か暇な人が墓参りに行くことにするという状況である。一方、近年、男性は出稼ぎに行く人が多くなり、清明節にあまり帰れなくなったため、墓参りを行う責任はほとんど女性が担うようになってきた。



図 5-15 L家の清明節の墓参り（撮影：楊宜霖）

例えば、図 5-15 はL家の清明節の墓参りを行っている場面である。L家の姑と嫁は、清明節の朝7時から、螞蟻島の郷政府が用意した船で小螞蟻島へL家の祖先の墓参りに行った。L家の舅と息子は当日沈家門で出稼ぎしていたから、墓参りに参加しなかった。姑と嫁は供物（清明節の3日前から用意した10種類の料理、十組

の碗と箸、果物、餅、紙銭、経、竹の棒など）を捧げた。祖先の墓に着いたら、まず一部の紙銭を竹の棒でつなげて、墓の上に挿し、墓前の石の机に供物を置き、線香と蠟燭を上げ参拝した。その後、用意した紙銭と経が供物の前で燃やされるとともに、祖先たちに「お金を送ってきたよ、取ってくださいよ」という。最後は、墓の周辺を草むしりをした。以上の儀式は大体1時間かかり、終わったら船で戻った。

② 廟で行う祖先祭祀—旧暦七月半節

毎年、螞蟻島における清明節の墓参り以外の祖先祭祀（命日、旧暦七月半節、冬至に行う祭祀）は全て廟で行う位牌祭祀となり、その中で、旧暦七月半節が最も盛大である。旧暦7月10日から7月15日までの5日間で、螞蟻島の女性はほとんど3つの廟で経を読みに行く。各廟で経を読む人は一般的に40～50人いる。その5日間の中で、2日間は菩薩のために経を読み、菩薩に螞蟻島の全島が平穏無事であるようにと保護してもらうのである。他の3日間は、子孫がいない死者のために経を読み、死者の痛みがなくなるようにと祈る。7月11日の午後、女性たちは死者のために紙服、紙靴などを作り、午後3時ごろ、廟の外で、すべての紙製祭祀品を焼き、死んだ人と縁を結ぶ。7月12日、女性たちは、自分の祖先たちに料理を用意し始める。7月15日に、女性たちは、黄色の紙に、祖先の名前、生年月日時、死亡年月日時を記し位牌に相当したものを作り、廟に置き、供物を廟の神壇に供え、焼香し蠟燭を点して参拝する。そして、祖先のために経を読み、経、紙銭、位牌と一緒に燃やして祖先を祀る。その後、供物を持ち帰り、その晩の食事の際に家族で分けて食べる。旧暦七月半節と同じように、祖先の命日、冬至に行われる祭祀儀礼も全て廟で完成する。廟で行う祖先祭祀に関する活動はほとんど女性が担い、男性はあまり参加しない。

廟で行う祖先祭祀からみると、螞蟻島の人々は仏教に深く影響されていることがはっきりしている。祖先のために廟で経を読み、祖先の罪を消除させ、逆に子孫にもっと福と保護とを与えられると螞蟻島の人々は信じている。また、廟での祖先祭祀は主に女性が担っており、螞蟻島の漁家における女性の役割は昔より非常に重要になってきた。

3 祖先祭祀と女性の関与

伝統の祖先祭祀は漢民族において、父系的な祖先を祀り、父系的に連続する男性によって祭祀され、そ執行される場合も男性を中心に行われている。女性は結婚しても、夫家においても祖先祭祀の担い手にはならないが、祖先祭祀儀礼の準備活動、例えば供物の用意などが主に女性の責任であり、実は、女性は祖先祭祀において完全には排除されているわけではない。

螞蟻島における現在の祖先祭祀からみると、いつからか女性は祖先祭祀活動において、重要な役割を果たしてきた。具体的には、女性が婚姻によって祖先として子孫に

祭祀され、また、祭祀者として、実家の祖先と結婚した夫家の祖先を祀るという2つの角度から分析する。

ここでは、第3章で紹介したY・AXを事例として、現代螞蟻島の祖先祭祀における女性の関与を分析する。Y・AXと夫家の家族構成(図3-9)と具体的な状況は第3章で触れたが、毎年、Z・LD家の祖先祭祀は、螞蟻島の人々と同じように、清明節に一度のみ墓参りを行い、他の旧暦七月半節と冬至などに廟で祖先祭祀を行っている。Z・LD家の祖先といえば、Z・LDの祖父母は言うまでもなく、Z・LDの両親、Z・LDの義理の父母(父の姉夫婦)と合計6人である。一方、Y・AXの両親は息子がいなかったため、毎年の祖先祭祀の場合、Y・AXが両親を祀っている。Z・LDの母は再婚したが、再婚後子供はなかったから、Z・LDが相変わらず母を祖先として祀っている。Z・LDの継父はZ・LDの家で亡くなったため、時には、母を祀るとき、ついでに継父にも紙銭を燃やすことがある。また、Z・LDの義理の父母は子供がなかったため、Z・LDが養子として義理の父母を祀っている。現在、毎年Z・LD家の祖先祭祀の清明節の墓参りは、ほとんど次男夫婦が担っている。長男はわざと桃花からもどらないことが多い。清明節以外に廟で行う祖先祭祀は、Y・AXと次男の嫁が責任を負っている。

① 祖先としての女性

伝統的な祖先祭祀の原理により、女性は生命の最後の時に至り、葬送儀礼を通じて、その女性の身分帰属が実家から夫家への移動が完成するようになった。葬送儀礼以降、この女性の身分帰属が完全に夫家に属することになり、夫家の祖先として祀られ、実家の人は死者を祀る義務がなくなる。Z・LDの祖母はこういう普通の状況である。女性は結婚後、息子がいない場合には、養子を取り、死後は養子に祀られる。例えば、Z・LDの義理の父母は子供がなかったため、Z・LDが養子として義理の父母を祀っている。もし、息子となる者がいない場合には、娘に祭祀されることがある。事例のとおり、Y・AXの両親は息子がいなかったため、毎年の祖先祭祀の場合、Y・AXは娘として両親を祀っている。以上の事例から、女性は、実家から離れ、夫に付随して夫家の祖先として祀られることが、結婚することによって決められ、自分が直接子孫を産むかどうか関わっているわけではない。Z・LD家の祖先祭祀の現状をみると、1つの特殊な事例がある。それはZ・LDの母は再婚しても、元のZ・LD家の祖先として祀られていることと、Z・LDの継父は表面的にZ・LD家の祖先にならないが、実際にはZ・LDに祀られていることである。

② 祭祀者としての女性

伝統的な祖先祭祀の原理により、祭祀は男性を中心に行い、女性は一般的に主要な祭祀者とはならない。しかし、結婚前においては、家庭の中に息子がいない場合、女性も出生家族の祖先を祀ることがある。例えば、Y・AXは未婚時代に、兄弟がいなか

ったため、当時の祖先祭祀がすべて母と4人の娘が一緒に行っていた。これは家に男子がいない場合、仕方がないというやり方である。

一方、近年では、蟻蟻島の男性たちが出稼ぎにいくことが多いので、実際の祖先祭祀の執行者が女性となる傾向がある。特に、廟で行う祭祀においては、ほとんど女性が執行している。例えば、Z・LD家の祖先祭祀の執行者はY・AXと次男の嫁である。祭祀者としての女性は、その義務は男性の特別な違いはない。男性と異なるのは、女性の身分帰属は婚姻によって実家から夫家へ移動し、夫に付随して夫家の祖先祭祀を行い、さらに葬送儀礼の後、夫家の祖先として祀られていくことである。Y・AXと次男の嫁は、未婚時代、娘として出生家族の祖先を祭祀し、結婚後は夫家の家族の祖先を祀ることになる。

小括

以上、舟山群島の漁民の解放前後の60年ぐらいの廟の歴史と、廟を造ろうとする組織の背景と運営という復興の過程、「漁村」を代表して祭祀活動を行っている廟で行う活動をまとめてきた。中国解放前の漁村における漁民信仰では、天后信仰を代表とする舟山群島の地方神を信仰する漁民が自発的に組織した結社や互助のネットワークが村民の生活を支えていた。その村落の結合の中心にあったのは村の廟であった。解放の当初、全国の多数の廟と神像は「迷信」の象徴として破壊され、廟の祭りも行われなくなった。漁村の自発的な結社などはあまり存在しなかった。しかし、近年、改革・開放政策が進展してから、廟を再建し、漁民の自発的な活動も多くなり、廟で行う儀礼も再開され、漁民信仰が再構築されてきたといえる。

(1) 漁民が大勢で労働をするときに合わせて歌う歌

(2) 出漁を終わり、家に帰る

(3) 廟の中で、線香を管理する人々のリーダーである。

(4) 寇承御は、旧名寇珠、宋真宗の女官である。宋真宗の劉氏の妃は、李氏の妃が太子を産んだことに嫉妬し、狸猫（ヤマネコ）の皮をむいて太子と替え、寇珠に太子の首を絞めるように命じた。しかし、寇珠は悪いことをすることが忍びないため、太子を化粧箱の中に入れて救った。その後、劉氏の妃が真実に気づいたから、寇珠を拷問しても、寇珠は自白せず、最後に自殺してしまった。救われた太子は仁宗皇帝になり、真実を知ると、忠烈祠を建て寇珠を祀る。

(5) 大興岙財神殿の1人のデザイナーYさんが大興岙財神殿の前で造船所を見ながら筆者にこの大興岙財神殿の変遷してきたことを紹介していただいている。

終章

第1節 本論の総括

本論においては、舟山群島における螞蟻島という漁村を事例とし、その中で暮らす女性の役割に注目し、今日まで漁村社会がどのように変容してきたのかを第2章、3章、4章、5章にわたって明らかにしてきた。具体的には、まず漁村の工業化と漁村人口の流動化が女性の労働参加にどのように影響してきたのか、その中で女性の自己認識がどのように形成されてきたのかについて論じた。それから、漁村社会の変容する過程において、漁民の家族生活、人生儀礼、信仰祭祀活動はどのように変化してきたのかについて様々な側面に着目し、その中の女性の役割を論じてきた。本章では、これまで解明できた点をもう一度整理した上で、現代舟山群島における漁村社会の変質・民俗の変容と女性の地位と役割を分析し、結語としたい。最後に、今後舟山群島における漁村社会の予察を試みる。

1 漁村女性の労働との自己認識の変化―漁村の工業化・流動化と「漁嫂像」

中華人民共和国解放前、船での漁撈作業は体力の要求が高く、「女が船に乗ると船が転覆する」という観念がある。また女性の生理のため、船での生活は女性の体によくないなどの原因で、漁村女性は船に乗れないという禁忌のために、漁撈作業にまったく参加しなかった。漁撈作業以外の一切の家事や補助的な労働は、例えば、網を洗う、直すなどすべて女性の担い手であった。しかし、漁村女性の労働比重は重かったが、その労働に対する収入は少なかったため、長い間女性は家庭の中の地位が低く、彼女たちの労働も軽視され、まるで「牛馬」という苦役にこき使われる人のような存在であった。これに対して、鶴理恵子が日本の伝統的な農漁村における女性は、「労働の主体性を奪われ、『ただ牛や馬のように使われるだけだった』という『テマ』である存在であった」と指摘している。したがって、中国の「牛馬」であった漁村女性と日本の「テマ」であった農漁村女性とは全く同じの存在であると考えている。この状況は、イリイチも『シャドーワーク』の中で、「産業化以前の社会では、サブシステムに関するすべての仕事がジェンダーによって割り振られ、男女が競合することなく『大人になる』文化であった。『パックス・エコノミカ』の下での産業的労働（ペイド、アンペイドとも）はジェンダーレスである。しかし、高賃金の労働には先ず男がつき、女は残された低賃金労働か無給（アンペイド）のシャドウ・ワークにつくことを強いられる」（イリイチ 2006）と指摘している。

人民公社の成立後、漁村は漁業を全力で発展させるとともに、農業、林業、牧畜業、副業も発展させていたので、生産の労働力が非常に不足し、女性は家の外へ出かけ、男性と一緒に公社の労働に参加できた。特に、漁村の機帆船化を実現した後、遠洋漁業生産を発展させようとして、男性労働力が足りなかったため、漁作業は漁業労働力

の体力への要求は伝統的と比べて低くなり、女性にも男性と一緒に遠洋漁作業に参加できるようになった。また、女性は船に乗れるだけではなく、「船老大」で「婦女号」の全員を管理できるようになった。人民公社時期、女性は男性と共同労働ができるようになり、「時間労働点数制」で女性労働も家庭収入加わるようになり、家庭の中の決定権をも持てるようになり、女性の家族内での地位が向上した。一方、女性は人民公社の“学習班”に参加することによって、「漢字」を勉強し始めたので、国家の漁業政策や法律、例えば『婚姻法』、『労働法』などについてわかるようになり、自分自身の法律レベルの権利と義務が理解出来るようになった。一部の女性は人民公社での団体活動や政治活動にも参加し始め、婦女主任などの幹部にもなった。また、伝統的には、家長が家庭を管理していたが、小家族になってくると、夫婦で管理するようになり、その中で、女性が家庭の経済を管理し始めた。こうして、女性は、家庭内の収入源として経済的な貢献をしながら、だんだん家庭での経済を掌握・管理し始め、家庭の中での決定権を持つようになった。さらに、村の中でも様々な活動に参加し始め、彼女らの自己認識も高揚し、女性も男性と平等であるという自信から、女性の地位は向上した。

1980年代、中国では、人民公社制度が解体し、全国的に改革開放政策を行い、市場経済と競争原理を導入し、高度経済成長を達成した。現在までずっと続いている漁業生産の株式合作制が登場した。人民公社体制のもとでは、公社以外の職に就くことは不可能であったが、各戸（漁家）経営請負制の導入により漁家所得が向上し、漁民が自己で運営する商業、漁業加工場、船の部品を造る工業などの小企業も出てくるようになった。漁業がうまく行かなくて、企業を運営できなかった人々は、出稼ぎにとして外で働く人も増加していた。しかし、近年、漁村の構造的問題の1つは、膨大な漁村過剰人口問題であった。舟山市統計局によると統計では、1995年～2005年の10年間に、漁業資源の衰退とともに、漁民の収入は毎年減少状態になった。2002年、浙江省漁業局は、「漁村での過剰人口が問題で、『転産転業』という政策を実行しなければならない」と指摘した。

農村における商業、あるいは工業の発展について、社会学者・人類学者である費孝通は、一連の研究を発表した。1983年、費孝通は、小城镇に工業を発展させることによって、村内で農業外の産業に就くという「離土不離郷」の実現を構想していた（費孝通 1991：24-30）。これは中国全体に大きい影響をもたらした。舟山地区の「転産転業」という政策は、費孝通の「離土不離郷」という理論構想と同じ考え方で、漁村産業転換を進めることによって、離島という条件不利地域にもかかわらず、漁民の収入を増加することができた。1990年代嵎蟻島の産業変化は、主に海産品の加工、養殖業と船の部品を造る工業などが発展するとともに、2000年になると、観光事業とレージャー漁業も急速に発展してきた。「漁家楽」という業種はこの機運に乗じて生まれた。「漁家楽」の経営が頂点に発展した時、一部の経営者は完全に漁業生産を止めて「漁家楽」を経営し、家庭の収入は漁業生産から「漁家楽」へ転換した。この段階で、漁家女性の自分が労働の主体であるという意識はもうすでに形成されていた。しかし、

周辺の島の漁民も皆「漁家楽」という業種を真似たようになり、利用者もすくなくなつて、2006年以降「漁家楽」は下火になった。

また、費孝通は、1936年、1957年と1981年、「江村」で3回フィールドワークを行って、『江村経済』という著作を完成した。費孝通は、この「江村」を典型的な事例として中国の工業変遷、さらに中国の社会変遷にも分析できた。『江村経済』の社会改革を強調されるに対して、費孝通のもう1つ著作『郷土中国』は、中国の社会変遷に対応する社会道徳を検討した。「江村」という典型的な農村の発展と似ているように、螞蟻島のような漁村でも、工業を発展し、漁村社会を変容させている。2007年以降、造船所が建設されてから、螞蟻島の主要産業も漁業生産から造船工業へ転換し、地元の漁民も東海岸造船所へ就職しつつある。造船所設立の影響から、螞蟻島の外来人口も2006年の134人から2011年の6500人に増えた。外来労働力が流入に対して、一部の地元の労働力、特に女性労働力は子供の進学や、都市的生活への憧れなどの原因で、村外へ流出した。このように労働力が流動するようになった結果、1年の内螞蟻島に10ヶ月以上暮らす出稼ぎ者は、9割以上を占めるようになった。

漁村における工業化と流動化の進展に伴い、出稼ぎ労働者の大量流入が漁村社会の変容に重要な影響をもたらしている。具体的には、2つの影響がある。

1 これらの外来労働者、あるいは「新島民」は、自分の出身地の文化と生活習慣を持ち、螞蟻島の地元の漁家文化と漁村特有の民俗に出会う場合、地元の漁家文化に巨大な衝撃を与えた。外来人口は、地縁、血縁のネットワークを通じてもとに故郷の家族・親族や同郷者たちを連れてくるのが一般の状況である。また、方言の存在がコミュニケーションの阻害になることと、村での滞在期間の短さなどのために、外来労働者の生活空間は労働場所である工場と、工場のすぐ近くの住まいである宿舍とに集約されている。特に、女性出稼ぎ労働者は、同郷者あるいは同僚以外の人とあまり交流せず、地元の村民との人間関係がそれほど濃密とは言えない。また、戸籍を移動しなければならず、定住してくる可能性はまだ高くないのである。

2 螞蟻島の地元の人々にとって、大勢の外来人口が流入する結果、もともと静かなふるさとが不安定な要素を増加してきた。また、当地で学校がないので、子供の就学のために、地元の漁家女性は子供の就学地の問題から、子供の就学している学校の当地に出稼ぎして暮らすようになった。螞蟻島に残っている女性たちも、契機があれば、島外へ移住しようと思っている人が多い。

したがって、外来人口の流入の結果として、地元漁民と外来人口の間に新たな境界を作り出している。その境界は、地理的境界（リビングサークル）、行政的境界（管理組織）、身分の境界（戸籍）などあるのが正直なところである。また、地元の人と外来人口との意見の行き違いや、矛盾も確かに存在している。実は、螞蟻島だけではなく、中国の工業化する過程の中で、外来人口と地元の人との矛盾は、普遍な問題である。この問題をどのように解決するのかについて、これから、考える必要な課題ではないかと考えている。

2 漁村家族生活における女性の役割変化―漁村家庭の構造の現在

伝統的な漁村社会の家庭構造は、家族の構造形態が一般的に大家族の形態であり、家族成員は三世代、あるいは四世代が一緒に暮らすのが普通であった(秦兆雄 2005)。

このような「大家族」は、一般的に兄弟が多く、兄弟が結婚すると別々に居住するが、食事や農業漁作業などは共同で行った。家族内の経済権利は家長が持ち、個人の収入はすべて家長に出し、家長が統一的に分配する。家族成員は世代と性別によって地位が決まるため男尊女卑の思想も深かった。また、漁村の女性は船に乗れないという伝統的な禁忌のために、女性は漁業の作業にまったく参加しなかった。その時代、男性が出漁している間の一切の家事は女性が担い手であった。そして、男性が遠洋へ出漁するのは幾月もかかるので、漁村の農業生産はほとんど女性達が行った。つまり、漁村男女の性的役割に応じた分業が普遍的にみられた。大家族の分家は、男兄弟全員で家屋・土地・家財・道具類を均等に分割していた。その時の漁村女性は嫁入り道具を分与されるだけで、均分相続には参与できなかった。また、実家及び婚家における権利持ってなかった。川井は「相続慣習において女性は男性に比べ常に圧倒的に劣位に置かれていた」(川井、1987:203)と指摘している。しかし、解放後、政府は新しい『婚姻法』を公布し、「婚姻の自由、一夫一妻、男女平等」などの新しい原則に基づいて伝統的な婚姻・家族関係を改革しようとした。その結果として、婚姻法による自己選択の政策のおかげで、「冥婚、童養媳」の慣習が違法と見なされ、女性も自分の意思で結婚できるようになった。しかし、伝統的な漁業経済の背景に、一般的な家庭の収入はとても低くて、子供がたくさんがいるため、生活は苦しかった。

第1章で述べたように、漁業民主改革は、伝統的な大家族に根本的な変化を迫るきっかけであった。また、後に人民公社が成立し、生活の集団化が実行され、家族内部の機能は集団へ委譲することになり、その代表が公共食堂であった。この生活の集団化も大家族を解体させ、半分以上の大家族は、親と子の世帯が分離することによって、小家族化した。

1980年代の改革開放以降、漁村社会における家族形態もすこしずつ変わってきた。現在では息子が結婚すると独立するので大家族の形態は出現せず、夫婦と子供の小家族が圧倒的に多くなっている。特に、「一人っ子」政策の影響で、漁村の家族人口規模は著しく縮小している。また、漁村の工業化は、漁民を家庭外労働に従事する雇用労働者にした。特に女性の就業は著しい。漁村工業化は、女性の家庭内の役割への期待を増幅させたが、子供が独立した後空巣夫婦家庭の比率も増加した。また、若年層の夫婦は島外に移住し、子供の進学のために、漁村に残っている人はほとんど高齢者であり、老親扶養問題も出てきた。

一方、個々の漁民あるいは漁民家族の微視的な生活史の検討も必要である。高桑守史は「一人の人間が地域に生をうけ、その成長過程を経て、一人の漁民として自立していく過程や、家族の日常生活上の行動や言動にこだわる中で、彼らが保持する民俗のあり方に眼を向け、彼らの社会観や人生観などの価値観のあり方を検討することは、

漁民社会に特有のそれぞれの場面で立ち現れる漁民あるいは漁民家族間の利害の競合を有効に理解できる手段となるものである」と指摘した（高桑 1994：43-49）。したがって、本論で、Y・AX という普通の漁村女性の個人生活史を通じて、彼女の生涯における役割である、娘、嫁、母、姑と言う役割を考察することにより、家族における女性の位置づけが変化して行くことについて述べた。さらに、漁村社会の変容によって、娘、嫁、母、姑の役割も変化したことを比較分析した。その結果、舟山群島の漁村における家族、親族と姻戚関係におけるいくつかの特徴を確認することができた。

1 螞蟻島において、伝統的には親が死んだ後、兄弟がそれぞれ分家して互いに独立した生活単位を形成するという社会的な慣習は、今日結婚した時に、すぐに分家して独立的な生活単位を形成するように変わった。

2 財産相続は、伝統的には兄弟均分の形式から、法律により、現在では娘も含めた全ての子供間の均等分与による財産相続の形式に変化した。

3 300 年ほど前に移住してきた祖先を持つ同姓のいくつかの家族が存在するが、農村とは異なり、同姓集団としての宗族と形成することはなかった。

4 漢民族の男子均分相続の理念に基づく伝統的な親の老後の扶養が、息子全員によってなされるという観念は、螞蟻島においてもこれまでは強固であった。しかし、小家族化によって現代女性の生活は変化し、娘に対する親の期待はその結婚後においても持続するようになった。また、「一人っ子」政策が実施されてから、財産分与は基本的に、1 人の子供が相続するようになったので、親の老後の扶養に対する義務は、息子と娘に平等に存在するようになった。

5 漁家の青年たちはほとんど生家と婚家を離れ、出稼ぎによって独立して暮らしている。1 年の内で、姑と嫁は会う時間が少なくなったので、2 人の関係は薄くなり、形式的になった。正月や祝日の時、姑の嫁に対する態度はお客さんと同様であり、両者の生活習慣や考え方の違いからの矛盾もあまり見えなくなる。一方、現代の家庭において、嫁は家庭の経済を管理するので、姑の扶養について大きな決定権を持つ。伝統的な姑の嫁に対する指導という態度は弱くなり、姑と嫁との関係はお互いに世話する相互扶助の関係に変化して来た。

3 人生儀礼からみる女性の家族帰属意識の変化－漁村民俗の伝承・消滅

漁村における民俗事象の変化は、部分的には個人や、生活の基礎的単位としての家族の主体的選択と関連している。人生儀礼は、漁村の重要な民俗事象として、1949 年から今までの 60 年間に大きく変容し、その多くが消滅の危機に瀕している。しかし、現在、残っている儀礼は漁民たちの主体的選択であろうと考える。

伝統的な婚姻儀礼は大家族の最も重要なことだが、その内容は複雑で、その儀礼は主に男性子孫の多産と家の繁栄、嫁に対する実家から夫家への身分帰属の転換を示す儀礼が何回も強調される。したがって、夫家での一連の婚姻当日の儀礼はほとんど新婦に対して行われ、例えば、新婦に落花生を食べさせて妊娠を祈願する儀礼が多く行

われる。このような儀礼を経て、新婦は夫家の成員になり、夫家での一連の親族との関係も変化して行く。

嫁にとって、夫家の大家族での最初の1年ほどの新しい環境への適応段階がもっとも孤独な期間で、心はやはり実家への帰属意識が強い。夫家の成員もやはり嫁が子供を産むまで、嫁は「外の人」だという意識を持ち、祖先の祭りを絶やさないようにするために、嫁の妊娠に強い関心を持つ。つまり、嫁にとって実家から夫家への過渡期は婚約の初めから、長子の出生まで続くと考えられる。

しかし、近年、漁村での婚姻儀礼は昔よりかなり簡単になり、伝統的な婚姻儀礼の内容が今日の若者たちの結婚式にはまったく見られなくなった。また、中国においては、現在大家族から小家族へ変化しており、特に、「一人っ子」政策の実施以降、女性は結婚しても、夫の両親と同居せず、夫婦で独立して暮らす。新婚夫婦が増えたため、大家族からの影響がかなり弱くなり、女性の帰属意識もすぐに実家から、夫と形成する小家族に移動するようになったと考えられる。この傾向は、農村より漁村のほうが大きく、螞蟻島では、筆者が調査した人達の大多数が結婚と同時に、新婚夫婦で独立した小家族を形成している。

螞蟻島では、伝統的な誕生儀礼は、ほとんど男児を産んだ時のみ行われ、女児の場合は男児よりずいぶん簡単で、男女の差があった。また、初生児が女の場合、姑が引続き嫁の妊娠に強い関心を持ち続ける。改革開放以降、特に「一人っ子」政策の実施から、漁村での男女の差別に対する観念が伝統観念よりかなり薄くなり、儀礼も変わった。漁村の生活水準の向上とともに、産婦の衣食住も建国以前よりかなり改善された。また、多くの伝統てきな誕生儀礼の内容も、今日の漁民によって行う必要がなくなった。第1児の出産は、妊娠祈願を行う必要がなくなり、将来漁民となるための海水を飲ませる儀礼も行われなくなった。意識のレベルでは、伝統的な誕生儀礼が家族関係にも変化を及ぼした。子供を産む前、嫁はやはり実家への帰属意識が強かったが、子供を産んだ後、特に男児を産んだ産婦の身分帰属が実家から夫家へ実質的に移動した。産婦自身は、もう完全に夫家の大家族に融合し、夫家も嫁の家族員として地位を認めたとと言えるのである。しかし、今日の漁家では、女性が結婚してから、夫と一緒に独立して暮らすため、夫家の大家族への帰属意識は非常に希薄になり、やはり自分の小家族への帰属意識が強いと思われる。大家族と「房」という小家族の関係について、陳其南は「伝統的な大家族の中に、小家族が長男、次男、三男は「房」という単位で存在した。その時、嫁の関係は、夫との「房」持ちながら、大家族と「房」という小家族の「両重」家族構成において、各「房」の1嫂、2嫂との関係が複雑関係であった」と指摘した。現在、大家族から小家族へ変化し、嫁のその複雑な関係が単純になった。

次に、伝統の葬送儀礼は、たくさんの規則を守らなければならなかった。特に、意識的に、女性の実家においても、女性の夫家においても、この女性の身分帰属が葬送儀礼によって、夫家に属することが最終的に確認され、それ以降、夫家の祖先として祀られ、実家の人は婚出した死者を祀る義務がなくなる。今日の葬送儀礼で伝統の儀

礼と一番異なることは、土葬から火葬へ転換したことであり、それとともに儀礼の内容にも変化をもたらした。特に老人たちは、できるだけ伝統的な葬送儀礼を守りたいのであるが、やはり、現実の条件は変わったので、儀礼も変化せざるを得ない。しかし、意識的には、今日の状況と伝統とはあまり変わらなかった。地元の規則によって、どのような状況にもかかわらず、女性は実家の祖先として祭られることにならず、唯一の合法的帰属が亡くなった後、夫家の祖先として祀られることである。したがって、女性は老齢段階において、夫家への帰属意識が強くなるのである。女性がなくなった後、自分の帰属意識もなくなり、その帰属が女性死者の子孫の意識によって表される。父系社会における女性の家族の位置づけの段階的变化を示している。螞蟻島においてもこの家族関係は同様であった。

今日の漁村では、例えば、調査地の螞蟻島のように、漁村といっても、ほとんど漁業ではなく出稼ぎをして生計をたてる人が一般的である。人生儀礼は海に関する内容が多少残り、まだ漁村の特徴が見られるが、おもに農村地域の漢民族を対象として行われてきた事例と今回の螞蟻島とでは家族帰属意識のレベルにおいて大きな差異は見受けられなかった。例えば、婚姻儀礼の「定親」において、男方から女方への「礼」の中に、伝統的に多種類のものが必ずあるに対して、現在の婚姻儀礼においては、大黃魚、落花生と蓮子だけ残っている。また、誕生儀礼において、妊婦と産婦の禁忌の食べ物は、ほとんど海産物と関わり、それが伝統的な慣習と現在とあまり変わらない。なぜこのような儀礼が残ってきたのかというと、現在の若者たちが島外へ就学や出稼ぎのために、都市文化に影響され、伝統的な慣習はほとんどなくなったが、一部の漁民はやはり地元の伝統的な儀礼を踏襲したい。特に、出稼ぎ行っても結婚、誕生、葬送儀礼の時、まだ海産物を使われ、漁民たちは伝統的な漁村民俗というものが主体的な選択として伝承している。しかし、漁村民俗は漁民の主体的選択に依存すると、消滅の可能性が高いため、これから、どのように伝統的な漁村民俗事象を保護したほうがいいのかについて、考えなければならない。

4 漁村の廟の復興と女性の活躍—漁民信仰と祭祀活動の伝承

第5章では、舟山群島に一般的に見られた漁民信仰活動の形態と性格を明らかにし、その中における女性の役割を分析した。中華人民共和国建国以降、とりわけ文化大革命を契機として、中国の伝統的な信仰や宗教が「迷信」として激しく排撃された。その中で各地の廟もほとんど破壊され、廟の祭りも廃止された。また、村の自発的な宗教的集団などもほとんど活動を停止した。近年、改革・開放政策が進展してから、中央の政策も緩和され、村民の自発的な活動も再開されるようになり、廟や祭りも復活した。

螞蟻島における人々の信仰世界を知る手がかりとなる重要なポイントは、天后宮（娘娘廟）で祭っている観音と海神である媽祖（娘娘菩薩）、財神廟で祭っている財神爺（文財神と武財神）、土地神（土地公公と土地婆婆）、医の神である天医菩薩、平

安の神である天官（堯）、地官（舜）、水官（禹）という三官菩薩と葛仙翁菩薩にあるように思われる。仏教の観音と漁民を守る英雄の霊力を持つ海神としての媽祖は天后宮に合祀されており、また、死者の靈魂を管理すると観念されている自然神信仰を象徴していた土地神と道教の財神爺は財神廟に合祀されてきた。このように、天后宮では、仏教と道教の神が合祀され、財神廟では、道教の神と民間信仰の神が合祀されてきた。

螞蟻島での宗教活動に関してみれば、天后宮と2つの財神廟の間には祭祀の日程において共通性を持つ。これらの廟は、すべて旧暦の正月1日の「春節拝菩薩年」、また主神の誕生日に祭祀を行っている。そのほか、それぞれの廟は、それぞれの特別な祭祀活動を行っている。祭祀活動の主催はほとんどが女性中心となっており、拝みに来るのも女性が多い。

また、財神殿の儀礼と天后宮の儀礼を比べると、3つの面白い点に気づいてきた。1つは、財神殿で行われる儀礼は、個人或いは一家族のためにという「私人」の雰囲気が高く、天后宮で行われる儀礼は相対的にみんなのために、或いは「公衆」の感じが強い。2つ目は、財神殿で祀っている神様が道教に属するのに、儀礼の時仏教の僧侶を招く。それに対して、天后宮で祀っている観音菩薩は仏教に属するのに、儀礼の時読んでいたのは「太平經」という道教の経典である。これら見せかけの矛盾、あるいは不調和な表象の中に、何か深い意味があるだろうか。おそらくいわゆる「仏亦可道、道亦可仏」、つまり仏教もまた道教に重なり、道教もまた仏教に重なるという意味が最良の答えであろうかと考えられる。

そして最後の興味深い点は、螞蟻島における3つの廟の再建と運営に関する活動に参加する人々は、ほとんど村における自発的に形成された女性であり、特に、春節や特定の儀礼を行う時、神や菩薩に参拝するのもすべて女性であり、あまり男性の姿が見られないということである。なぜかと地元の人に聞いたら、「廟へ行ったり、神様や菩薩を参拝したりするのは女性のことだ、男性たちは参加しなくてもいいし、または参加したくないといってもいいのだ」と教えてくれた。この状況は、おそらく漁村における男女がそれぞれの「責任」を分掌していると言えよう。つまり、螞蟻島においては、伝統的に男性は漁業労働を中心に行い、女性は海に出ないで、家のことをやるわけであった。そして、家族のことを神仏に祈るのは主に女性の役割とされてきた。

一方、螞蟻島における毎年の祖先祭祀は、清明節の時だけ墓参りを行われ、「七月半節」や命日などの祖先祭祀は、すべて廟で行う位牌祭祀となる。その際は、紙の位牌に祖先の名前が書かれ、終了後には、紙位牌が燃やされる。このような伝統的な祖先祭祀は漢民族では一般的に父系的な祖先を祀り、父系的に連続する男性によって祭祀され、執行される。螞蟻島においても、それは同様である。

女性は結婚しても、夫家において祖先祭祀の担い手とはならないが、祖先祭祀儀礼の準備活動、例えば供物の用意などは主に女性の責任である。実は、女性は祖先祭祀において、完全に排除されているわけではない。しかし、螞蟻島における現在の祖先祭祀から見ると、女性は祖先祭祀活動において、重要な役割を果たすようになった。

改革開放後、男性が出稼ぎで村を離れるようになり、清明節や位牌祭祀の時に、村に帰れないことが多くなった。そのため、男性に代わって女性が墓参りや位牌祭祀を行うように変化してきた。この時点で、女性が墓参りに参加できないという認識が薄れ、家に残された女性が家庭の仕事の1つとして祖先祭祀にもせざるを得なくなった。以上のように、女性は漁民信仰と「漁文化」の復興してきた過程で、不可欠な役割を果たしているといえるだろう。

第2節 結論—漁村社会の変質と民俗の変容における女性の地位と役割

以上の4点の分析から、舟山群島における漁村社会像と「漁嫂像」は、中国人の生活世界の1つの側面を現してきたと考えられる。この舟山漁民の生活世界は、中国の改革解放以降の経済発展によって形成されてきただけでなく、これから国家における海洋発展の政策の影響を受けながら今日まで変容しており、今後も変わりゆくといえる。

漁村民俗変容の要因の1つとして、生産技術の革新や物質文化の進歩が漁村に導入されることによって、漁村社会の生活世界の全般に大きな変容を迫ることになった。とりわけ漁村における漁具・漁法の革新は、従来の漁撈組織を根本からつくがえし、新しい生産手段に即応した新たな生産組織を出現させた。本論の第4章で記述したように、漁民生活の水準が上昇するとともに、漁村における人生儀礼などの様々なレベルにおける民俗変容をもたらした。

もう1つは、改革開放の政策は、地域経済の不均衡発展を生じさせ、停滞地域の生産労働人口が、発達地域へ大幅に流出する現象として現れた。2000年以降、漁業資源を衰退とともに、螞蟻島の人口流出の顕著な特徴は、家の主要な生産労働力が出稼ぎの増加と、挙家離漁あるいは挙家離島の増大という点であろう。この状況は、螞蟻島の工業化の実現、つまり、造船所の設立後すこし緩和したが、実は、すべての外来人口を除けば、地元の螞蟻島の住民はほとんど「老人と女子供だけの島」と呼ばれる形態に変化してしまった。本論の第2章と第3章で記述したように、漁村の工業化と流動化は、漁村の基礎的社会構造・家族構造や日常における社会的諸関係に変化をもたらした。

以上の漁村のさまざまな民俗変容によって、現在螞蟻島の漁村は、伝統的な漁村と比べて大きく変質・変容したといえる。なぜかという、「漁村」と言っても、全然漁業に従事しない人が半分以上を占めているのである。特に、漁村工業化による大勢の外来人口流入が、漁村の構成者の半分以上が外来人口と地元の老人になった。また、新しい文化要素の流入は、螞蟻島の地元の人々の生活観や世間観、価値観にも少なからざる変化をもたらしたと考えられる。

漁村社会を変質するとともに、漁村の伝統的な民俗も変容し、特に、漁村で特有の民俗事象が消滅しつつある。この漁村の無形民俗文化財の保護においては、中国政府

はいまだ意識してないところである。日本はこの問題についてすでに多くの対策を行ってきた。たとえば、漁村自治体は、こうした民俗の変容や消滅に対処して博物館を設立したり、失われてゆく生活用具や民具の収集保存を盛んに行い、民俗緊急調査などを通して、漁村での民俗生活を記録に残す作業や、あるいは消滅に瀕している民俗芸能などの保護を図るため、助成金を出し、保存会の設立・育成につとめている。したがって、中国政府も、早くこうした文化財保存の動きをしたほうがいいと考える。

本論は漁村民俗誌として、ある程度舟山群島の伝統的な漁村民俗文化を記録できたと考えられ、これ以降の学者に重要な民俗研究資料を提供できていると思う。

一方、漁村社会の変質過程においては、漁村女性の地位と役割も変わってきた。まず、女性自身は、労働の参加によって、女性自身が労働主体としての自己認識の自覚化を実現した。そして、女性は自己価値の実現とともに、彼女らの家庭での役割も、従属的な地位から現在の家庭を半分支える地位（半辺天）になった。さらに、家庭以外の範囲でも、女性もできるだけ多くの活動に参加し始めた。例えば、本論の第5章で記述したように、螞蟻島における民間信仰に関する活動は、すべて女性の責任において行われる。

以上の事から、彼女らは無意識的ではあるが、結果的には漁村における重要な民俗文化財を保護する存在であったことが明確になった。

おわりに—今後舟山群島における漁村社会の研究課題

最後に、今後舟山群島における漁村社会の研究課題、さらには、拡大調査研究の必要性がある課題としては、中国における他の地域の漁村社会との比較研究ではないかと考える。さらに、中国とその周辺国の漁村との比較研究も、これからの課題として考えてみたい。

筆者は、博士課程において、日本の漁村におけるフィールドワークに参加した。特に、歴史民俗資料学研究科の「民俗調査実習」という授業において、三浦半島の佐島と言う漁村で現地調査を行った。また、笹川科学研究助成によって、中国の台湾地区の緑島でもフィールドワークを行った。これらの経験によって、日本の漁村の過疎化と都市化や、漁民社会の変質などの問題は、中国と台湾地区と非常に類似していることがわかった。

以上の事は、東アジアの漁村において、漁村社会の状況は各国に多くの類似点が存在するのだろうと考えられる。以上の事は、筆者のこれからの生涯における課題であり、これからも継続して、この課題を広くそして深く探求していきたい。

終章

第1節 本論の総括

本論においては、舟山群島における螞蟻島という漁村を事例とし、その中で暮らす女性の役割に注目し、今日まで漁村社会がどのように変容してきたのかを第2章、3章、4章、5章にわたって明らかにしてきた。具体的には、まず漁村の工業化と漁村人口の流動化が女性の労働参加にどのように影響してきたのか、その中で女性の自己認識がどのように形成されてきたのかについて論じた。それから、漁村社会の変容する過程において、漁民の家族生活、人生儀礼、信仰祭祀活動はどのように変化してきたのかについて様々な側面に着目し、その中の女性の役割を論じてきた。本章では、これまで解明できた点をもう一度整理した上で、現代舟山群島における漁村社会の変質・民俗の変容における女性の地位と役割を分析し、結語としたい。最後に、今後舟山群島における漁村社会の予察を試みる。

1 漁村女性の労働との自己認識の変化—漁村の工業化・流動化と「漁嫂像」

中華人民共和国の建国以前には、漁船での漁業作業には体力的な要求があった。そして、さらには「女が船に乗ると船が転覆する」という観念も存在した。また女性は生理のため、船での生活は女性の体によくないなどの観念があったため、漁村女性は船に乗れなかった。そのため女性たちは漁業作業にまったく参加することはなかった。一方で漁業作業以外の一切の家事や補助的な労働、例えば、網を洗う、直すなどはすべて女性が担い手であった。しかし、漁村女性の労働比重は重かったが、その労働に対する収入は少なかったため、長い間女性は家庭の中での地位が低く、彼女たちの労働も軽視され、まるで「牛馬」のようにこき使われる存在であった。これに対して日本の農漁村における女性の労働を研究してきた鶴理恵子は、「日本の農漁村における女性が『テマ』として扱われていた時期から、その後労働の主体へとその位置づけを大きく変えていった時期に焦点を当てる。労働の主体性を奪われた女性たちの記憶は『ただ牛や馬のように使われるだけだった』という、大変なみじめな思い出として語られる」と指摘している（鶴 2003 : 5）。したがって、中国の「牛馬」であった漁村女性と日本の「テマ」であった農漁村女性とは全く同じの存在であると考えている。この状況は、イリイチも『シャドーワーク』の中で、「産業化以前の社会では、シャドウワークを覆い隠す第1は、男性はなによりもまず生産者であり、女性はなによりもまず私的な家庭内で生計をやりくりするものとされる。この性に基づく役割の経済的区別は、生活の自立・自存という諸条件のもとでありえないことであった。第2は、女性が産業的労働の両生産のために無報酬で徴用されること—不生産的な女性は『再生産』ということと慰撫される」（イリイチ 2006 : 225）と指摘している。

人民公社の成立後、漁村は漁業を全力で発展させるとともに、農業、林業、牧畜業

などの副業も発展させていたので、生産の労働力が非常に不足し、女性は家の外へ出かけ、男性と一緒に公社の労働に参加できた。特に、漁村の機帆船化を実現した後、遠洋漁業生産を発展させようとして、男性労働力が足りなかったのも、漁業作業における漁業労働力として女性も男性と一緒に遠洋漁業作業に参加できるようになった。また、女性は船に乗れるだけでなく、「船老大」で「婦女号」の全員を管理できるようになった。人民公社時期、女性は男性と共同労働ができるようになり、「時間労働点数制」によって女性労働からも家庭収入を加わるようになり、家庭の中の決定権をも持つようになり、女性の家族内での地位が向上した。一方、女性は人民公社の「学習班」に参加することによって、漢字を勉強し始めたので、国家の漁業政策や法律、例えば『婚姻法』、『労働法』などについてもわかるようになり、自分自身の権利と義務が理解出来るようになった。一部の女性は人民公社での団体活動や政治活動にも参加し始め、婦女主任などの幹部にもなった。また、伝統的には、家長が家庭を管理していたが、小家族になってくると、夫婦で管理するようになり、その中で、女性が家庭の経営を管理し始めた。こうして、女性は、家庭内において収入源として経済的な貢献をしながら、だんだん家庭での経済を掌握・管理し始め、家庭の中での決定権を持つようになった。さらに、村の中でも様々な活動に参加し始めたことで、彼女らの自己認識も高揚し、女性も男性と平等であるという自信から、女性の地位は向上した。

1980年代、中国では、人民公社制度が解体し、全国的に改革開放政策を行い、市場経済と競争原理を導入し、高度経済成長を達成した。それに平行して現在までずっと続いている漁業生産の株式合作制が登場した。人民公社体制のもとでは、公社以外の職に就くことは不可能であったが、各戸（漁家）経営請負制の導入により漁家所得が向上し、漁民が自己で運営する商業、漁業加工場、船の部品を造る工場などの小企業も出てくるようになった。漁業経営がうまく行かなかった人や企業運営ができなかった人々は、島外への出稼ぎにでて働く人も増加していた。しかし、近年、漁村の構造的問題の1つは、膨大な漁村過剰人口問題であった。舟山市統計局によると統計では、1995年～2005年の10年間に、漁業資源の衰退とともに、漁民の収入は毎年減少している。2002年に、浙江省漁業局は、「漁村での過剰人口が問題で、『転産転業』という政策を実行しなければならない」と指摘した。

農村における商業、あるいは工業の発展について、社会学者・人類学者である費孝通は、一連の研究成果を発表している。1983年、費孝通は、小城镇に工業を発展させることによって、村内で農業外の産業に就くという「離土不離郷」の実現を構想していた（費孝通 1991：24-30）。これは中国全体に大きい影響をもたらした。舟山地区の「転産転業」という政策は、費孝通の「離土不離郷」という構想と同じ考え方で、漁村の産業転換を進めることによって、離島という条件不利な地域にもかかわらず、漁民の収入を増加することができた。1990年代嵎蟻島の産業変化は、主に海産品の加工、養殖業と船の部品を造る工業などが発展するとともに、2000年になると、観光事業とレージャー漁業も急速に発展してきた。「漁家楽」という業種はこの機運に乗じて生まれた。「漁家楽」の経営が頂点に発展した時、一部の経営者は完全に漁業生産

を止めて「漁家楽」を経営し、家庭の収入は漁業生産から「漁家楽」へ転換した。この段階で、漁家女性の自分が労働の主体であるという意識はもうすでに形成されていた。しかし、周辺の島の漁民も皆「漁家楽」という業種を真似るようになり、利用者もすくなくなっていて、2006年以降「漁家楽」は下火になった。

また、費孝通は、1936年、1957年と1981年、「江村」で3回フィールドワークを行って、『江村経済』という著作を残した。費孝通は、この「江村」を典型的な事例として中国の工業化、さらに中国の社会変遷についても分析した。『江村経済』では社会改革が強調されるに対して、費孝通のもう1つの著作『郷土中国』は、中国の社会変遷に対応する社会道徳を検討した。「江村」という典型的な農村の発展と類似するように、螞蟻島のような漁村でも、工業を発展させ、漁村社会を変容させている。2007年以降、造船所が建設されてから、螞蟻島の主要産業も漁業生産から造船工業へ転換し、地元の漁民も東海岸造船所へ就職しつつある。造船所設立の影響から、螞蟻島の外来人口も2006年の134人から2011年の6500人に増えた。外来労働力が流入するのしたがって、一部の地元の労働力、特に女性労働力は子供の進学や、都市的生活への憧れなどの原因で、村外へ流出した。このように労働力が流動するようになった結果、1年のうち螞蟻島に10ヶ月以上暮らす出稼ぎ者は、居住人口の9割以上を占めるようになった。

漁村における工業化と人口の流動化に伴い、出稼ぎ労働者の大量流入が漁村社会の変容に重要な影響をもたらしている。そこには、2つの具体的な影響がある。

1 これらの外来労働者、あるいは「新島民」は、自分の出身地の文化と生活習慣を持ち、螞蟻島の地元の漁家文化と漁村特有の民俗に出会う場合、地元の漁家文化に巨大な衝撃を与えた。新島民は、地縁、血縁のネットワークを通じてもとの故郷の家族・親族や同郷者たちを連れてくるのが一般的である。また、方言の存在がコミュニケーションの阻害になることと、村での滞在期間の短さなどのために、外来労働者の生活空間は労働場所である工場と、工場のすぐ近くの住まいである宿舍とに集約されている。特に、女性出稼ぎ労働者は、同郷者あるいは同僚以外の人とあまり交流せず、地元の村民との人間関係がそれほど濃密とは言えない。また、戸籍を移動しなければならず、定住してくる可能性はまだ高くないのである。

2 螞蟻島の地元の人々にとって、大勢の外来人口が流入の結果、もともと静かな故郷に不安定な要素が増加してきた。また、当地には学校がないので、子供の就学のために、地元の漁家女性は子供を伴って就学地の問題から、子供の就学している学校の当地に出稼ぎして暮らすようになった。螞蟻島に残っている女性たちも、契機があれば、島外へ移住しようと思っている人が多い。

したがって、外来人口の流入の結果として、地元漁民と新島民の間に新たな境界が作り出されている。そこには、地理的境界（リビングサークル）、行政的境界（管理組織）、身分の境界（戸籍）などがあるのである。また、地元の人と新島民との意見の行き違いや、矛盾も確かに存在している。これは、螞蟻島だけではなく、中国の工業化する過程の中で、外来人口と地元の人との間にある普遍的な問題である。この問

題をどのように解決するのかについて、これから、考えることが課題ではないかと考えている。

2 漁村家族生活における女性の役割変化―漁村家庭の構造の現在

伝統的な漁村社会の家庭構造は、家族の構造形態が大家族の形態であり、家族成員は三世代、あるいは四世代が一緒に暮らすのが普通であった（秦兆雄 2005）。

このような「大家族」は、一般的に兄弟が多く、兄弟が結婚すると別々に居住するが、食事や農漁業作業などは共同で行った。家族内の経済権利は家長が持ち、個人の収入はすべて家長に出し、家長が統一的に分配する。この家族形態は、中国農村においてもどうようであった（末成道男 1999）。家族成員は世代と性別によって地位が決まるため男尊女卑の思想も深かった。また、漁村の女性は船に乗れないという伝統的な禁忌のために、女性は漁業の作業にまったく参加しなかった。その時代、男性が出漁している間の一切の家事は女性が担い手であった。そして、男性が遠洋へ出漁するのは幾月もかかるので、漁村の農業生産はほとんど女性達が行った。つまり、漁村男女の性的役割に応じた分業が普遍的にみられた。大家族の分家は、男兄弟全員で家屋・土地・家財・道具類を均等に分割していた。その時の漁村女性は嫁入り道具を分与されるだけで、均分相続には参与できなかった。また、実家及び婚家における権利持ってもいなかった。川井は「相続慣習において女性は男性に比べ常に圧倒的に劣位に置かれていた」（川井、1987：203）と指摘している。しかし、解放後、政府は新しい『婚姻法』を公布し、「婚姻の自由、一夫一妻、男女平等」などの新しい原則に基づいて伝統的な婚姻・家族関係を改革しようとした。その結果として、婚姻法による自己選択の政策のおかげで、「冥婚、童養媳」の慣習が違法と見なされ、女性も自分の意思で結婚できるようになった。しかし、伝統的な漁業経済の背景には、一般的な家庭の収入がとても低く、子供がたくさんがいるため、生活は苦しかったという現状があった。

第1章で述べたように、漁業民主改革は、伝統的な大家族に根本的な変化を迫るきっかけであった。また、後に人民公社が成立し、生活の集団化が実行され、家族内部の機能は集団へ委譲することになった。その象徴が公共食堂であった。この生活の集団化も大家族を解体させ、半分以上の大家族は、親と子の世帯が分離することによって、小家族化した。

1980年代の改革開放以降、漁村社会における家族形態もすこしずつ変わってきた。現在では息子が結婚すると独立するので大家族の形態は出現せず、夫婦と子供の小家族が圧倒的に多くなっている。特に、「一人っ子」政策の影響で、漁村の家族人口規模は著しく縮小している。また、漁村の工業化は、漁民を家庭外労働に従事する雇用労働者にした。特に女性の就業は著しい。漁村工業化は、女性の家庭内での役割への期待を増幅させたが、子供が独立した後空巣夫婦家庭の比率も増加した。また、若年層の夫婦は島外に移住し、子供の進学のために、漁村に残っている人はほとんど高齢者

であり、老親扶養問題も出てきた。

一方、個々の漁民あるいは漁民家族の微視的な生活史の検討も必要である。高桑守史は「一人の人間が地域に生をうけ、その成長過程を経て、一人の漁民として自立していく過程や、家族の日常生活上の行動や言動にこだわる中で、彼らが保持する民俗のあり方に眼を向け、彼らの社会観や人生観などの価値観のあり方を検討することは、漁民社会に特有のそれぞれの場面で立ち現れる漁民あるいは漁民家族間の利害の競合を有効に理解できる手段となるものである」と指摘した（高桑 1994：43-49）。したがって、本論で、Y・AX という普通の漁村女性の個人生活史を通じて、彼女の生涯における役割である、娘、嫁、母、姑と言う役割を考察することにより、家族における女性の位置づけが変化して行くことについて述べた。さらに、漁村社会の変容によって、娘、嫁、母、姑の役割も変化したことを比較分析した。その結果、舟山群島の漁村における家族、親族と姻戚関係におけるいくつかの特徴を確認することができた。

1 蟻蟻島において、伝統的には親が死んだ後、兄弟がそれぞれ分家して互いに独立した生活単位を形成するという社会的な慣習は、今日結婚した時に、すぐに分家して独立的な生活単位を形成するように変わった。

2 財産相続は、伝統的には兄弟均分の形式から、現在では法律により、娘も含めた全ての子供間の均等分与による財産相続の形式に変化した。

3 300 年ほど前に移住してきた祖先を持つ同姓のいくつかの家族が存在するが、農村とは異なり、同姓集団としての宗族を形成することはなかった。

4 漢民族の男子均分相続の理念に基づく伝統的な親の老後の扶養が、息子全員によってなされるという観念は、蟻蟻島においてもこれまでは強固であった。しかし、小家族化によって現代女性の生活は変化し、娘に対する親の期待はその結婚後においても持続するようになった。また、「一人っ子」政策が実施されてから、財産分与は基本的に、1 人の子供が相続するようになったので、親の老後の扶養に対する義務は、息子と娘に平等に存在するようになった。

5 漁家の青年たちはほとんど生家と婚家を離れ、出稼ぎによって独立して暮らしている。1 年の内で、姑と嫁は会う時間が少なくなったので、2 人の関係は薄くなり、形式的になった。正月や祝日の時、姑の嫁に対する態度はお客さんと同様であり、両者の生活習慣や考え方の違いからの矛盾もあまり見えなくなる。一方、現代の家庭において、嫁は家庭の経済を管理するので、姑の扶養について大きな決定権を持つ。伝統的な姑の嫁に対する指導という態度は弱くなり、姑と嫁との関係はお互いに世話する相互扶助の関係に変化して来た。

3 人生儀礼からみる女性の家族帰属意識の変化－漁村民俗の伝承・消滅

漁村における民俗事象の変化は、部分的には個人や、生活の基礎的単位としての家族の主体的選択と関連している。人生儀礼は、漁村の重要な民俗事象として、1949 年から今までの 60 年間に大きく変容し、その多くが消滅の危機に瀕している。しか

し、現在、残っている儀礼は漁民たちの主体的選択によるものであらうと考える。

伝統的な婚姻儀礼は大家族の最も重要なことだが、その内容は複雑で、その儀礼は主に男性子孫の多産と家の繁栄、嫁に対する実家から夫家への身分帰属の転換を示す儀礼が何回も強調される。したがって、夫家での一連の婚姻当日の儀礼はほとんど新婦に対して行われ、例えば、新婦に落花生を食べさせて妊娠を祈願する儀礼が多く行われる。このような儀礼を経て、新婦は夫家の成員になり、夫家での一連の親族との関係も変化して行く。

嫁にとって、夫家の大家族での最初の1年ほどは新しい環境への適応段階でありもっとも孤独な期間で、心はやはり実家への帰属意識が強い。夫家の成員もやはり嫁が子供を産むまで、嫁は「外の人」だという意識を持ち、祖先の祭りを絶やさないようにするために、嫁の妊娠に強い関心を持つ。つまり、嫁にとって実家から夫家への過渡期は婚約の初めから、長子の出生まで続くと考えられる。

しかし、近年、漁村での婚姻儀礼は昔よりかなり簡単になり、伝統的な婚姻儀礼の内容が今日の若者たちの結婚式にはまったく見られなくなった。また、中国においては、現在大家族から小家族へ変化しており、特に、「一人っ子」政策の実施以降、女性は結婚しても、夫の両親と同居せず、夫婦で独立して暮らす。新婚夫婦が増えたため、大家族からの影響がかなり弱くなり、女性の帰属意識もすぐに実家から、夫と形成する小家族に移動するようになったと考えられる。この傾向は、農村より漁村のほうが大きく、螞蟻島では、筆者が調査した人達の大多数が結婚と同時に、新婚夫婦で独立した小家族を形成している。

螞蟻島では、伝統的な誕生儀礼は、ほとんど男児を産んだ時のみ行われ、女児の場合は男児よりずいぶん簡単で、男女の差があった。また、初生児が女の場合、姑が引続き嫁の妊娠に強い関心を持ち続ける。改革開放以降、特に「一人っ子」政策の実施から、漁村での男女の差別に対する観念が伝統観念よりかなり薄くなり、儀礼も変わった。漁村の生活水準の向上とともに、産婦の衣食住も建国以前よりかなり改善された。また、多くの伝統的な誕生儀礼の内容も、今日の漁民にとっては行う必要がなくなっている。第1児の出産は、妊娠祈願を行う必要がなくなり、将来漁民となるための海水を飲ませる儀礼も行われなくなった。意識のレベルでは、伝統的な誕生儀礼が家族関係にも変化を及ぼした。子供を産む前、嫁はやはり実家への帰属意識が強かったが、子供を産んだ後、特に男児を産んだ産婦の身分帰属が実家から夫家へ実質的に移動した。産婦自身は、もう完全に夫家の大家族に融合し、夫家も嫁の家族員として地位を認めたと言えるのである。しかし、今日の漁家では、女性が結婚してから、夫と一緒に独立して暮らすため、夫家の大家族への帰属意識は非常に希薄になり、やはり自分の小家族への帰属意識が強いと思われる。大家族と「房」という小家族の関係について、陳其南は「伝統的な大家族の中に、小家族が長男、次男、三男は『房』という単位で存在した。その時、嫁の関係は、夫との『房』持ちながら、大家族と『房』という小家族の『両重』家族構成において、各『房』の1嫂、2嫂との関係が複雑関係であった」と指摘した。現在、大家族から小家族へ変化し、嫁のその複雑な関係が

単純になった。

次に、伝統の葬送儀礼は、たくさんの規則を守らなければならなかった。特に、意識的に、女性の実家においても、女性の夫家においても、この女性の身分帰属が葬送儀礼によって、夫家に属することが最終的に確認され、それ以降、夫家の祖先として祀られ、実家の人は婚出した死者を祀る義務がなくなる。今日の葬送儀礼で伝統の儀礼と一番異なることは、土葬から火葬へ転換したことであり、それとともに儀礼の内容にも変化をもたらした。特に老人たちは、できるだけ伝統的な葬送儀礼を守りたいのであるが、やはり、現実の条件は変わったので、儀礼も変化せざるを得ない。しかし、意識的には、今日の状況と伝統とはあまり変わらなかったという。地元の規則によって、どのような状況にもかかわらず、女性は実家の祖先として祭られることにはならず、唯一の合法的帰属が亡くなった後、夫家の祖先として祀られることである。したがって、女性は老齢段階において、夫家への帰属意識が強くなるのである。女性がなくなった後、自分の帰属意識もなくなり、その帰属が女性死者の子孫の意識によって表される。父系社会における女性の家族の位置づけの段階的变化を示している。螞蟻島においてもこの家族関係は同様であった。

今日の漁村では、例えば、調査地の螞蟻島のように、漁村といっても、ほとんど漁業ではなく出稼ぎをして生計をたてる人が一般的である。人生儀礼は海に関する内容が多少残り、まだ漁村の特徴が見られるが、おもに農村地域の漢民族を対象として行われてきた事例と今回の螞蟻島とでは家族帰属意識のレベルにおいて大きな差異は見受けられなかった。例えば、婚姻儀礼の「定親」において、男方から女方への「礼」の中に、伝統的に多種類のものが必ずあるに対して、現在の婚姻儀礼においては、大黄魚、落花生と蓮子だけ残っている。また、誕生儀礼において、妊婦と産婦の禁忌の食べ物は、ほとんど海産物と関わり、それが伝統的な慣習と現在とあまり変わらない。なぜこのような儀礼が残ってきたのかというと、現在の若者たちが島外へ就学や出稼ぎのために、都市文化に影響され、伝統的な慣習はほとんどなくなったが、一部の漁民はやはり地元の伝統的な儀礼を踏襲したい。特に、出稼ぎ行っても結婚、誕生、葬送儀礼の時、まだ海産物を使われ、漁民たちは伝統的な漁村民俗というものが主体的な選択として伝承している。しかし、漁村民俗は漁民の主体的選択に依存すると、消滅の可能性が高いため、これから、どのように伝統的な漁村民俗事象を保護したほうがいいのかについて、考えなければならない。

4 漁村の廟の復興と女性の活躍—漁民信仰と祭祀活動の伝承

第5章では、舟山群島に一般的に見られた漁民信仰活動の形態と性格を明らかにし、その中における女性の役割を分析した。中華人民共和国建国以降、とりわけ文化大革命を契機として、中国の伝統的な信仰や宗教が「迷信」として激しく排撃された。その中で各地の廟もほとんど破壊され、廟の祭りも廃止された。また、村の自発的な宗教的集団などもほとんど活動を停止した。近年、改革・開放政策が進展してから、中

央の政策も緩和され、村民の自発的な活動も再開されるようになり、廟や祭りも復活した。

螞蟻島における人々の信仰世界を知る手がかりとなる重要なポイントは、天后宮（娘娘廟）で祭っている観音と海神である媽祖（娘娘菩薩）、財神廟で祭っている財神爺（文財神と武財神）、土地神（土地公公と土地婆婆）、医の神である天医菩薩、平安の神である天官（堯）、地官（舜）、水官（禹）という三官菩薩と葛仙翁菩薩にあるように思われる。仏教の観音と漁民を守る英雄の霊力を持つ海神としての媽祖は天后宮に合祀されており、また、死者の靈魂を管理すると観念されている自然神信仰を象徴していた土地神と道教の財神爺は財神廟に合祀されてきた。このように、天后宮では、仏教と道教の神が合祀され、財神廟では、道教の神と民間信仰の神が合祀されてきた。

螞蟻島での宗教活動に関してみれば、天后宮と2つの財神廟の間には祭祀の日程において共通性を持つ。これらの廟は、すべて旧暦の正月1日の「春節拝菩薩年」、また主神の誕生日に祭祀を行っている。そのほか、それぞれの廟は、それぞれの特別な祭祀活動を行っている。祭祀活動の主催はほとんどが女性中心となっており、拝みに来るのも女性が多い。

また、財神殿の儀礼と天后宮の儀礼を比べると、3つの面白い点に気づいてきた。1つは、財神殿で行われる儀礼は、個人或いは一家族のためにという「私人」の雰囲気が高く、天后宮で行われる儀礼は相対的にみんなのために、或いは「公衆」の感じが強い。2つ目は、財神殿で祀っている神様が道教に属するのに、儀礼の時仏教の僧侶を招く。それに対して、天后宮で祀っている観音菩薩は仏教に属するのに、儀礼の時読んでいたのは「太平經」という道教の経典である。これら見せかけの矛盾、あるいは不調和な表象の中に、何か深い意味があるだろうか。おそらくいわゆる「仏亦可道、道亦可仏」、つまり仏教もまた道教に重なり、道教もまた仏教に重なるという意味が最良の答えであろうかと考えられる。

そして最後の興味深い点は、螞蟻島における3つの廟の再建と運営に関する活動に参加する人々は、ほとんど村における自発的に形成された女性であり、特に、春節や特定の儀礼を行う時、神や菩薩に参拝するのもすべて女性であり、あまり男性の姿が見られないということである。なぜかと地元の人に聞いたら、「廟へ行ったり、神様や菩薩を参拝したりするのは女性のことだ、男性たちは参加しなくてもいいし、または参加したくないといってもいいのだ」と教えてくれた。この状況は、おそらく漁村における男女がそれぞれの「責任」を分掌していると言えよう。つまり、螞蟻島においては、伝統的に男性は漁業労働を中心に行い、女性は海に出ないで、家のことをやるわけであった。そして、家族のことを神仏に祈るのは主に女性の役割とされてきた。

一方、螞蟻島における毎年の祖先祭祀は、清明節の時だけ墓参りを行われ、「七月半節」や命日などの祖先祭祀は、すべて廟で行う位牌祭祀となる。その際は、紙の位牌に祖先の名前が書かれ、終了後には、紙位牌が燃やされる。このような伝統的な祖先祭祀は漢民族では一般的に父系的な祖先を祀り、父系的に連続する男性によって祭

祀され、執行される。螞蟻島においても、それは同様である。

女性は結婚しても、夫家において祖先祭祀の担い手とはならないが、祖先祭祀儀礼の準備活動、例えば供物の用意などは主に女性の責任である。実は、女性は祖先祭祀において、完全に排除されているわけではない。しかし、螞蟻島における現在の祖先祭祀から見ると、女性は祖先祭祀活動において、重要な役割を果たすようになった。改革開放後、男性が出稼ぎで村を離れるようになり、清明節や位牌祭祀の時に、村に帰れないことが多くなった。そのため、男性に代わって女性が墓参りや位牌祭祀を行うように変化してきた。この時点で、女性が墓参りに参加できないという認識が薄れ、家に残された女性が家庭の仕事の1つとして祖先祭祀にもせざるを得なくなった。以上のように、女性は漁民信仰と「漁文化」の復興してきた過程で、不可欠な役割を果たしているといえるだろう。

第2節 結論—漁村社会の変質と民俗の変容における女性の地位と役割

以上の4点の分析から、舟山群島における漁村社会像と「漁嫂像」は、中国人の生活世界の1つの側面を現してきたと考えられる。この舟山漁民の生活世界は、中国の改革解放以降の経済発展によって形成されてきただけでなく、これから国家における海洋発展の政策の影響を受けながら今日まで変容しており、今後も変わりゆくといえる。

漁村民俗変容の要因の1つとして、生産技術の革新や物質文化の進歩が漁村に導入されることによって、漁村社会の生活世界の全般に大きな変容を迫ることになった。とりわけ漁村における漁具・漁法の革新は、従来の漁撈組織を根本からつくがえし、新しい生産手段に即応した新たな生産組織を出現させた。本論の第4章で記述したように、漁民生活の水準が上昇するとともに、漁村における人生儀礼などの様々なレベルにおける民俗変容をもたらした。

もう1つは、改革開放の政策は、地域経済の不均衡発展を生じさせ、停滞地域の生産労働人口が、発達地域へ大幅に流出する現象として現れた。2000年以降、漁業資源を衰退とともに、螞蟻島の人口流出の顕著な特徴は、家の主要な生産労働力が出稼ぎの増加と、挙家離漁あるいは挙家離島の増大という点であろう。この状況は、螞蟻島の工業化の実現、つまり、造船所の設立後すこし緩和したが、実は、すべての外来人口を除けば、地元の螞蟻島の住民はほとんど「老人と女子供だけの島」と呼ばれる形態に変化してしまった。本論の第2章と第3章で記述したように、漁村の工業化と流動化は、漁村の基礎的社会構造・家族構造や日常における社会的諸関係に変化をもたらした。

以上の漁村のさまざまな民俗変容によって、現在螞蟻島の漁村は、伝統的な漁村と比べて大きく変質・変容したといえる。なぜかという、「漁村」と言っても、全然漁業に従事しない人が半分以上を占めているのである。特に、漁村工業化による大勢

の外来人口流入が、漁村の構成者の半分以上が外来人口と地元の老人になった。また、新しい文化要素の流入は、螞蟻島の地元の人々の生活観や世間観、価値観にも少なからざる変化をもたらしたと考えられる。

漁村社会を変質するとともに、漁村の伝統的な民俗も変容し、特に、漁村で特有の民俗事象が消滅しつつある。この漁村の無形民俗文化財の保護においては、中国政府はいまだ意識してないところである。日本はこの問題についてすでに多くの対策を行ってきた。たとえば、漁村自治体は、こうした民俗の変容や消滅に対処して博物館を設立したり、失われてゆく生活用具や民具の収集保存を盛んに行い、民俗緊急調査などを通して、漁村での民俗生活を記録に残す作業や、あるいは消滅に瀕している民俗芸能などの保護を図るため、助成金を出し、保存会の設立・育成につとめている。したがって、中国政府も、早くこうした文化財保存の動きをしたほうがいいと考える。

本論は漁村民俗誌として、ある程度舟山群島の伝統的な漁村民俗文化を記録できたと考えられ、これ以降の学者に重要な民俗研究資料を提供できると思っている。

一方、漁村社会の変質過程においては、漁村女性の地位と役割も変わってきた。まず、女性自身は、労働の参加によって、女性自身が労働主体としての自己認識の自覚化を実現した。そして、女性は自己価値の実現とともに、彼女らの家庭での役割も、従属的な地位から現在の家庭を半分支える地位（半辺天）になった。さらに、家庭以外の範囲でも、女性もできるだけ多くの活動に参加し始めた。例えば、本論の第5章で記述したように、螞蟻島における民間信仰に関する活動は、すべて女性の責任において行われる。

以上の事から、彼女らは無意識的ではあるが、結果的には漁村における重要な民俗文化財を保護する存在であったことが明確になった。

おわりに—今後舟山群島における漁村社会の研究課題

最後に、今後舟山群島における漁村社会の研究課題、さらには、拡大調査研究の必要性がある課題としては、中国における他の地域の漁村社会との比較研究ではないかと考える。さらに、中国とその周辺国の漁村との比較研究も、これからの課題として考えてみたい。

筆者は、博士課程において、日本の漁村におけるフィールドワークに参加した。特に、歴史民俗資料学研究科の「民俗調査実習」という授業において、三浦半島の佐島と言う漁村で現地調査を行った。また、笹川科学研究助成によって、中国の台湾地区の緑島でもフィールドワークを行った。これらの経験によって、日本の漁村の過疎化と都市化や、漁民社会の変質などの問題は、中国と台湾地区と非常に類似していることがわかった。

以上の事は、東アジアの漁村において、漁村社会の状況は各国に多くの類似点が存在するのだろうと考えられる。以上の事は、筆者のこれからの生涯においての課題であり、これからも継続して、この課題を広くそして深く探求していきたい。

参考文献

日本語文献（著者の五十音順）

青木保・黒田悦子

1988 『儀礼——文化と形式的行動』東京大学出版社

足羽與志子

2000 「中国単部における从教復興の動態—国家・社会・トランスナショナリズム」菱田雅清(編)『現代中国の構造変動 5 社会—国家との共棲関係』東京大学出版会 pp. 239-274。

網野善彦

1993 『日本歴史民俗論集 7—海・川・山の生産と信仰』吉川弘文館

網野善彦、大林太良など

1983 『日本民俗文化大系第五巻 山民と海人—非平地民の生活と伝承』小学館

1985 『日本民俗文化大系第十巻 家と女性—暮らしの文化史』小学館

綾部恒雄

1982 『女の文化人類学』弘文堂

荒一能

2011 「瀬戸内海漁村における女性の働き」『常民文化』34: pp. 83-97

アルノルト・ファン・ヘネップ

1977 『通過儀礼 人類学ゼミナール 3』綾部恒雄・綾部裕子 訳 弘文堂

安藤正士

1995 「民族」辻康吾、加藤千洋(編)『原典中国現代史 第4巻 社会』東京:岩波書店, pp. 64-90。

李善愛

2001 『海を越える済州島の海女—海の資源をめぐる女のたたかい』明石書店

イリイチ

2006 『シャドウ・ワーカー—生活のあり方を問う』(玉野井芳郎・栗原彬訳) 岩波書店

伊賀上菜穂

2002 「結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係—記述資料分析の試み—」スラブ研究, pp179-212, 北海道スラブ研究センター

池田孝之、周晟

2008 「中国・湖南省における『農家楽』の実態に関する考察：その1「農家楽」の発展経緯について」、日本建築学会学術講演梗概集 pp. 397-398

石田浩

1996 『中国伝統農村の変革と工業化——上海近郊農村調査報告』晃洋書房

伊藤亜人

1983 「漁民集団とその活動」『日本民俗文化大系 5 山民と海人—非平地民の生活と伝承—』東京：小学館, pp. 317-360。

岩崎繁野

1957 『漁業における歩合制度と船頭制度に関する研究』水産研究会

岩本由輝

1970 『近世漁村共同体の変遷過程』塙書房

于洋

2013a 「舟山群島における漁村女性の労働と自己認識の変化—アリ島の“漁嫂”の暮らしとその変化をめぐって」、『年報 非文字資料研究』第9号

2013b 「漁村家族生活における女性の役割変化—蟻島の“漁嫂”の事例から」『比較民俗研究』

上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田登

2009 『新版 民俗調査ハンドブック』吉川弘文館

植野弘子

2000 『台湾漢民族の姻戚』風響社

2011 「父系社会を生きる娘—台湾漢民族社会における家庭生活とその変化をめぐって」『文化人類学』75-4

植松明石

1991 『環中国海の民俗と文化 2 神々の祭祀』凱風社

ヴィクター・W・ターナー

1988 『儀礼の過程』 富倉光雄 訳 思索社

王崧興

1986 「漢民族の社会組織」 竹村卓二(編)『日本民俗社会の形成と発展—イエ・ムラ・ウジの源流を探る—』 東京:山川出版社, pp. 147-167。

1994 「中国人—その中心と周辺—」 黒田悦子(編)『民族の出会いのかたち』 東京:朝日新聞社, pp. 241-261。

大沢真理

2002 『男女共同参画社会をつくる』 日本放送出版協会

太田出、佐藤仁史

2007 『太湖流域社会史の歴史的研究』 汲古書院

太田出、佐藤仁史、稲田清一、呉滔

2007 『中国農村の信仰と生活—太湖流域社会史口述記録集』 汲古書院

大橋克巳

2011 「成島地区の母親たち—若妻会から「たんぼぼくらぶ」へ」『成島の民俗』 pp. 23-55

岡田照子

2012 『瀬川清子—女性民俗学者の軌跡』 岩田書院

奥井亜紗子

2011 『農村—都市移動と家族変動の歴史社会学—近現代日本における「近代家族の大衆化」再考』 晃洋書房

加藤仁美

2002 「『浦』の暮らし、『触』の暮らし—壱岐にみる漁村と農村の二元構造」『特集 壱岐・対馬—国境の島の民俗誌』 14(11)

亀山慶一

1986 『漁民文化の民俗研究』 弘文堂

神奈川大学日本常民文化研究所

2009 『海と非農業民—網野善彦の学問的軌跡をたどる』 岩波書店

川井伸一

1987 「土地改革に見る農村の血縁関係」小林弘二編『中国農村変革再考』アジア経済研究所

河岡武春

1987 『海の民：漁村の歴史と民俗』平凡社

川口幸大

2004 「現代中国における清明節の墓祭祀」『東北人類学論壇』3:33-48

2007 「現代中国の村落における春節」『東北人類学論壇』6:23-38

2009 「清明節—中国の墓参り」『季刊民族学』127:94-103

2010 「廟と儀礼の復興、およびその周縁化—現代中国における宗教のひとつの位相」

長谷有紀・川口幸大・長沼さやか編『中国における社会主義的近代化—宗教・消費・エスニシティ』勉誠出版、pp3-26

柿崎京一・陸学藝・金一鐵・矢野敬生

2008 『東アジア村落の基礎構造—日本・中国・韓国村落の実証的研究』御茶の水書房

金柄徹

2003 『家船の民族誌—現代日本に生きる海の民—』東京：東京大学出版会。

窪田幸子・八木祐子

1999 『社会変容と女性—ジェンダーの文化人類学』ナカニシヤ 出版

倉石あつ子

2009 『女性民俗誌論』岩田書院

倉田一郎

1995 『日本民俗文化資料集成 16 巻—農山漁民文化と民俗語』三一書房

小島孝夫

2005 『海の民俗文化：漁撈習俗の伝播に関する実証的研究』明石書店

小林弘二

1997 『20 世紀の農民革命と共産主義運動—中国における農業集団化政策の生成と瓦解』勁草書房

2002 『ポスト社会主義の中国政治—構造と変容』東信堂

胡艶紅

2012 「現代中国における漁民信仰の変容—太湖流域の蘇州市光福鎮漁港村の事例から」
『現代民俗学研究』4、pp. 39-54

2013 「『七月半』祭礼における神・祖先・死者—中国太湖流域における大型漁船漁民の事例を中心に—」現代民俗学会 2013 年度年次大会

小坂みゆき

2011 「中国朝鮮族における婚姻儀礼の変化」『北海道大学大学院文学研究科 研究論集』
第11号, 51-69

関恒樹

2007 『海域世界の民族誌—フィリピン島嶼部における移動・生業・アイデンティティ』
世界思想社.

黄強

1998 『中国の祭祀儀礼と信仰』第一書房

後藤知美

2012 「創られていく労働観—旅館業を中心として」『Area Studies Tsukuba』
33:pp. 167-190

斉藤善之

2007 『海と川に生きる—身分的周縁と近世社会 2』吉川弘文館

佐々木衛

1990 『中国の家・村・神々—近代華北農村社会論』東方書店

1992 『近代中国の社会と民衆文化—日中共同研究・華北農村社会調査資料集』東方書店

1993 『中国民衆の社会と秩序』東方書店

2012 『現代中国社会の基層構造』東方書店

佐々木衛・柄澤行雄

2003 『中国村落社会の構造とダイナミズム』東方書店

塩田もも

2009 「ジャワにおける儀礼と女性」『イスラム世界』67 日本イスラム協会

首藤明和・落合恵美子・小林一穂

2008 『分岐する現代中国家族——個人と家族の再編成』明石書店

ジュリア・クリステヴァ

1981 『中国の女たち』丸山静、原田邦夫、山根重男 訳、せりか書房

聶莉莉

1992 『劉堡-中国東北地方の宗族とその変容』東京大学出版会

秦兆雄

2004 「宗族の規範と個人の選択—中国湖北省農村の招贅婚の事例から」『民族学研究』68-4

2005 『中国湖北省農村の家族・宗族・婚姻』風響社

末成道男

1999 『中原と周辺—人類学的フィールドからの視点』風響社

鈴木文子

2001 「女性から見た親族—韓国漁村の人口減少化における女性のネットワーク分析を中心に」『島根大学教育学部紀要』35pp. 21-40

鈴木未来

2004 「現代中国における女性と家族」『変貌するアジアの家族—比較・文化・ジェンダー—』昭和堂

諏訪哲郎

1987 『現代中国の構図』古今書院

志賀市子

1997 「都市社会香港における葬儀の担い手の変化—『喃嘸佬』から『経生』へ—」瀬川昌久(編)『香港 社会の人類学—総括と展望—』東京:風響社、pp. 163-191

斯波義信

2002 『中国都市史』東京大学出版会。

瀬川清子

1962 『女のはたらき 衣生活の歴史』未来社

1980 『女の民俗誌—そのけがれと神秘』東京書籍株式会社

1981 「海村婦人の労働」柳田国男編『海村生活の研究』pp. 115, 国書刊行会

瀬川昌久

1991 『中国人の村落と宗族—香港新界農村の社会人類学的研究—』東京:弘文堂。

- 1996 『族譜—華単漢族の宗族・風水・移居』東京：風響社。
- 1997 「香港新界の宗族村落—生きた化石における伝統の再生」瀬川昌久(編)『香港社会の人類学—総括と展望—』東京：風響社，pp. 17-38。
- 1998 「中国の漢族—世界最大の『民族』とその内部多様性」原尻英樹(編)『世界の民族—「民族」形成と近代』東京：放送大学教育振興会、pp145-163。
- 1999 「香港中国人のアイデンティティ—」末成道男(編)『中原と周辺—人類学的フィールドからの視点—』東京：風響社，pp. 27-40。
- 2002 「中国単部におけるエスニック観光と『伝統文化』の再定義」瀬川昌久(編)『文化のディスプレイ—東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編—』東北アジア研究センター叢書(8)：135-174。
- 2004 『中国社会の人類学—親族・家族からの展望』世界思想社
- 2012 「漢族の中の多元と一体—近 100 年における実家アイデンティティの動態を例に」瀬川昌久(編)『近現代中国における民族認識の人類学』京都：昭和堂、pp202-226。

田島佳也

- 1997 『〈調査報告〉中国東南部・浙江省舟山群島の伝統的造船所と漁村：舟山本島・朱家尖島の場合』Institute for the study of Japanese folk culture. Kanagawa

高江洲洋子

- 1992 「父系出自集団における女性の帰属原理—沖縄県東風平町高良の場合」『民族学研究』56-4

高桑守史

- 1994 『日本漁民社会論考』未来社

竹中恵美子・久場嬉子

- 1994 『労働力の女性化』有斐閣

谷川健一

- 1990 『日本民俗文化資料集成 5 巻—渚の民俗誌』三一書房
- 1992 『日本民俗文化資料集成 3 巻—漂海民：家船と糸満』三一書房

田村勇

- 1990 『日本の民族学シリーズ 9—海の民俗』雄山閣

陶立璠

- 1997 『中国民俗学概論』(佐野賢治 監訳, 上野稔弘 訳) 勉誠社

陳其南（小熊誠訳）

2006 「房と伝統的中国家族制度：西洋人類学における中国家族研究の再検討」『中国
文化人類学リーディングス』風響社

鶴理恵子

2003 「『テマ』から『労働の主体』へー兼業化と農業女性の自己認識の変化」『日本民俗
学』233:pp. 1-30

内藤莞爾

2001 『社会構造-核家族の社会人類学』新泉社

中楯興

1996 『日本における海洋民の総合研究——糸満系漁民を中心として』（上、下巻）九州
大学出版社

中谷文美

2003 「人類学のジェンダー研究とフェミニズム」『民族学研究』68-3pp372-393

中道仁美

2008 『女性から見る日本の漁業と漁村』農林統計出版

長沼さやか

2010 『広東の水上市民——珠江デルタ漢族のエスニシティとその変容』風響社

長谷有紀・川口幸大・長沼さやか

2010 『中国における社会主義的近代化—宗教・消費・エスニシティ』勉誠出版

波平恵美子

1999 『暮らしの中の文化人類学』出窓社

奈良康明

2003 『葬祭——現代的意義と課題』曹洞宗総合研究センター

野地恒有

2001 『移住漁民の民俗学的研究』吉川弘文館

橋本征治

2009 『海の回廊と文化の出会い—アジア・世界をつなぐ—』

服部誠・山崎祐子・八木透

2008 『日本の民俗 7 男と女の民族誌』吉川弘文館

羽原又吉

1963 『漂海民』東京：岩波書店

樊秀麗

2003 『大凉山彝族における葬送儀礼と靈魂観を通してみた帰属集団意識の形成』勉誠出版

潘宏立

2002 『現代東南中国の漢族社会—閩南農村の宗族組織とその変容』風響社

菱田雅晴

2000 『現代中国の構造変動 5——社会・国家との共棲関係』東京大学出版会

副島久実

2010 「水産物の地域流通に関する研究—漁村女性起業に着目して」、『海洋水産エンジニアリング』10 (92) : pp. 59—62

福田アジオ

1995 『中国浙江の民俗文化—環東シナ海（東海）農耕文化の民俗学的研究』国立歴史民俗博物館

1999 『中国浙南の民俗文化—環東シナ海（東海）農耕文化の民俗学的研究』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

2001 『中国江南村落の民俗誌的研究—上海近郊村落の民俗』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

2006 『中国江南沿海村落民俗誌：浙江省象山县東門島と温嶺市箬山』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

2009 『日本の民俗学—「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館

福田アジオ・宮田登

2009 『日本民俗学概論』吉川弘文館

藤川美代子

2010 「中国福建省南部における水上居民の葬送儀礼とその変遷」『年報 非文字資料研究』第8号

2010 「端午節の儀礼にみる水上生活者たちの所属意識—中国福建省九龍江河口に暮らす連家船漁民の例から」『比較民俗研究』(24):4-39.

三木奈都子

1997 「家族経営漁家における性別分業と女性労働」『漁業経済研究』41(3): pp. 1-18

三谷孝

1993 『農民が語る中国現代史——華北農村調査の記録』内山書店

2000 『村から中国を読む』青木書店

モーリス・フリードマン

1995 『中国の宗族と社会』(田村克己・瀬川昌久訳) 弘文堂

宮田登

1983 『女の霊力と家の神』人文書院

芳賀登

1991 『成人式と通過儀礼——その民俗と歴史』雄山閣出版株式会社

八木透

2001 『婚姻と家族の民俗的構造』吉川弘文館

安室知

2008 日本の民俗 1-『海と里』吉川弘文館

柳田国男

1981 『海村生活の研究』国書刊行会

1990 『柳田国男全集』10 筑摩書房

山陰民俗学会

1997 『葬・墓・祖霊信仰』山陰民俗叢書 5、島根日日新聞社

山口徹

2007 『沿岸漁業の歴史』,成山堂書店

義江明子

1996 『日本古代の祭祀と女性』吉川弘文館

凌星光

1996 『中国の経済改革と将来像』 平文社

若旅淑乃

2003 「つきあい再考—群馬県吾妻郡東村を事例として」『日本民俗学』233号

渡邊欣雄

1989 『環中国海の民俗と文化 3 祖先祭祀』 凱風社

和田正平

1996 『アフリカ女性の民俗誌』 明石書店

中国語文献（著者のピンイン順）

崔鳳

2007 『海洋与社会——海洋社会学初探』 黑竜江人民出版社

蔡豊明

2006 『呉越文化的越海東伝与流布』 学林出版社

房学嘉、宋徳剣など

2012 『客家婦女社会与文化』 華南理工大学出版社

費孝通

2007 『郷土中国』 江蘇文芸出版社

范濤

2008 『孤独的島嶼与大海的呼唤：台山大襟島南湾村的変遷』 広東人民出版社

放長生

2005 『舟山民俗と民間文学研究』 中国文史出版社

高丙中

2008 「“中国民俗誌”の書写問題」『文化芸術研究』7号

2010 「中国人的生活世界：民俗学的路径」『民俗研究』1号

韓敏

2007 『回應革命与改革——皖北李村的社会變遷与延續』、陸益竜、徐新玉訳、江蘇人民出版社

韓興勇

2004 『中国漁業經濟發展理論研究』上海科学普及出版社

2006 『上海現代漁村社会經濟發展史研究』上海科学普及出版社

韓興勇、于洋

2008 「張謇与近代海洋漁業『太平洋學報』2008年7号 pp. 84-88

杭州大学中文系家史編写組

1978 『毛主席救我們出苦海』浙江人民出版社

何燕俠

2009 「妊娠・出産・育児に関わる習俗慣習の変化」『中華人民共和国における生殖コントロールの進展と女性たちの対応』平成18～20年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 文成印刷

何直昇、陶根德

2009 『舟山鑼鼓』浙江攝影出版社

胡衛偉

2010 『浙江漁村古鎮文化尋踪之旅』浙江工商大学出版社

黃均銘

2011 「試論舟山海神信仰及祭海文化資源開發利用」pp. 203-205『中国民間海洋信仰与祭海文化研究』上海海事大学・中国太平洋学会・岱山县人民政府編 海洋出版社

賈德裕、朱興農、郝同福

1998 『現代化進程中的中国農民』南京大学出版社

金濤

2012 『舟山群島海洋文化概論』杭州出版社

金濤、姜彬

2005 『東海島嶼文化与民俗』上海文芸出版社

金振斌

2006 『新農漁村建設』（李麗秋 訳）社会科学文献出版社

孔海娥

2012 『女性生命歷程的角色實踐——以湖北省燕山村為例』 中国社会科学出版社

李霞

2005 「依存者或構築者？——婦女親族關係についての民族誌研究」、『思想戦線』第一期

2010 『娘家与婆家——華北農村婦女的生活空間和後台權力』 社会科学文献出版社

李銀河

1993 『生育与村落文化』中国社会科学出版社

李越

2006 『中国古代海洋詩歌選』海洋出版社

廖迪生

2000 『香港天后崇拜』香港：三聯書店

劉中一

2009 『村莊里的中国：一個華北鄉村的婚姻、家庭、生育与性』山西人民出版社

倪濃水

2006 『中国古代海洋小說選』海洋出版社

歐陽宗

1998 『海上人家——海洋漁業經濟与漁民社会』单昌：江西高校出版社

曲金良、紀麗真

2012 『海洋民俗』中国海洋大学出版社

沈可

2012 「家庭構成中多代同堂比重下降将減少女性労働参与」、『人口信息』第二期

宋立清

2007 『中国漁民轉産轉業研究』中国海洋大学出版社

蘇群、周春芳

2005 「農村女性在城鎮的非農就業及遷居意願分析」、『農業經濟問題』第5期

孫樂

2009 「正視城鎮在業婦女家務勞働価値」、『人口与經濟』第1期

王金玲

1996 「浙江農村婦女家庭地位及变化的性別比較」『浙江學刊』第6期

王崧興

1967 『龜山島—漢人漁村社会之研究』

王文洪

2009 『舟山群島文化地圖』海洋出版社

尹旦萍

2009 『当代土家族女性婚姻變遷：以埃山村為例』社会科学文献出版社

徐波

2004 『舟山方言与東海文化』中国社会科学出版社

2006 『中国古代海洋散文選』海洋出版社

2009 『浙江海洋漁俗文化称名考察』海洋出版社

楊国楨

2000 「論海洋人文社会科学の概念磨合」『厦門大學學報』第一期

姚先国

2005 「家庭收入と中国の城鎮婦女的勞働参与決策分析」、『經濟研究』

于洋

2007 「漁民社会交往与漁村社会轉型關係研究」、『中国漁業經濟研究』02期

張偉

2007 『浙江海洋文化与經濟』第一号、海洋出版社

2008 『浙江海洋文化与經濟』第二号、海洋出版社

2009 『浙江海洋文化与經濟』第三号、海洋出版社

鐘敬文

2010 『民俗学概論』高等教育出版社

周星

2011 『郷土生活の邏輯—人類学視野中の民俗研究』北京大学出版社

朱愛嵐 (Judd, Ellen R.)

2004 『中国北方村落的社会性別与權利』、胡玉坤訳、江蘇人民出版社

定海区档案局、定海区史誌办公室

2008 『定海民俗与民間芸術』中国文史出版社

『舟山市誌』、1992、浙江人民出版社

『舟山漁誌』、1985、海洋出版社

舟山市普陀区螞蟻島郷人民政府

2008 『浙江省非物質文化遺産普查 舟山市普陀区螞蟻島郷集成卷』

中共舟山県委宣伝部・中共螞アリ島人民公社委員会

1959 『解放前後の螞アリ島——螞アリ島人民公社の歴史』農業出版社

中共舟山市普陀区螞アリ島郷党委・舟山市普陀区螞アリ島郷人民政府

2008 『解説螞アリ島』

英語文献

FREEDMAN

1979 “Rites and Duties, or Chinese Marriage.” In M. FREEDMAN, The Study of Chinese Society: Essays by Maurice Freedman. Stanford: Stanford University Press

Margery Wolf

1972 Women and the Family in Rural Taiwan, Stanford: Stanford University Press, Judd, Ellen R.

1989 「Niangjia: Chinese Women and Their Natal Families」 Journal of Asian Studies

Pierre Bourdieu

謝辞

本論文が完成に至るまでには、数多くの方々のご協力をいただいた。巻末ではあるが、ここに感謝の意を表したいと思う。

本論文の作成し学位論文をまとめるに当たり、終始暖かい激励とご指導、ご鞭撻を頂いた指導教官である小熊誠教授に心より感謝申し上げます。中国宗族研究、日本と中国との民俗比較研究を専門とされる小熊先生は、2011年4月神奈川大学歴史民俗資料学研究科への入学時から今日まで3年を超える長きにわたり、いつも楽観的な人生態度でやさしく励ましてくだり、私自身の至らなさを実感することができたことが今後の努力の糧になるものであります。

また、博士課程への進学および研究全般にわたり多大なご支援、ご指導を賜りました佐野賢治教授に深く感謝いたしております。本論文作成に当たり、中間発表委員会として多くのご助言を頂きました田上繁教授、広田律子教授、中島三千男教授、安田常雄教授、には深く感謝いたします。授学位論文審査において、貴重なご指導とご助言を頂いた神奈川大学歴史民俗資料学研究科学の森武麿教授、安室知教授に心より感謝申しあげます。

博士課程在学中、歴史民俗資料学研究科の藤川美代子先輩、白莉莉先輩、新垣夢乃さん、近石哲さん、磯貝奈津子さん、小村純江さん、王新艶さん、姚琮さんの存在が研究を進めていく上で、大きな励みとなったことをここに記すとともに、心より感謝申しあげます。

留学生としての私の論文に、日本語のチェックを頂きました国際交流センターの野崎まり先生と国際理解という授業を受けた吉川香緒子先生に深く感謝しております。

博士課程後期進学以前、東京大学総合文化研究科で研究生として1年半にわたり、村田雄二郎教授、菅豊教授、チューターの吉見崇さんより、数多くの貴重なご助言と支援を賜りましたことをここに記すとともに、心より感謝申し上げます。

また、研究を進めるにあたり、ご支援、ご協力を頂きながら、ここにお名前を記すことが出来なかった多くの方々に心より感謝申しあげます。

最後になりますが、私の博士卒業を心待ちにしながら、平成24年2月26日に永眠した父にこの論文を捧げるとともに、いつも温かく見守りそして心の支えになってくれた中国に住む母に心から深く感謝します。

本研究は、多くの研究助成、補助金、資金負担等により実施されたものです。

ここに記して感謝の意を表します。

①非文字資料センター（第3章）

②平成24年度公益財団法人日本科学協会笹川科学研究助成（第4章）